明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十年四月十五日發行（毎月一回五日發行）

女學世界定期增刊第七巻第六號



博文館發行



登録
商標


四月一日より
第十三回新柄陳列會
寄せ切れ見切り反物大賣出し
懸賞裾模様圖案展覽
營業科目
新柄呉服太物類
歐米流行洋服類
鞄及旅行用具類
舶來小間物化粧品類
帽子洋傘履物類
室內裝飾品類
食堂及び寫眞場の設けも有之候
三越呉服店
日本ばし駿河町

女學世界定期増刊 **婦人博覽會** 第七巻第六號

目次

家庭

雜俎

口繪

寫眞版


THE GEM
ゼム
THE GEM
衛生家必携懐中良薬

春の野邊



竹久夢二筆

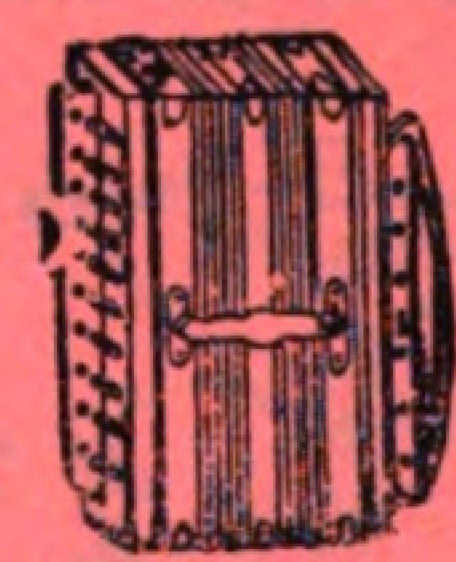
無師獨奏
紙腔琴



本器は誰人にても習はずして自由に奏曲し得る美妙の音樂器にして是に配する曲譜は長唄端唄常盤津其他軍歌唱歌流行唄等數百種あり

定價 大形上製拾五圓
同中製拾圓
小形五圓

舶來
手風琴



●定價金參圓參拾錢、參圓五拾錢、六圓、六圓五拾錢、七圓五拾錢、八圓、九圓、拾圓以上拾八圓迄各種

西洋
横笛



金三十錢四十錢五十錢六十錢七十錢一圓一圓廿錢一圓五十錢二圓以上各種

◎平圓盤發音器 正價金貳拾五圓、四拾圓、五拾圓、五拾八圓、六拾圓、八拾五圓●音譜數百種出來

◎大聲蓄音器 正價金貳圓、五圓、金參拾參圓金五拾五圓、金六拾五圓●配用蠟管數百種出來



◎教育的高等玩具類

◎軍樂隊用樂器類各種

日本製造元祖
西川風琴
音律正確保險付



一號形	二號形	三號形	四號形	五號形	六號形	七號形	八號形	九號形	十號形	十一號形	十二號形	十三號形	以上廿二號形
金十八圓	金十九圓	金二十一圓	金二十八圓	金三十三圓	金三十八圓	金四十五圓	金五十圓	金五十八圓	金六十八圓	金八十圓	金百圓	金百十五圓	二百七十圓迄

和洋
バイオリン
弓箱外附屬品一式



和製 金貳圓以上五拾圓迄

舶來 金拾參圓以上七拾圓迄

◎瓜生繁編 進行曲 正價四十錢 郵稅六錢

◎文部省檢定濟 山田唱歌集

◎長原政二郎著 歐米各國 舞踏大觀 正價六十錢 郵稅八錢

◎同著 舞踏必携 ダイアモンド 正價卅錢 郵稅二錢

◎新案遊戯 鬪球盤 金一圓八拾錢 金貳圓 金貳圓五拾錢 金參圓五拾錢 金五圓五拾錢 金六圓

◎舶來バイオリン及附屬品澤山新着

◎新刊バイオリン曲多種相蒐有之候

★(甲の一)

◎東京銀座三丁目 電話新橋一二五九番

十字屋樂器店

振替貯金口座 七一五八 ◎

女(甲の二)

美術造花用
打(かた)抜(ぬき)及鏝(こて)類
專門製造販賣



當工場販賣の造花用打拔(うちぬ)き及び鏝(こて)類は製造の堅牢と價格の低廉とを以て是迄各女學校並に造花師の高評を得來り候處今般通信販賣部を新設いたし廣く地方の御註文にも應じ申すべく候間陸續御註文下され度候

戸澤工場販賣部

東京本所區松倉町二丁目四九

◎**流行繪葉書**を買はんとせば**博文館**發賣品に**注目**せよ◎

小兒科診察

特ニ
乳兒ノ疾患及育兒法
小兒皮膚病

診察時間 午前九時ヨリ十二時
日曜午前

種痘獨逸新式

拙者儀久シク獨逸大學ニ於テ斯學ヲ專攻シ歸朝後毎日診療ニ從事ス

ドクトル メヂチーネ **長井岩雄**

日本橋區數寄屋町一番地
（電話本局百八十番）

男女 **ちゞれ くせ毛 赤毛** は何程の難毛も直に根治黒變し良き艶の出る奇術を郵券封入申込の方に無料教授晢て美髪にして差上げます

東京 本郷區丸山福山町 **岩阪澄子**

表情



北澤樂天筆

世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日

目に必らず美麗に除去すること

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかすいぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥價は壹劑分壹圓叁劑半分三圓六劑分五圓拾貳劑分拾圓 送料各拾錢宛必ず添送の事 郵劵代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）著金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

家庭必須書類

● 飯田吳服店裁縫部小岩井主任 鹽田副主任合著
實用裁縫全書（大判二六六頁）正價五拾錢 郵稅八錢

● 刺繡術專門 磯村大次郡君著
實用刺繡術（大判一二四頁）正價貳拾五錢 郵稅四錢

● 山田興松君著
實用造花術指南（大判一〇〇頁）正價貳拾五錢 郵稅四錢

● 吉田調子君著
裁縫と編物（大判二六二頁）正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 曾我部純一君著
最新家計簿記（大判一三四頁）正價貳拾五錢 郵稅六錢

東京 博文館 本町

◎各女學校裁縫教授先生方より充分なる御試驗を受け女子裁縫實用器具として何れも非常なる御賞贊を蒙むりたり

專賣

乙女くけ臺

定價 特製金七拾五錢 松印金四拾五錢

特許

定價 竹印金三拾五錢 梅印未製

◎箱入堅牢高尙優美の品なれば裁縫學校御入門又は御婚禮其他の御進物用としてことに適當の美術品にこれ有候

（小包送料は二個迄八錢）



「此くけ臺は手數が省け切れ地がいたまず大層調法であります」

製造發賣元

堀口商店

神田榮町十一（五軒町停留場東側）

女（乙の三）

女(乙の四)

渡し場



大下藤次郎筆

女(丙の一)

醫學士 田村貞策君
朝夷孤舟君 譯述

（近刊）

衛生指針

妊産婦の務

妊産は妻たる者の第一の天職であるから、淑女諸君は必ず此知識を得なければならぬ。世間には此知識を疎略にする爲め、免れる事の出來る困難や危險などに陷る者が多いのは、甚だ遺憾である。されば、一家の主母たる者は、是非とも本書一冊を家庭に備へ置きて參考に供し、新婚せんとする令嬢は、約束を極め衣服調度などを支度する以前に、豫め本書を一讀して、自己の身體が其天職を完くするに足るや否やを詳かにするが宜しい。本書は妊産に關する身體の適否、妊娠の有無、分娩の難易、産後母子の手當等に就きて、妊産婦又は産婆の心得べき總ての事項を親切平易に委しく説明したものである。

全一冊和裝美本
紙數四百五拾頁
密畵數十個挿入
正價七拾五錢
郵稅拾錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

最新刊

小栗風葉君新作　宮川春汀君畫

有情無情

▲定價金六拾五錢▼
▲小包料金八錢▼
▲洋装金釘美本▼

本文の一節

『ねえ、土屋さん。』とお極りの態をして、貴方に御父さんから何かお話が無くつて？。』

『お話とは』と弘は不審の面色。が、心には其謎が解けて居たかも知れぬ。

『本當にお聞きなさらないの？』

『伺はんですが、一體甚麼お話で。』

『那の……。』

『は？。』

『まあ、厭しませう！』

『何爲です？どうも中途半端で切られては、其處が頗る妙で無いですな。』と目をパチ付かせたが、『然し、まるで。お話が無いではありません、其の色々と……。』

『其れ御覧なさいな！。』

『尤もお話とは會社の今後の方針に關して、其他には別段無いやうでしたな。』

『本當？』

『誰が嘘などを申すものですか。』

『其れも然うねえ。』と頷きはしたが、未だ腑に落ち兼ねた様子。

『で、お父さんから甚麼お話があるのです？貴方は御存知なのですか。』

『え、私も能くは知らない事よ！』

『は、然うですか』と弘は胡散臭さうな、眼色をする。

『だけど餘程變よ。此間是非近い中に爲さるつて言つてらしつた癖に……。』

重版出來

菊池幽芳君作　鏑木清方君畫　**筆子**　（前篇）價各九拾錢　（後篇）送料各十錢

小栗風葉君作　鏑木清方君畫　**麗子夫人**　（前篇）價各六拾錢　（後篇）送料各八錢

草村北星君作　宮川春汀君畫　**母の面影**　價八拾五錢　送料拾錢

岡鬼太郎君著　鏑木清方君畫　**三筋の綾**　價五拾錢　送料八錢

新刊出來

塚原澁柿君作　塚原千草君畫　**淀殿**（第一篇）價六拾五錢　送料八錢

小林蹴月君作　杉浦非水君畫　**瀧の音**　價四拾五錢　送料八錢

村上浪六君作　宮川春汀君畫　**元祿女**　價四拾五錢　送料八錢

德田秋聲君作　宮川春汀君畫　**女ごゝろ**　價六拾錢　送料八錢

發兌元　東京市京橋區尾張町一丁目『振替貯金口座八三五五番』　株式會社　隆文館

女（丙の三）

博覽會
會場內

丸嘉出品案內

〔美術館〕
帝國技藝委員製作
美術品各種

〔一號館入口〕
金屬及ビ蒔繪工藝品
室內裝飾品及ビ花瓶

〔二號館入口〕
寶石入裝身具・袋物
頭飾り各種

會場へ御はこびノ際ハ弊店出品御一覽
被下御用命奉願上候

東京市日本橋區若松町
丸嘉
電(浪花)七六八番

(丙の四)

はるの日



榊原蕉園筆

(丁の二)

巖谷小波君著



全一冊洋裝
四六判上製
紙數三百五十頁
近日發行

題して『子供心』と云ふ。内容は大方判じ得べし。蓋し子供を主人公としたる、清新高雅なる家庭小說、總て七編を收めたるもの是也。著者が當代のお伽作家たる事は、世已に定評あり。而もそれと同時に、巧みに少年少女を寫して、紙上に躍如たらしむる技量も亦文壇の珍とする所とす。本書の如きは、即ち其傑作中の傑作を集め、更に子供畫を以て獨特に妙ある、宮川春汀氏の極彩色插畫七葉を添えたるもの。苟も世の子煩惱者にして、此書を座右に置かざらん乎、共に家庭を語る可らず、共に兒愛を語る可からず。

東京 博文館 本町

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーテル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる斬新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價)壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料 肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑(又は特製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新藥館房」の名義に注目し購求あらんを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速にイヤ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈ゞ慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**(電話下谷五四六番)

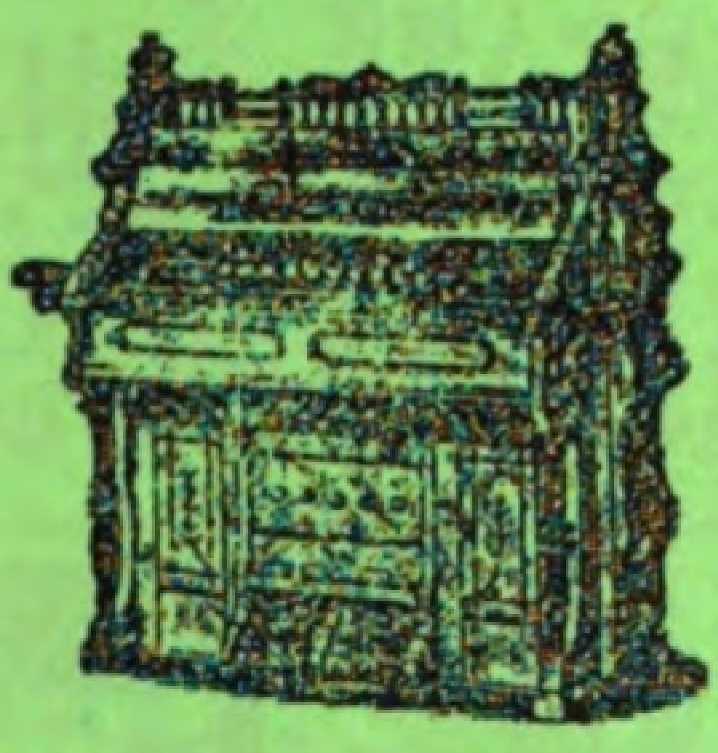
女(丁の三)



山葉風琴

（保險附）

號	價格
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二八、〇〇
第參號	二五、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	二七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	[illegible]八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇[illegible]、〇〇
第拾參號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷川オルガン壹號	二一〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇





○山葉洋琴　金參百參拾圓以上金壹千參百圓迄各種

◎舶來洋琴　三百圓以上三千圓迄各種

◎舶來風琴　百圓以上千五百圓迄各種

○鈴木ヴアイオリン　金貳圓以上百貳拾圓迄各種　弓金七十錢以上　箱金壹圓五十錢以上各種



◎舶來ヴァイオリン及弓箱等各種

◎樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種

◎戰捷紀念國旗印銀笛數種

◎八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジヨレーット各樂器附屬品、和洋音樂書各種郵券貳錢御送附あらば美麗なる目錄進呈す

楠美恩三郎先生編　（久しく品切れの處彌々再版出來）

デュエット トリヲ 唱歌集

伴奏附

大形美本全一册　定價金六十五錢　郵税金八錢

近時音樂書の發刊漸く其多きを加ふるは洵に樂界の爲め欣喜の至りに不堪然れども中等教育以上に適する完全なる唱歌集の如きは恰も曉星の寥々たるが如し編者楠美先生夙に之を憂ひ今回本書を公刊せらる書中收むる處の貳拾五の歌曲はグルック、メンデルソン、アプト、モッアルト、ルビンスタイン、ウェーベル等の歐洲諸樂聖の作に係る歌曲中精を取り粹を拔きたるものにして殊に配するに本邦名家の作歌を以てせらる、されば其曲節と歌詞の調和の美妙に到ては一度試唱するものの感嘆措く能はざるべきことと信ず又伴奏部のみ彈奏するも、ピアノ、オルガンの曲譜として實に趣味津々たるもの多し希くは大方諸賢の御愛唱あらんことを

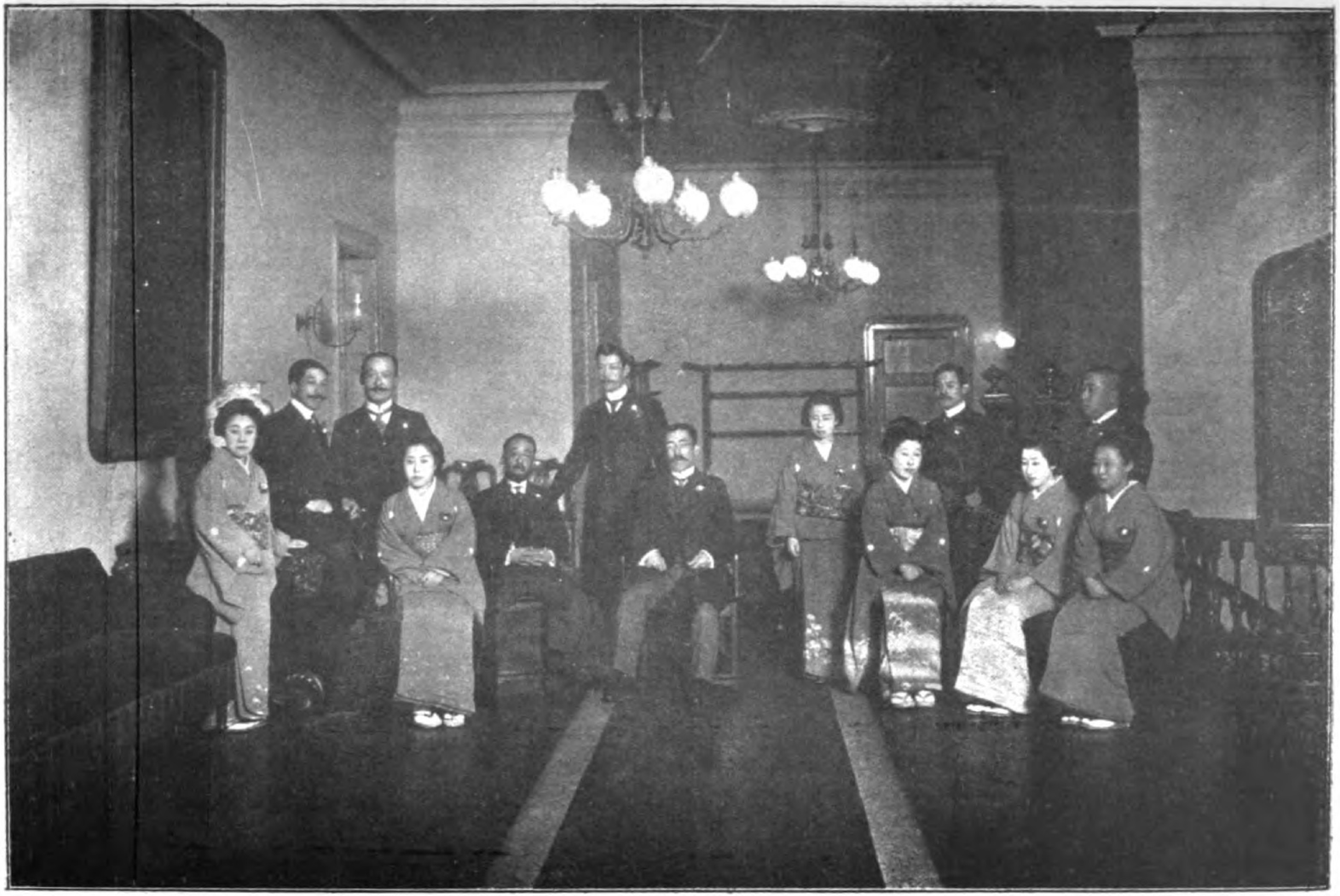
ピアノオルガン
調律修繕

（振替貯金口座壹五八〇番）

東京市京橋區竹川町十三番地　合資會社　共益商社樂器店　電話新橋五二九　電報略號ヨキ

（丁の四）

徳川の一門



洋裝



小笠原伯爵夫人　さだ子　同令妹　照子

石油厨炉

定價 焜爐用 金貳圓廿錢より
飯炊き兩用 金三圓廿錢より



◎石油厨爐は僅廿分間に二夕の石油で一升の飯が炊け魚煮餅を燒くも臭くなし下等石油で使用するも無煙無臭保證せり

定價の五分引

目錄定價表は申越次第直ちに送呈す

此切取廣告御持參の方は

本品は女學世界(切取廣告)讀者の外割引をせず

東京日本橋區室町(電話本局二八九)

發賣元 久能木商店

京都四條通高倉角(電話一一七二)

代理店 宮本商店

天下一品

最上醬油

釀造元 千葉縣野田町 **茂木佐平治**

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

女(戊の二)

當代無類の奇文!!!毒舌文の一大機軸!!!

龍門を見ざれば天下の深きを知らず
元祿姉さんを見ざれば天下の文を知ることなし
巫山を見ずして天下の勝を說くこと勿れ
元祿姉さんを知らずして天下の文を談ずる勿れ

元祿姉さん著

▲咳唾珠を成す奇才子の文!!!▼

▲人を魅する妖婦の文!!!▼



噫是れ現代婦人の心裡を解剖せる

正價金參拾五錢　郵稅八錢

觀象國也、見よ現代婦人千百の疑問が奈何に靈警なる著者の眼光に映じ如何に燃犀なる著者の筆に依つて解決されつゝあるかを。著者元より小說家にあらず、然れども實在の滄海より掬び來れる一滴の甚麽を千倍の顯微鏡に映じこれを萬人の眼前に展觀せしむるの技に至つては眞に是れ當代の傑品一度び卷を繙かば、老婦は嫉み、壯婦は怨み、貧婦は恥ぢ、孀婦は怒り、而して妙齡の才人は忽ち紅潮して以て手に汗を握らん。（近日再版出來）

本書綱目

▲嫁の最貧？姑の最貧？
▲結付られたる女
▲女性を呪へる口
▲お姑婆を作りし社會
▲囚はれたる女
▲鬮を引損ひし女
▲美人の立場と醜婦の立場
▲武器を持てる女
▲侮辱されたる女

▲手腕ある女
▲札は野心家に落ちたり
▲女は三世の祟り
▲離婚の原因
▲女學生の現在
▲都と鄙＝婦人兩面觀
▲婦人と文章
▲化粧哲學
▲情の研究

東京 博文館 本冊

（戊の二）

尤も高評ある繪葉書は日本葉書會製博文館發賣品也

衞生無害御試驗濟 東京本町三 玉屋支店

衣服洗淨 **玉川** 一名シャボンイラズ

手もあれず、さゝくれもできません

大日本發賣元祖

御安眠請合 **のみよけ** 除虫菊

部屋人身に撒布すべし

定價 大罐入金廿錢 小罐入金拾錢 平罐入金五錢 ○遠國送り料金貳錢

○蚤○虱○蚊○蠅○南京蟲○油蟲○草木より發生する蟲其他一切の蟲を防ぐ良効あり○牛馬犬猫魚類に生ずる蚤虱羽蟲には此粉末をすり込べし稍の蟲其他草木より發する蟲には熱湯にて溶解せしめ冷たる後撒布すべし

發賣元 ㊇ 松澤八右衛門

東京市京橋區銀座三丁目四番地

電話(長)新橋五三四番 振替貯金口座七二四番

賣捌は諸々藥店賣藥店小間物店荒物店に特約あり御最寄にて御買求め願上候

●近頃のみよけ(にせ物)相見え候間御求めの節は丸八の商標に御注意あらんことを

學習院女子部長

少女文庫

●第一編 お伽噺教草 ……山中古洞君畫

●第二編 庭訓お伽噺 ……水野年方君畫

●第三編 内國少女鑑 ……山中古洞君畫

●第四編 外國少女鑑 ……鈴木華邨君畫

●第五編 家庭の心得 ……梶田半古君畫

●第六編 學校の心得 ……島崎柳塢君畫

▲全部六冊大判◎裝美本紙數一冊貳百五十頁以上(每編密畫數十個挿入)

正價 一冊參拾五錢◎三冊壹圓◎全部六冊壹圓九拾錢▲郵税壹冊六錢宛

博文館發行

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

患者の福音 肺病

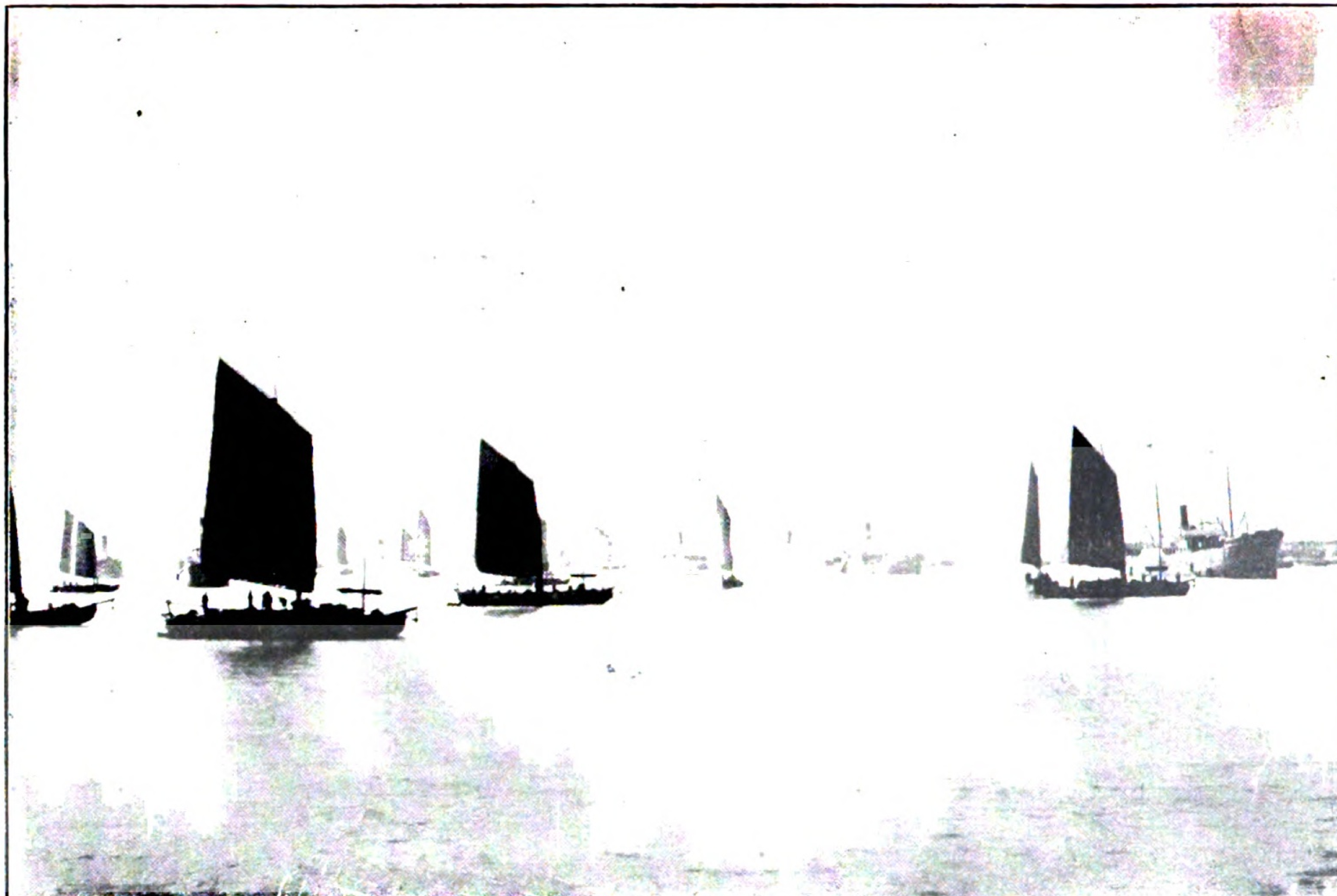
著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也◎郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町 衞生書院

女(戊の三)

女(戊の四)

遼河の大觀



客間の裝飾




各女學校御用
美術造花
材料
附屬示範ニ參考造花標本一式
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番
(切取線)
營業目錄御入用ナレバ此切取ヲ添ヘ御申越被下度候
縣　郡　町(村)
女學世界第七卷第六號
(己の二)

婦女必讀の大全書發行

去れば本書は全部を五十卷と爲し、毎月一卷づゝ、左の諸大家に請ひ、編を逐ふて發刊す。著者は皆な現代婦人敎育界に第一流の諸名家にして、各家皆な多年の經驗に徵し、最も實際に適切なる事物を選み、文章は平易流暢を旨とし、之れを讀で趣味多く、記事は明細精確に之を實地に施して遺憾なきを期せらる。幸ひに世上の女流にして、各一本を家庭に備へられんには、恰も常に家庭敎師を自家に聘し、日々に起る所の事物に對して、一々指導を受くるに異ならざる裨益あるべきなり。

第一編

新家庭訓

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子女史著

紙數三百頁
石版極彩口繪挿入
挿畫十數個

●續刊

四季料理　宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長　石井泰次郎君著

和洋裁縫指南　女子高等師範學校敎授　喜多見佐喜子女史著

家政要訣　女子高等師範學校敎授　後閑菊野女史著

本町　博文館

女(巳の三)

女（巳四）

名流小照



侯爵夫人 德川久子



子爵夫人 大村梅子

第五回内國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登錄商標

壽美禮おしろい

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
爛瓊附 乳白硝子器入
壽美禮おしろいね



◉壽美禮おしろい

◉製れり 定價（大壜二十錢 小壜十二錢）

ヴワイオレット水製 定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）

錫栓附乳白硝子罎入



すみれ白粉は。歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成績液體等を以て配劑しあるにより肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性あり「壽美禮白粉」は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白さに至るべし 葉「おしろい」は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜鬧の場所に臨て衞生上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京、横濱に於て上流社會に益々好評を博し流行の月桂冠なり。

◉西洋洗滌劑壽美禮あらひ粉の特性

◎弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊舖新製の香料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなすこと極めて妙なり

◎常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半ゑり、ハンカチーフ、絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白するの性あり

◎使用法は普通あらい粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶香ひ 大袋入 貳錢
鑵詰 六錢五厘 袋入 壹錢

登錄商標
西洋
色白くなるあらひ粉
SUMIRE
Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖 東京東兩國元町兩國橋際 壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處ノ小間物店、化粧品店。賣藥店其他各勸工場・各劇場、運動場等ニ有リ

女（庚の一）

◉空前の好評◉既に五版發行◉

商工世界太平洋臨時增刊

東京勸業博覽會

三月二十日より上野公園にて開設されし東京博覽會は名は地方的なれ共事實は全國的なり。又た世界的なりとも言はる。陳列區域のみを廻つても四里の長に達すれば、大阪の第五回博覽會に比して遜色なきのみならず、其建築と其の出品の進歩は同一の比にあらず、大に傳ふべく記す可きなり。

◉口繪には二色刷極めて鮮明なる寫眞版十數面を附す

此臨時增刊は博覽會に關する一切の事を網羅せり、見物する者は之を携へて案内書にすべく、見ざる者も一讀せば宛から目の當り見るの思ある可し。何が出品されるかも知るを得べく、如何なる珍らしき餘興かあるかも知らる。花咲き出てゝより夏の初まで上野に行く者、東京に來る者は是非買つて備置かざる可からず。

◉正價拾貳錢　郵稅一錢五厘

（其の二）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座第二百四十番　博文館

東京寫眞帖

東京博覽會
紀念出版

● 東京府知事 男爵千家尊福君題詠
● 東京商業會議所會頭 中野武營君序文
● 東京博覽會協贊會 理事華原清風君序文
● 東京市長 尾崎行雄君題辭
● 田山花袋君編
● 柴田常吉君撮影
● 橋本邦助君裝畫

●總クロース金文字金書入頗美裝製本横八寸五分縱六寸●製本四月中旬出來●正價金壹圓五拾錢小包料金拾錢●東京市部詳密全圖●東京博覽會全圖石版極彩色●東京名所舊跡、諸官衙、公署學校、銀行會社商店等寫眞版約四百面彩色刷頗鮮明▲コロタイプ數葉入●附錄東京遊覽案內

發兌元 東京本町 博文館 ● 發行元 東京小石川 日本葉書會

新式 葉書帖

各其獨特の想を描いて得意の圖案に意を凝すこと月餘其表裝の美なると裝釘の完きとは本會の大に誇とする所なり蓋し裝飾用として床上に置くべく紀念用として机上の珍たるべし

折本

縱挿 表裝佐藤生案 四十枚挿價廿錢送料四錢
横挿 表裝佐藤生案 四十枚挿價廿錢送料四錢

中形

A印中村不折君案 B印橋本邦助君案 C印武內桂舟君案 D印丸山晚霞君案
各百二十枚挿 優美高尚
價 DBA 九拾錢 C印八拾錢 送料各拾錢

小形

武內桂舟案六十枚挿
定價五十錢送料六錢

發賣元 東京本町 博文館
發行元 東京小石川 日本葉書會

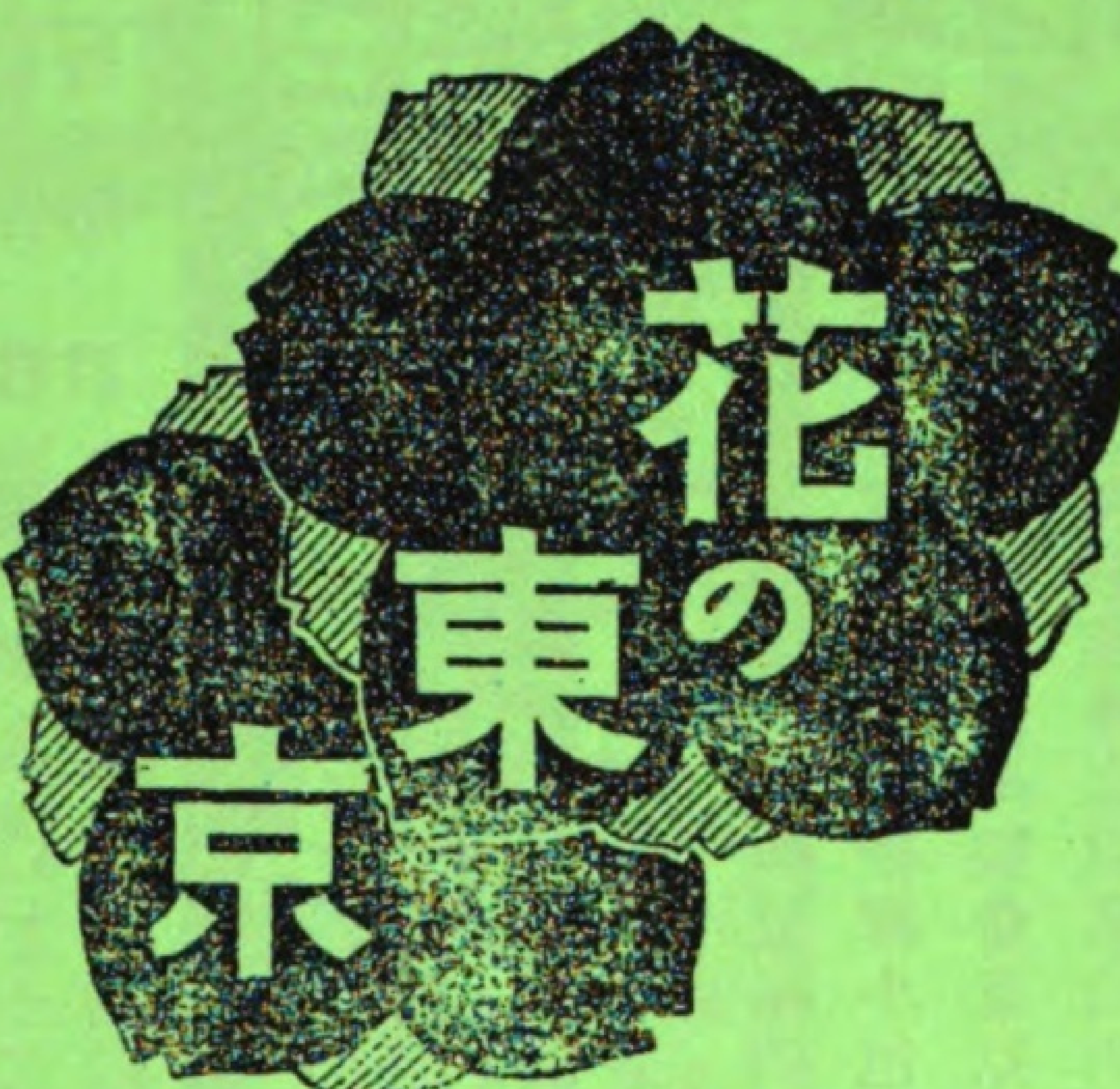
（女、庚の三）

少女世界 定期増刊

第二巻第六號

四月十五日發行

全一册洋装菊判
紙數百拾餘頁



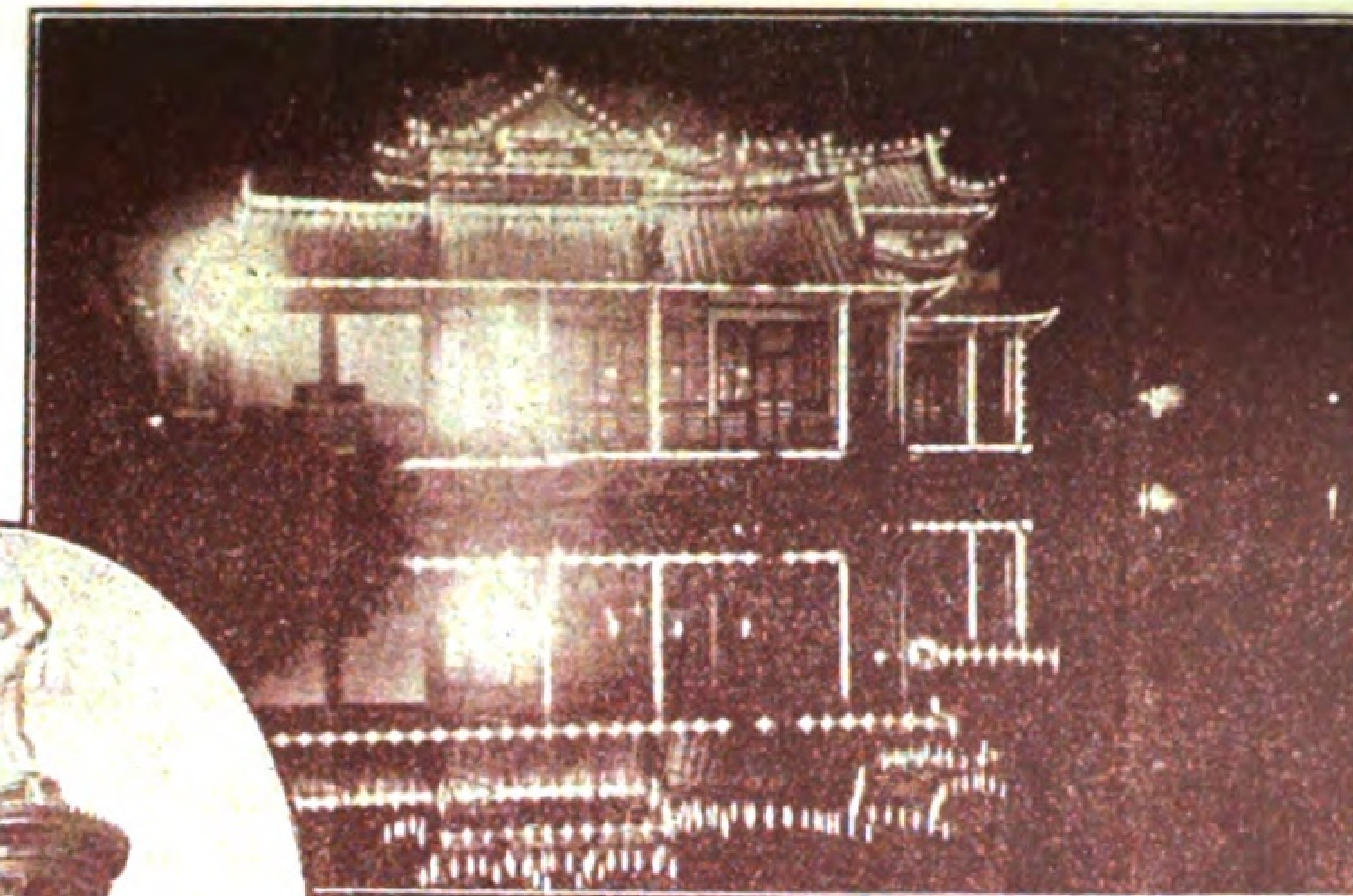
正價金拾錢
郵税壹錢

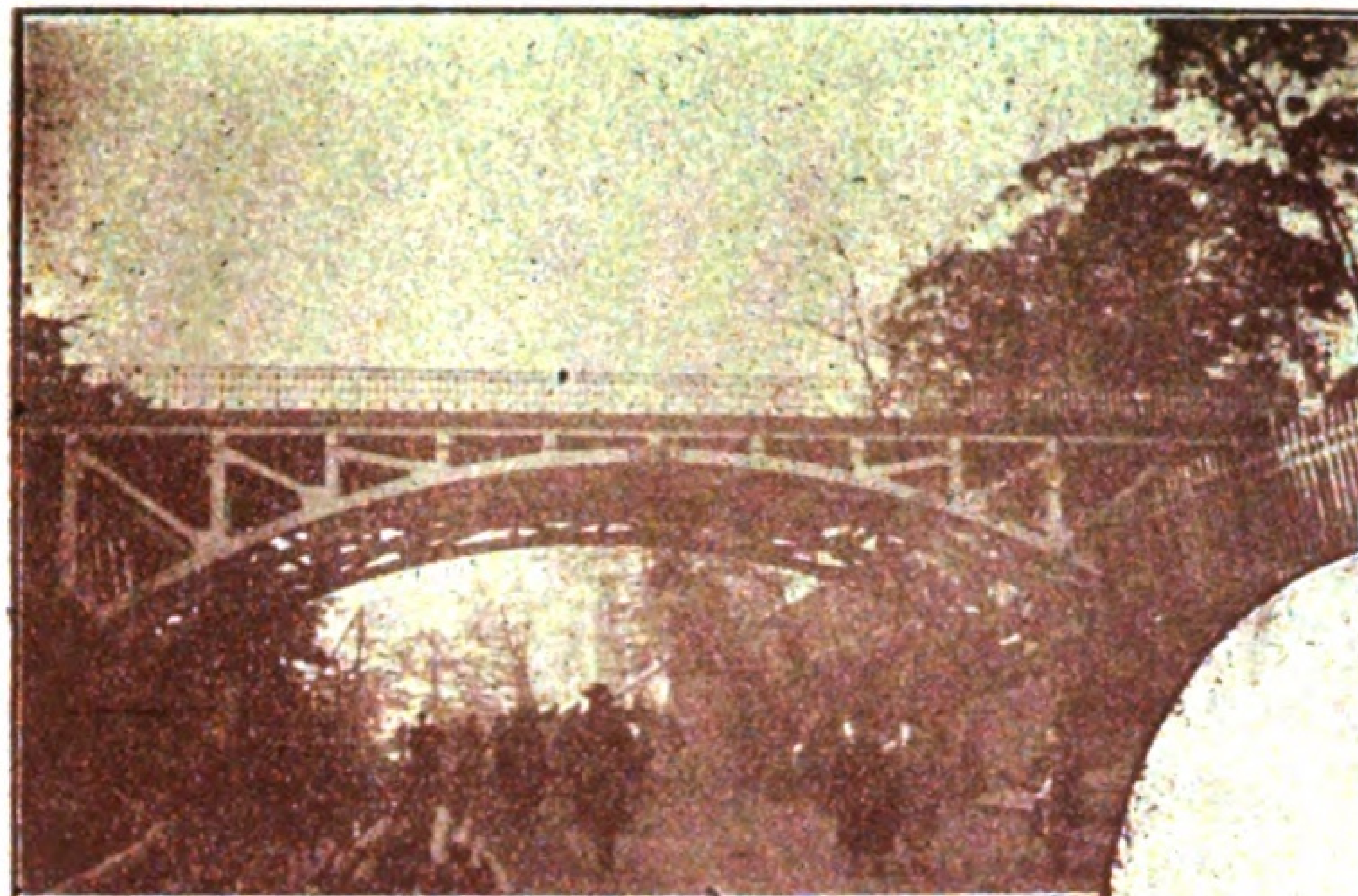
さア〳〵、花が咲きました、上野の花に博覧會、どんなに麗はしいことでせう。蝶々のやうなリボンを春風になぶらせつゝ、花見に出かけるお嬢さんは、先づ『**花の東京**』を御覧なさい、花よりも美しい装いを凝らし、數ある都の名所々々を、まのあたり遊覧するやうに、面白く詳しく記してあります。また**東京博覧會**の**光景**や、**女學校**の**入學案内**が、親切に述べてありますから、都のお嬢さんも鄙の少女も、速かにこれを求めて、**遊覧の案内**とせねばなりません。

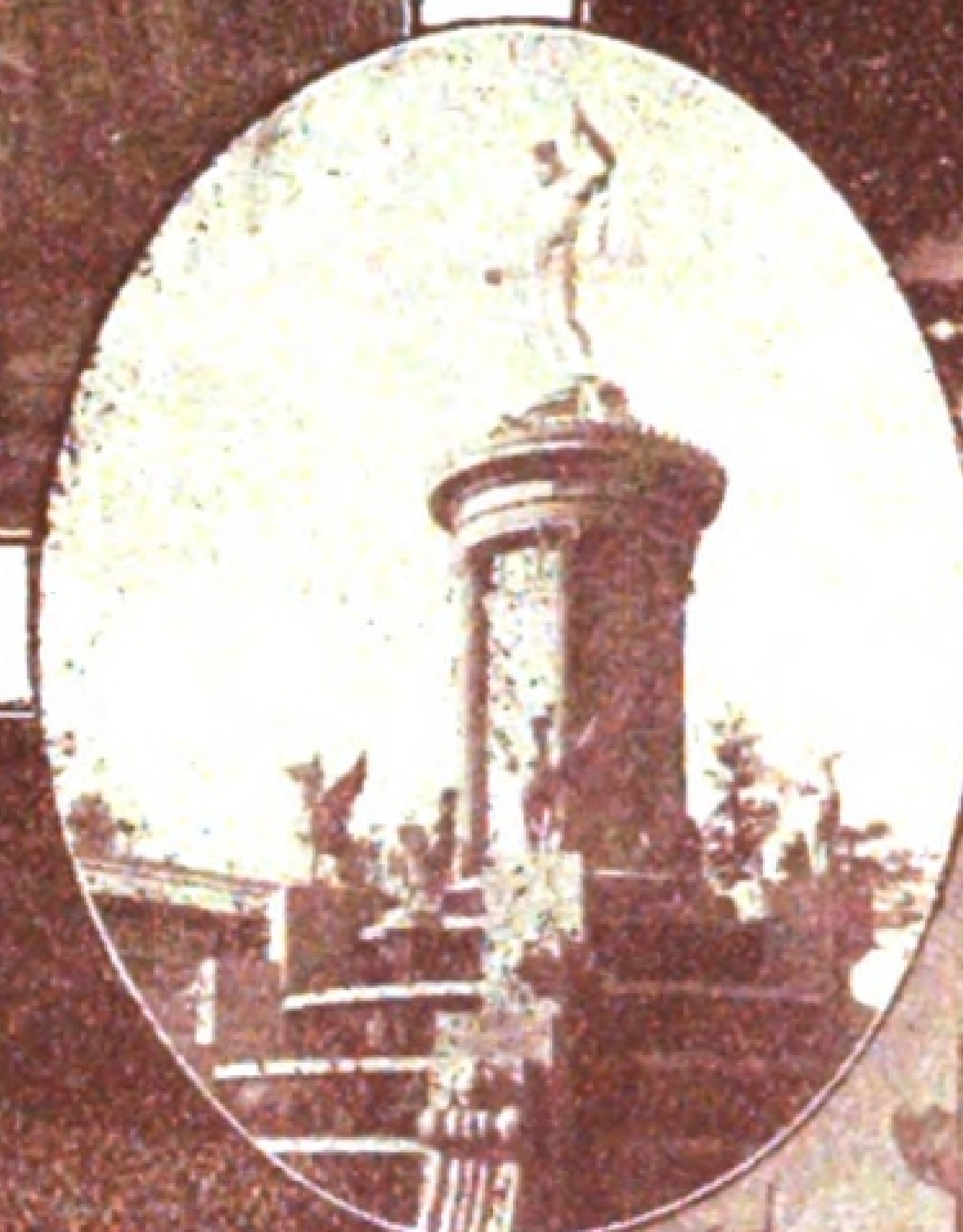
殊に、巻頭の少女芝居『**女赤ゲット**』は一**巖谷小波山人作奇々妙々**讀吹き出さずには居られません。少女の春の讀みものとして、花を見るよりも愉快です。

(裏の四)

東京博覽會


臺灣館の光飾


凌雲橋




三菱館


池の端附近の夜景

東京神田南乗物町十二●電話本局二七二一●振替口座一五一四一

東洋社 創業 十周年祝

四月中 圖書標本器械樂器 凡て定價一割引

●手提形風琴 ●デスク形風琴 ●（東洋社）風琴（三月以後改正定價如左）

●手提形風琴

號	定價（圓）	荷造費（圓）
一	一八	、六〇
二	三三	、八〇

●デスク形風琴

號	定價（圓）	荷造費（圓）
一	二〇	一、〇〇
二	二八	一、〇〇
三	三五	一、五〇
四	四三	一、五〇
五	四八	一、七〇
六	五五	一、七〇
七	六五	二、二〇
八	七八	二、二〇
九	八八	三、〇〇
十	一〇〇	三、〇〇

●普通形風琴

號	定價（圓）	荷造費（圓）
一	一八	一、八〇
二	二八	一、〇〇
三	三七	一、五〇
四	四五	一、五〇
五	五〇	一、七〇
六	五八	一、七〇
七	六八	二、二〇
八	八〇	二、二〇
九	九〇	三、〇〇
十	一〇〇	三、〇〇
十一	一二〇	三、〇〇
十二	一五〇	五、〇〇
十三	一八〇	五、〇〇
十四	二〇〇	五、〇〇

（外に装飾用鏡付風琴及レークサイド形風琴共に百五十圓二百圓二百五十圓）

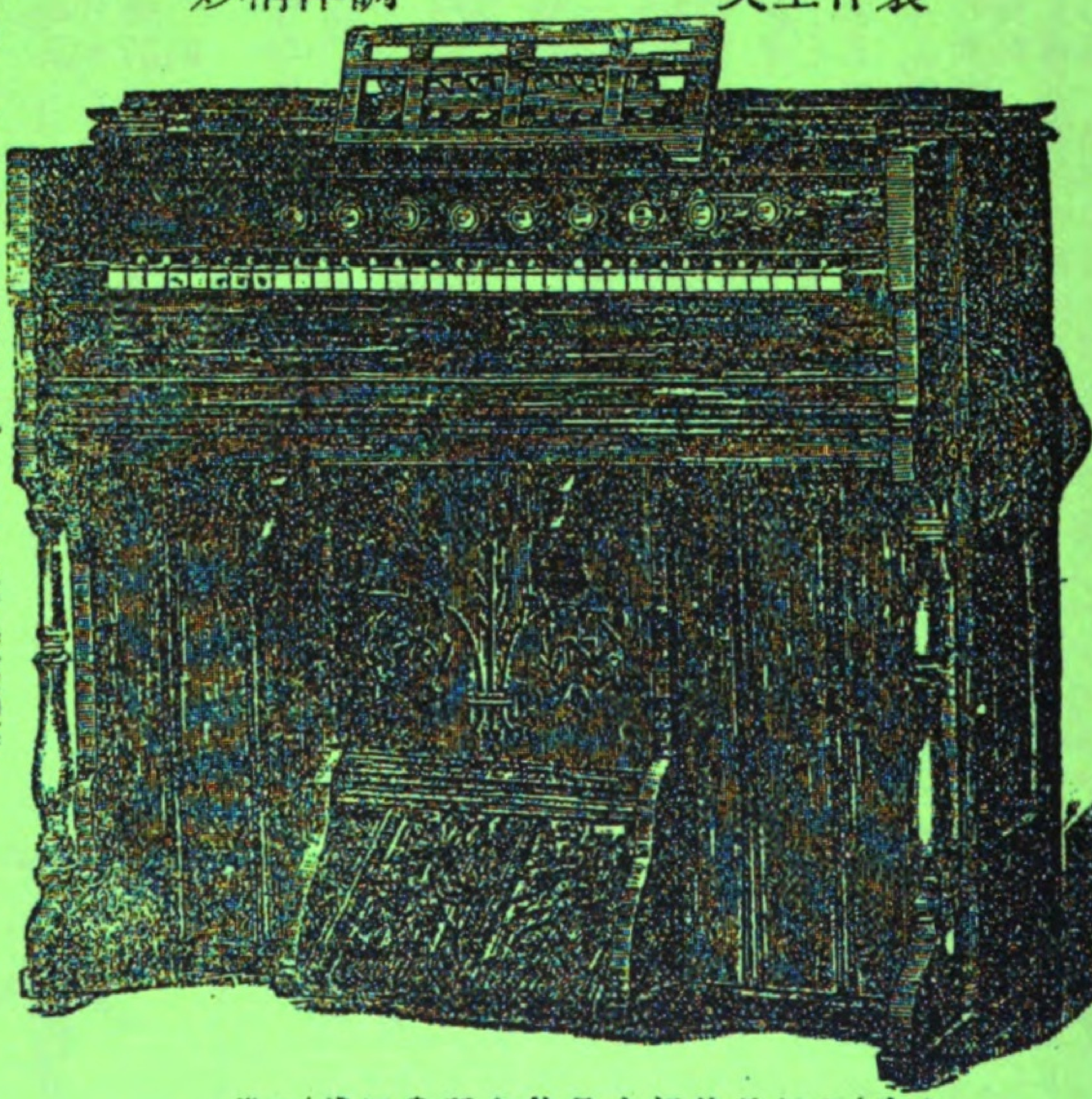
東洋社の手提形風琴は容積甚小而も音は強大携帯至便也

東洋社のデスク形風琴は上等永平教授管共上至便至利

東洋社の普通形風琴は外觀優美教授至便

東洋社の装飾用風琴は實用装飾用共に適す は両種共外觀壯麗音色優美形狀組織最新

製作堅美　調律精妙



（●御注文は前金に限る ●定價の外運賃荷造費申受く）

●東洋社音樂部編纂 ヴァイオリン初歩教則本 増訂二版 定價五十錢●郵税六錢

●東洋社樂器部編纂 オルガン初歩教則本 定價四十五錢●郵税六錢

（女 辛の一）

三月改正 器械目録 標本目録 各郵券四錢 樂器目録 遊戯體操器械目録 各郵券二錢 にて進呈

●大島元音樂學校長序 天谷音樂學校教官閲 オルガン使用法及修理法 定價二十五錢 郵税貮錢

●樋川二重師範教諭 野田岐阜師範教官 編 オルガン進行曲教則本 増訂四版 定價金三十五錢 郵税四錢

四月十五日創刊

英語世界

第一號要目

講 發刊の辭
▲英國史談……學習院教授 熊本謙二郎
▲ウンベルト王……學習院教授 南日恒太郎
▲名家逸話三則……早稻田大學講師 增田藤之助
▲笑話三則…… 深澤由次郎

講話
▲英文中の否定語に就て……東京高等師範學校講師 佐久間信恭
▲アルハベットの話……早稻田大學講師 岸本能武太
▲英語と英文……第一高等學校教授 畔柳都太郎

遊戲
▲ベースボール用語……早稻田大學講師 安部磯雄

發音及綴字……東京第一高等師範學校教授 岡倉由三郎

詩歌
▲ラングテニスン等の名作評釋……太陽英文記者 太田善男

時文研究

會話
▲子供の對話
▲會話資料……東京帝國文科大學講師 アーサーロイド

文法及作文●名家訪問●懸賞文募集

口繪 ○第一高等學校並新渡戶校長○ケンブリッヂ大學○英語分布地圖○勅語英譯

寫眞版 ○神田男爵の筆蹟○英國皇帝の肖像○ラングの肖像○英學名家の肖像○其他七八葉



每月一回十日發行年刊十二冊
洋裝菊判六十四頁每號
寫眞版及密畫數多挿入
正價一冊拾錢郵稅壹錢



東京 博文館 本町

(辛の二)

怒濤庵　江見水蔭君著竝畫



海洋文學者として既に定評有る江見水蔭氏が、身自ら捕鯨船に乗り組みて、遠く朝鮮の惡灘に漂泊し、諾威砲手が狂瀾の裡に照尺を定むるの時、氏は怒濤の間に起ちて、一管の筆棹を呵し、捕鯨の大壯觀を實寫して、深く海底の秘奥を發く。本篇は此紀念帖也。氏の意氣や豪宕、氏の詩想や壯大、本書が如何なる快文字を以て成るかは茲に云ふを俟たざるべし。されば事實上の冒險小說として、頁紙を繰るに遑無き間に、遠洋漁業の智識をも了解し、豫ては韓國の風俗をも窺ふに足る。蓋し近時出色の好著述なり。

全一冊菊判洋裝
紙數約二百頁
實況寫眞版入
正價三拾五錢
郵税六錢
近日發行

卷中目次

東京本町　博文館

販賣部電話番號　本局二六二〇番

振替貯金口座番號　第二百四十番

(辛の三)

（辛の四）

紐育の社交婦人







榎本子爵令孃



中上川氏令妹





●時季は來れり

歐米最新流行

ヘヤロール

束髪前髪じん

▲貴婦人の最も賞賛の經濟品▲輕き事ハ子の如く伸縮自由
▲頭部を冷してフケを除去す▲上品の容姿を装ふヘヤロール

ヘヤロール箱入
改正壹個三十八錢
ヘヤタイ箱入
定價壹打三十五錢



●ヘヤタイ

貴婦人用の束髪元結にして切り結びの手數を省く便利徳用のハイカラ品

輸入發賣元
東京京橋區館屋町一番地
日加商店

特約店
東京市日本橋區橋町四 丸見屋商店
大阪市東區南久寶寺町三 小栗小三郎

賣捌所 各地和洋小間物店

女(壬の一)

第貳巻第四號

文章世界増刊

文と詩

既刊

△内容　青年文章家の中堅たる投書家諸氏の佳品傑作を紙上に掲載し、宛然百花爛熳たるの趣あり。題目は叙事文、抒情文、書簡文、論文、小品文、はがき文、新體詩、漢詩、短歌、俳句、小説等にして、皆現代諸家の嚴密なる選擇と親切丁寧なる批評とを加へたるを以て最も習文の參考書たるに適すべし。

全一冊洋装大判

△巻頭　文章を作るもの丶爲めに必要なる諸種の文話、解題、材料等を掲ぐ。『明治名作解題』は明治年間に於ける文學的作品に就いて、公平にして親切なる解題を試みて、明治文壇の内容を知るに便ならしめ、『現代文學者小傳』は現今作家數百名の經歴、出身、作品等に就いて詳細なる記述を爲し、まさに是好個の文學者人名辭書にして。文章一家寶庫たらんを期す。

正價廿錢　郵税二錢

本文

●小説……小栗風葉
●懸賞小説の評……選者
●論文……長谷川天溪選
●叙事文……田山花袋選
●抒情文……西村渚山選
●書簡文……前田木城選
●小品文……長谷川天溪選
●はがき文……前田木城選
●新體詩……蒲原有明選
●和歌……窪田空穗選
●漢詩……岸上質軒選
●俳句……内藤鳴雪選
●課題答案
●應募畫評……橋本邦助
●文界時報

口繪

●日光中禪寺のやしほ(みづゑ)……丸山晩霞君畫
●眼鏡橋より見たるニコライ堂(鉛筆畫)……和田三造君畫

寫眞版

●諸書の人●西行法師の筆蹟●原稿のさま〲(山路愛山、大町桂月)●農家(泰西名畫)●詩友諸君の小照●貴婦人の纖糸(泰西名畫)●米國紐育セントラルパーク

附録小説

●批評家……正宗白鳥
●母……窪田空穗
●白眼黨……小川未明
●復讐……村山鳥逕
●齲歯……西村渚山

東京本町　博文館

(壬の二)

五月上旬創刊

鐵道滊船 旅行案内

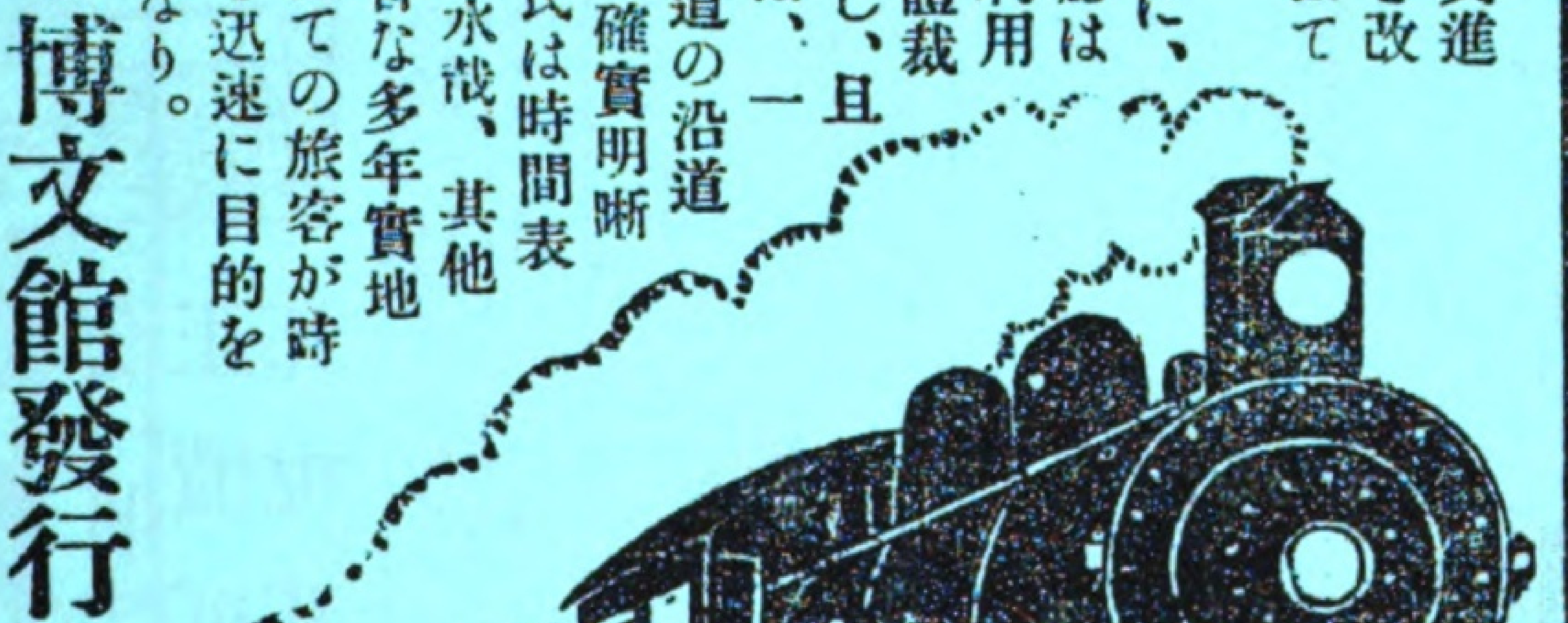
◎毎月一回十日發行

洋装菊判紙數百六十餘頁
正價拾錢郵稅壹錢五厘

東には東京博覧會開け、西には關西府縣聯合共進會もまた開け、官私各鐵道は皆々發着時間を改正して旅客の便を計り、各滊船會社また競ふて運輸の改良を計りつゝあり。

我が戰勝帝國民は、今や花紅柳緑の樂天地に、探勝遊覧の日もまた足らざらんとす。本誌は此等旅客が陸海交通の機關を遺憾なく利用せんが爲に、今後毎月發刊せらる。其の體裁には最も新機軸を出して、携帶に便にし、且つ必要なる鐵道又は航路の發着時間は、一見忽ち見出し得べく、また其等の鐵道の沿道案内は、最新最正の資料に因て最も確實明晰に之を編纂す。統計家の伊藤祐穀氏は時間表の編製に從ひ、旅行家の名家坪谷水哉、其他の諸氏は、案内記に筆を執り、皆な多年實地の經驗に依て成る直ちに是れ總ての旅客が時間を誤らず、經費を省き、最も迅速に目的を達する爲に唯一無二の案内記なり。

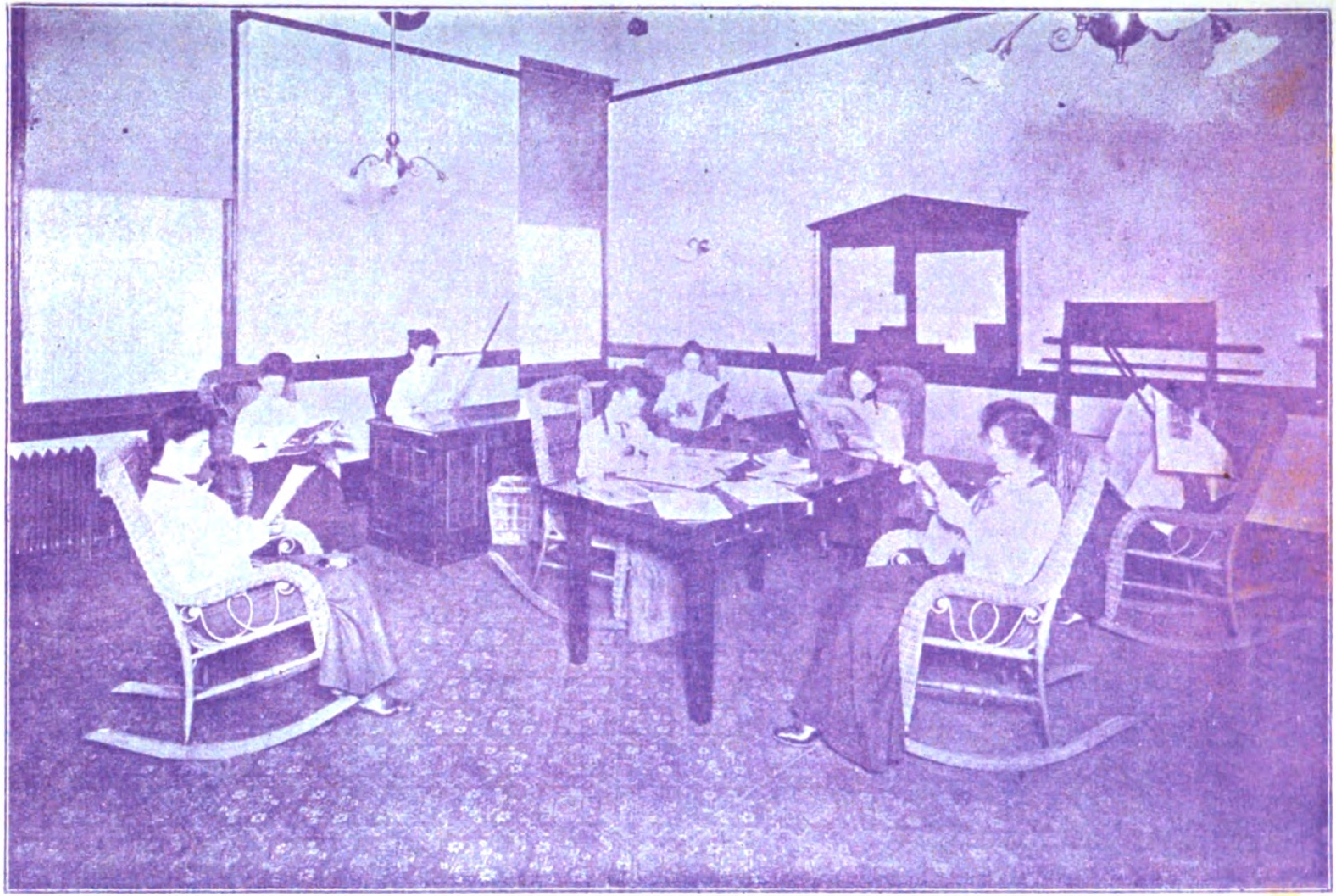
從來同種類の雜誌あり冀くは**博文館發行**の旅行案内に注意を乞ふ。



發兌元 東京本町 博文館

（壬の四）

米國電話交換所休憩室



南洋土産



文藝倶樂部 第十三卷第六號 定期增刊

豫告

現代の落語家中錚々の聞え高きもの、東西に亘りて十八名を選び、おの〳〵其得意とする落語十八編を收む。世の中に讀んで此の書ほど面白きものなけむ、讀者は今より腮の掛金に御用鎮あれと云爾

落語十八番

全一册洋裝菊判
正價貳拾五錢
郵稅貳錢五厘
四月十五日發行

目次

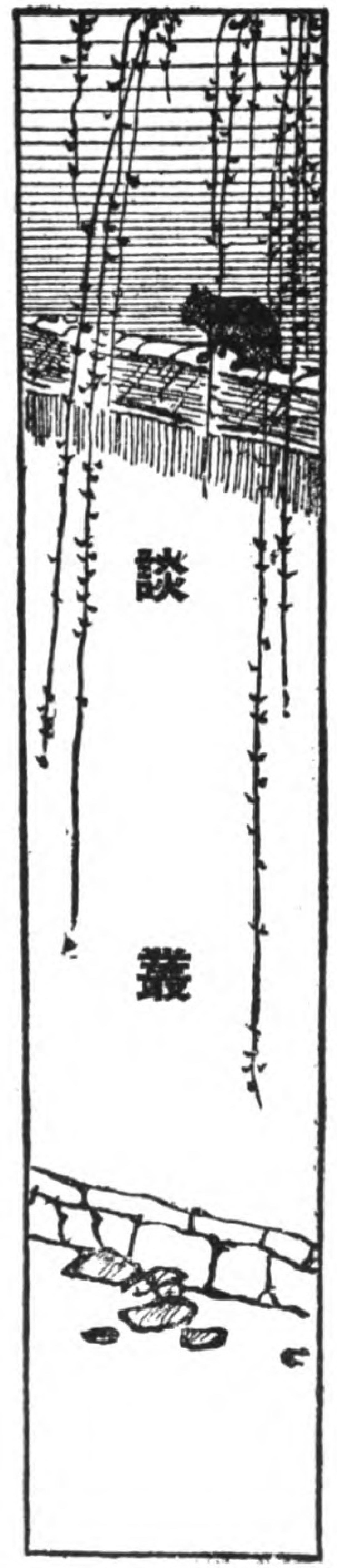
東京 博文館 本町

(癸の二)


女學世界
定期增刊
婦人博覽會

博覽會と婦人の活動

手島精一



博覽會は勿論商品紹介の一機關であるが、併し乍ら他の一面より觀察すれば、又之を一般社會の教育狀態の反射鏡とも見るとが出來る。從つて博覽會に現はれた婦人の出品、或は博覽會に於ける婦人の活動等の有樣を見れば、又其の當時に於ける婦人の教育狀態は略ゞ之を推察する事が能るわけである然らば今日博覽會に於ける婦人の出品の有樣は如何であるか、又今日の婦人は博覽會てふものゝ上に如何な活動を爲しつゝあるかと云ふのに、遺憾乍ら自分は之れに就ては格別愉快なる事實を擧ぐるとが出來ぬ。

△男女出品の優劣

先づ今日世界一般を見渡して博覽會に於ける婦人の出品の有樣を見るのに、何れの國の博覽會に於ても、婦人の出品は其の精巧の程度に於て今日は未だ到底男子の敵で無い。素より婦人の出品中にも偶々拔群のものもあらうが、槪して言へば男子の出品に比して餘程劣つた方である。而かも博覽會に於ける出品は、婦人の手に成りしと否とを問はず、偏に其の製作の精巧なりや否やの點に依て消長するものであるから、婦人の出品は勢ひ男子の出品に壓倒せられて、何れも甚だ振

つて居らぬ。是れ其の一面に於て實際に於ける婦人の智識技能と男子の其れとの間に大なる懸隔のあることを示すもので、一家一國の調和の上から見れば、甚だ悲むべき事であらうと思ふ。次に婦人の活動は如何と言ふのに、是れも亦甚だ淋しいもので、たゞ女權の最も盛んなりと稱せらるゝ北米に於て僅かに左の數個の事實を見たに過ぎない。

△パーメル婦人の活動

其の一は、彼の市俄高大博覧會――閣龍大博覧會――の時に、特に婦人部といふものを設け、婦人の盡力に依て内外婦人の製作物を一堂の下に蒐めた事實がある。其の部長となつた人は同地の婦人間に最も名望のあるパーメル夫人で、婦人部の事柄は一切主として此の人に依つて經營されたのである。即ち同婦人は自ら東西に奔走して博覧會場に一の立派なる婦人館てふものを造り出し、外は萬國の婦人團體に出品を勸誘して、凡そ婦人の製作に係るものは總て其の館内に蒐集陳列したのである。當時我國へも出品勸誘の書面が來たので、我國にては毛利侯爵母堂が主として斡旋の勞を取られ、貴婦人團體と博覧會の當局者とが相協議して其の勸誘に應ずることゝなつた、で編物、繪畫、陶器等の内で婦人の製作品を多數に出陳して非常なる好評を博し得たのである。其他右婦人部は博覧會の他の部へ婦人の審査官を出して出品審査の事に當らしむるとか、或は博覧會中婦人の學會を開くとか、隨分盛んな活動を試みたわけである。

△五十万弗の調金策

扨て右の婦人部が、内に於て諸般の活動を爲す爲めに又外に以ては萬國に向つて多數の出品を勸誘する爲めに必要なる費用は、素より尠なからざる額であつたが、其の支辨方法は實に巧妙なるものであつた。即ちパーメル夫人は、先づ國會に向つて婦人部の補助金として金二十五萬弗の下附を請求し、且つ其の金を悉くコロンプスの亞米利加發見を助けた恩主た

る西班牙女王エサベラの肖像を現はした二十五仙の紀念貨幣を鑄造して交附せらるべきやうにと申出でたのである。すると國會は、之れに對して賛成を表し異議なく直ちに之を承認して國印を押したる二十五仙の貨幣二十五萬弗を鑄造して婦人部に交附したのである。すると婦人部に於ては其の貨幣を一個五十仙づゝの價で公衆に賣り出したのである。所が其れが却々の好評で、瞬間に之を賣り盡して、二十五萬弗の貨幣が忽ち其の倍額五十萬弗となつたわけである。何と妙策ではないが流石は米國婦人である斯ういふ事に拔目はない其爲め莫大な費用も綽々として餘裕を生じ十分に之を支辨するとが出來のたである。婦人の行動としては實に目醒しい事ではあるまいか。

△婦人團體の接待

右の金策はシカゴ博覽會に於ける婦人事業中の成功したもの丶一つであるが、今一つは聖路易の大博覽會の際に於ける婦人の活動である。然れ共當時はバーメル夫人の如き活動的の人物が婦人の中に無かつたと見えて、たゞ僅かに婦人が接待に力めた位のものであつた故に市俄高に於けるが時の如き愉快な活動を見なかつたのである。當時或る婦人の團體が博覽會に協賛を與へて、內外國の貴賓或は知名の士の來聖の節に、主として接待の任に當つたのであるが。其の接待の一事に就ては十分盡力した方であつた。我が伏見宮殿下が、博覽會に御臨場あらせられた節に、卒先して御接待申上げたのは、即ち右の婦人團體であつた。之を要するに、聖路易に於ける婦人の活動は、市俄高に於ける其れに比すれば、頗る微々たるものであつた。

以上述べたる所を外にしては、博覽會に於て婦人が活動したと云ふ事は、未だ曾て之を聞かぬ。是れ必竟其の一面に於て實社會に於ける婦人の地位勢力の如何を知るの料となるわけで。未だ婦人の男子に及ばざる點は聊か遺憾と言はなければならぬ。（GI生筆記）



北米の婦人博覽會

マスターオブアーツ　飯島榮太郎

今更言ふ迄も無い事だが、米國は實に女の世界である、其の勢力は非常なものであるから苟くも婦人の企てた事業と言へば、殆んと同じ模型で打出したやうに、孰れも大なる成功を遂げてゐるのである。

△婦人博覽會

の如きも亦其の一つで私が彼國に居た間に、彼地此地で大仕掛のものや小規模のものを幾箇も見ましたが孰れも誠に立派な成効であつた。然れ共、米國婦人が婦人博覽會と云ふ新規のものを、のこ〱世間へ擔ぎ出して、而して立派に成効を遂げ爲せるのは、强ち其の勢力の大なる結果とばかしも云へない、一には其の遣方が實に花々しくて而して如何にも面白い、言はゝ世間の好奇心に投ずるのが旨いからである。で玆に私が先年費府其他に於て見た二三のものに就て少しく其の遣方を述べて見ませう。稍や大仕掛のものになると、其の仕組は現に芝公園に開催されてゐる婦人博覽會などゝ略ぼ同じ樣であるが。其の大體の趣向を述べて見ると、其の陳列品は、婦人の手に成つた美術工藝品は申すに及ばず、男子の手に成つたものでも苟くも

△婦人に關係あるもの

は殆んど網羅し盡してゐる。又其の傍には婦人が種々の物品を實地に製造つて觀せて居れば、又其の製造法を或は無報酬で或は幾何かの報酬を取つて敎授するなどの事も遣つて居る。併し斯んな事ではまだ〱趣味が乏しいと云ふので、別に上野の博覽會にある演藝館のやうなものを幾ケ所にも設けて、其處へ貴婦人

令嬢達が集つて、此方では音樂、彼方では遊戲、さては舞踏、演劇など、様々と婦人の藝を遣つて觀せる。それから又獨逸、佛蘭西、西班牙、伊太利、希臘、土耳其、支那、日本等

△世界各國の婦人

を集めて觀せるなどの事も遣つて居る。之れには兎角の議論もあつたが。兎に角も却々趣味があつた。其の遣方は、一軒の會館を個々別々に區劃を設らへて其の中に各國の婦人を演出したのもあれば又廻舞臺の様にぐる／＼と廻はして觀せるものと、兩様あるのもあつたが、其の婦人にはそれ／＼其國固有の服装をさせ、其國固有の珍らしい遊戲なり、手仕事なりを遣らせて置く、この外又其の居室の構造、室内の装飾、及び手廻道具に至る迄一切其國風を示してあるから、之を一見すれば世界各國の婦人及び其日常生活の模様は説明を待たずして詳しく知ることが出來る様な仕組である故にそれは何地で遣つても必ず呼物になる。けれ共之を遣るに就ては、能く其の國風を調べなければ往々飛でもない間違を惹起す事がある。現に費府で遣つた時などは我々日本人は實に情け無い感じがした位である。それは歐米各國婦人の美々しき扮裝と立派な居室のある所へ、何處から連れて來たかも知れぬこれが日本人だといふ

△その日本婦人

は實に憫然なもので時は恰も夏の暑い最中であつたが其の服装といふのは彼國の下女の用ゐる縞の浴衣の見苦しい着物を着せ、而して居る所はと言へば總て竹で造つたものである實にお話にならぬ小さな小屋であつた。一體彼國の人は竹は日本の名産として非常に珍重されてゐるから、日本の國は家でも器物でも皆竹で造つてあるものとでも考へたものらしいそれで恁んなものを造つたのでせう、敢て別段輕蔑の意味でも無かつたらうが、着物と言ひ居室と言ひ總て支那人の其れにも劣つてゐたので、我々は甚だ殘念に堪えなかつ

た次第である。併し恁う云ふ事のあつたにも拘らず、其の大體の趣向は餘程面白く且つ有益であつたので、恐らくは右博覽會を成効せしめた最大要素であつたでせう。それから今一つ餘程嶄新な趣向があつた。それは

△社交的婦人博覽會

とでも云ふのであらうか、一昨年ローサンゼルスに於て初めて之を遣りました。之れは普通の婦人博覽會の如くに會場をたゞ一ケ所に限るものでは無くして、多くの婦人が連合して各自の家を博覽會の一部に供したのである。即ち其の家々に於て互に知己の婦人を接待する仕組のもので、貴婦人間の交際の一手段として出來たのであります。蓋し彼國では毎年九、十、十一月頃が上流社會の交際季節で、其頃になると貴婦人達は、晝と言はず夜と言はず、今日は何處明日は何處と、殆んど毎日のやうに宴會に忙殺されてる、其故其の繁忙を省略して一時に有益なる交際の目的を達しやうとの考へから有力なる

△十五人の貴婦人

が組合つて右の婦人博覽會を開いたのである。其の遣方は、先づ其の會場を、當地で言へば、例へば本郷切通邊の某富豪夫人の邸、少しく距れて高等師範學校邊の某紳商夫人の邸、橋を渡つて駿河臺の某金穴夫人の邸、と云ふやうに飛々に設け、而して其の各の家には各異つた國風の装飾を施し、各々其國の婦人に關する物品を陳列し、各其國の禮法に從つて知己の婦人を接待するのである。で其の切通邊の某夫人の邸へ假りに日本風の博覽會場とすれば、多くの日本品を集めて來て邸宅を出來得る限り日本的に装飾してある。其の装飾には矢張り多くの竹を用ゐてある。酸漿提灯は彼方にも此方にもぶら下つてゐる。又

△櫻花は日本の名花

と言ふので其邊をずつと櫻の花で飾つてある。中に這入つて見ると、驚くまいとか、應接室の天井から大

きな傘を吊り下がッて、其の周圍に赤い提灯をぶら下てある。私共から見たら全然發狂者の所爲である。其處でお茶、煎餅、羊羹など云ふ御馳走が出るが、孰れも食へたものでは無い、其處に居る婦人は皆日本風で着物は木綿縮緬、髪は丸髷或は島田等、其れに小さい團扇の格好をした柄の五寸位の簪を差して却々妙な樣子をしてゐる。が其れで兎も角も多數の客を接待する。それから其處で切符を貰つて次の師範學校邊の某夫人の邸へ行くと、其處は全く佛蘭西風で、邸宅の裝飾、客の接待等總て佛蘭西式で遣つてゐる。又其次の駿河臺の某夫人の邸へ行くと、其所は全く英國式で遣つてゐる。と云ふやうに總て十五軒の家が

△各々各國固有の式

を以て來客を接待してゐる。のみならず、其の各々の家には、來客の參考に供する爲めに各々其の國風の臺所、食堂などをも造りつけ、且つ其れに用ゐる器物其他各國婦人に關する物品を澤山集めて縱覽せしめるので、其處へ行くと其の一國の婦人の日常生活の狀態を詳しく知ることが出來る。實に活々とした面白い趣向で、之を遣つた當時は非常な喝采であつた。是れ強ち婦人博覽會にのみ限つたことでは無い。要するに何事業に就ても米國婦人の遣振は總て是んな風で、彼女等が諸種の大事業を容易く成効せしむるのは決して偶然では無いのである。

富豪の娘と結婚の約成りし男、娘の父に向ひ「ハア夫れでは貴殿は、持參金として御息女に、たつた五千圓しか下さらぬのですな、五千圓では貴殿の身代としては餘り少いではありませんか。

娘の父「如何にも少いが、其の代り俺が死れば、遺産は悉皆娘に遣る積りです。

男（餘り甘い話しに思はず口を辷らし）「イエ夫れでは貴殿の御死なりなさるのは、一體何時頃ですか。



野蠻國の教育

理學博士　坪井正五郎

地球は如何なるものであるかと云ふことは委しく研究せられてあるが、地球上に住んで居る人種に就ては文明國人は　隨分よく知られ居るが、野蠻國の人のことは研究せられないので、之を知るものが希である、勿論眞の教育は文明人にのみあるが、野蠻人も亦一種の教育とも云はるべきものがあつて其れによりて人の高下を定めたり又夫を撰擇したりする、

一體野蠻未開の人といへば誰しも輕蔑するけれど然し各地方を視察するに野蠻未開の人と云ても其れ〳〵の教育がある。

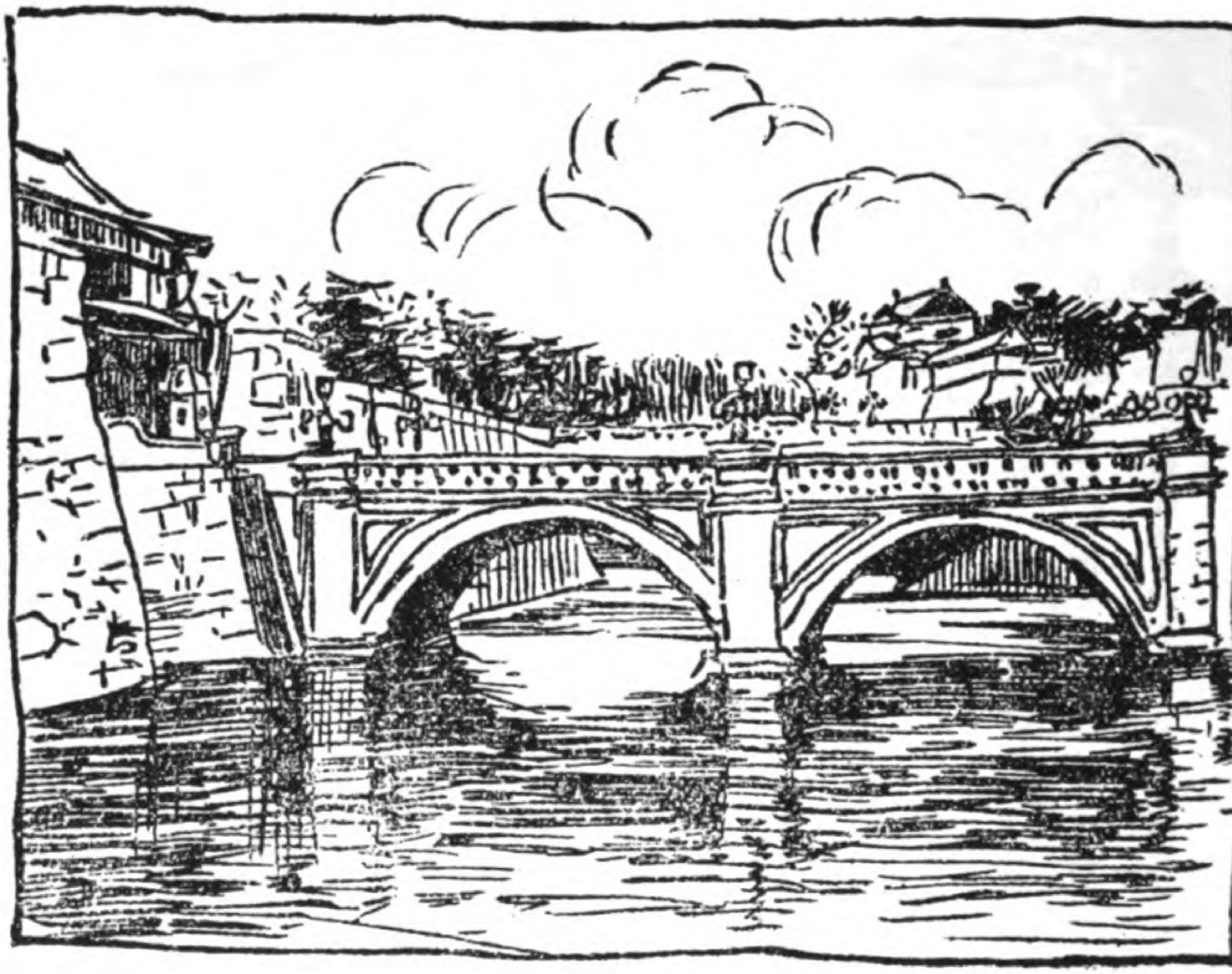
例へば臺灣には蠻人が夥しいが、アタイアルと申すは、マレイ人種で最も野蠻である、殺伐の氣に富んで人の首を多く持つことを財產として居る、人を殺すのは何も其人に怨みのある爲でもなく、唯々己れの實力を示し、人よりも多く首を所有て居ると見せ、又腕力の強い事を看板にする爲である、然し此等の野蠻人は何時にても人の首を取るといふ譯でもない、常には農事に從事して居るから、勞働に紛れて通行の人も意に止めず耕作の業を爲して居るが、夫れが暇になると人の首を取りに出かける、通行の人が彼等に隱れつゝ歩んでも、それと見出すことが餘程巧であつて、鳥の鳴聲によりてすら人の通行するを知ると云ふ、さうして首を取る事が上手な者は他の人々を司配して蠻人社會の上位を占める、男子が幼少の頃には首取の稽古として大きな芋を置き、是れを切らせて、後日人の首を切る下稽古とさせるのであるから、野蠻社會には首取といふ事が教育であつて、不思議と思はれないのである。

西南に移りてヒリッピン、マレー半島地方のお話を致せば此處にて婦人が男子を撰ぶには矢張臺灣と同じく人を多く斬つた者を撰びまして、首を多く取つた者は我々の觀る教育ある男子とか智識勝れたる男子と想はれて居るから、臆病者の子孫は後世に殘らない、それは殺伐の氣風に富んで居る者が豪い者と思はれて、女子は皆是れに嫁するからである。

亞弗利加西方ダホメには女子が兵隊となる男子の兵隊もあるけれども、多くは女子から組織されてある、女子は擊劍調練等を學ぶ、或者は又家に在りて家事向の事を司つて居る、鐵砲や大砲を使ふのは、女子であつて、近頃では不完全ながらも、女子が大砲を製造するのである、又死人の髮の毛を頭のまはり又は衣服に飾つて、之を多く付けるのを名譽とするのもある、又人を殺した度每に日本で申す子安貝を一ツづゝ鐵砲の飾りに付けて其數によつて敵を幾人殺したかを示すのもある。

亞米利加の北部にも野蠻人がある、男子が教師になる時の試驗は木で鳥の形を作り紐を付けて首につるし其時悲鳴を發した者は落第にする、足にも牛の首をつけて綱引く人のまはりをぐる／＼廻はらせる、之れに堪ゆる者は即ち擧げられて教師となる、落第した人は終身子供あつかひせられて、仲間の相談にも出られぬのである、併し婦人は子を育て料理裁縫の業をつとめて内顧の憂なきやうにするのである。

南洋諸島の内に最も開けないのはオーストリーのイスランドである、住居は鳥の巢のやうで衣服もなく食物も唯自然の供給物をのみ仰いて生活して居る、此處の試驗は剛情我慢を試すのであつて、男子の髭を一本々々ぬくにいたさを我慢して居る、次に手に握つて居る物を取らうとするが、容易に放さないしまいにはくすぐつて取らうとしても更に放さないので及第となる傷は裝飾であつて胸や脊にある傷に縫をして譽を裝つて居る、婦人の職は貝や木の實を料理して食はしむる事である、今申した五六の例によりても社會は如何んなものであるかを察する事が出來る又教育は開化人に



東京名所寫生（二重橋）

ばかり占有されて居るものではなく猶程度の低い野蠻人にも之れある事が分る、であるから人類と名の付く者には些さかも教育のない者はない、人類と獸類とを區別するに尾の有無で知るものでない人間でも隨分尾ぽを隱くして居る者があるではありませんか、人には理解力があつて、之れによりて人の經驗を我が經驗のやうに覺ゆるのが即ち獸類と異なる所である之を以て社會の狀態を知り開化人と野蠻人とを知り得るのである、蝶もはじめから美しかつたのではない、毛虫が蛹蛹に化し、其れから蝶となつたのである、蛆虫は穢いが一生蛆虫で終るものでない、或は時期が來れば羽が生いて飛ぶ事が出來る學校教育を受ける時は自分の力を發展する事の出來ぬ場合であるが業を終へて後實力を修養し蝶のやうに美しく社會に活動する時を待つて居るのである、若し開化した國でも教育てふものがなくば精神的の蛆虫毛虫よりも劣るのである、蝶に成つても露を吸はなければならぬ如く教育は自己の力を發展する爲に必要なものである、今私は、聊か野蠻人の辨護をいたしたのであります。（此は東京高等女學校に於て博士の講演せられたるもの）「文責記者にあり雪子」

整頓は家政の始め

一定の物品は必らず一定の場所に置き、決してこれを亂すべからず、これ家政を執るものゝ眼目にして、やがて又社會に處し、人に交際するの要具なり、これに就て一話あり、昔し一世那翁に向ひて或人が問へるには陛下は御多忙の際に於かれても、御目を閉ぢ玉へば直ちに眠り玉ふ樣なり、我々凡人には迚も及ばぬ事なれど、願はくは其方法を授けたまへと那翁答へて曰く、予の腦中には多くの箱ありて皆よく整列せり、凡そ事を成さんと欲せばまづその適宜の箱を出して之を開くなり、用なくして、眠に就かんと欲せば、凡ての箱を閉づるのみ、故に眠らんと決心せば直ちに眠むる事を得るなりと、英雄の心胸磊々として風月の容るといふも畢竟この整頓の中に得たる餘裕なるなからんや、又英國の大政事家虞翁は議會に出て、演說するに際し偶々參考書類を要する時は書記官をして予が事務室の何番目の箱の何號の抽斗の何處の邊に何々の書類あり、これを取り來れと命ず、書記官至れば果して其處にあり其用意の緻密にして周到なること恰も繪圖面に描かれたる圖畫を見るがごとし、而して人は那翁の英雄にして虞翁の大政事家たるを知れどもその英雄たり政事家たる腦中に以上のごとき緻密の思慮と周到なる用意の深く其腦中に潜める事を知るもの少し假令又これを知ると雖も、さてこれを日常の生活に實行する者果して幾人あるべきや。

吾人はその經驗によりて人事には左の原則あることを發見せり、曰く精神の整頓と、事物の整列は大人物となるの要素なりと元來吾々はその固有せる五官の作用によりて周圍の事物と接するや、千種萬別、錯綜、混亂殆んど端睨すべからず、この千差萬別の錯綜によりて精神は常に混雜して心の靜平を失ふものなり、精神の靜平を妨害さるれば、從つて事を成すに敏活を欠き、敏活を欠ぐが故に自然又心に億劫を生ず、斯くの如くにして遂に成すべき事を十分成し遂げずして中途に拋擲すること多し、既に一事を拋擲するによりて他の一事も又妨げらる其原因を尋ぬれば只始めて事物を整頓せざるの一事にありて存す、是に於てか吾々は第一に秩序を整へ、事を整頓する習慣を養はざるべからざる事を悟る。



歴代衣裝の話

福地天香

△古來の女裝

我國上代の婦人服は、埴輪の人形や、法隆寺、中宮尼寺などに保存する天壽國曼陀羅に於て見られる推古天皇時代の女裝にも、知られる如く、袖は孰れも筒袖で、襟を胸の眞中で合せ、二重三重の裾廣き裳を着けた樣は能く西洋の婦人服に似て居りました。下つて奈良朝時代になつても、唐制の服に倣ふて、西洋の上衣の如き背子なるものを着、之れに下衣の如き裳をつけ、袖は稍廣かッたが腕の上には鰭のやうな裝飾もあり、髮の結ひ振も束髮に類し、足には絹張の靴を穿きたるなど、是亦大に西洋婦人の服裝に似て居りました。

然るに宇多天皇の御代に及んで、遣唐使を癈して一切外國との交通を斷ち、此の離れた嶋國幾で百年間長夜の夢を貪ッて居た間に我が慣習風俗は次第に緩み、其の服裝の如きも從來の窮屈な裳や靴をば脫ぎ去て、寢轉びの仕易いのを專一とするやうな暢氣なものになりました。保元の亂以來は此の服裝は一層亂れて、裳もつけねば上衣も着ず、たゞ一枚の小袖を着て、之に名古屋帶と稱する細い紐を腰に纏ひ、髷は立兵庫のやうな結髮にして、之れで立膝をしたり寢轉んだりと云ふ甚だ困つた風俗となりました。德川時代の服裝は此の亂れに亂れた戰國時代の服裝を承繼いで生れ出でたので、此れに多少の裝飾を附け、袖を長くし、帶を廣くし、髮は鬢を張り出して重く大いなる櫛笄を翳すまでのものでした。

△德川時代の女裝

今日尙ほ用ゐられてある幕府時代の婦人服は、德川三百年間に發達し來つたのであるから、從來の日本婦

人の如く屋内にのみ垂れ籠て居る女の衣服としては、餘程重寶でもあり又優美にも出來て居ります。裾の捌けて居る所は起居に甚だ便利であらうし、帶一筋を解けば脫替は何の造作も無い、袖の長いのはポッケットの代用を爲し、幅の廣い帶は後を隱すのに宜しく、見た格好も中々に好い。黑々と美しい髮を面白く結んで、鼈甲の櫛や寶玉の簪を差し、之れに丈長の鹿の子などを掛けたのも大いに趣がある。奇麗な素足の儘で西洋人支那人などのやうに汚れた靴下を穿かないのも甚だ心地が良い。又其の服裝は多くは光線の薄暗ふして狹き室で着らるゝので縞柄や模樣などにも注意して細かい質素なものを用ゐるとか、紋の附け工合や仕立方などに就ても頗る綿密な工夫を凝してある。

△現代女裝の改良

けれど此の幕府時代の服裝は、縱令如何程緻密な工夫の結果に成ッたものでも、元來鎖國籠居の慣習の間に發達したものであるから、今日外交も開け、又婦人の仕事も段々と戶外的になりて來た世の中には適せぬことは勿論である。去ればこそ此の十數年來色々改良の考案を出して此の舊式を一變しやうと苦心して居る人々もあるのですが、何樣此の服裝は長年の經驗を重ね、工夫に工夫を凝らして出來上つたもので、日本婦人の體格、容貌、背格好などにも能く篏當り、又夫れ〲美の要素をも具へて居るから、不便とは知りつゝも之を改良して一層好いものを作り出さうと云ふ事は一朝一夕の業ではない。

△改良案のまち〲

今日迄の服裝の改良案を見るに、各自分の專門に偏してその考案は區々である。衞生家は衞生の一方より割り出し、敎育家に修學體操の便否を基として考へ、西洋心醉家は一も二もなく西洋を土臺として改良せんとし、畫家は自分の理想に基き繪に畫いた態の如何を標準とする、更に吳服店の方に至つては專ら商賈上より打算して居る。然れ共婦人の服裝は斯かる單純な

考へで作り出さるゝものでない。我々素人の考に依るも、婦人の服裝は少くも左の諸點を參照しなければならぬ。

第一　婦人の生活狀態
第二　職業の如何
第三　地質と價格
第四　裁縫の難易
第五　色合、模樣、縞柄と婦人の體格、容貌との釣合
第六　服裝と髮の色、頭の裝飾、履物との調和
第七　衞生上の注意

右孰れの點から見ても非難無く、其の上模範の出所か良くて、且つ弘め方に何等の不都合も無くして、初めて世に行はるべきもので、婦人服の改良と云ふ事は廣く且つ深く研究をせねばならぬ。

△將來の婦人服

私は今日の日本婦人の服裝のやうに其の種類が尠なくては困ると思ふ。自分は其の樣式は日本風にもせ



東京名所寫生（外櫻田）

よ、根本は西洋服の如く平常家に居て働らく時に用ゐる衣服、ヴイジチンクドレッス樣の訪問服、トラヴリングドレッス樣の旅行服、夜會などに用ゐるイヴニングドレッスと云ふやうなもの、さては大禮服など云ふ類のものを作つて、一々其の向々の實用に適はしめ、其の場所柄との調和を考へることに仕なければならぬと思ふ。上着、下着、袴、襟の裝飾、髪の結ひ樣、櫛、簪、帽子、手袋、履物なども亦右に準じて考へる事が必要であらう。今日の簡單なる着物と一筋の帶ばかりでは迚も時勢の要求に應ずることが出來まいと思ふ。又着物の色合の如きも紫色や牡丹色や消黒色や或は近時流行の茶色ばかりを何時々々迄も逐ふて居る事も出來まいし、又模樣なども、ほんの一時の流行に駈られて彼の馬鹿らしい程華美な元祿桃山如きに眩惑するのも亦餘り妙ではあるまい。着物の地質なども絹物一式で貫すと云ふは聊か異なものである。此等の諸點は廣く偏らず十分に研究を積まねばならぬのです。

△流行と研究會

服裝と云ふものは自然に委せて置いても多少の變化はあるもので、例へば近く吾妻コートが流行り出した、ショールの類が行はれて來た、庇髪が盛んになツた、リボンを無暗につゝける、と云ふやうに西洋風が輸入されて婦人の服裝は次第に變つて參るが、併し此の自然の變遷に委せて置くのみでは完全な服裝は容易に調ふものではないから是非共專門家の考を集めて將來の模範を作る事にせなければならぬ。

娘の父「然らば貴殿は、心から拙者の娘を愛して下さるのですな。
若者「如何にも左樣、私は貴殿の御息女を愛するの餘り、今は狂せんばかりです、何うか御推察を願ひます。
娘の父「ウンそれぢや貴耶の愛して下さるのは、一體何方です、姉ですか、妹ですか。
若者大に狼狽の體「ム、、、ウ、その何方ツて、アノ兩方です。

活人活語

（處世の要訣）

◎不信者のない宗教は即ち愛國教なり、露國に希臘教あり、日本に神佛教あるごとし。

◎人は金持にならうとして居る間は決して金持でない滿足しては進歩せぬと同じ事なり。

◎法律の力は恐れるより生じ、宗教の力は信ずるより生ず。

◎馬鹿に意見するは、黒奴に石鹸の効用を說くがごとし。

◎なまけ者とは必ずしも何もせぬ者を云ふにあらず、何にもならぬ事を成す者も亦なまけ者である。

◎おしやべりとは、必ずしも多くをしやべると云ふ意味にあらず、考へずしてしやべる者も亦おしやべりである。苟しくも言語は思想の表彰である、熟考して後に發すべきものである。

◎婦人の意に逆ふことは、風に逆ふて船を漕ぐがごとし骨折つて利益なし。

◎退屈は鉛である、喜悦には羽がある。いそ〳〵として靜止せぬは喜悦の象である。

◎自由を己に求めてこれを人に拒むは、即ち壓制の定義なり。

◎婦人の心より愛を省かば何が遺るか？　蠟燭のなき燭臺のごとしとユゴーの言味ふべし。

◎小德を行ふは大德を行ふよりも難し、何となれば小德には名譽がないから。

◎生命の心配が減ずるに從つて、死の心配が增して來る、此の世ではどうしても安心が出來ぬものと知れ。

◎手に持つて居る雀は眺めて居る鶴に優る。來年の千圓よりは今日の拾圓を欲するが人情。

◎世には愛する人の快復を見る程嬉しい事はない。

◎老人の意見は冬の太陽の如し、暖めずして照らすばかり。意見には一味の溫情なかるべからず。

◎利巧な馬鹿程世間に厄介な馬鹿はない。始末にをへぬ代物は利巧な馬鹿に多しと知れ。

◎知識の男子に必要なものは、感情の婦人なり、一軒の家に二人の知識は餘り多過ぎるなり。

◎勤勞は富の右の手にして、節儉は其の左の手である、右と左の手を程よく使ふ者にあらねば成就はせぬもの。

◎大事業を行はんとするには、死なぬ積りで働かねばならぬ。

◎馬鹿は己の知惠に誇り、貪慾家は己の鷹揚に誇り、利己者流は己の親切に誇る。

◎人は始終己の缺點に檢點を打つ癖がある。

◎自ら譴責する所なしとする者は其の良心が餘程病氣をして居るなり。

◎悲みの涙は荒野の雨潛々として濕り勝なり。

◎敵を作るまいと思へば、己の長所美點を隱さねばならぬ、これを隱すものは眞の大人なり豈唯敵を作らざるのみならんや。

◎小思想を盛るに大言壯語を以てするは、恰も子供に大人の着物を被せたやうである。

◎始終悲んで居るものは、始終己のことを考へて居るからである。

◎金持で學問を求るのと、學者で金を求るのとは、共に同じ樣に六箇敷事である、何處か一ッに定めねばならぬ。

◎稀な訪問は親交を温める。あまり屢々訪問する勿れとの反言ならん。

◎女と云ふものは男の看護婦として天より授けられた者である。

◎希望と耐忍とは遲速の別こそあれ、兩々相隨行するものである。

◎美人ばかりを愛し、惡書ばかりを好み美食のみを専らとするは衰世の徴である。

◎默して後悔した者はないが、語つて後悔する者は澤山ある、口は禍の門今に始まつた事にあらず。

教育の重荷

今日の青年男女に何が最も普通で、且つ尤も多い病氣と云はばまづ何よりも神經衰弱であらう、扨て又その神經衰弱には何が尤も重なる原因になるかといふに、予輩の考ふる處では少くも今日の不完全の教育制度が確かに其の一部分の責を負はればならぬものであらうとおもふ、何故かといふのに槪して今日の教育制度は體育の未だ十分發達せぬものに無暗と澤山の課業を詰め込む弊がある、即ち智育が一番に多い其上に試驗制度などさいもあつて絶へず生徒の心を傷めさする、殊に貧窮な學生になればなるほど、頻りに達成を尊ぶの結果、體育などには一切構はず不養生の上に無理な勉強をして、それで少しも身體に差支ないものと考へてる、又彼の苦學生などの人々になると晝は勉強して夜は勞働するといふ、詰り此類の人は頭腦と身體とは全で別物のやうに考へるから、晝夜兼行の有樣に體力を費して體力、筋力、智力の調和といふとは少しも顧みぬ、之れは一般學生の大なる弊害と見なければならぬ。

元來今日の一般社會は到底抜くとの出來ぬ一の惡思想が潜んでゐる、それは外でもない青年には必らず學問をさせればならぬといふ觀念がある、學問するにもまづは實際の事柄よりも形而上の學問を學ぶのを高尚と心得て居る處ろから法律とか哲學とか、空論許りの教育に熱心さすることである、これが即ち中學生位な青年が其身分も充分に辨へずに宇宙の眞理が分らぬとか人生の價値がどうのかうのと煩悶するやうな譯になるので、それは誰の罪かといふと、さし當つては父兄たる人々の責任であるとおもふ、父兄が其子弟の性格を周圍と境遇に應じさするとの出來ぬ處ろから生じたもので實に今日の一大病源と言はればならぬ、次には青年と職業との關係である、抑も職業は人生一代の大事であれば子弟の將來の幸福を望む父兄たるものは隨分よく考へて子弟の身體や精神によく適合した職業を擇ばればならぬ筈であるのに一般の父母は兎角教師とか、政治家、法律家とか學者とか、醫者とかいふ様な側を希望して、商人、大工、職工、事務家といふ様な方を等閑にする様な傾きがある。

一は精神病に罹るやうな青年は、小兒時代から性質を異にして居るもので教育の方法も亦それ〴〵適當な方法を擇ばればならぬ、世に怠惰な小兒もあれば又惡癖な小兒もある、それには教育や境遇から起るのもあるが又病氣の爲めに怠惰や惡癖に陷る生徒も多い、然るに學校では一緒にそれを教育する此の邊の事は大に父母の注意すべき處ろである。

婦人の見たる博覽會

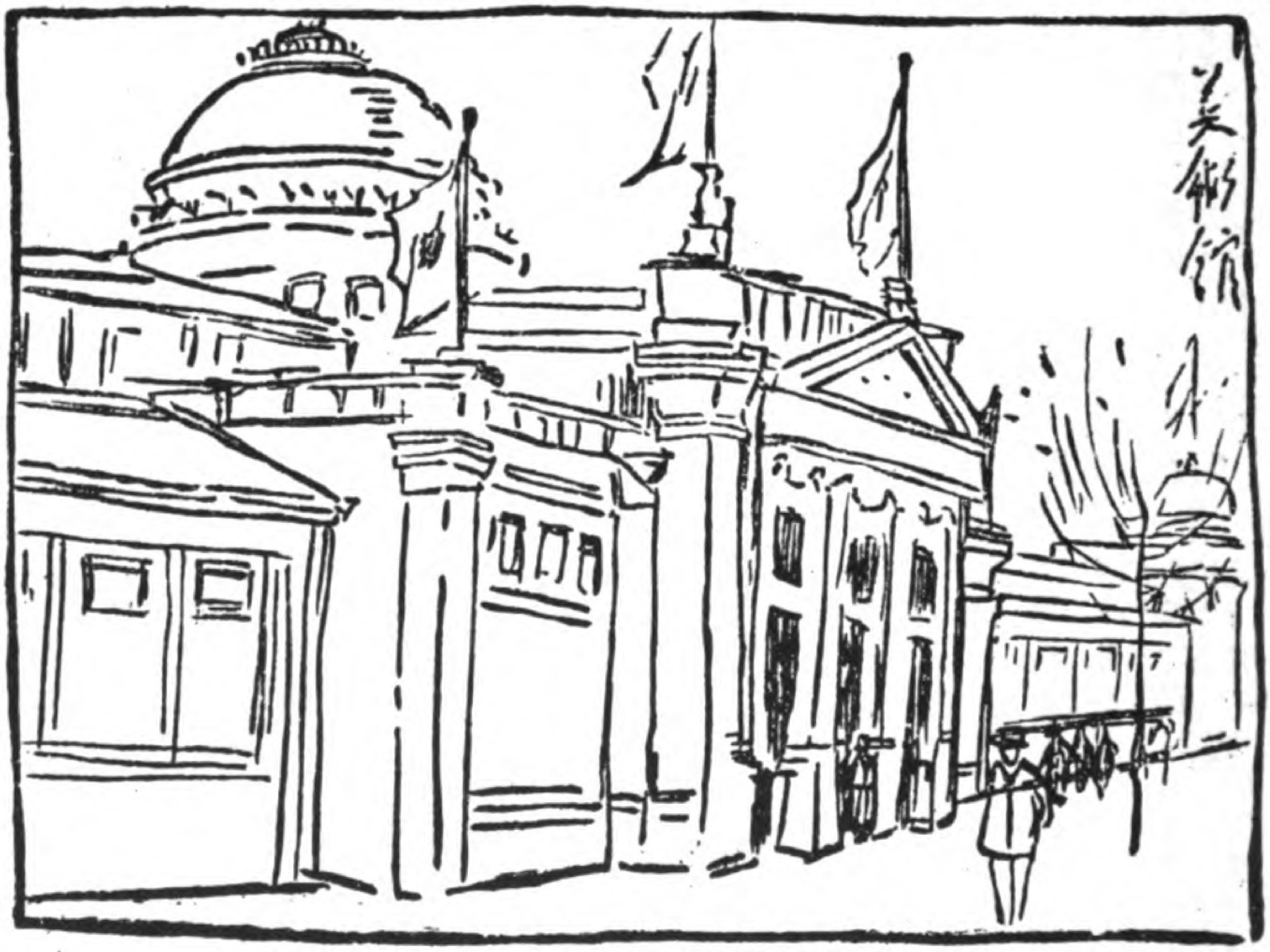
ハウェン夫人

記者曰。夫人は曾て其父君と久しく日本に在り、深く我が國情に通ぜりと稱せらるゝ人、一旦本國に歸り住みて、爰に十餘年の星霜を經しが、這度觀光を思立ちて來朝し、適々東京勸業博覽會の開設に際したれば、親くこれを觀覽して、其所感を叩きたる記者に、次の如く語られしなり。

△婦人の領分　妾は今回の東京府勸業博覽會を見まして、第一係う感じました。今回の博覽會には婦人の領分が極て少く、分娩とか、育兒とか、料理とか、裁縫とか、兎に角婦人の見て參考とすべき物品の出陳が、殆んどあるか無いかのは、誠に遺憾なことで就中、分娩や育兒用の改良具は、苟くも人の母たるものが、見てもつて大いなる敎訓を得るもので、又玩具なども見て置く必要が充分にあらうと存じます。衣服や什器、其他化粧品の類は別として、此等のものには一々詳細の說明をつけ、其使用法を敎へて、これを家庭に應用する機會を與へたなら、得る所亦甚だ大いなるものがあることでせう。然るに今回の博覽會は此等の用意が忘れられて居るかのやうに思ひます。つまり申しますと、部分々々の事に顧みないで、大局にのみ眼を着けた爲め、只だ廣義に、美術とか、工業とか、乃至敎育、衞生などいつたやうな廣い名稱の下に雜然と種々のものを類集して、婦人とか、小兒とかいふやうな、其樣なことには何も考へ及ばなかつたものと見えます。夫故、婦人の領分が自づと少く、心して搜さねば、それを見出すことが出來ない位で、漫然と――所謂單に見物するといふに過ない人には、自己の領分を見出すことが、極めて稀なことゝ存じます。此の一事は他日再び博覽會の開設を見る時、日本の婦人方が、敢て要求なさる必要があらうと存じますので――。

△觀覽者に對して不親切　次に感じましたのはこの一事です。數多い出品物の中には、隨分詳細な說明が無

ければ解り難いものが澤山ありませうし、殊に婦人に對しては夫が多いことと存じますが、何故か説明の附いて居ないものが多く厶います。あれでは、小供など連れて參りまして、不意に小供から説明を求められましても、何と言ひ聞かしてよいか、自分にすら解らないのですから、勢ひ曖昧なことを言つて置かなければなりません、此の曖昧なことを小供に言つて聞かせると申すことほど、害になることは厶いませんので、深く注意を致しましたら、説明書を附けると申すことは、



東京博覧會寫生――美術館

係かる點に迄必要があるのですから、これは今からでも實行して頂き度いものです。別て、外國語の説明を附して頂き度いのは、現に妾が次のやうな目にあひましたのでも判りますことです。――他の事でもありませんが、妾はフト目についたものがありまして、夫れが欲いと存じましたから、連れてまゐりました通辯に、何程とついて居るかを尋ねますと、其通辯は言下に、あれは非賣品ですと申しますから、夫れでは止むを得ないと存じまして、此の賣約沙汰は其儘に致してしまひました。處が後で聞きますと、其

品は矢張賣物で、明かに賣價までついて居ますさうで、これは外國語の記がついて居ないものですから、通辯が自分の面倒を省う爲め、恁んなよい加減な事を申したのださうで、彼の不親切は申すまでも無いのですが、Hand off（手を觸る可らず）だけを外國語で書いて、他の事は日本語の說明する縷々附けないとあつては、到底觀覽者に對して親切とは申されますまい。

△不統一　それから、全體が統一して居らぬやうに存じます。成る程、出品の一つ〳〵を見ますと、中には隨分美事な、目につくものも厶いますが、兎角に統一を欠いて、其爲に觀覽するのが餘程困難かと存じます。さう申しては何ですが、今回の博覽會は大きな勸工塲に過ぬとの評が適當で、雜然物品を陳列したまでのこと、博覽會としては什麼でせうか！

△婦人の爲め　最後に尙一の感じましたのは此の博覽會に婦人の爲めの設備が特別に何も無いことです。設令ば婦人の爲めの休憩所が特に設けて無いこと、それから婦人の爲の娛樂室が別に備へられなかつたこと、これ等は其主なもので、仔細に見もてまゐつたなら、此の婦人の爲めと申すことは、那邊にも忘られて居ることを發見することが出來ます。

△妾の見た博覽會　は以上の失望と、以上の希望とを妾に語らしめ、妾に——平生最も愛慕する日本の婦人方の爲めに、其現在と未來とに向つて、此等の言を用ゐしめました。而して尙ほ、日本の美術家——別ても純粹の日本畫家にお望みしたいのは、博覽會に出品の畫だからとて、今回のやうに大きく描寫れないでもよからうかのやうに存じますので、成るほど、あゝいふ風に大きくお書きになりましたら、如何にも目について よいには相違厶いますまいが、あれでは實用に適せず、洋風の家ですら、あゝ大きくては甚麼あらうかと存じます位、況んや建築法のまるで異う日本の家屋には、折角ながら使用途が無く、随つて賣約者も無くはありますまいか、これを家庭を忘れて、只だ博覽會だけを主としたからのことで、就中閨秀畫家の方々は此等の點にも注意して、何方までも實用に適するやうありたいものです。

食品の按排

一 飲食の目的は第一身體の滋養第二に食味の滿足にあり

一 料理は成るべく消化よからんやう心掛くべし、されど如何に消化に重きを置くとても病菌の恐ある生卵を中熟にし、條虫の恐ある刺身を生食するはよろしからず

一 病人、老人、胃弱者、及び六七歳以下の小兒の食品を除いては、材料にあまり多く消化不消化を問ふべからず。

一 料理の飾りに顏料を用ふる時は、必ず其無害を保證すべし、一般に顏料は使用せざるを法とす。

一 藥味は成るべく之を避くべし、殊に小兒には一切禁制主義を取るべし、止むを得ずんば成るべく無害なるもの少量を撰ぶべし、葱蒜、韮の臭氣は其の中に存する一種油樣の物質に基くものにして、其物質は葱蒜等の三百分の一を存するのみなれども、其臭氣の强き之を食する後久き間、呼吸及び皮膚に遺るのみならず、當分母の乳中に混じ來り、乳兒に害を與ふるものなり、猶懷胎中多く香料を食へば、胎兒に影響して甚しきは腦膜炎を起すことあり。

一 少しにても疑ひある材料は、惜しむことなく投棄すべし、殊に蒲鉾は往々此種の惡肉を以て作ることあるが故に夏日は食はざるをよしとす。

一 物を煮燒する時は、其物に應じて水の性質、溫度の上せ方、火の加減、時間等を加減すべし。

一 ソップを作るには、水の中へ肉片を入れて、徐々に熱せざれば、養分凝り固りて水に溶け來ること少し。

一 肉を煮るには、湯を沸したる中へ肉片を投じて煮ざれば、美き味悉く汁に出てゝ、滓のみ殘るの恐あり、ソップを作ると反對の手加減を要す。

一 强硬き肉は煮て數時間冷し置き、更に火に返せば軟かとなるものなり、打叩きて煮れば更に宜し、一般に屠りたるばかりのものは硬く、日を經るに從ひ軟かになり、腐敗せざる限りは古きものを用ふべし。

一 豆類を煮るには、天水を用ひて硬き井水を避くべし。

一 卵を中熟にするには、攝氏寒暖計にて六十七度以上、七十七度以下の湯に投じ、三四十分間煮るを可とす、かくする時は、黃味も白味も全くの中熟にて、極めて消化よく美味なるものを得可し、此の溫度は、指頭を瞬時觸るゝも、別に熱さを覺えざる程の湯加減なるが故に少く馴るれば寒暖計の必要なかるべし、又これに最適する器は、銅壺附の五德にて、火は炭團を良しとす。

一 材料は成るべく其地のもの、其時々の物を用ふべし、初物々々とて、凡て高價なる初物を求むるの人あれども、これ畢竟一種の病癖にして自然の食味にあらず。

一 金と材料の價値とは、必らずしも平行するものにあらず、歐米の北部にては、甘藷は非常の御馳走にて、一貫目數圓に價すれども我國にては、僅に十錢内外のみ、安價にして滋養に富める材料あり。

初夏の風物

東阡西陌の花にあこがれしはきのふの夢にて、春は惜めども止らず、落花狼藉、時はいつしか新樹の候に入りぬ。菜種は刈り倒されて、麥は時えがほに生ひ、梅子豆の如く、柳條蔭を成して地に垂る。一日一日に伸ぶるは若竹、桑の葉、茶の芽。農事はこれより多忙ならんとす。

見渡す限り濃き淡き若葉に目もさはやかなる中に、柘榴の花の燃えたゝむばかりに紅なる、卯の花の垣根に白く咲ける、燕子花の水際に紫の色濃く咲ける、さすがに色彩は單調ならず。

鶯と蝶との全盛時代は既に過ぎ去りて、燕子花獨り忙し。しでの田長てふ子規の聲を、もろこし人は、よにも悲しきものとすれど、わが國人は初音聞くを樂む。夕暮には蝙蝠も羽を伸し、水邊には螢飛びかふ。初雷もやがて聞ゆべく、草深きあたりには蚊もそろ〳〵出で初むべし。

初松魚味はんは及びなきも、筍、そらまめ、豌豆、田家の風味はつぎ〳〵に膳に上りて都の空もなつかしからず。

主婦の務として衣洗ふわざは、四季いづれも疎にすまじきことなれど夏は殊に然り。

借り着せんより洗ひ着せよとは、よくも家事經濟の要をいひ盡したるものかな。垢染みたる絹の衣着んよりは、たとひ手織木綿なりとも、洗ひ清めて糊つけたるを、夫にも子にも着せ、自らも着たるは、見る目心地よく、主婦の氣立も押しやられていと床し。衣類襯衣足袋何にても垢光りに光るまでも着潰し、はては二束三文の價もて屑屋の手に渡すなどの家庭に決して福運の神は宿らじ。

世には洗濯を怠らぬ婦人はなほ多けれども、己が心の垢を洗はんとする婦人は極めて鮮し。

買物案内

▲下村（日本橋區本兩替町）日本銀行の前にある舊式の店構にて、有數の舊家なり。「江戸名物詩」に「三都無類山城製、貴賤珍重六十州、貯得道中經幾日、不融不替一番油」とある如く、古來煉油を以て聞えたるが、白粉も亦當店の名物にて、店頭に凸字形の箱看板を出せり。亦古くより楊枝をも鬻ぎ、其材料の黑木を右の箱看板の上に載せたる處より、「下むらの箱看板は黑木賣り」の狂句あり。

▲井喜（同田所町）煉油の老舖にして、梳油髮付井筒香の名は、夙に好評あり。其他香油井筒油、八千代等、何れも品質優秀なり。

▲柳屋（同通町二丁目横通）是亦煉油の老舖なり、梳油、鬢附として有名なる柳精香及び白粉下花筏の元祖なり。また雲の上白粉と稱する白粉も、當店の特製なり。

▲よし屋（同區新葭町）各種の婦人用裝飾品を販賣し、また煉油、香油、白粉、紅等の化粧品をも鬻く、就中油類は著名にして、梳油井に鬢附油たる松金香の如きは、創業以來相傳へて製造し、汎く世に行はる、また香油のさくら香、水白粉の薄櫻の如きも品質良好にして好評を博す。當店の建物は二三餘年來數次の大火を免がれて、今日に至れりと云ふ。

▲守田さくら香（下谷區上車坂町）小間物化粧品の老舖なり。古來さくら香と稱する梳油を以て、名高くなれり。其他無鉛毒白粉の雪くらべ、薔薇化粧と稱する化粧香水井に壽美禮香、白薔薇香など稱する香水を販賣す。

▲紅勘（淺草區諏訪町）小町紅を名題の商品とし、白粉、伽羅油及び諸種の化粧品小間物類を販賣す。維新の頃、當家の一子大道藝人となり、竹の棹に桝を胴としたる三味線を鳴らして、市中を徘徊せしより紅勘の名益々著はる。

▲其他御園白粉（銀座二丁目胡蝶園）▲美人かつら（同佐々木商店）▲二八水、花王石鹼（馬喰町長瀬富郎）▲テキメン水、乙女肌石鹼▲小町水、ダイヤモンド齒磨（平尾贊平）▲ムスク香水、ホーサン石鹼▲象印齒磨▲壽美禮白粉▲ライオン齒磨▲キレー水等あり。

▲ゑり治（京橋竹川町）染色と模樣とに嶄新の意匠を出し、品質精良を以て、好評あり。半襟の外帶揚類、袱紗地、浴衣地、帶地井に化粧品を販賣し、また髷形「すゞめ形」「ゑり治形」は、當店の特製なり。

▲ゑり善（日本橋區葺屋町）著明の半襟商店にて、其種類は上中下各種に應じてよく其の嗜味に投ず、また帶揚、袱紗等をも販賣す。

▲大美津（馬道六丁目）二百年來の老舖にして、駒下駄の表に今日の如く隱し鋲を用ふるは、當店の考案なりと云ふ。陳列場を淺草仲店に設け、各種の駒下駄、草履等を販賣す。

▲香取屋（淺草茅町）大美津と共に、江戸時代よりの老舖にして香取形、江戸ッ子形、シユース形等の新流行品を考案せり。

▲仙女香坂本（京橋南傳馬町）江戸時代の仙女香と稱する白粉を鬻ぎたるより、屋號とす、今に洋傘の流行本家なり。

▲玉寶堂（池の端仲町）安永年間の創業東都屈指の老舖なり。幕府の御廣敷御用、尋で上野輪王寺宮御用達を命ぜらる。文化の頃迄は上野山下に開店せしが、火災に罹りて後、池の端に移り、各種袋物の外に各種の美術工藝品、婦人用裝飾品、懷中時計等を販賣し、宮内省の御用を勤む。

田家の風味

晩春より夏にかけて田家の風味のいと多かる中に筍こそ第一の美味ならめ。裏の篁より今掘り來しまゝの、いと大いなるを皮むきてすか〳〵と切り、さて鰹だしにて煮上たる味は魚鳥にも勝る

青そら豆、青豌豆は上戸にも下戸にも嗜まれ、煮てたべんも汁の實とせんも、はた飯に入れ粥に入れんも皆よし、あかぬ風味なり。

やがて胡瓜もいで初むべく初茄子も膳に上るべし。そが淺漬の加減よきは細君の誇ともならんか。

女の好くといふなる南瓜もおもふまゝに口に入る。

菓物には桃李につぎて梨枇杷西瓜夏蜜柑、今とりたての水々しきは、晝寢の夢をも覺ますべく、夏の暑さも果つべし、彼の胃に大害ありといふ氷水など飲まん要もなし。

蔬菜菓物のみかは泥鰌の蒲燒、鮎の鹽燒さては鯉の膾もたまには膳に上るべし。かゝる時都人は多くの黄金費して店曝らしの蔬菜魚肉を求むるよと思へば、田舍の生活こそ清福はいと多けれ。

裏の竹藪去年少し手入致させ候ひし加減にやことしは存外によき筍生ひ出で昨日すでに加減見致し候ひしに誠に柔らかにて老人共の口にもかなひ候に付唯今掘り取らせ候まゝを二本御目にかけ候御笑味下されたく候かしこ

世界周遊館

繪日傘

▲雄大なる觀せ物

人工の花は、東京博覽會なる名の下に開かれた、微妙なる者、壯麗なる者、趣味多き者、燦爛たる者、精を極め巧を極めて目も彩に、實に天工を奪ふと云ふ熟語は、斯の事を指す爲めに、造られたのではあるまいかと疑はれるが、中に就いて結構外觀一番雄大で巧妙なる者は、何であるかと云へば、世界周遊館は慥に其の一つであらふと思ふ、いでや是れから少し、斯の内容と構造を説明して見やう。

▲位置構造及び裝置

博覽會第一會場の東、パノラマ館と並んで美術協會の隣りに建てられた物、ローマルチシサンス式とか云ふ建築で間口三十五間、軒の高さ五十五尺、塔の高さ七十尺、總坪數三百坪、何と大したものではないか、で工費は未だ全く完備しないから、正確のことは分らぬが、何でも數萬圓は要したと云ふ話しで、設計は大熊工學士、中尾技師、繪畫は洋畫の泰斗、黑田淸輝氏の監督の下に、同校助教諭中村勝次郎、北蓮藏、中澤弘光諸氏の苦心慘憺の餘に成つたものだそうだ、

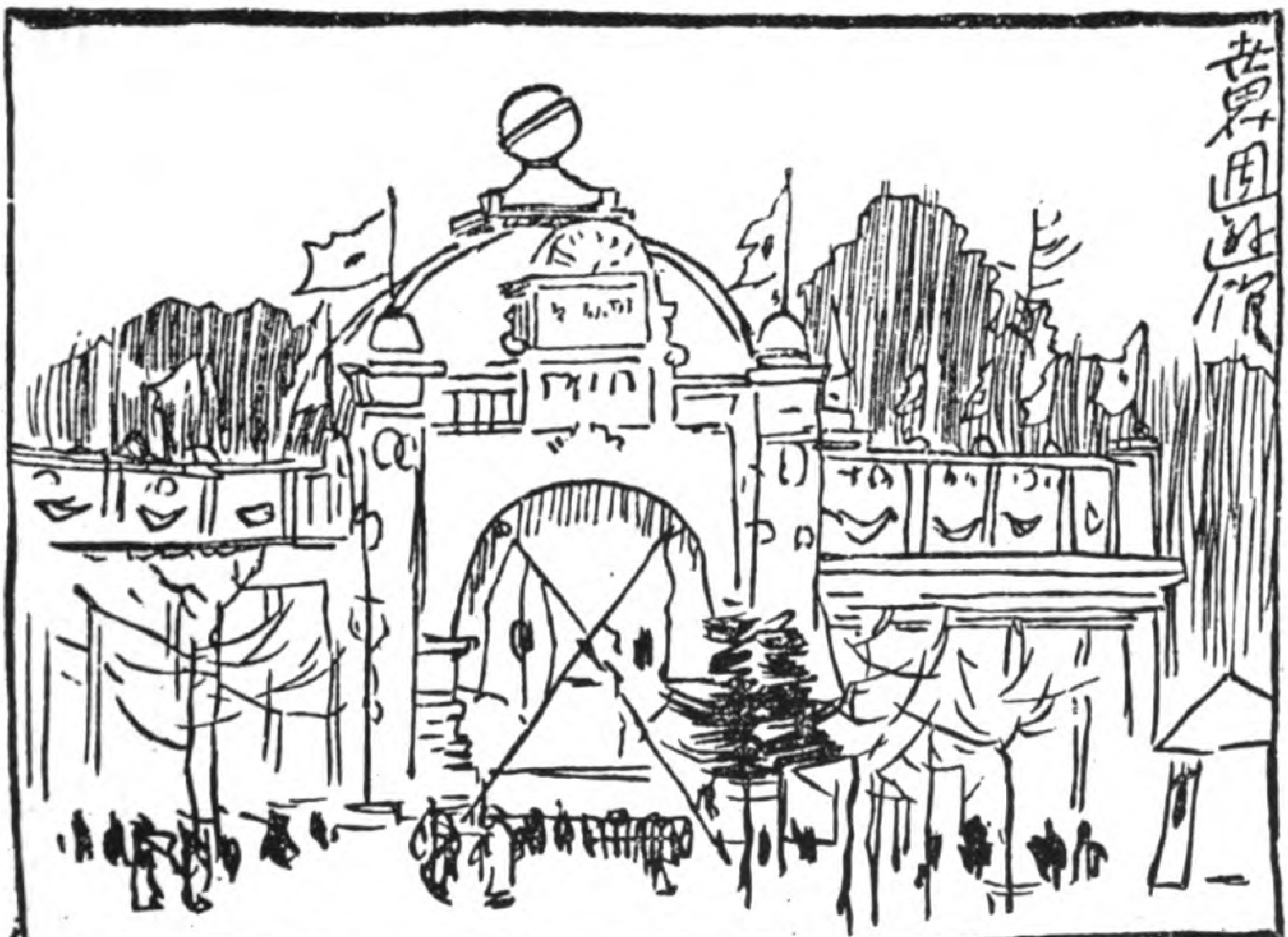
▲日本橫濱港

第一番に眼前に展かれたる光景は、橫濱港である、即ち海上より棧橋を左にし、稅關を正面にし、居留地より本牧へかけて、全市街を眺望する所、左手遙か雲煙縹渺の彼方に、富士山が一寸顏を出して居る圖で、數千噸の汽船が、林の如く港一杯に碇泊し、更に眼を放たば、水や空なる大海原に、大小の船舶が、東西に馳せて居るが、又た直ぐ眼の前には、小山のやうな戰鬪艦が、盛んに黑烟を吐いて、今將に長風波浪の程に上らんとして居る、夫れから又た其の戰鬪艦の下には、木の葉のやうな端艇が、縱橫に馳せ違ひ、上の棧橋には、世界各國の人士の往來織るが如くで、其中に一人の若い細君が、船上の其の良人らしい人と相對して互に、ハンケチを振り合つて、別れを惜しんで居る光景

など、實に觀る者をして、斯の懐かしい、風光明媚の故郷を離れて、天涯萬里の異境に向はんともするの、感に堪へさらしむる。

▲次はコロンボ

横濱港の次ぎに、出て來る光景は、即ち印度の錫崙島なるコロンボである、椰子だとか、橄欖樹だとか、熱帶の植物が森のやうに繁つて居る所へ、黒人が裸體のまゝ象に跨つて居る景を示めして居る、で陸上遥かに印度一流の行燈を立てたやうな建物が、簇々して居て、其下には矢張り裸體の男女が、三々五々往來して居るが、何しろ光線の具合が、非常に能く出來て居て、赤道直下華氏百度以上の熱で、萬民皆な、燒けんとする光景が、歴々と見えるので、此の光景に對すれば、何となく氷水が欲しくなるやうな心持ちがする。



▲次は埃及

コロンボの次ぎは亞弗利加の埃及である、有名な三角塔を始め、其の他種々の驚べき宏壯なる四千年前の建築が、長空を睥睨して、サハラの大砂漠の中に聳えて居て、其下に黒人が天幕生活をして居る光景を示めして居る、茲も矢張り熱帶だから、椰子や芭蕉などが、繁茂して、非常の酷熱であると云ふ事を、直ぐ連想させるが、此の圖で一番人

を動かす點は、思ひを遠く四千年の昔、埃及全盛の時代に馳せしむる、懷古の情であらう。

▲ヴェニス港

次きは有名な伊太利のヴェニス港である、茲は特筆すべき程の光景ではないが、流石に古代羅馬の都の文明を最も多く受けた所だけあつて、建築は隨分宏壯で、圖の正面には、ヴェニス市廳及び稅關を示して居るが、何れも圓頂塔とか云ふ、駿河臺のニコライ會堂のやうな建築で、同じ風の建物が、幾百となく、遙かに續いて居る。

▲ゼ子バ湖

ゼ子パ湖畔と聞けば、何人も直ぐ世界第一の絶勝かと背づくが、成程此の圖で見た所でも、世界第一の絶勝である地位は動かぬ、遙かに千古の白雪を戴いて、雲に聳える、アルプスの連山を背景とし、幾多の趣きある丘陵に圍まれて、名にし負ふゼ子バの湖水が、萬古の碧りを湛えて、鏡のやうに光つて居る、其所へ以つて來て、湖を圍んで建てられたる、ゼネバ市の壯大なる建物が、倒まに影を醮して居る所は、實に何とも云へぬ光景である、此の光景に對すると何人も魂を千里外の彼方なる、山紫水明郷に飛ばすを禁せぬであらう。

▲聖彼得斯堡

次ぎは露西亞の首府、聖彼得斯堡であるが、北方の寒國より外に見ることの出來ぬ、薄晴い光が、天地を包んで居る所は、直ぐ露都であると云ふことが首かれる、此の圖は、其の昔し、彼得大帝が住はれたと云ふ、宮殿と其の宮殿の前に、馬に跨れる彼得大帝の銅像とを示めして居るが、雪が其の銅像の上に、積つて居る所を見ると、露國の雄大と宏壯と寒氣とを連想せしめる。

▲和蘭の田舍

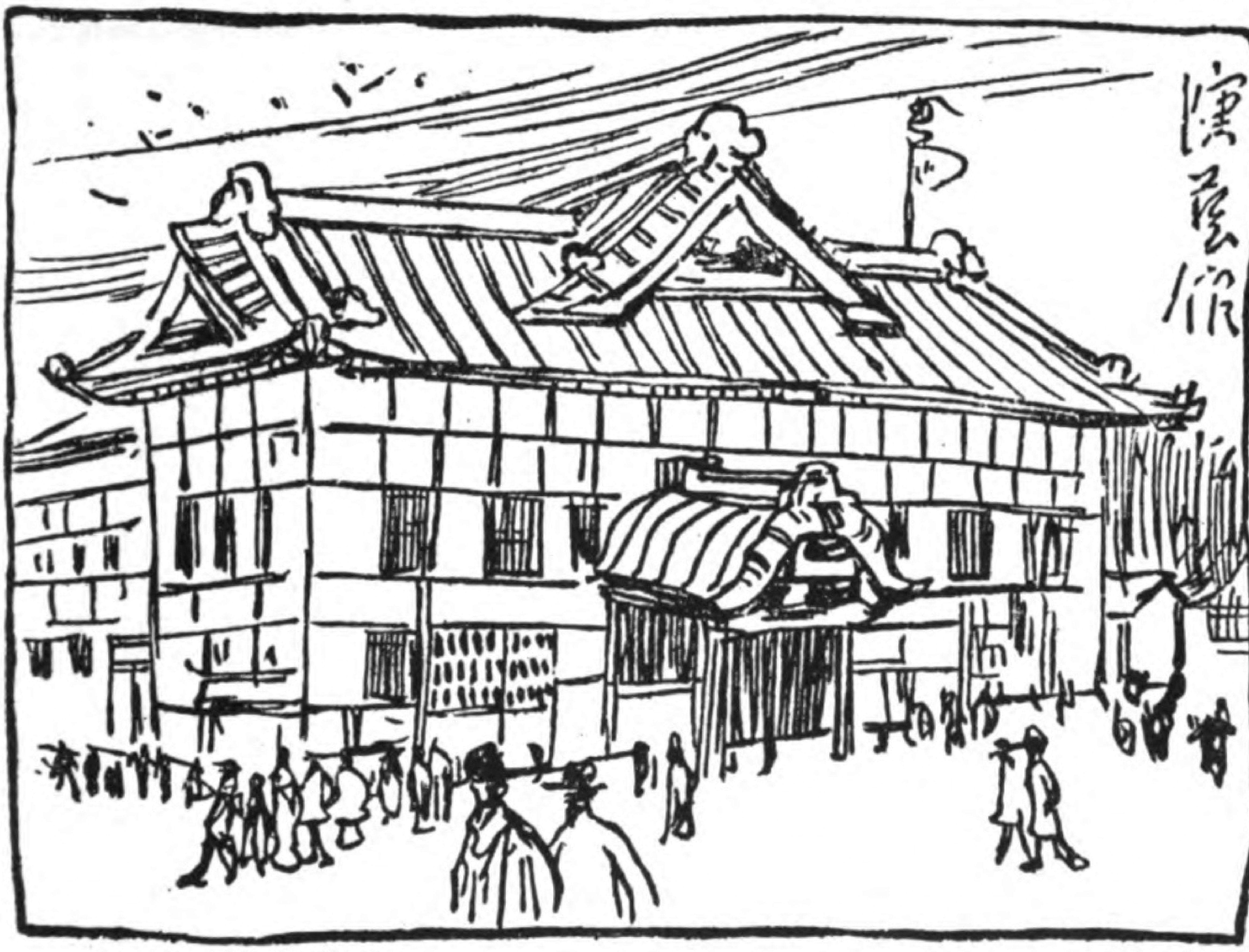
和蘭は陸が海より低い國で、爲めに平地に水が溜つて困ることは、我々が地理學で學んだ所だが、此の圖は和蘭の片田舍で、風車排水機を用ゐて、盛んに溜り水を排出して居る光景を示めして居るが、其風車排水機の仕掛けが如何にも巧妙である、

▲獨逸の漢堡

獨逸の漢堡は、世界有數の工業地で、其の繁榮は、首府伯林を凌駕する程だとは、兼ねて聞いて居たが、成る程此の圖で見ても、河にも、海にも大小滊船の帆檣と烟突が、林の如く並んで黒烟天に漲るの光景を呈し、陸には同じく各種工場の烟突から吐き出す黒烟で、空を蔽ふて居る、夫れから又た市の中央を流るゝエルブ河の大鐵橋は、魔王の如く雲に聳えて人をして、其の繁盛の度を想像せしむる。

▲佛國巴里

次ぎは世界の花の都である、巴里と云へば人は直ぐ、世界



の流行と華美の中心であると云ふことを連想するが、此の國は世界の華美の中心たる、巴里の又た其の中心たるフヲリベルジユールの光景を示めして、人をして聞きしに勝るとの感に堪えざらしむる、即ち士女花の如く、雲の如く、數奇を凝らし、華美を競ひ、翩々胡蝶の如く舞ふて居る光景を見、顧みて近來非常に華美に流るとの批難ある、我國上流婦人の風俗を見やうものならば、其の餘りに見すぼらしいのに、驚かれるであらう。

▲英國倫敦

此の圖は英國倫敦のトラフワ

ルガア街の、夜景を示めして居るが、巴里の華美を見て之を見ると、只だ黒塗りの大厦が聳えて居る所へ、幾十臺の馬車が馳せて居るばかり、頗る質實であるが亦何となく奥床しい所があるやうだ。

▲ナイヤガラの瀑

倫敦から太西洋を横斷して、亞米利加へ着くと、今度は名にし負ふ、ナイヤガラの大瀑布である、華嚴瀧や那智の瀧は物かは、何の事はない、銀河の水を一時に傾けたやうな、壯絶、悽絶の光景で、誠に天地間の一大壯觀を極めて、人をして神馳せ魂飛ぶの思に堪えざらしむる。

＊　＊　＊　＊　＊

是れで全世界を一週した譯であるが、兎に角縱覽一順すれば、誠に目千里の波濤を凌き、全地球を跋渉し、異れる各國の風俗を親しく實見したやうな心持ちがするのみならず、知らず〳〵の間に、世界の地理を學び得る利益がある、尙ほ序でに云ふて置くが、此の世界週遊館の裝置は、パノラマに好く似て居る、殊に光線を利用する具合などは、パノラマと思へば、間違ひなしである。

蔬菜館

は二號館の後方に在り同館内なる農會出品陳列場を通り抜て右方の出口たるだら〳〵坂を下れば坂の左右には果樹苗木の出品あり其突當りの瀟洒なる一構こそ蔬菜館にてある也其構造は飽迄田園趣味を發揮したるものにして農科大學出身牛込寛治氏外數氏の設計になるものなりと、松材の荒木を其儘梁間に渡しこれに根付の蘿を匍はせる屋根は葭簀張として其を漆喰にて叩ける等却々凝つたものなり、さて館の正面には緑染せる水草を布き洋芹、西洋牛蒡、花椰菜、甘藍、玉萵苣等を栽培し洋翠を飾れる中央に體軀を草綿にて造り角を干大根にて造れる二頭の緬羊を放牧し其後方に高橋氏の筆に係る牧場の背景を掲げ直下なる數坪をば更に染色せる水藻にて飾り蕪菁、蘿蔔、其他の根菜類を陳列せり、而して其左右に三段の棚を設え里芋、葱の蔬菜類を排列し參考として青森産の苹果をも陳列せり、館内最も見物なるは足立、葛飾兩郡の出品にかゝる葱にして足立郡のものは右方に葛飾郡のものは左方に在り、何れも本場の逸品を選擇したるとて其白根のみにても二尺に垂んとせるものあり、白色玲瓏一種の光澤あり、束ね紐の兩端に赤色なる毛糸の紐を着けたる等、これが葱かと思ふばかり、立派に見受けたり。

世界第一の邸宅

△駐英米國大使ホロワイトロー、レイド氏は倫敦交際社會の大立物なるが茲に同大使館の壯麗なる實况を紹介せん。

△今の米國大使館は有名なるドーチエスターの邸宅にして一年の家賃は八萬圓にして即ち一週間千六百圓に當れり大使の給料は一年三萬五千圓なれば家税は實に其給料の二倍以上に相當するなり殊に最近大使館に於て催ふされたる宴會の如きは實に壯大無比なるものにて一夕の費用平均二萬圓を要し其他一夜の宴會並に其邸宅維持費は同大使半年の給料に達すると云ふ。

△大使は右の外別に一年二萬圓の家税を拂ふて別莊を借入れ居れり此本館並に別莊を維持する爲めには六十人の婢僕を要し此給仕二十八人の食料は一年一萬二千圓、婢僕三十八人の給料は一萬五千圓、其他雇人等の費用一萬圓、此外大使一族の生活費より同邸宅の瓦斯、電燈、石炭其他衣服、飮食一切の費用一年合計六十萬圓に達すと云ふ。

△されば同大使館の壯麗なることは交際社會の一齊に欽羨する所なるに加へて同邸は倫敦第一の公園ハイドパークに接し其窓間より一望すれば流石に雜鬧を極むる倫敦も宛然幽邃なる閑地に在るが如しと。

△今同邸内部の大要を記さんに全部恰も是れ宮殿にして英國皇帝の住居し給ふバッキングハム宮殿と雖も本館に於けるが如く大理石の階子段に大枚三十萬圓を投じたるものはあらず又其壯麗なる六大廳接間は必要の場合には開いて一室と爲し裕に二千人の來客をして少しも混雜なく舞踏せしむるを得べし此外十二の客間、二十四の寢室、食堂、壯大なる大廣間、喫煙室、音樂室、珠突室、二大圖書室其他料理室等ありて大小無數の部屋は殆んど枚擧に遑あらず殊に其玄關の如きは廿五人より五十人の來客ありても一時に出入し得らるゝ如く結構しあり。

△室内の装飾中最も驚くべきは英佛伊獨等各國古代の名畫なり此名畫に附しある火災保險高のみにても實に五千萬圓の巨額に達し其畫家は何れも歐洲歷代の名家なりと云ふ。

小兒の眼に見て面白き

教育水族館

漁　郎

▲博覽會中の奇觀

今回の東京博覽會中第一の奇觀は第二會塲の教育水族館であらう、併し經營者の云ふ所を聞くと、魚族收容の方針は、必ずしも珍なるもの許りを選ぶと云ふでなく、手近で却つて人の氣のつかざる動物を收める方針だとか、で只今の所は、規模設備何れも、滿足であるとは云はれぬが、夫れでも博覽會中の一奇觀たる價値は十分である、

▲構造及び設備

教育水族館の構造は、約六間四面位の建物で、夫れが階上階下に分れて、階上には水産の系統を知らしむる爲め、多くの海産物を陳列し、日本産の介殼類を標準として、六個の額面が掲げてあるが、階上階下何れも觀覽に極めて、都合よく出來て居る、夫れから設備であるが、魚族を養つて置く水槽の水は、二個の電氣モーターを据えつけて運轉して居る、海水は房州松輪の海岸から、毎日船で運び、之を海水溫度に平均する爲め、トタン張りの暖爐で水の中に入れて置く、夫れから機械力で運轉する水は、最初水槽の中へ入れて、魚族の棲息に供し、水槽より排除されたらば、再び沙を濾して水槽に入れると云ふ具合に循環して、水の淸潔を保つて居るが、水槽で疲れた魚は、休養槽と云ふへ入れて、元氣を恢復せしむる仕掛けである、是れで設備の一班はお判りでせうから、次に内容を申ませう。

▲海驢と水鳥の卵

先づ入塲第一番に驚かれるのは、正面の水槽の中に居る、海驢の泣聲である、夫れを見ながら二階へ昇ると、頭の上に水鳥の卵が五六十陳列されて居る、其卵の中には眞圓いのもあれば、鷄の卵見たやうな形をしたのもある、親指の先き位しかないのもあれば、鷄卵を三ッ四ッ合せた程の、大きさのもあるので中々見物です。

▲鰉と鏡鯉

二階へ昇つて見ると、其處には四角な硝子壜が、幾十となく並んで居る、此の壜の中には悉皆淡水族の魚ばかりで、第一番にあるのは、鰉と云つて、ハゼ位の大きさの、琵琶湖特產の魚で、畏くも天皇陛下の最も御嗜好遊さるゝ魚だそうである、次の壜に這入つてるのは、鏡鯉と云つて、態々西洋から取り寄せた魚で、全體の形は、日本の鯉と何等の相違もないが、鱗が三段について居る。

▲刺魚、タナゴ、鰻

次ぎは海苔昆布等の海產物で、其次は氣味の悪い蠑螈と、氣味のよい金魚とが並んで居る、更に進んで行くと、更に奇觀である、刺魚と云ふ、滿身に刺を植えた魚が、晃々たる刺を閃めかしながら、勇ましく泳いで居る、是ればかりならば左程奇觀でもないが、此の刺魚が、水草や木の根を集めて圓い巣を造り、雌が產卵して居るのを、雄が番をして居るのは實に奇觀である、次ぎがタナゴと云ふ茨城の產魚で其綺麗な點は金魚にも讓らぬが、金魚と同じく外觀ばかりで、食用には供せられぬと云ふ事、能無し魚である、偖て其次ぎは鰻である、腕の太さ位ある、眞黒の物や、八ツ目鰻やが、ニヨロ／＼として居て、餘り見つともよくない。

▲源五郎蟲やクラゲ

其の次ぎは、水草を浮べた小形の壜の中に、源五郎蟲やら、松藻虫やらが、尻を水面に出したり、倒しまになつたりして泳いで居る、角又や昆布の製品を見てしまうと、丸く太つた、鮒位の大きさの和金と云ふ魚が居る、次ぎには鯛に能く似て鯛より小さい和蘭金魚や、水蠆切とて、蜻蛉の幼虫や、目の馬鹿に飛び出して居る、支那金魚や、タダクラゲ、ミズクラゲなど色々のクラゲが、浮いたり、沈んだりして居る所は一寸奇觀であつた。

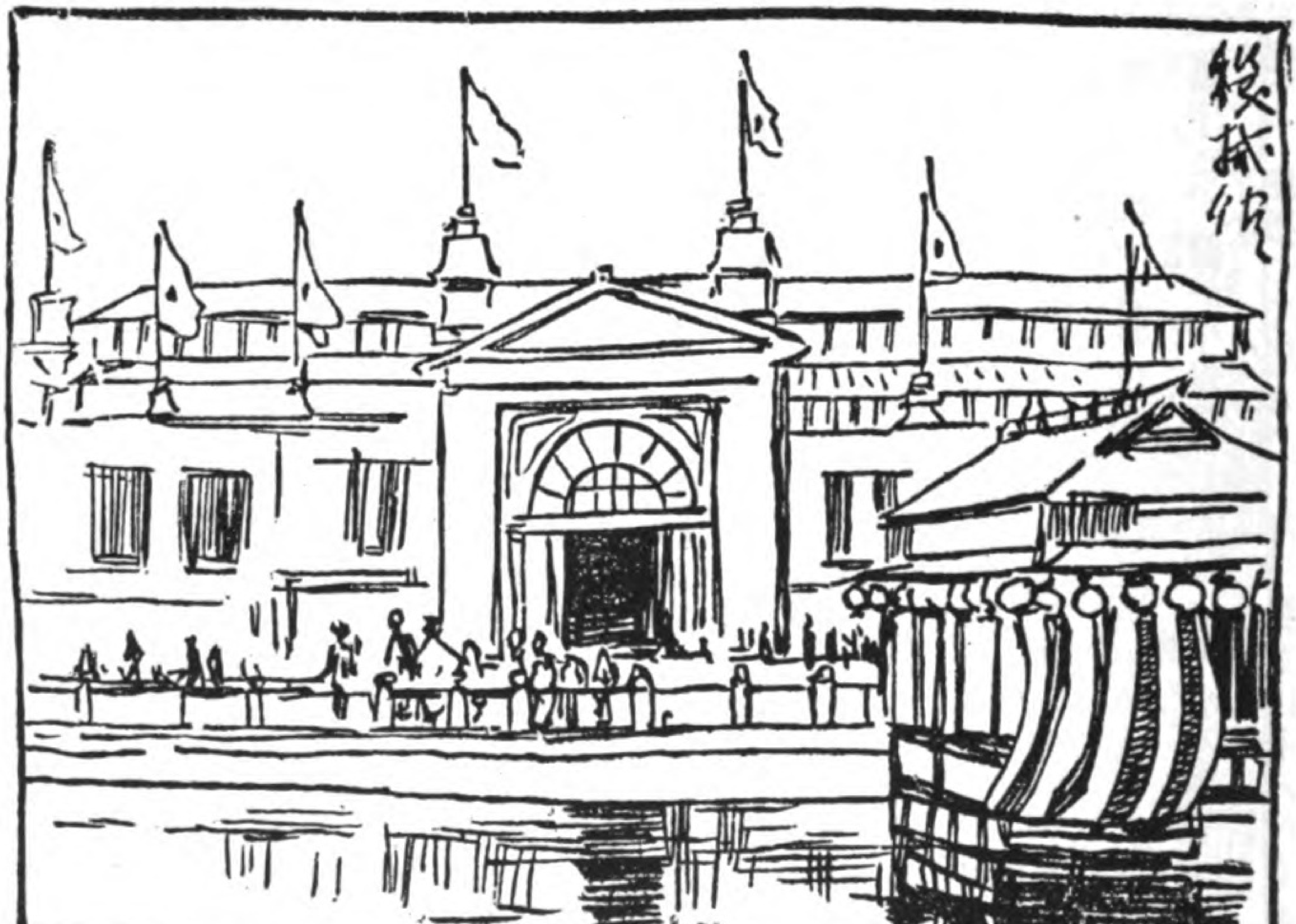
▲鮫の酒精漬

此の時上を振り仰いで見ると日本水族分布圖やら、日本主要水產輸出品やら、色々の額が懸つて居る、此の額を見ながら進んで行くと、次ぎには鰮の搾粕や、干鰮等の壜詰があつて、又た其の次ぎには、鮫の酒精漬

がズット並んで居る、其中で最も珍とすべきは、ベルッノサメの胎兒で、其大きさは、牛や馬の胎兒よりも、餘程大きかつた。

▲鯨汁、目高、疣燒、

鮫の酒精漬の次ぎは、魚の解剖標本があつて、其隣りには木曜島産のメローと云ふ蠟のやうに光る貝がある、又た其の隣りには、目高が元氣よく壜の中に泳いで居て、側には鯨の汁が、黄金色を放つて居る、夫れから二階の一番盡頭に、イボヤキと云ふ、海綿のやうなものがある、名詮自稱滿身に澤山の疣が附着いて居る。



▲マンボウ

是れで悉皆二階の觀覽を終り、階子段を下るのであるが、下りかけて一番驚かれるのはマンボウと云ふ珍魚の干したのが吊るしてある、這は人魚と共に、水族館中の兩珍として、持て囃さるゝ魚で、不思議のことには、此のマンホーには尾がない、單に尾がないばかりでなく、全體の構造が極めて滑稽で、上下に大きな鰭があるばかり、其泳ぐ所の如何に奇觀なるかは、察するに餘りありです。

▲鯱と靑ザメ

梯子段を下り盡すと、其處に鯨が鯱に襲撃されてる處の

水彩畫が懸かつて居る、唯見れば、一頭の鯨が潮を吹き尾を振り、體を躍らして居る所へ、數百の鯱が牙を怒らし、鱗を逆立てゝ前後左右から、先を爭つて鯨に嚙みついて居る、鯱は其大きさは、鯨の百分の一もないが、如何に其の慓悍猛烈の魚であるかは此の圖で分る、次ぎは矢張り魚中の勇者なる、アヲザメの干したのである、其の牙を露き出して、今にも喰つて掛らんず有様は、凄まじなんど云ふばかりなしである。

▲龜、鱸、鰕、蟹等

階子段の直ぐ下の槽には、龜ばかり簇々として居る、即ち鼈を始め、臺灣の龜やら、琉球の龜やら、偖ては其の甲羅を開閉して居る函龜等が如龜〱して居る龜の次ぎは海魚ばかりで、鷹揚さうな鱸や、呑氣さうや比目や、緊り底に密着いて居るあかえや、長い髯を振つて力味んで居る伊勢蝦や、其の他あわび、綿にそつくりのわたどり、黒鯛、かははぎ、等が、銘々其特色を發揮して、威張り返つて居る其一番下に、蟹が甲冑を着けて、鎧武者よろしくと云ふ見得で、頑張つて居る。

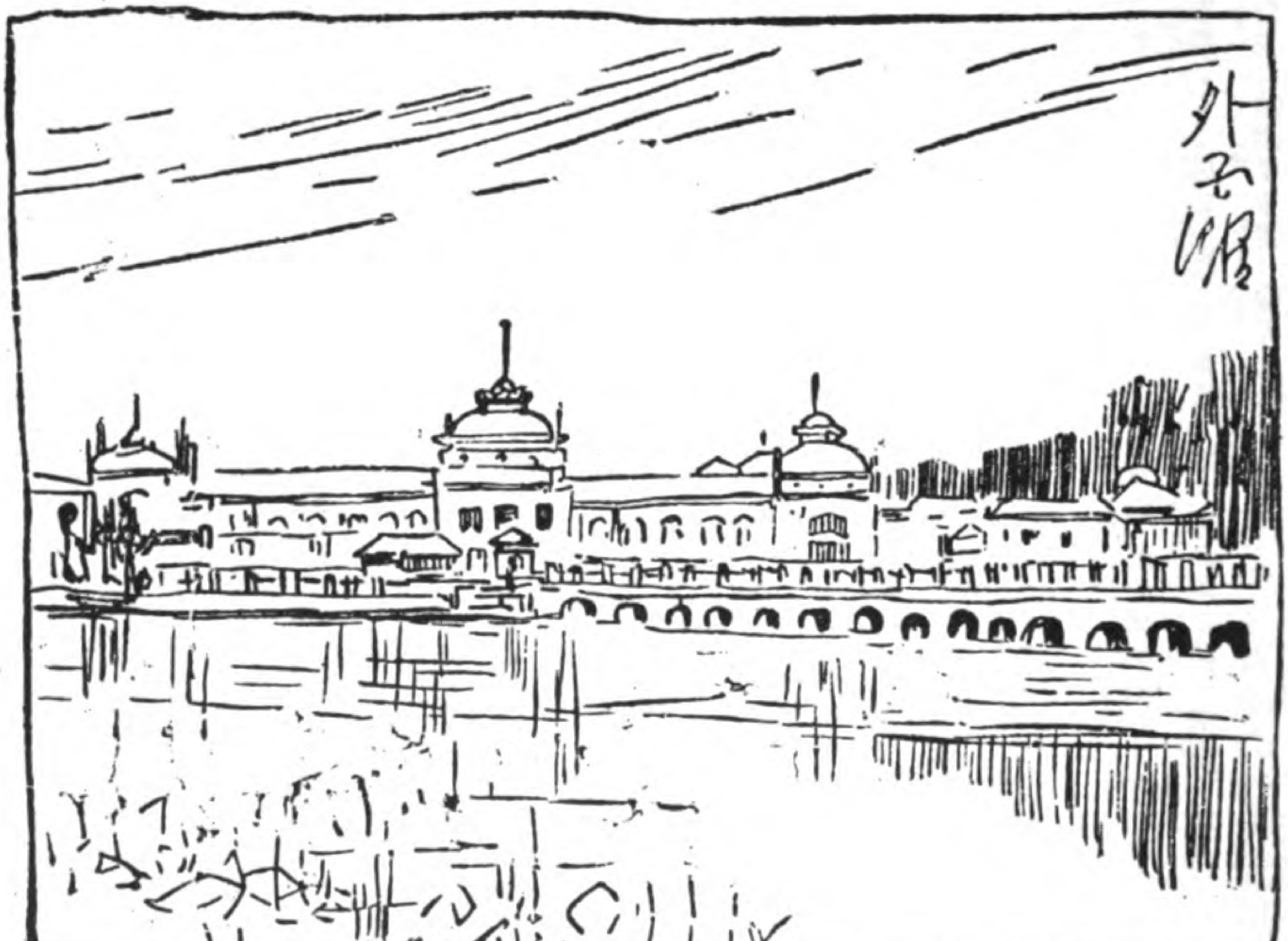
▲鰈、長　蟹等

次ぎの槽には、珊瑚によく似た、いしるでにや、いほにやなどが、岩の上に生えて居て、其の上を、鰈などが澤山泳いで居る、次ぎの槽は、全槽悉く、こんずいばかりで、頭を突き合せて、塊つて泳いで居る、此のこんずいは、鯰に能く似て居る、上下の顎に髯を生して氣取つて居る所は、實に滑稽である、又た其の次ぎの槽には石鯛やら、彷彿やらが、蠢々して居て、其の隣りには、長脚蟹と云つて、足の長さの一丈もあるのが、其の長い足を戟にして、力味んで居る。

▲オツトセイ

是れで此の水族館の一班の漁族の紹介は濟んだのですが、最後に見逃してならぬ物は、出口にある人魚と膃肭臍である、分けて人魚は一番人の好奇心を、惹くものであらうが、惜しいことには死んで居る、此の人魚は去年琉球の八重山島近邊で、獲れたものであるさうだが、水の關子が違ふので死んでしまつたのださうな、長さは七八尺もあらうか、胴は眞圓で、全身は眞

つ白だ、夫れで頭の所が、一寸人の顔に似て居る、殊に目が圓く飛び出して居る所などは、人の顔にそつくりである、併し餘り見つともよくない、何處か間拔けたやうな、又た薄馬鹿のやうな顔をして居る、次ぎは千島の膃肭臍である、膃肭臍は雄と雌と二疋居るが、何れが雄で、何れが雌だか一寸見には分らぬ、夫れで斷えず岩へ上つたり、水の中へ這入ッたりして、何時もキヨロ〳〵四邊を見廻はして、少しも落ち附きがないが、夫れでも時に依ると、腹を出して悠々と泳ぎながら、片方の手で頻りに腹を掻いて居る



所などは、實に奇觀である、先づ此の水族館での見物は、此の膃肭臍と人魚と夫れに海驢であらう。

＊　＊　＊

以上は今度東京の博覽會の唯一の奇觀と稱せらるゝ、水族館の大略であるが、前にも云ふ通り、設備か未だ全く整はぬから、物足りぬ感はあるが、併し博覽會閉會後、規模を擴張し、永久的の設備をするさうだから、大に見るに足るものがあらうと思ふ、總じて教育と銘が打つてあるだけに、說明書なども丁寧に書いてあるから、魚族に關する智識を得るには、餘程効があるやうに思はれる、故に吾輩は殊に御婦人や、兒童に向つて水族館を御勸め致します。

食卓趣味

△英國では食事の間が一般にチト長すぎます、又食物の量も他の諸國に比べて多過ぎる、これは例の「英國の胃の腑」とまで言はれた昔しからの習慣でもあらうが、甚だ多過ぎるのです。そこでまづ晩餐に客を招く時間は八時半位が適當でせう、料理は皿數が八皿、其品々はまづスープ、魚の蒸物、燒肉類、鳥類、野菜、それに一寸した甘味の玉子菓子などを取添へて立派な皿に盛つて出す、で、食時の時間は一時間と二十分位に定める。勿論料理の中には消化の遲ひ食物もあらうが、會食の間で無邪氣な雜談でもしておもしろ可笑しく食べたならば、大抵なものは消化して仕舞ふ。

△朝飯の獻立英國では通例ブレツキフアストには果實を最初に出し、之れを食し了つた後パン類を出し、穀物が濟みたる上で他のものを一緒に出すのが例である。

△眞實に愉快な饗宴といふものは何も山海の珍味を傾けた盛宴ではなくて、寧ろ質素に心を盡した小宴にあるのである、そこで英國では盛宴よりはこの小宴會を歡迎する傾がある。乍併日に〳〵進む社交的の影響からして倫敦などでは盛大な宴會は増々其規模を廣めて來ました。

△まづ食堂の面積は次第に廣まるといふ譯て、主人公となる人も多勢の客を一室に招いて饗宴を行ふといふ事が流行となつて來た、斯る次第であるから以前は眞味の宴會といふて僅か十人か八人位を限つたもので、其中に一人の雄辯家でもあつて圓卓子を圍み、種種樣々の失策話や、愉快談を試み、聽手も又一心に耳を傾けて、時々話が佳境に入ると一時に興の聲をあげて、笑ひ出すのであつた。

△又食堂の設備には英國の主婦たる人々の氣質、趣味、意匠が其儘顯はれて居る、まづ卓子掛は清楚とした白布で、そこへ輝き渡る玻璃鏡を置き、切立の生花をあしらへ、又皿は大抵銀製のもので、皿棚にあるだけの皿を卓上に排べて飾り立てる習慣があるさて其の食堂には花瓦斯、花電氣で、あたりは煌々と輝き渡る、そこへ、奇麗な婦人がダイヤモンドを飾り立つた燦然たる衣服を纏つて列席した樣は、宛ながら畫のやうである。

△宴會の時に出す酒は大槪三種、シエリー、クラレツト、佛國製の葡萄酒バーガンデーなどであるが、前の二種は食事の際に用ひられ、後の二種は食後の健胃劑として用ひられる、食堂で婦人客の居る間は喫烟は禁じられてあるか、男子は食後に銀製の提器に挿まれた澤山の酒瓶に對して自在に飲酒する習慣である。



模範呉服店參觀記

佐倉桃子

——三越呉服店の新設備△四月一よりの賣出景況△食堂と寫眞場及び實物幻燈の設置△賣出四日目の參觀記——

先づ東京に呉服屋も多い、けれども其中の模範たるべきものを訊ねましたら、それは三越と白木屋位なもの、大丸老い、松屋未だ振はず、萬般の設備に於きまして、大抵この二店を模範的呉朋店と云ふ事が出來ませう、

其中にも三越呉服店は、專務取締役の日比翁助氏が先年歐米漫遊以來、彼地の大商賈に倣ひ、痒いところへ手の届く設備、中々容易な事ではございません。で、同店では博覽會の開設と共に、四月一日から愈々食堂を設け、寫眞場を置き、土曜日の晩にはまた新舶來實物幻燈をやる事となり、この披露と共に四月一日から寄切れの大賣出と云ふこと、買物旁々一度は見て置いたら後學の爲めになるでせうと、恰度さうでしたね、賣出しから四日目の午前、電車を駿河町で降りたのでございます。

朝早い事ではあり、殊には博覽會開會中の事とていの一番位の考へで正面入口の方へ廻つて見ますと、何がさて中はもう一杯の人でした。三越呉服店と印のある袢纏を着た若い人に下足を預けて、ちと買物がありましたから、直ぐに左りへ折れて、洋品店の方へ行つて見ますと、こゝにも男のお客樣が五六人買物をしてお出でになりました。此處には男の店員と、年頃二十四五とも見える、品のいゝ束髪の方とが、忙がしさうに働いて居ましたが、妾は束髪の方から、床敷二枚靴下一枚、石鹸一つを買ひました。で、持つて行かうと申しましたら、束髪の方は叮嚀に合札「二參」と書いたのを渡して下すつて、「お買物はお歸りの時出口でお渡し申します!」何と行屆いて居るではありませんか。

妾は右の合札を袂へ大切に入れて、右の方へ辿りま

すと、其處には小間物、袋物、蝙蝠傘、雜貨などが綺麗に列べてありましたが、餘りお客樣の影を見ないやうですから、あの玄關に山をなして居たお客樣は一體何處へ行つたのか知らと奥の方へ進んで行きますと、不圖眼についたのは流行の女傘、刺繡のしてあるのやら、椽が絹糸で編まれて居るのやら種々ありましたが其刺繡が網になつて居るなどは隨分凝つたものだと思ひました。すると側に阿母さまに手を引かれた五歳ばかりの坊ちやんが其傘を御覽になると、

『阿母さん、この傘は雨が漏るはね！』

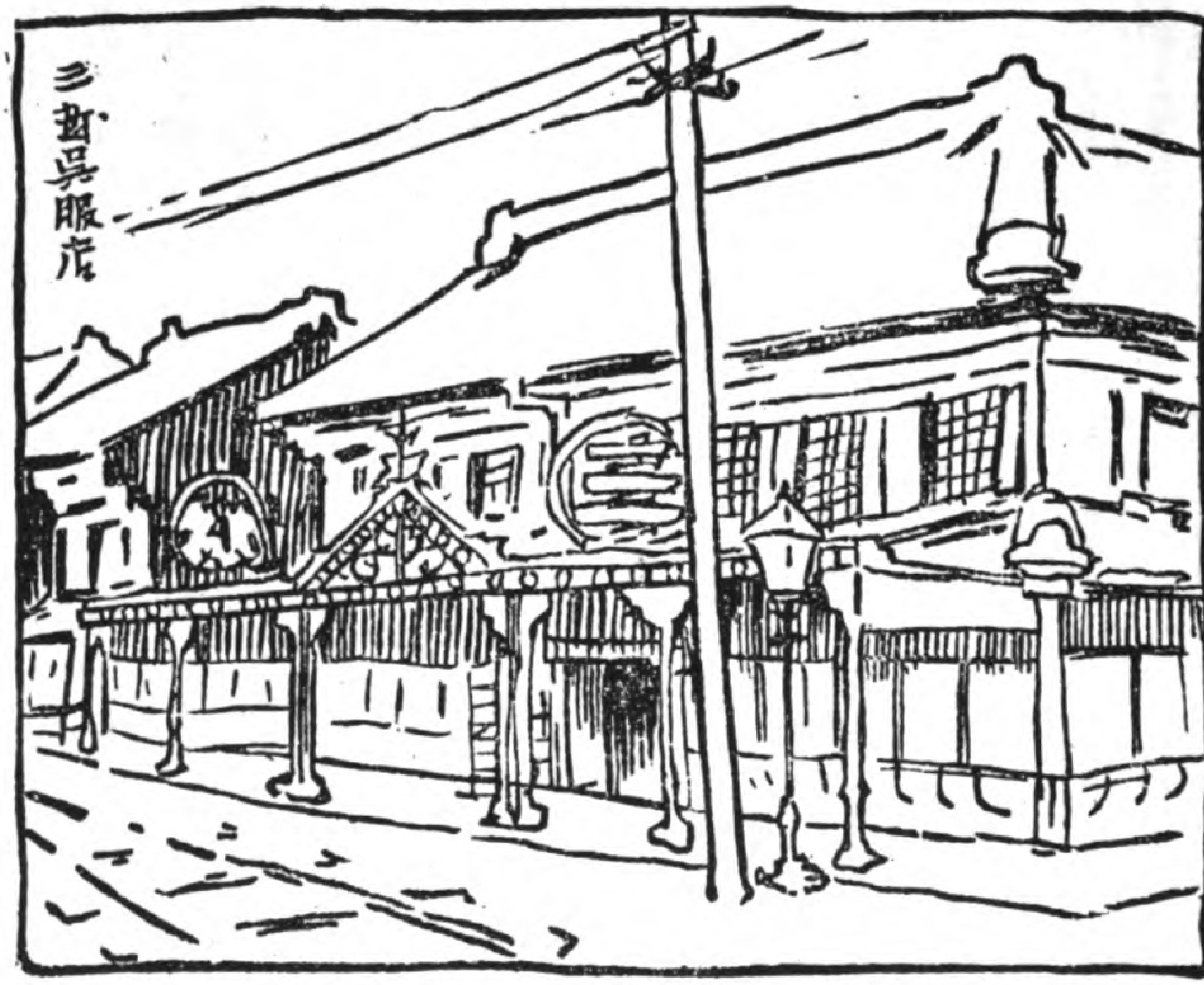
成程これは御尤もな質問と思ひました。右側に化粧道具を入れた手提籠や、鞄などがありまして、これも新しく置かれた品ばかりださうですが、こゝには珍らしい下駄が列べてありました。百三十年桐の柾目の臺の見事さ、それに絹糸で丁度籐表のやうに編まれた表がついて居て、鼻緒は總刺繡になつて、價段は四十圓と云ふ事でした、こんな下駄を穿いたら、それこそ天氣の日にも懷中へ下駄を入れて裸足で歩行かねばなりますまい、足から直ぐに頭へ飛ぶやうですが、直ぐ側に

▲博覽會紀念リボン▼

何とまア立派でせう、ヽヽ、シホンへ露玉を鏤めたもので七歳から十四五までのお孃樣には嘸よからうと思ひました。妾のやうなものが挿したら、それこそ可笑しうございませうが、餘り綺麗ですから、價段を聞くと、廉いこと一つ三十五錢と云ふのです、お土產に一つ買ひましたが、これはイルミチーションに模つたのださうで、始めて賣出したのだと云ふ事、いゝ思つきです乾度賣れるに違ありません！

▲寄切賣場▼

不圖見ると、其所は格子で劃られて、其中が寄切賣場、まア何と云ふ人でせう、玄關に山をなした人は、皆こゝへ集つたのかと思ひました。山と積んである寄切を引くら返して、其中から氣に入つたのを抱へ込んでは、うろ〳〵歩行いて彼入る御婦人があるかと思ふと、八字髯に嚴めしい洋服の紳士が紅の寄切を提げて彼入るのもあり、其間を店員がまた縱横に縫つて働い



春風や堤長うして家遠し　蕪村

て居る光景は、花野に蝶の舞ふにも似て、美しさは云はん方がありません。妾も欲しいものがあればと思ひまして、區劃の中へ這入つては見ましたが、亂軍の中には、獲物のありさうな筈もなく、よしあつたにしたところが、これを抱へて烏鷺つくのも氣が利かないと思ひまして、直ぐにまた其處を出て、二階へ上つて見ますと、友禪の巻切れが入れてある飾棚にも眞黒にお客樣が大集つて、其賣れる事、見て居てさへ面白い位でした。左側の少し引込んだところに、

▲懸賞裾模樣圖案▼

が掲げてありました、圖案などゝ云ふものも、かうまで進んだものかと思ひました。一等、二等、三等、成程それと頷れる意匠で、もう一度こんな裾模樣を着て見たいやうな氣も致しました。

▲階上休憩室▼

を覗いて見ますと、何の椅子も〳〵束髪や丸髷の影が印されて、お給仕の方が忙がしさうにお茶を運んで居ました。其先きの空中庵、此處は貴賓に薄茶を薦める

ところで、鳥渡した庭もあり、洒落た茶室になつて居るのですが、何か貴賓がお出でになつた模樣ですから、何方か知らと、不圖側を通る店員の一人に訊いて見ますと、宮内省の女官方がお見えになつたのださうです。こんなところに立つて居るも失禮と思ひまして、そのまゝ飾棚の間を縫ひ、左りへとつて行きますと其處に、

▲新設の食堂▼

があります。入口の兩側に織物で大きく「食堂」と記されて、中は晴々とした氣持のいゝ五十坪ばかりの大廣間、西北の一角が料理場になつて居て、南の窓際に一雙に蘆に雁、一雙は葦に鯉の都合二雙の刺繡屛風が立てゝありまして、卓子が其處此處に六七脚、匇々凝つたものと思ひまして。丁度正午時分の事でもありましたから、其卓子の一つへ撰れて、椅子へ腰を懸けますと、綺麗な、可愛らしいお給仕の娘さんが、

『何か差上げますか？』

と其やさしい挨拶には惚々致しました。卓子の上に方形の硝子が置いてありまして、其底に定價表がちやんと書かれて居ます。

▲御食事五拾錢▲お壽司拾五錢▲日本菓子五錢▲珈琲五錢▲紅茶五錢▲西洋菓子拾錢と云ふのです。妾はそれで紅茶とお菓子とを頼みまして、これをお晝食の代りとしましたが、近所の飲食店へ這入つて食べるよりも、甚麼に氣輕に、また甚麼に晴々致すでせう。

▲飾棚の改善▼

長く食堂にお邪魔をするもお氣の毒と、其處を出て、氣が注きますと、前に參りました時とは飾棚が悉皆違つて、今度は四方硝子の棚になつて居ますから、上から覗く事が出來て、大層便利です、で、また今度新たに出來ました、

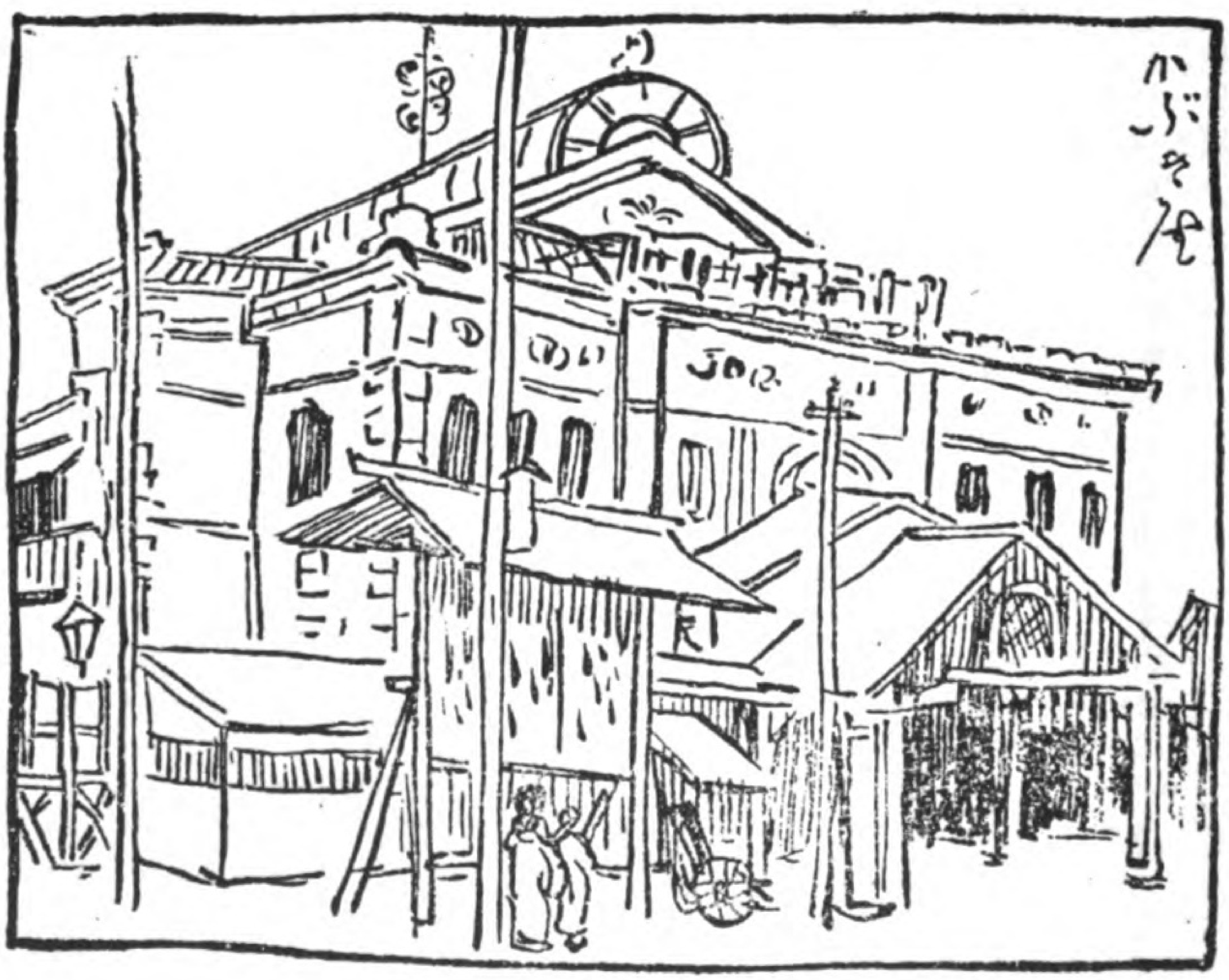
▲十二ヶ月の意匠晴衣▼

が此飾棚の上に飾られて居ましたが、それは一々東京の名所を一年の季に寄せて、意匠を凝したものでこれはと思ふ程見事なものでした。詳しい事はいつかの新聞に出て居ましたから、こゝには申上げませんが、刺繡もあり摺箔もあり、人の氣のつかぬところに意匠

か凝してあるのです。一月の歌留多や、六月の傘に燕の模様や、十二月の枯蓮などは殊に秀逸でせう。妾は慾を申すやうですが、この衣服が一人の人に着られるやうな意匠で、もう少し若い人の着るやうな柄や地合であつたらば、嘸見事でせう。それは澁いところに味があり、またかう云ふでッくりとしたものを選まれたに就きましては、それ〴〵お說もある事と思ひますが、こゝで少し不足を申せば、折角これ程意匠が施してあり、且つは見事なのもが飾棚の上にところ〴〵置いてあるものですから、人の目につくやうで、返つて目につきません、かう云ふものは結句一つ場所へ集めて、一月から十二月まで一目に見えるやうにしたらばと思ひます。

▲下町で一番高い庭▼

其處へまた丁度妾の知つて居る店員の方が見えまして「三階の上に庭が出來たから見に被入い、未だ開園と云ふ運びには至りませんが、お初にお目に懸けませう！」と案內をして下さいました。西洋賣店の廊下か



春風やはてなき海のおもてより　挂雨

ら潜戸を開けると、其處が階子になつて居まして、これを登つて行きますと、五十坪の庭。最中植木屋が草花や躑躅を植え込んで居ました。見ると其北の隅に稲荷様が祀られて、花壇もあり、葡萄棚もあり、下町で一番高い庭でせう、周圍の壁の上には、ところ〴〵に電燈の装置もあり、草花の大鉢も載せてあつて、こゝが日本橋の屋根の上とは思へません。夏の月の夜にこゝへ上つたら、嘸涼しいだらうと思ひました。鬢の毛が二條ばかりほつれましたのをこゝの風の紀念と致しまして、別に取上げも致しません、其儘店員の方について降りて行きますと店員の方はまた振向いて、莞爾やかに、これから、

▲新設の寫眞場▼

を覧て被入い！　事務室と書いたお室の前を通り過ぎて奥の應接間を左りへ折れますと、突當りは受附とも見えるところで、次がお客様の待合所、化粧用の水道まで具へてありまして、其次ぎの間がまた應接間になつて居るのですが、寫眞を撮影するところは、北向きの廣間で、それは〳〵見事なもの！寫眞器械から、背景、椅子、何でもないものはありません、こゝの定價表と云ふのを拜見しますと、先づ普通のお寫眞で、

▲手札(一組四枚)壹圓、二枚掛(同)壹圓五拾錢、カビネ(同)參拾五錢、八ッ切(同)四圓、四ッ切(同)六圓五拾錢、半切(同)拾五圓、全紙(同)貳拾五圓と云ふのです。市松の日覆ひ、背景の雲の模樣、それ等に見惚れて居りますと、後ろから、

「佐倉さん、さア一つ撮りませう！」

と云ふ方がありますから、振向いて見ると、それは有名な柴田先生でした。

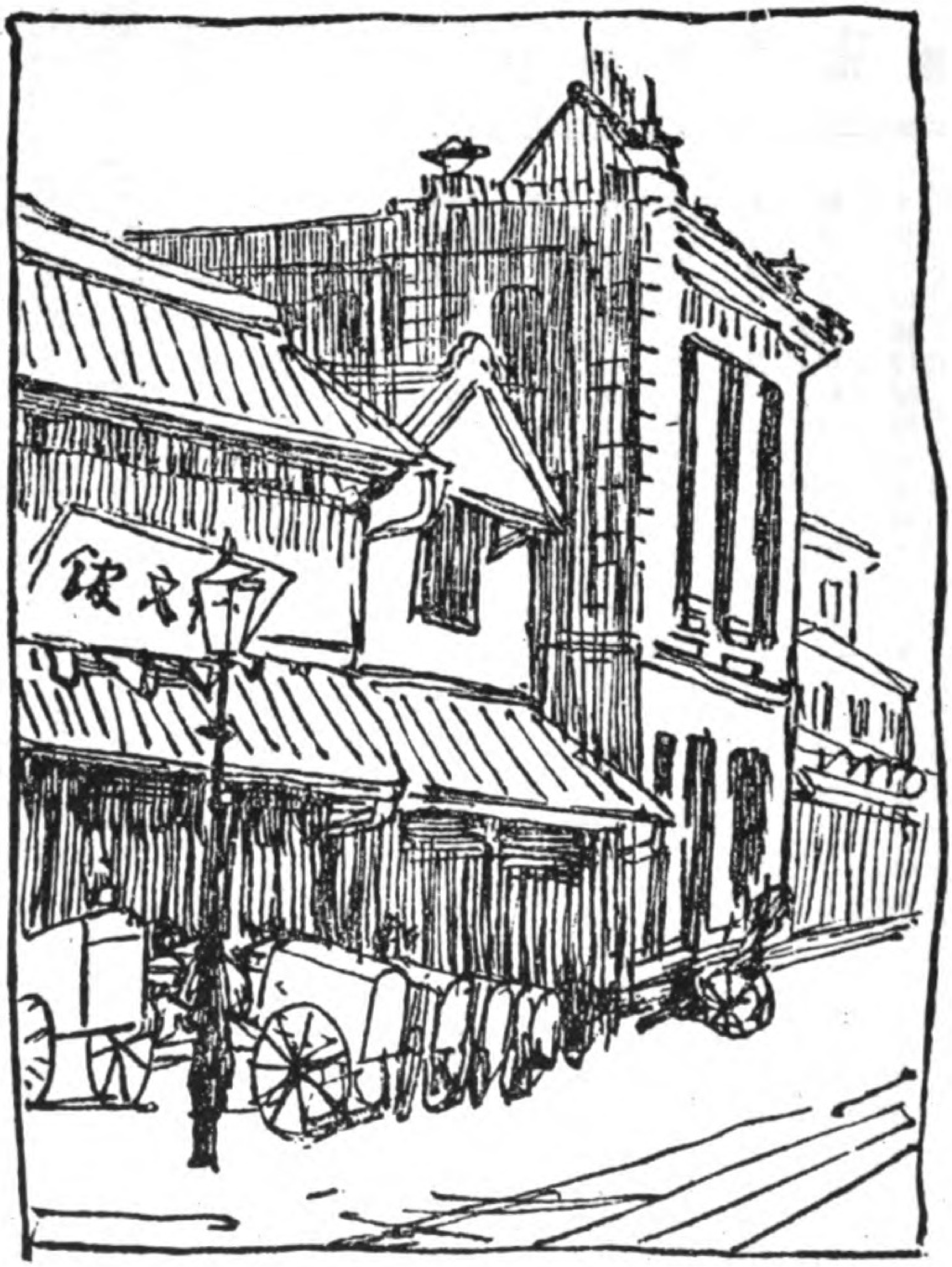
「まア貴郎がお撮り下さるんですか？」

妾は柴田先生を古くから存じて居るものですから、心安だてにかう申しますと、先生は其福々しいお顔に笑を湛へられまして、

「私が今度此處の技師長になりましたから、よろしく御贔屓を願ひます」

「さうでございますか、それは結構、いづれ新婚の時

には是非お願ひ申ませう！」
と云ひますと、先生はまた笑はれまして、



「そんな串戯は置いて、さア一つ撮つて上げませう、
新婚は新婚、今日は今日です」

其處に椅子を据へられて、ンレズを向けられましたから、
「ちやア一つお願ひ申ます！」
隨分活潑ですわね！とう〳〵手札を一組願つてしまひました。そこでまた妾は先生に向ひまして、
「實物幻燈と申すのは、何日でございますのです？」
と伺ひますと、
「それは當分の内毎土曜日の午後六時から八時までやりますので、雨でも降れば日曜に延ばします！」
それからこの實物幻燈と云ふ事は、西洋には能くある廣告の一つで、慰みにもなれば、利益にもなると云ふ說明を聞きまして、柴田先生にお暇を告げ、出口と記した階子段を降りますと、

▲品物受渡場の混雜▼

は大變なもの、宛然お芋を採むやうな有樣です、妾は其處で買物を受とつて、さて出口へ來て見ますと此處もまた人の山！下足を受取つて、三井銀行の前へ出ましたが、考へて見ると、成程三越呉服店は呉服店の模範、いえそればかりではありません、日本商店の模範だらうと思ひました。此上の望みは、もう一つ小供の遊戯室が拵へて戴きたいのと、出口を今少し廣くして戴きたいのですが、それは云はずとも、あれだけの事業をする店ですから、近い中に改善されるでありませう、あゝ隨分と草臥れました！

博覧會の温室

温室は新公園演藝場に向ひ合ひて低き硝子屋根を連亘せるものなり、這は園藝専攻の池田農學博士の設計にかゝり高田商會の建築になりたるものなり、さて温室はこれを九室に區分し第一室には理科大學附屬植物園出品の熱帶性植物の木立性のものを栽植し第二室を同園出品椰子類の培養場に當て第三室を蘭科植物の栽植場となし其大部分を酒井伯の秘藏品にて埋め更らに大隈伯及び岩崎男の蘭類を陳列する筈にて目下清楚の花を着け居るはファレノプシス、デンドロビューム、スプリペヂウス、アンチリウム等なり、第四號室には農科大學出品の盆栽果樹及び鍋島侯爵家出品の歐洲産葡萄を栽植し五號室を挿木床、六號室を養場とし七號室には西洋甜瓜、蕃茄等の洋蔬菜を棚上に這はし、八號室を茄子等の促成栽培場に當て、九號室を花卉室とし目下風信子、チユーリップの球根植物及セペリア其他の一年二年生の西洋花卉の鉢植を陳列しあるもこは間に合はせの爲め有合せの物品を投げ込みたるに過ぎざれどいづれその中に絢爛の美艶冶なる上品を陳列する筈なりと。

むかしの花見風俗

今はむかし六代將軍の頃、花見小袖とて其模樣栽ちぬいなどを競ひ以て晴を飾る一種の風俗ありきこは若き婦人等が彌生の空の花に浮れて上野か岡或は隅田堤に春の永き日を短かしと遊ぶ花見のとき人目の關を作る小袖にて各々其勝らんとをつとむ故に花見小袖とは云ふなり、近世奇跡考に紫一本を引きて云、東叡山黒門より仁王門までの並木の櫻の下に花見衆なし松山のうち清水のうしろに幕はしらかして見る人おほし幕のおほき時は三百餘人よりすくなき時も二百あまりあり此外につれだちたる女房の上着の小袖男の羽おりを辨當からげたる細引にとほして櫻の木にゆひつけてかりの幕にして毛氈花むしろしきて酒のむ也鳴物はならず小歌淨瑠璃踊仕舞はとがむる事なし本町通り町を始め有德なるもさもなきも町かたにて女房娘正月の小袖と云は仕立ず花見小袖とは成ほと手をこめ結構にだてなる物ずきにしたるを着て出る也花よりなほ見事也花のころは空くもりておほかた晝過より雨ふる然れども傘をもさゝずよき小袖をすきとぬらして歸るを遊山にも又手がらにもする也」とありされば今日より想像するときは其小袖綾羅錦繡とおもはるれども當時未だ素質にして近年の如き美服は用ひざりしと思はる西鶴織留にある老女おのれが若きときの事をかたる條に我等もふだんは花色染の木綿着ものに紬の帶一筋にてすがたを作り嫁取振舞のときも淺黃に散し菊の絹の着ものしゆちんの帶にむらさきの革足袋に花をやりにしとあるを見れば此花見小袖のありさまも推て知るべしまた當時の武士は花見遊山に小身にても鎗を持侍をつれてゆくことなりしに當春上野へ花見にゆきて見れば御旗本の面々にあまた逢ひしが鎗をもたせたる人上野の山中に一人も見かけず、けつく陪臣には侍を附け鎗をもたせたるもの多しと古老物語にあり」此書は享保年間の記にて元祿前後なる幕臣の遊惰を諷したるものなり。

晴天一日の栞

▲帝室博物館――構内の面積三萬三千坪を占む、陳列品は歴史、美術、工藝、天産の四部に分たれ、其の普通常備品には歴史五萬二千百四十五點△美術七千八百十六點△美術工藝二千八十六點△天産六萬一千四百七十一點を有し、なほ主管御物には歴史二百十四點、美術十二點、美術工藝七點を備ふ。

此の外現時參品として陳列せるものに木乃伊あり。凡そ二千五百年も經たもので、埃及國テーベス府で發見せるアンクマカトの子フシヤレプターと云ふ者の屍體なりと。丈五尺五寸、胸幅一尺三寸、頗る大きな物である。なほ外にもいろ／＼觀るべきものが澤山ある。百聞一見に如かず、宜しく一日を此館に費すべしである。

觀覽券は大人五錢、小人三錢。日曜の外年中閉館

▲上野動物園――門を入つて、石段を下れば小丘の上に、藤堂高虎の築造した閑々亭と云ふのがある。當今園内に飼養せる重なる動物を擧げると、暹羅產の牝象、それから頭が鹿で體が駱駝で、足が牝牛で、尾が驢馬の四不象といふ變なもの、それから駱駝、濠洲產の袋角鹿、獅子、熊、豹、白熊、猩々、駝鳥、野猪、赤熊、山羊、猿その他、鶴、鴇、鴛鴦、鴨、孔雀、七面鳥、鵜、梟、鸚鵡、小雀、山雀等の鳥類より、山椒魚、河豚、鯛などの魚族まで飼養してある。なほ此頃は新來の麒麟が二頭居て、その長い首で盛に觀客を呼んでゐる。

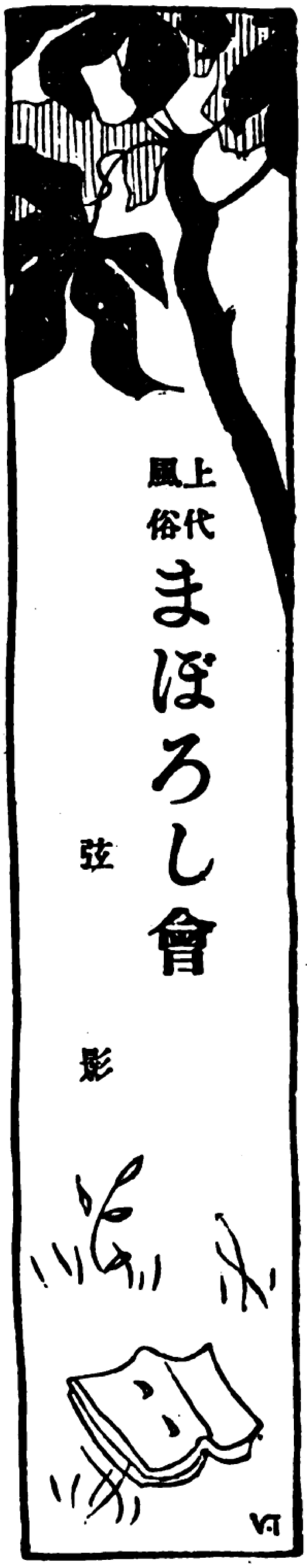
觀覽料は大人四錢。小人二錢。

▲小石川植物園――白山御殿町に在り、面積四萬八千八百坪の大園である。園内には遍く諸種の植物を栽培してあるが、その種類内外產を合して三千餘種を算するのである。又園内には日本式の溫室と歐州式の溫室とを設けてあつて、後者には專ら熱帶地方の植物を收容栽培してゐる。

本園は、毎日（十二月二十六日より一月五日までは休み）來觀を許可してゐる。

來觀券には三種ある、日曜日祭日の來觀券は紅色で一枚三錢、平日のは青色で一枚二錢、又、日曜で、特別來觀券と云ふのは紫色で一枚五錢。

園内には櫻の樹多く、滿開の時は紅雲の棚引くが如くである故、山の手の貴婦人、紳士、女學生など散步がてら花を見に來るものが多い。又た園の西の方に庭園があつて、頗る泉石の美を極め、四時景趣に富んでゐる(麻軒)



上代風俗 まぼろし會

弦影

天清浄、地清浄、苔のむしたる巖は、屏風の如くに立ち並びて、峻しく險しき處ろに扉の窟あり、いかにしたりけむ、その扉は堅く鎖されぬ。前に居並ぶ人々の風采を見るに、いづれも頭髪を左右に分けて双髻を兩耳の上にて束ね、髭髯毿々たり。白色なる筒袖の上衣と、同じ色なる裳とを着け、腰には頭槌の劍を佩き、足には獸皮の靴を穿つ。頸より胸のあたり手首などには勾玉もて飾りたれば、身の動くたびに閃々として晃めけり。その中なる一人は、根掘じにしたる榊の、上の枝には玉を繋ぎ、中の枝には鏡、下の枝には靑和幣、を懸けたるを捧げ持ち、一人は恭しく扉前に進みて、何やらん聲高らかに言上す。また一人の女性、鼻いと低く滿面に愛嬌を堪へたるが、これも身に白き衣裳を着け日陰蔓を鬘とし、眞木蔓を手襷にかけ、小竹葉を手草に結び、鐸つけたる矛持ち、足踏み鳴らして躍る。

此の時、扉の隙より、一道の光明、外を射ると見えけるが、一人の偉丈夫つか〳〵と扉前に進み、すばやく扉に手をかけ、力に任せて引き開くれば、中には和好端麗神彩奕々たる神人、莞爾に笑みて立たせたまひ、光輝赫耀として六合を照らすにぞ、扉前にありし人々、皆手を拍ちて喜び狂ひぬ、我等は此の壯嚴なる光景に神戰き眼眩き、思はず俯伏しけるが、やがて再び頭を擡ぐるに、こはそもいかに、今まで有りし巖窟も人人の姿も全く消え失せて迹方なく、前面に廣き數百千

人をも容るべき大會堂こそ現はれたれ。會堂は今しも幾百の婦人をもて充たされたり。中には頭に寶髻を戴き足に錦襪を穿きたる貴婦人あり、十二一重の上臈あり、垂髪袿衣の奥方あり、水干立烏帽子の白拍子あり、瑇瑁の簪、刺繍の裲襠せる遊君あり、かさへ扇の艶なるあり、八重襷のかひ〴〵しきあり、緋の袴の氣高きあり、千種萬様、上下三千載の婦人を一堂に集めたるがごとし。

かゝるほどに幹事とおぼしき一婦人、正面の演壇に現はれ何事か開會の辭を述べしが、目前の事柄も數千里を隔てし心地して一條聞き取れざりし内に早や一名の演者は代りて壇に登れり、熟ら〳〵其人の扮裝を双眼鏡にて眺むれば、白の絁もて造れる筒袖の衣に、同じ地質なる褌を着け、腰に男のすなる太刀を佩き、手に梓の丸木弓を持ち、背には鷲の羽矧ぎたる八目の鏑矢を負ひたる婦人なり、眼元凛々しく鼻秀で、長き黒髪を無雑作に後頭部に束ね、勇氣をさ〳〵男子をも凌ぐべき風采なりき、不思議の事よと思ふうちその婦人は徐ろに口を開きていふ樣、

私は我が朝の國初より推古時代までの婦人の狀態に就きまして、少々申述べやうと存じます。我が邦は昔しから細戈千足國と稱へて、尙武の國柄でございますが、その勇武は唯男子ばかりでなく、女子も雄々しい氣象を持つて居りまして、一旦事あれば共に從軍し、弓矢を執つて戰ふたものであります。

恐れ多くも神武帝の御東征の時に八十梟帥が國見岳に據り、女坂に女軍を備へたといふ事、又皇軍も初に女軍を忍坂より出でしめたとあるのを見ても、當時娘子軍の如何に勇ましくあつたかゞわかります。降つて景行天皇の御代に、筑紫に神夏磯姫といふ女、徒衆甚だ多く一國の魁帥であつたが皇軍に歸順したといふ事があります。又日本武尊の御一代には倭姫に橘姫、宮簀姫と三人の女性が色彩を添へて居られますが、下つて神功皇后の三韓御親征、この外、夫と共に海外へ遠征した婦人が敵に捕へられ、飽くまでも屈服しないで、壯烈なる最後を遂げた大葉子の

如き例も澤山あります。かく申す私も實は夫と共に從軍致しました。時は丁度舒明天皇の九年夫形名は東國の叛賊征討の大將を拜命致しましたので、私も共に隨いて參りました。ところが賊の勢が存外に强盛で、私共は却て或る城の中へ圍まれてしまひました。此の時味方の軍勢は大半逃げ散つてしまつて、城中殆んど空しといふ有樣、夫は闇にまぎれて此の城を逃れ出でやうと申します。そこで私はそれを押止め夫に向うて、此の場



名畫の面影——元信筆山水

合、城を舍てゝ逃げるなどとは、卑怯千萬、矢竭き刀折るゝまでも戰ひ、城を枕に討死なさいましてこそ、大君への忠節も立ち、祖先へも申譯があると申すもの、兎に角元氣を付けられよと、酒を勸めましたから、夫は終にそこへ醉ひ臥しました。そこで私は夫の太刀を腰に佩き、弓十張をおし張り、召使ひの女共に弦を引き鳴らさせましたが、此の物音に夫も眼を覺まし、鉾とつて起ち上り、殘卒を率ゐて打つて出ました。この有樣を見て賊軍は、城中にはまだ軍勢が澤山あると

思つたか、圍を解いて退きましたところへ、散卒も追追に集つて來てたう／＼賊を平げることが出來ました。併しこれは私共ばかりではない。當時の女は誰でも此の位の氣象がありましたから、女子の勢力も隨分强大でした。しかるに其の後、儒敎や佛敎がだん／＼と支那からはいつて來て、自然社會の狀態に一大變動を起し、終に大寶令といふものが出來て、大に女子の權利を抑え、女子の從軍なども禁ずるやうになりました。

渡海婦人（十五歲の少女）

引き續いて登壇せる婦人は、窈窕たる花顏、嬋娟たる風姿、げに天生の麗質を、綾羅錦繡もて造れる衣、紕帶、褶、纈裙などにて包み、頭には金銀を鏤めたる寶髻を戴き、足には錦の襪を穿き、珠の沓を履みたれば、光明赫耀としてあたりを射、見る目まばゆきばかりなりき。

先刻のお話しの通り、大寶令が發布になつてから大に女子の氣風も變つて、戰爭などに行くものはなくなりました。且段々と海外の文明を輸入して、諸般の工藝が日に日に發達するにつけ、衣食住も見かはすばかり贅澤になりました。唯今私の着用して居るのが、即ち當時の上流婦人の禮服であります。中にも美術は驚くばかりに發達して、何處へ出しても恥かしからぬ品が出來るやうになりました。それが私共の時代の特色でございます。さて私共時代の風俗や美術品の大部分は奈良の博物館へ陳列させておきましたから、お望みのお方は同館に就て御熟覽下さいませ。

さて話しが少し前代に立ち戻りますが、我が邦で始めて出家して尼となつた婦人は、南梁の歸化人司馬達等の娘の嶋女でありまして、十一歲の時に出家得度して善信尼と稱しました。之に次で漢人夜菩といふ者の娘豐女といふのと、錦織壺といふ者の娘石女といふのとが尼になり、二人ともに善信尼の弟子となりました。此の三尼は排佛黨のために言ふにいへぬ迫害を受けましたが、少しも屈することなく信仰を續け

て居る中に、佛教が追々盛んになつて來て、善信尼は他の二尼と共に戒律を受けんがために官名によつて百濟へ渡航しました。これが崇峻帝の元年であつて、我國最初の海外留學生であります。その時善信尼はまだやうやう十五歳であつたといふのは實に感ずべき事で單に宗教上のみならず女子文學史上に特筆大書すべき事であらうと思ひます。かくて此の三尼は三年の後に業を卒へて歸朝しましたが、善信尼の名聲は隆々として朝野を動



名畫の面影——春星筆柳間舟遊

かし、其の門に入つて教を受け得度する者が多かつた中に、貴族の婦人が續々得度するといふ有樣になりまして、推古帝の朝には僧八百十六人に對して、尼が五百六十九人あつたといふのを見ても、當時の女子が傳道のために、さまで男子に劣らぬ働きをして居つたことが、わかります。その後熱心なる崇佛黨蘇我氏が倒れて、儒教主義を基礎とした唐朝の制度に模して大化の改新が行はれたのですが、佛教は衰へるどころではない、却てます／＼盛んになつて、私共の時代には

終に隆盛の極に達しました。私共も熱心な信者でありまして、金銅毘盧舍那佛の建立や、國分寺の設置については、及ばずながら獻身的に盡力も致しましたし、施藥院悲田院なども設けて、慈悲善根を施しましたが、天下の婦女子苟も志ある者は皆競うて佛門に入り、佛敎の弘布に從事するといふ勢でありました。併し私は此の席で私の信ずる佛敎の功德を述べて、皆さんに御信仰を强ふるのではありません。唯日本の婦人は傳道者としても、成功者であるといふ事と、大寶令で一般の女子の勢力は大に縮少せられたにかゝはらず、宗敎界では大なる勢力を持つて居た事とを、御紹介致したのでございます。

艶書の展覽會

表着は若松と唐草との地紋に窠の上紋おきたる萠黃色の織物に紫絹の裏をつけ。下には、蘇芳色、雲に立浪の紋、葡萄色の裏つけたる五衣、緋色の綾の打衣、遠菱の紋ある濃色の綾の單などを着襲ね。上には葡萄色の二重織物、龜甲の地紋に八葉菊の上紋ある唐衣を着け。緋の精好の打袴を穿き。白綾に桐竹鳳凰の地模樣ある裳を裾長に曳き。髮は長く背後に垂れ。頭には梨子地蒔繪の櫛を挿し。白粉傅けたる顏に、天上眉の色黛く。額上の釵子、金色燦然たり。飾紐付きたる胡粉塗彩色模樣の衵扇を胸のあたりに持ち添へながら徐ろに說き出すやう。

私は平安朝の宮廷に仕へたものでムいます。私の時代に於きましては第一に婦人の生命とする衣服が、前代よりも一層華美になりました。即ち私の只今着用して居りますのが上流婦人の禮服でございまして、十二一重と申します。併しこれなどは、よほど質素な方で、ずつと上つ方になりますとまだ〳〵幾層倍も華美なものがございました。ある園遊會の時に、花の如き女御樣は、今日を晴れと有らんかぎりの盛裝をして、艶麗を競はれました中に、紫、紅、萠黃、山吹、蘇芳などの打衣を廿五枚も襲ねて、表着、唐衣、裳などには、黃金をのべて紋においたのもあ

れば、黄金作りの菊の折枝や螺鈿などを付けたのもありました。或は柳さくらをませ重ねて、表は織物裏は打物で裳の腰に玉を貫いて、「柳さくらをこきませて」「玉にもぬける春の柳か」の歌の意を寓したのもあり、それはそれは意匠を凝らし華奢を極めたものでありました。それがまた女子ばかりでなく、男子も女子に劣らず服裝にうき身を窶し紅粉を粧ひ歯を涅め、風流都雅を爭ふて居たのでございます。外國はいざ知らず、我國で服裝に



名畵の面影――納言筆洗小町

最も贅澤を盡したのは、先づ私の時代であらうかと存じます。

住居には寢殿、東對、西對などがありまして、廊を以て聯絡し、中庭には珍卉百草を植えて四時の眺めとし、池には築山島などを設け、橋を架け、水に臨んで釣殿渡殿などを設け、夏にも冬にも適した構造でございました。屋根は優美な檜皮葺。天井は組入の格天井。板敷の上に高麗縁または雲繝縁の疊を敷き。屏風、簾、壁代、唐紙、障子、絹張の明障子などをそれ〴〵に装置し。坐傍には几帳脇息な

などを置き。寢るには帳臺あり、衣服調度を納れるのには塗籠あり。厨子棚には香壺、硯筥、草子筥、唐匣を飾り。衣桁にはかの華美なる衣裳を掛け、鏡臺には明鏡を据えてある。それが皆彫刻、蒔繪、螺鈿などで裝飾をしてあつて、今日東京博覽會で拜見する千圓二千圓の値札のある蒔繪書棚などは只尋常の器に過ぎない位ですから、室内は恰も小美術館のやうでありました。かういふ次第ですから飲食の贅澤なことは申すまでもありません。

此の如く綺麗な家に住んで綺麗な衣服を着て美味なるものを食べました。衣食住に於て一の缺くる所がありませぬ。そして何も生存競争上の必要がないといふのですから、一世は只如何にして面白く遊び如何にして現代の榮耀を極むべきかといふ事に心を碎くばかり、そこで歌舞、音樂、燕宴が非常に發達しまして。神樂、催馬樂、東遊、風俗歌、朗咏、今様などが盛んに行はれ、樂器は和琴、笛、箏、横笛、笏、拍子などの樣なものがありました。中には雍々たる大雅の音がなかつたでもありませんが、まづ多くは淫靡纎弱なる哀調でありました。それを伶人に演じさせて見たり聞いたりするばかりでなく、自ら舞ひ自ら奏して樂んだものであります。即ち所謂一世を歌謡し燕遊して暮らしたものでありました。

即ちこれを節物に分ちますると、まづ春は子の日の遊、曲水の宴、夏は端午七夕、秋は重陽などの公の行事はいふまでもなく。加茂の祭りには綺羅粉黛、一年一度の衣裳競べをなし、大堰川の舟遊には、龍頭鷁首の舟を浮べ、詩歌管絃の三才に誇り、昨日は東家に醉ひ、今日は西隣に招かれ、瓊宴を花前に開いては、心短き春風を恨み、仙樂を月下に奏しては、無情の秋雲を妬み。人は只恍惚として歡樂に醉ふて居たのであります。去り乍ら花は散り易く、月は缺くるもの、一年中花見月見で押通すわけにも參りませぬから、また種々の遊技が考へ出されました。歌合に詩合、詩歌合、それから花合、扇合、謎合、貝覆、貝合、双六などが盛んに行はれました、甚しい

のは艶書合せといふことまでが行はれました。世界廣しと雖も、恐くは艶書の展覧會を開いて男女愛情の厚薄を審査するといふ例はありますまい。つまり當時の貴族は、何の事はない、だうして遊んだら面白いだらうと研究をして居つたと申してもよい程でございます。さて又文學は此の時代になつて非常に發達しまして、唐詩漢文の流行はいふまでもなく、假名文學さへ起りまして、女流にも辭藻に富んだものが輩出致しました。それ故、



名畫の面影――探幽

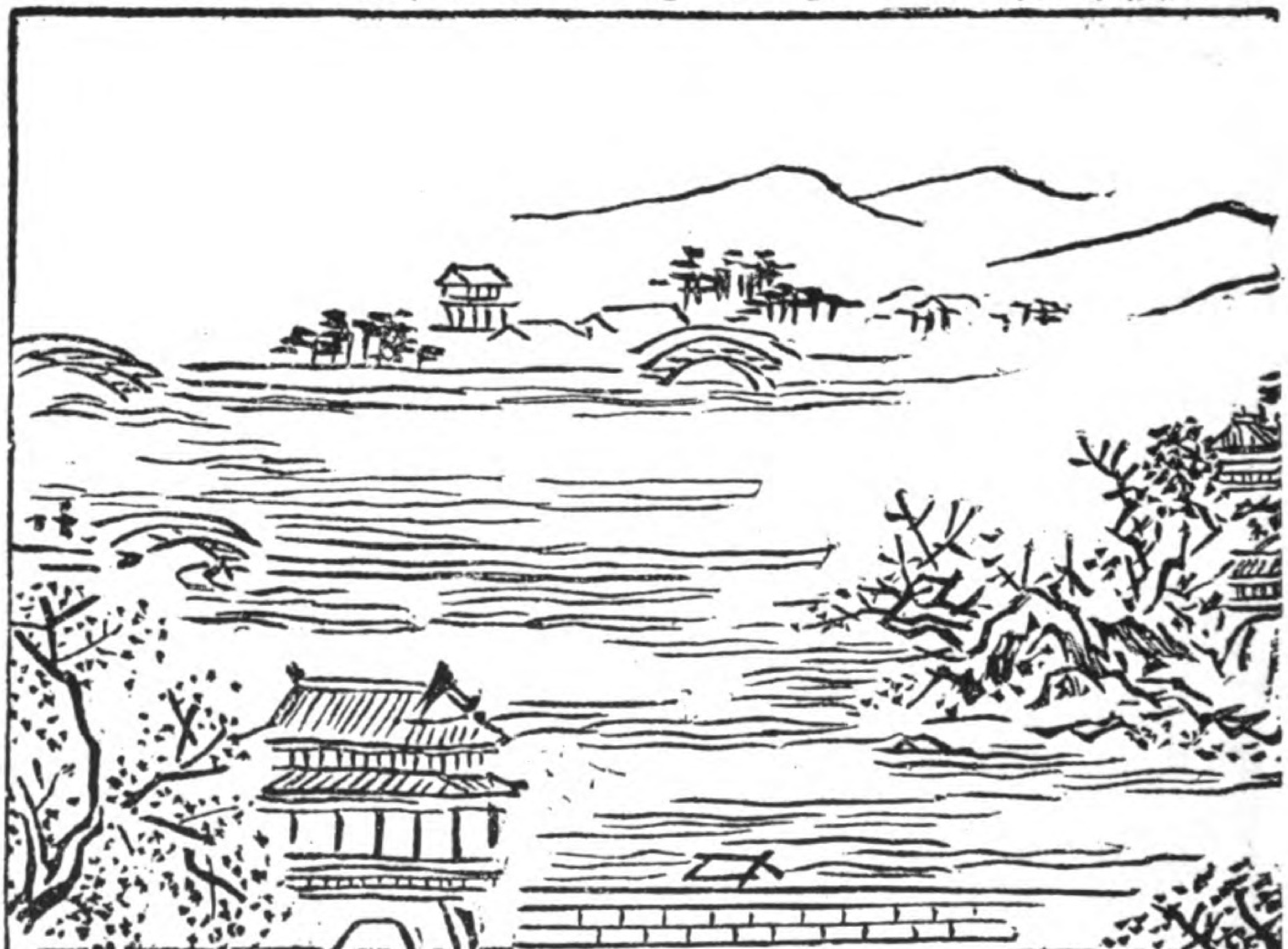
日本の文學史上から見れば誠に光彩ある時代でせうが、其の謂はゆる文學なるものは、前に申した優柔都雅なる縉紳と、婀娜窈窕たる貴嬪との間に玩ばされて居たのでムいますから、實學などゝいふ考は少しもありませんでした。其の極、文藝詞章は一つの遊戯、一つの交際の道具となつてしまひました。中にも短歌は假名文字の創造と共に大に進歩したのでムいますが、さて其の風調といふものは淫蕩艶冶に流れ、前代のやうな氣概風骨は全くなくなりました。それもまだよい

と致して、此の和歌なるものが、主として男女の情交を媒介するの通話器となるに至りましては、誠に歎はしい次第で厶います。されば貴紳名媛が盛装粧服して宮中に列座し、一字半句の優劣を爭ふた歌合なるものも、畢竟戀愛の研究に外ならんので厶います。それでもまだ飽き足らずして、終には前に申したやうな艶書合せなどと、古今無類の事を致すやうになつたので厶います。

右樣の次第で平安朝の貴族は、衣食住に於ては、此の上もない驕奢を盡し、面白をかしく遊び暮して居る上に、軟文學が流行して、なまめかしい艶書や戀歌が絶えず其の情緒をかきみだし、微妙なる音樂が常に其の春心を挑發するといふ有樣で厶いますから、淫靡の風は京洛を吹倒し、男女間の風儀、夫妻間の倫常といふものは、今こゝでお話しするのも恥ぢ入るほど壞頽の極に達しました。

無論社會の禮文は日に日に發達し、儒佛兩教は益々隆昌となるにつけて、男女の別はいよ〳〵嚴重になり、女は外出の時には、輿に乘るか被衣を被ふかして、花顔を人に見せるのを恥ぢ。家に居る時でも、紅閨翠帳の内に垂れ籠め、扇をかざし、そぎ髪をかけて、心易い男子にすら顔をむき出しにして話しをせぬのを善いとしてありましたが。これは眞に表面の事だけで、一たび其の裏面を窺ひますると、此上もない醜猥なもので厶いました。それで此の時代の婚姻と申しますのは、先づ初に男女が戀歌の贈答をして情交の媒をなし、やがて意氣相通ずるに至れば、黄道吉日を擇び、日暮を待つて、男が竊に女の家を訪ふので厶います。かくて一夜の契、濃かに百年の苦樂を語らひ、東雲告ぐる鷄の聲に驚かされて家に歸れば、やがて惜しき名殘をこま〴〵と文に認めて女の方へ送ります。之を後朝の文と申しまして、女も亦必ず之に答へるのが禮儀としてありました。そこで女の父母は、男の風采なり品位なりが氣に入つたか入らぬかを尋ねまする。若し氣に入らぬとあれば、直に其の情交を絶たさせるのでございますが、

氣に入りますれば、翌る夜も男が通ふて來て、前日の如く後朝の贈答を致しまする。かくて三日目には、三日の餅といふのを拵らへてたべまする。その後、酒肴を調へまして露顯の式といふものを行ひ、舅と婿とが顔を合せまして、こゝに始めて公然たる夫妻となりまして、それから情交がます〳〵親密になつて比翼連理を契るといふやうになりますれば、夫は始めて妻を我家に迎へまして正妻とするので厶いますこれが普通の婚姻の順序



名畫の面影――探幽

で厶いますが、當時の男心は浮薄で厶いましたから、中に一人の妻を愛して居るものはありません。彼處の館に忍び、此處の里に通ひ、成るべく多くの情婦を持つて居るのを風雅男として我人共に誇つたもので厶います。甚しいのになりますると正妻の二人三人もあり、只今の法律ならば重婚でせうが、二人妻、三人妻、三妻錐などいふのが、堂々たる一國の大宰相たる人の身の上の事で。閨門には嫉妬怨恨の氣常に滿ち渡り、二人の妻の喧嘩ならば、まだ仲裁の仕やうもあります

が、三人の喧嘩となりましては、殆んど手のつけやうなく、その爲めに無常の心を起した大臣があつた位でムいます。

殿方がこんな有樣でムいますから、女子もまた自然愛情の厚薄に依りまして、昨日は藤家の閨裡に眠り、今日は橘門の幃中に契るを恥ぢませぬ。夫ある身にても二三人の情夫を持つといふ有樣で、中には兄弟叔姪の婦と姦するものもあれば、甚しいのは繼母子相姦するといふ亂倫至極の事もありました。そんな有樣でございますから、夫が歿なりました後は、謂はゆる誘ふ水あらばいなんといふ風情で、再緣しないのを却つて不名譽と致し、鵜坂の社前に臀うたるゝも恥ぢず、筑摩の神事に戴く鍋の重なるをも厭はぬといふ狀態でムいました。誠に倫常の壞敗したことは、古今何處にも其の例があるまいと存じまする。

寡婦の髷

菊綴したる白絹の水干を瘠方の身に着け、立烏帽子を被り、腰には白鞘卷の太刀を佩き、手には扇子を携へたり。綺羅粉黛を粧へるにはあらねど、眉目淸秀、風姿鮮妍、あつぱれ當代の佳人とぞ見えたりける。

私は鎌倉時代の音樂者でございます。先刻お話のありました通り、京都の搢紳は驕奢淫逸、花天月地の間に優遊し、金殿玉樓の裏に暖かき夢を貪つて居る時に地方の武人は劍を磨き馬に秣ひ、ひたすら實力を蓄へて機運の到るを待つて居りましたが、天險の烽火一たび天に冲して、地方擾亂の火蓋を切り、次で前九年後三年の役となり、保元平治の亂となりまして、霓裳羽衣の曲は、はかなくも矢叫びの聲に驚破せられ、花の都はたちまち變じて修羅の巷となりました。そこでさしも全盛に誇りました藤原氏の權力は全く衰へ、遂に武家の天下となつたのでムいますが、藤原氏に代りました平氏はまた藤原氏の華奢を繰り返し、二十餘年の榮華を夢と致して、あはれ西海の藻屑となつてしまひました。之に代つて天下の實權を掌握した源氏は、前車の覆轍に鑑みて、萬

事、質素剛健を旨と致しましたから、衣食住についても、京都以外に一種の武家風を起しました。随て婦人の服裝も至て質素なものでございました。

さて私はこゝに私の身の上話を申すと致せば甚だお聽き苦しうもございませうが、それが幾分か婦人の節操とか意氣地とかいふ問題に關係致しますから、思ひ切つてお話し致す次第でございます。

さて私が夫に當る人の生母の事を彼是申しまするのは甚だ道ならぬ義とは存じまするが、話の順序と致しまして、一寸申述べませう。



名畫の面影——吳春筆春雨

夫の生母常盤は、もと近衛帝の皇后に宮仕へを致しまして、宮中では美人の譽の高かつたものでムいます。それが左馬頭殿の側室になりまして產まれたのが、即ち私の夫でございます。ところが平治の亂に左馬頭どのは、脆くもうち破れて、源氏に由緣ある者は、一人として京都に踏み留ることのできぬ塲合となりました。そこで常盤どのは三人の子供をかゝへて都をさまよひ出でまして、大和の國龍門の里まで落ち延びましたが、折惡しくも大風雪に

逢ひ、雪は笠檐を撲ち風は袂を捲くといふ時の句の通り、進退谷れる處を平家の侍に捕へられ六波羅へひき立てられました。しかるに妙なことから遂に平相國の枕席を掃はるゝことゝなつたので厶います。これは無論三人の子供の命を助けたいばかりの苦心から起つたのでせうが、何をいふても平相國といへば、左馬頭どのゝ不倶戴天の敵であります。その敵に身を任かされたので厶いますから、世の人が彼是非難するのも有理なことで、辯護の致し樣もございません。しかしそれもまだよいと致した處で、やがて清盛の胤を宿して一女を生み、寵愛が衰へて暇が出てから、また再び大藏卿藤原長成どのゝ許へ嫁がれました。これも長成卿にたよつて源家を再興しやうといふ深い考からの事であらうと私は考へますが、口さがない京童は決して之を諒察しなかつたやうな譯で、私は世の人が常盤どのゝ操行についていろ〳〵と非難するのを聞いて居りましたから、私が吉野山中で夫に別れ、不運にも捕へられました時、たとひ如何なるうき目に逢ふても節操を守り、夫の名を汚すまいと覺悟致しました。さて鎌倉へ參つて見ますると、手をかへ品をかへて、夫の所在を訊問せられましたが、私はどこまでも知らぬで押し通しました。そこで私は幸に節操上には壓迫を受けなかつたので厶いますが、こゝに一つの出來事と申すのは、私の音樂舞踏に長けて居るといふことが鎌倉殿に聞えたと見へまして、鶴が岡の祠前で一さし舞ふて見せよとの注文で厶います。

如何にも私はもと白拍子で厶いました。併し今日では九郎判官の妻です、それを兄上とはいひながら、現在敵の面前で舞うて見よなどゝ、餘りに人を侮辱したことだと思ひましたから、斷然之を拒絶しましたが、なか〳〵聞き入れません。是非にとの所望ですから、よしそれではこれをしほに一つ鎌倉武士の度膽を拔いてやらうと考へまして、その日正面に鎌倉殿御夫婦、下手には諸士の面々列座の上、工藤祐經が鼓の役、畠山重忠が銅拍子の役といふ晴れが

ましい次第、私はこゝぞと聲高らかに。

よしの山みねの白雲ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき

また

しづやしづ倭布の緒環くりかへし昔を今になすよしもがな

と場所もあらうに、夫を慕ふこころを歌ひました。すると鎌倉殿の御怒りは非常なもので、一座は白けて見える。既に一命も取られる處を、御臺所の取做で、其の場は納まりました。それから續て鎌倉に留ることになり。御臺所から絶えず保護を受けましたが、實は此の時私は夫の胤を身に宿して居りまして、やがてやす〳〵とそれを産み落したのですが、無殘や……其の後の事は多く語るに忍びません。



名畫の面影＝元信筆　芦雁

武人の妻

次で登壇せる婦人は、垂髪袿衣姿のいとも質素なる裝ひ、一揖して立てる風體如何にも武人の妻らしく見られたり。

前說に伺ひました通り、鎌倉幕府は質素剛健を武門の金條と致しましたから、當時の武士の間には、いつとなく義を重んじ、死を輕んずとふい氣風、即ち一種の武士道

が出來ました。隨て此の時代の婦人、就中武士の家庭に人となつた婦人には、平安朝のやうに、才色雙絶といふやうな名媛のないかはりに、氣象はよほど堅實なものでムいまして、如何なる境遇に處しても武士の妻たる面目を傷けてはならぬ。夫の名譽を汚してはならぬ。これが即ち婦女の道であると自ら重んずる心の强かつたものでムいます。それ故、夫や我が子の出陣を見送るのは、心で泣ても口では笑ふといふ有樣、夫の留守中は質素儉約を守つて、よく一家を整理し、如何なる窮乏にも堪へ、如何なる苦痛をも忍びて、夫に後顧の憂なからしめ、よしや夫や子供の討死の知らせがあつても涙一滴見せぬ。つまり己の感情を抑えて外に現はさぬのを婦人の美德として居りました。若し後世の日本婦人に、克己心とか忍耐力とかがあるとしたならば、遠く其の萠芽を此の時代に發したものであらうと思ひます。夫死して後は、男の子は無論武士の子たるに恥ぢぬやう、女の子も武士の妻たるに恥ぢぬやうに育て上げて、夫の遺志を繼がせ家名を揚げさすのが妻の責任でございましたが、子の無い者は黒髪を剃りこぼつて尼になるのもあれば、自害して殉死する者もあるほどでムいましたから、先刻御話しの貞操の事などは論ずるまでもなく極めて嚴格なものでありました。斯く申す私も夫に先立れた一人でございまして、建武年中、夫は朝敵征伐のため、兵庫へ向け出陣の道すがら、櫻井の驛から當年十一才の忰に、わが亡きあとの事を言ひ含めて送り還しました。夫は此度のいくさ所詮勝利は期しがたしと決死の覺悟でございましたが、萬一にも凱陣をと私共はひたすらその武運長久を祈つて居りました甲斐もなく、夫は湊川の敗軍に、四十三歳を一期として討死致しました。程なく敵將の情によつて夫の首級は我が家へ屆きましたが、見ればあさましい御姿、今一たび御言葉をと思へどかひなく、悲しさ胸にこみあげ、はふり落ちんとする涙をかみしめて、じつと耐へて居りますると、忰は何と思ひましたか、つか〳〵と起つて持佛堂の

方へ參ります。その血相の唯ならぬのを見て、私は後とをつけて參りまするると、悴は肌おしぬぎ櫻井の驛で父から貰ふた遺物の寳劍をぬき放ち、彼の體爲でございます。そこで私は其の不所存を諭し、自害を思ひ止まらせました。當時の武士の家庭にはかやうな活劇がまゝ行はれたのでムいます

政略結婚

これに代りて登壇せるは白綸子の三枚重ねに、緋緞子に紫の裏つけたる間着を着襲ね。黒地に梅松櫻の模様ある金襴の鉢の木帯を締め、其の上に黒地縫模樣の裲襠を裾長に着なし、髪はおすべらかしなり。



名畫の面影――吳春筆兎

さて武家の世も北條滅びて足利の世となりましてからは、いつとはなしに鎌倉以來の質素剛健の風か棄りまして、東山殿の頃には、また〳〵藤原氏にも劣らぬ驕奢を盡くされましたから、美術工藝は發達したものの、同時に、武士の生活狀態は日に日に贅澤になつて天下の政治の中心は天下の借金の中心となりました。併し應仁大亂の後は草莽の間に自然武士道が發達致しまして、武士たる者は卑怯

末練を何よりの恥辱として、身命を棄つるを此上もない名譽とする樣になつて參りました。就きまして當時の婦人の狀態は如何と申しまするに、敢て千軍萬馬の間に飛入つて戰ふたのではなく、寧ろ外交上に働いたと申してよいのであります。昔し漢の王昭君は絶世の美人でありながら、胡地へ赴いたと伺ひますが、我が戰國時代の婦人も矢張りそれで、敵國へ嫁づくものが多かつたのでムいます。無論これは自ら進んで行くのではなく、その父たり兄たる人の政略上隣國との婚姻を餘儀なくせられたのでムいます。それも永く同盟がつゞければよいのですが、當時の形勢として永く續きませんかつた。それ故、その同盟が破れて、その犧牲になつた婦人が澤山にありました。勿論これは皆歷々の御家柄であつて、そして御容貌のよい御方の事。餘り醜くてはいかに政略上とはいへ、先方が引き受けてくれませんから、此の時代の婦人は、醜く生れた方が幸福であつたかも知れません。

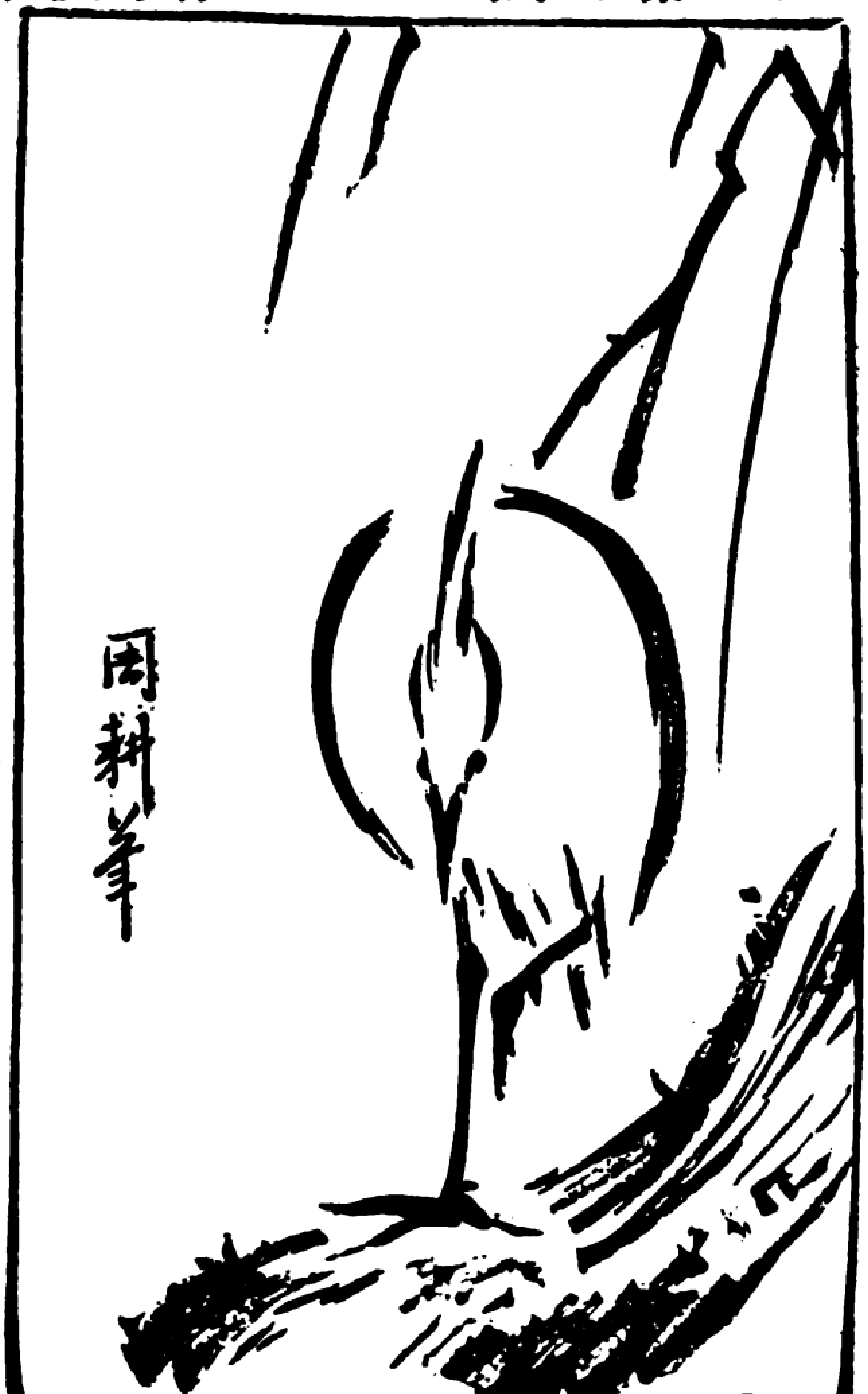
女の意氣地

眩きまでに盛裝したる一箇の美人、八文字の足取りゆたかに壇上に現はれたり。身には黑天鵞絨地に桐に鳳凰の繡模樣ある裲襠を裾長に着なし。黑繻子地、竹に虎の繡模樣ある帶を前に結び下げ、小袖は白茶地金襴胴拔きの三枚重ね、襦袢には白鹽瀨に金銀の繡模樣ある半襟をかけたり。鼈甲玳瑁の櫛笄、さて幾本となき簪を頭上隙なく挿し飾りたるさま、恰も後光を放つに似たり。嫣然一笑して、さて嬌音滑かに、

先刻から皆御身分のあるお方ばかりが、御登場なさいましたと跡へ、私風情が顏を出しますのは、誠に恐れ多いことでムいます。

さて德川の世となりましてからは、何事も掟が定まりまして、衣食住の事までも、士農工商とそれ〴〵の身分に應じて、家の建て方、風俗、着物の着方、食物までも、それ〴〵窮屈千萬な事とはなつたのでございますが、泰平がうち續くにつけて、いつとた

く、其分限を超えて贅澤をするやうになつて、終に元祿の惰奢に達しました。されば男女何れも綺羅錦繡を粧ひ華美艶麗を競ふた中に、一きは目立ましたは薄玉子色に、肩かのら一尺ほど青々と御簾の模樣を染め出し、唐織の縁、紅の房を下げ、裾は亂萩の模樣、それに藤色に碁盤の紅縞の裏をつけた小袖。下着は瑠璃紺に同じ紅縞の裏帶は黒天鵞絨に大紋の石甃のあるのを後に廻して御所結びに締め、その端に銀にて鶴菱の四紋が置いてある。そして返襟と裾先とを少し揚げて帶の下に挾み、抱帶なしに細い忍帶を締める。



名畫の面影――月耕筆

それから素き合潟具の裾には、鉛の鎮を掛けて、總淺黄の金剛を穿いて擦り足に歩く。髪はしめつけ島田で、前も後も長さは同じく、中ほどに平髷を懸け、白檀の木地に珊瑚樹を切り入れた櫛を挿し、前髪に鯨の鰭を入れて髪の狂はぬやうに仕懸け、すこし俯向きになつて首筋あり／＼と見せる。これ等が元祿姿の粋の粋なるものであつて、大層な金目のかかつたものでございます。無論大名の奥方、姫君などの服裝もこの時代には、華美を極められましたが、何を申しても高く四民の上に位して品格を保つて居られて、物見遊山にも容易く出られる

ことはない。出れば轎乗物といふ有様ですから、一般士民が拜むことは出來ませんかつた。先刻伺ひましたのに、奈良朝、平安朝など、隨分服裝に華美を競はれたとの事で厶いますが、それは皆貴族方に止まるやうですが、此の元祿時代には謂はゆる町人が、こんな贅澤をしたので厶いますから、餘程前代とは事情が變りて居ります。

さらば女子の狀態はどうかと申しまするに、三從七去の儒教主義で男尊女卑で、女の立ち塲は少しもありませんのですが、こゝに一つ不思議な現象と申しますのは、私共の社會に一種の氣慨を具へて居る者の多かつたことで厶います。其の氣慨と申しますのは、黄金を卑しみ權勢に媚びず、弱きを扶け强きを挫ぐといふやうな意氣張で、氣に入らねば百萬石の大名へも上らぬ。或は親の仇を討つた者もあれば、情人の仇を復した者もある。いづれも茶の湯、香、花、絲竹の道に通して和歌嗜みもやれば筆跡も見事中には易筮に巧みな者、禪理を悟つて居た者もありました。此の氣風も德川氏の末になつては、餘程衰へたやうで厶いますが、尙は勤王の志士を保護した者、外國人に袖を濡らさなかつた者もございました。

忽ちにして顯はれ忽ちにして隱くる幾多の婦人は有るがごとく無きがごとし。演じ去り演じ來る事柄、雲のごとく、風のごとし、髣髴として意味あるがごとくなきがごとし、捉へんと欲して捉ふべからず、實に不思議なるこの會合、奇異なるこの演說、聞くに夢とも幻ともわきまへ難き樣なりける。

◎母の第一の務は子に敎ゆべき所を深く學ぶに在り。

◎衣食に盡くす十分の一を家庭敎育に盡くさば、人は皆完全なる者とならむ。

◎子供は成長するも、母の心を水平以上に伸るものにあらず。

◎自ら手本を示して行はざれば、家庭を治むること能はず。

◎聽從は婦人の裝飾。

◎婦人は男子の供給する材料を以て人生を組立るものなり。

◎親は財產を授くれども、賢婦人は唯天之を授く。

家政上手

あまり多くの費用をも掛けず、舊來の習慣をも破壊せずして、よく家庭組織の改良を企てられし佐々夫人は現今十八歳を頭らにして男子六人、女子二人都合八人の子福者なるが、斯く多勢の子供を唯一人の下女の手助にて完全に養育し行かるゝは全く多年の經驗による事にて、苦心惨憺の經驗が生み出したる妙工風の結果にある事ならん、今其の二三を記して多勢小供を持てる家庭のしをりともなさんか。

△小兒の衣服＝＝家庭生活の上にて母親が尤も苦辛惨憺するは小兒の衣服なり、春夏秋冬、季節〳〵に脱ぎかへ、仕立てかへの手數は中々のものにて三人あれば上衣だけにても十二枚の手數なり、其上冬物になれば、袷、綿入の面倒あり、裾は切れ易く、袖は汚れ易く、其都度洗ひ張りの面倒に至つては如何なる家にても困る事なるが、此の面倒と費用を考へられしか佐々家にては家族の衣服は悉く單衣ばかりを用ひ、如何なる嚴寒の時とても綿入等は一切着用せしめず、春夏秋冬と季候の變るに隨ひて單衣を一枚着ると數枚を重ねるの掛外しを爲すのみ、蓋し綿入等を着する時は洗濯に不便なる處より假令垢付きても其期間丈は其儘捨てゝ置くが常なれども單衣の重衣なる時は洗濯に便利なるのみならず、洗ひ張の面倒なくして經濟上大いに得なりといふ、尤も古來綿入を着たる習慣ある日本人に單衣の重れ着は寒さに堪へ難しとあれば舶來若くは和製のネルを着ればよし、汚れゝば直ぐに水に浸けてよし、解きて洗ふの面倒なしとぞ。

△寢具と洗濯＝＝蒲團は自由に綿を拔き挿しのなるやうにし例へば寒氣加はる毎に綿一枚を挿し加へ蒲團皮は何時にても洗濯なし得らるゝ樣にし敷布團の如きは彈力のあるやうに藁の外に棕梠の毛を容れて身體と腦の爲を謀り、洗濯も又極めて簡便なる方法を取り洗濯物を灰汁の中に浸し置きて自然に油垢を去りたる後、徐々と振り出すのみなれば質を損する憂なしと又普通の裁縫は時間を要する事大なれば衣服はすべて夫人自からミシンにて縫ひあげ裁縫の時間を省く事多しと。

△物品の整理＝＝家族の多き家にては自然日用の物品多くなりて其の爲め手數を要する事大なるのみならず、其上物品排列の方法宜しきを得ざる時は徒らに出し入れに時間を費し其上器物を損する事あり家政上大に注意すべき事なるが、佐々家に於ては此の邊の注意尤も行屆きて各室内に於ける器物の排列其宜しきを得て搜すに時間の取れざるのみならず、精神上に與ふる教訓も又著しきものなりといふ、同家にては夜具布團の如きも決して上より積み重ぬるごとき事をせず必ず一枚一枚に並べ置き入用の時上の物をひつくり返して出すなどの不都合なしとぞ。



東京

博覽會名物競べ

蝸象子

▲第一會場のいろ〳〵▼

博覽會には隨分名物とも見るべきもの多けれども、これを一々書いつけんには、一冊の書となすも、尚足らじとこそ。こゝには我が觀たるまゝ、さては其中の主だちたるを列べ見るべきか、されば先づ第一會場より云はゞ、正門内正宗の大罎塔を始め、記すべきもの澤あらん。

▲貴顯紳士のお寫眞▼

守衞の『脫帽々』とあるに、不圖見れば金襴の幕絞りかけ、中には、皇太子殿下、同妃殿下、皇孫殿下を初め奉り、陸海軍大臣、伊藤侯爵、桂大將などゝ拜しもて行くまゝに、何事ぞや、一列に元祿風俗の藝妓風情、これはまた興醒むる心地ぞすなる。

▲黴毒皮膚病の標本▼

見るだも心地惡しく、氣の弱きわれ等の悚とするばかりなるも、恐きものは見たきの倣ひ、いつとても人だかりせるは此處なり腕に瘇物の吹出でたる、頭髮の脫落ちて氣味惡き、さては女の眼の飛出でゝ、累を今に見る模型、蠟細工の巧みなれば、人は眞個のものとや見るべき。夢になおそはれ給ひぞよ、されども今の淫靡な世の好き鑑にこそ、誰かは恐れを抱かざらん、有繫によき誡めなり。

▲七寶の花瓶▼

まづ高貴なるものにこの出品あり、京橋は安藤重壽氏出品の名古屋產七寶花瓶は、高さ三尺、價三千圓と云ふがあり、其他二十八對いつれも五百圓を下らず、美はしきものゝ一つならん。こゝにも人の多く集る、象牙の箸に魂消たる昔人に見せたらば、何と云ふべき。

▲博物標本社の出品▼

教育器械の間に在りて異彩を放つはこれなり。豹、孔雀、蜂雀、大蛇、大鷲、何でそれ威風堂々たるやと云ひもしたし、珍らしければ人立ちして、こゝもまた大入叶、名物の一つとやせん。

▲釜七本店の大釜▼

その價八圓二十五錢とは廉ならずや、五右衛門を煮たりと見ゆる大釜一つ、三斗の米も炊ぎ得べし。神代杉の手桶十五圓、二つながら目につくべし。二號館には、さまで大なる出品なきも、出口に近く盆景あり、海岸に松魚船の寄りたる景色、岩も蛙も松魚節とは氣が利きたり。

▲陸海軍出品と東京市模型▼

第四號館は云ふまでもなく、陸海軍の出品と、東京市役所の出品とを納めたるが、其中の名物とすべきは、

▲一時間三萬六千發を發する機關砲▼

これに探海燈、彈丸、秤量機、十二吋彈丸、露式十五吋魚形水雷など東京市出品中には、

▲東京全市模型▼

高村光雲、山本瑞雲兩氏が、東京全市を二十五に分割し、細密なる地圖を畫き、重なる建物を取つけたるもの、宮城内の芝生、外濠石垣、千代田文庫、二重橋等眞に一目の内に集め見たらん如く、市街十萬八千戸、寸馬豆人の俤、いと芽出度き出品なり。

▲松屋、白木の人形▼

は三號館にあり、松屋の人形は世界共通とあん。支那人あり、印度人あり、西洋人ありいづれも日本服を纏ひて得意なる態、日本服の世界共通とは、抱負の程も思はれていと懐かし。白木屋のは其人形よりは生きたる美人に衆目を引きしが、相對して三號館の人だかり、日曜大祭には沈着きて見るべくもなし。三越のは元祿模樣觀花の場の小袖幕もかくやとばかり。

▲伊勢丹の鏡天井▼

いと好き思ひつきならずや。兩つの棚に跨かれる天井に鏡を張れば、下を通ふ人の思はずも、己が影に仰ぎ見て、思はずも莞爾まるゝにこそ。これをや三號館廣告意匠の秀逸とや云ふべけれ。

▲青銅の五重塔▼

三河島の薬駄師喜樂園の出品とぞ云ふなる。青銅の五重塔、高さ二丈、重量七百五十餘貫價格八千五百圓とは、思ひ切りし出品なり。ところは美術館の裏手に當り、草木岩石の取り合せ、凡て東海道二川と鷲津との間なる、龜見山の窟觀音を、汽車中より眺めたる景色を模したるものとぞ。隣りに開く鹽瀬菓舗はさながら濱名湖の漁家とも見るべし、据附の入費千二百圓を要したりとは、眞個に左もあし。

▲建國剏業の畵▼

これで美術館内に評判の畵とこそ、筆者は中村不折氏の、有繁に面白き意匠ながら、知らぬ人々は何と見るべき、恐らくはこれ男女混浴の態とや云はん、いかに建國のさまとは云へ、これを若し日本とせば、裸體にてはなかりしならん、この説とるに足らじとそるも、兎ても、角ても美術館内の大作と云ふべし。

▲展望觀覽車▼

山中何の水車でと疑ふばかり、展望觀覽車は模型日本橋を渡りて左の方、雲を摩す大車輪は空に架りて、こ廻轉じつゝあり、これで博覽會第一の呼物たる、高さは七十尺に足らじとするも、地高ければ、海拔三百尺に餘りぬべし。乘りて其頂きに至らんか、東京全市は一眸の中に落ちて、寸馬豆人、輕氣球より瞰るが如けん。若し夫れ空中を廻轉して、徐々に昇り、徐々に降るの興、誰か快哉を叫ばるべき。

▲汽車の食堂▼

東海道は沼津あたりの停車場を其儘に、模造の客車を据えて、こゝに鯛飯を召し給へと汽車賣りの趣き捨て難し。汽車の窓より顔差出して、こゝへも一つの注文、宛然汽車に乘つて東海道を奔るが如し、それよりも倘便利なるは折詰の手輕なれば、混雜の中を、客はさまでに待たずとも、箸を採り得べく、これで賣店中の名趣向とや云はん。

▲自轉車の人形▼

さてまた第二會場にあつてる、先づ外國館内にある自轉車乘の人形にて、二人の男が自轉車へ打跨りつ、

大なる圓を描きて、くる〳〵と廻轉し居るさま、人形とは見えず、好く出來たり。

▲大蒸氣罐▼

長さ二十八呎、表面七呎半の大蒸氣罐はまた同じく第二會塲なる平尾大阪鐵工所の間にあり。神戸トーマス、ケルショウ商會のトムソン大氣罐とぞ云ふなる、目覺しきものゝ一つなり。

▲イルミチーション▼

各會塲のイルミチーション！これぞ夜の名物ならんか、美くしき眺めは人の足を引きて、夜の博覽會を見んとする都人の、日曜大祭を池畔に集ふも多しとか、されど其尤も美はしきは第二會塲なる機械館の飾燈とすべし。水に映れるさま龍宮もかくやとばかり！

▲山形屋（日本橋區長谷川町）琴三味線等日本樂器及淸樂器をも製造す。

▲幼々堂（京橋區東仲町）琵琶の製作を以て、其名著はる。

▲鶴川（同區和泉町）琴の製作を以て有名なり。

▲菊屋（日本橋區萬町）三味線の製作に於て有名なり。

▲重元　山田流に用ひらるゝ菖蒲形の琴は、初代平八の考案に成り、爾來此種の琴製作を以て、名高し、また胡弓三味線をも製す。

▲西洋樂器共益商社（京橋竹川町）

▲十字屋（銀座三丁目）

▲蓄音器三光堂（同一丁目）

▲古梅園（通一丁目）南都古梅園の分店なるが、文人墨客の愛顧を受け、其の製墨は古來有名なり。

▲高木法古齋（通旅籠町）高木水雄の名は、山間僻陬の地にもきこゆ、祖先は三河の人、元祿年間江戸に出で、文房具販賣を營めり。

▲鳩居堂（銀座）京都鳩居堂の支店にして、文房具の外に各種の薫香類を販賣す。

▲正心堂　湯島天神女坂下に在り。讀書水筆等の細筆製作に妙を得たり。

▲榛原（通一丁目）當店は色紙、短册、團扇紙、書畫帖、雁皮紙、書翰箋、團扇等を販賣す、また當店の團扇は、高尙優美にして、江湖の賞讃を博す。

▲金花堂（通四丁目）當店も亦雁皮紙製品を以て、江戸時代より名聲を博す。また色紙短册にても有名なるが、殊に扇子は最も誇る所なりと。

▲文雅堂（京橋區南傳馬町）色紙短册古雅なるものを製し、雅客騷人の間に名聲を博す。

天意人言

◎人老て愈々賢とならざれば、愈々愚となる。

◎良教育は遺産に優る。

◎風を蒔く者は嵐を收む。〔小亂を起す者は大亂の犠牲となるの意〕

◎牡鷄の前には牝鷄時夜をつくらず。

◎口に苦きものは、心に甘し

◎默する時は諾せりと思はる。併し多くは不承諾を含む。

◎友に富める者こそ眞の富者なれ。

◎富貴は人の自ら作る所、貧賤の人の自ら招く所。

◎人各々其の事業の子なり。

◎人皆其の樂しとする所に樂しみを認む。

◎人皆自ら友と言ふ、然れども之を信ずる者は尠なり。

他山の石

何故妙齢女子は結婚を好まざる乎

前田美根子

▲佛京巴里最近發刊の某女學雜誌にポール、ノレーなる一記者ありて、物好にも歐洲諸國就中佛國巴里あたりの妙齢女子にして多く結婚を好まざる者あるは何故なるかを女子に就て一々研究したる記事を掲載せり、同誌には尙他の方面より「何故男子の娶らざる婦人ある乎」を研究しつゝあれども、今茲には女子側の理屈をのみ紹介するに止めん。

▲甲女あり、結婚を申込みたる男子、幾十人ありたりと云へば、餘程の美人なりと知る可し、然るに此美人今仍結婚せずして幾多の才子を惱殺せしめつゝある所以を叩けば、大膽にも男子を睥睨したる理由を吐て曰く「私の婚姻しません理由は二つあります、其の一は私は天賦の至寶とも云ふべき自由を有つて居りますが、其の貴き自由は婚姻と兩立が甚だ六ヶ敷う御座ります、男子と云ふものは中々氣儘勝手な者で『自由尊重の第一義は人の自由を妨げざるに在り』と云ふ原則を滅茶々々に破壞するものでありますから、一たび此の如き我儘者と結婚して最後、萬事休すと覺悟を定めな

◎人各々其の眼鏡を異にす。
◎正しき愛は己より始まる。
◎活ける犬は死せる獅子に優る。
◎禁じられた菓實は食たし。
◎天は其の愛兒を鞭つ。
◎交る友を見て其人を知る。
◎義務を竭せば利益自ら生ず。
◎汚れた着物は之を家に洗濯せよ〔家庭内の不和などは之を公にすべからずの意〕
◎色味に就ては論ずる勿れ。〔人各々嗜好を異にするが故なり〕
◎袋の内の猫を買ふ勿れ。〔品質の知らぬ商品を買ふ勿れの意〕
◎外見を見て人を判斷する勿れ。
◎祝祭日は毎日あらず。〔人生苦なき能はずの意〕
◎刺芒なき薔薇はなし。〔苦なき樂なしの意〕
◎給仕の眼には英雄なし。
◎僞友よりも明鏡はなし。〔人は其の久しく交る友るによりて其の心事悉く顯はるゝ故なり〕
◎借金に友となり、返金に仇とな

ければなりません、故に私は第一自由擁護の爲に結婚致しません、次に第二の理由を有體に申しますれば、今日の青年男子、ハイカラ紳士などの中には私の理想に適ふ者は一人もありません、我が理想に適はぬ者と結婚は出來ぬではありませぬか、我手を願ふには、（我を娶らんと欲すれば）、我心を收らなければ、（我氣に入らざれば）、駄目ですよ。」永い大分なお轉婆の議論。

▲乙女は之と全く性質を異にし、眞面目で實著で、芳紀も二十八と云へば、既に婚期を一昔も過ぎ去りたるものなれども、如何なる故にや世間の青年之を娶らんと欲する者多きは、多分其の氣質の落着きたる爲にやあらん、然れども此の婦人も亦非婚主義を把持せり、其の理由はと云へば、「私は獨身で幸福に暮して居りますから、婚姻する必要を認めません、御覽の通り、私は家に居れば安樂世界であります、何を苦んでか他の仕合を慾張りませうか、實は私には三人の姉妹があります、皆んな縁付て居りますが、其等の婚姻生活と私の獨身生活とを比べて見ますると、私の方が餘程幸福であると思ふて居ります、私の妹などは奴隷の境遇にありとコボシて居りますよ、私がお婆さんになると可哀想だと云ふ人もありますが、其時は又其時で、今は此方がいつそ氣兼がなくて仕合です。」これは氣樂三昧の非婚主義。

る。
◎事局かわれば意見も變る。
◎慾張爺に放蕩息子。
◎雨後には乾度好天氣。
◎不仕合にも仕合はあり。
◎馬鹿には馬鹿の賞贊者あり。
◎困難の場合に眞の友を知る。
◎危險に際して眞勇顯はる。
◎長途の旅には輕荷も重し。
◎笑に因て人の賢愚を知る。
◎王公には言寡し。
◎盲者の世界には眇者王たり。
◎各頭各見。〔十人十色の意見と云ふ意味〕
◎籠の鳥たらんより野の鳥となれ
◎折れんよりは曲れよ。
◎絶つは節するより易し。〔就中酒煙草などに就きて〕
◎美しき籠は鳥を養はず。
◎肉は肉を養ふ。〔肉類は最も滋養あるの意〕
◎批評は易く、術は難し。
◎不安心は安心の母なり。

▲丙女あり、今仍獨身主義を守れり、その理由を述べて曰く「世間では大分理想の婦人、理想の婦人と云つて騷いで居る青年の方々がありまして、萬事備つた婦人を要求して居りますが、婦人の方でも亦男子に要求する點があります、私は我が未來の良人たらん者は、我が境遇にも充分目を掛けて、先づ第一私を安樂に暮させなければならぬ事を要求する權利がありますが、處が私も二三人から結婚の申込を受けましたが、其の人達は成程自分獨りでは澤山でせうが、妻を娶り、頓て子供が出來れば甚だ險呑であります、今は兎も角、將來が甚だ案じられます、勿論私は榮曜三昧の暮を希望する譯ではありませぬが、一年に五百法位の生活で、自分が洗濯したり、煮焚するやうなことでは、餘り香ばしい事とは思ひません。」これは杞憂から出た獨身主義。

▲丁女あり、才色に於て缺くる所多きも、資產に於て優に之を償へり、是を以て天下の青年中には隨分と之に目を屬する者多し、然れども此の女性も尚孤獨を守れり、其の理由を述べて曰く「私は人達が私を娶いたいと申しますが、果して私を娶いたいのですが、將又私の嫁資を娶いたいのでせうかを考へて見ると、何んだか婚姻が恐くて堪りません、御覽の通り、私は美人でもなければ才媛でもなく、財產を除くの外何んの取得がありませんから、とても男が私のことを心配して呉れる筈はありません、して

◎萬人の友は何人の友にもあらず

◎利益の友は屋上の燕なり。

◎夜は意見を齎らす。

◎金は最良の旅行劵なり。

◎虚榮は嘘の母なり。

◎希望は生命の杖なり

◎服は智者となさず、髯は學者となさず。

◎人は希望に生き後に紀念に生く

◎眼を去れば、心を去る。

◎怠惰は萬惡の母なり。

◎人は夕日よりも旭日を拜す。〔權勢の落ちかゝるときよりも權勢の盛ならんとするときに阿諛者多きが故に斯言ふ〕

◎飲みたる者は飲まん。〔人には矯正し得べからざる惡習なるが故に斯く言ふ〕

◎利己者に友なし。

◎自惚者は人に嫌はる。

◎目的を望む者は手段を望む。

◎女には秘密ほど重き荷物なし。〔夫婦の間に然り〕

見ますと矢張私の身が欲いのでなく、私の嫁資が欲いのに決定つて居ります、然し私から見ますれば金の爲に娶られんよりは、寧ろ一生老孃として暮した方が貧か優だと思ひます。』これは御尤の議論、財產との結婚は財產盡くれば緣も盡くるなり。

▲尙如上の外に二人の妙齡女子あり、一人は極めて敎育ある婦人なるが、其の未だ結婚せざる理由如何と問へば、『私は疾から結婚したいとは思つて居りますが、偖愈結婚しやうと云ふ段に至るまでの運びが附かぬのは、さう云つては失禮かは存じませんが、どうも適當な男子即ち私の尊敬するに足り且つ私が依賴するに足るだけの男子には未だ一人にも逢ひませんからです、私の知つて居る男の方々の中には、或者は身體虛弱で、或者は無能無識で、或者は意氣地なしで、或者は無粹で、どうしても一生苦樂を共にして行くべき人とは思はれません。』鄭寧なる言の裡にも鋒芒見へて當る可からず。

▲最後に他の一人の女子は一見可もなく不可もなしと云ふが如き婦人なり、其の今以て結婚せざる理由何くに在るかと問へば、單に答て曰く『私の結婚しませんのは、何も外に深い理由ある譯ではありません、唯母親がどうも之を承知しませんから仕方がありません、母は『親の生んだ者は親の勝手』だと云ふやうな舊思想を抱て居りますから、現在其の娘になつて

◎涙より乾き易きものはなし。

◎若し青年にして知つたならば、老人にして叶つたならば。〔青年には經驗なく、老人には氣力ない故に斯く言ふ〕

◎金曜日に笑ふ者は、日曜日に泣かん。〔人生哀樂の忽ち變るを云ふ〕

◎夢は皆嘘

◎輝く者皆黄金にあらず。

◎猫の居ぬ間に、鼠踊る。

◎良酒に商標なし。

◎今日は今日、明日は明日。

◎金の重荷は重からず。

◎遣るものは遣れ賣るものは賣れ

◎鍛錬の結果鍛冶師と成る。

◎自助者に天助あり。〔先づ汝を助けよ、而る後天汝を助けむ〕

◎彌治馬は直に群る。

◎尻尾に毒あり。

◎不能事に責務なし。

◎驢馬の頭に石鹸。

◎仕合者に仕合。

居る私は何とも申しやうがありません、母親の意志は一生身を自分の側に於て手助にもし、慰藉にもしたいと云ふ了簡なのでありませう、故に若も私が老嬢にして死するやうなことがありますれば、―此は殆ど決定つた事と思ひますが―それは私の罪ではなく、母親の罪であります。」多少訴ふるが如く、怨むが如き節なきにしもあらざれども、亦大に氣の毒の點なきにしもあらず。

▲ア、是れ歐洲にて妙齡女子が結婚を好まず若くは結婚を躊躇して獨身生活を送りつゝある理由なり、知らず我國の妙齡女子か亦果して此の如き理由にて非婚主義―非婚主義には語弊ありとすれば―獨身主義を守れる者あるや否や。

◎米國家庭の一美風

内田公使夫人曰く米國では友人など來ても特別に招待せざる以上は矢張、一家族と同じ食卓へ就かせて食事をさせますから夫と客と話もすれば妻君が又相手に成り嬢も相手となると云ふ風で、妻君も嬢も社會の事柄が分つて來る、客を待遇する事夫を待遇する事が見たり聞たりで能く分ります、所が日本はどうかと云ふに全く反對で、來客でもあれば主人と客とが差し向ひ、それも家内の者が知らぬ客ならば未しもなれど、學友とか親戚とか云ふ人でも、妻君は食事する時給仕に出る位が關の山で、其他の談話になれば何も聞く事が出來ません、殊にお酒でも召上る客でもあつたら大變です、妻君は御飯もたべずに待つて居る仕末、斯う云ふ有樣ですから自然妻君は社會の事も知らず、客の待遇も知らないのです、遂には夫が家に歸つても慰安の道を與へぬなど〻云つて藝妓買する樣になるので、之れは妻君の罪ではない、日本の女だつて馬鹿ではありません、全く機會を與へない罪です、西洋の樣な方法を取つたならば全くよい事と考へます。

牡丹



飲料に就ての注意

△牛乳の滋養分＝牛乳は其百分中蛋白質四、脂肪三、五乳糖四、を含めるものなれば之を用ゆる時には十分許り煮て飲料とすべし。大人は大抵一日に三合以上を用ゐざれば滋養となすに足らず、而して之に珈琲、紅茶及緑茶、砂糖などよき程に交へ用ふれば、一層の美味を調ふ、牛乳を貯蔵するは一度十分に沸かして罎中に入れ、固栓をして冷水中に置き、時々水を替へるを良法とす、されど猶用ひんとする時はよく注意すべし。乳を験するに水々として雲の如きもの丶浮べるは腐敗せるものなり、又青色試験紙を入るゝに濃き赤色となるものは酸化せるものと知るべし。この紙は薬舗にて求むべし。又牛乳には姦商ありて水、泔水、砂糖水、ゴム糊、白色料などを混合することあれば注意すべし、のみならず又乳汁の上皮バタとするものを取りたるあとの物を鬻くことありその乳は永く貯へ置きても再び上皮を生ぜざるにて知るべし。

△麦湯と茶＝茶は少量を用ゆれば精神を爽快にし消化を助くるものなれば、身神を労したる時など之を用ゆれば心に爽快を覚ゆべし。されど多量を用ゆれば胃を害ひ、睡眠を妨ぐること甚たしく殊に濃茶は害多し又久しく浸し置きたる茶は有毒のものなれば決して飲むべからず、殊に炎暑の候など一夜越の煎茶を飲む時は多くは胃腸を傷ひ腹痛を催ふす事あり、總じて煎茶の陳くなりたるものは劇烈の毒となるものと知るべし。彼の茶人などの嗜む抹茶は多量に服用すべきものにあらず、次に経済上よりいはんに茶は常に最上品を用ゆべからず、一度之を用ひ来れば再び下等品は喫し難くなりて生活上左程の必要なきものに多錢を費やすの愚を見るべし。茶は河水及び井水の混合物なき軟水を撰び用ゆべし。如何に最良品にても水を撰はずして煎じ方の悪しき時は大に其の香味を損ふものなりよき茶はよく沸りたる湯を微温に冷して入るべし、茶腕にうつす時には少しも湯のあとに残らぬ様にしたむべし。然せざれば第二番の時に早く香味を失ふものなり。晩茶は殊によく焙じて用ゆれば香気を増すものなり。麦湯は大麦を殻ながら煎りて湯にてよく煮たるものをよしとす、其の効用、香味共に茶、珈琲に増りて滋養あるものなり。これに砂糖を和して用ゆれば、炎暑の候などには殊に茶に代へて飲用するによろし。

△珈琲と紅茶＝家庭に於て珈琲を用ふるに砂糖と牛乳とを和して用ゆべし、珈琲も又精神を爽かにするの効用少からずと雖も之を多量に用ゆる時は逆上する故に決してその量を過すべからず。殊に之等の品は多くは輸入品なれば國家経済上より強ひて用ひざるをよしとす。

又紅茶はその香味従来の茶に類して遙かに高尚なり、之も砂糖牛乳等を和して用ゆるをよしとす、紅茶は元清國製のもの著明なりしが、近来静岡地方にても製すとなり、

總ての液體は皆水より成りたるものなれば。飲料に用ゆべき水は最も能く其良否を験し、且つ是を清浄ならしむべし。

日用心得帖

金塗り額ぶち、鏡のふち等の光澤を失ひし時又は蠅糞等を磨き落す法。
玉ねぎを二に切り、切り目の方を以て靜かに金塗の處をなで、のち海綿を水に浸たし、叮嚀に拭ふべし。

室内或は家具　ペンキにて塗りし油の臭氣を減せしむる法。
盥に水を注ぎ、之れに乾草を入れて「ペンキ」にて塗りし室或は塗りものゝある室に置くべし。然らば水中に浸され居る乾草はかの臭氣を吸ふなり。

ゆで玉子を其儘に饗應等に用ゆるとき、若し其殼に不潔物が附着しあるは甚だ醜くし、之れを去るには。
古き布切れに酢を浸し、之を拭ふ時は難なく其を去るを得べし。

不潔なる罎の内部を洗ふには、
先づ馬鈴薯を些さき霰に切り、凡そ一握除り罎のうちに入れ水五勺計を注入し、堅くコロップをさし暫時其儘になし置き、後ち數十回之を振り、のち能々水にて洗ふべし。然る時は罎はもとの如く美しくなるなり。

硝子器物の不潔を除くには、
少量の鹽酸を水に交せ洗ふべし。

油類が衣服又は端ものにかゝり斑點を生せし時、若し之を拔き去らんとならば、
先づ油のつきし衣服の部分を一重にし、其斑點部の下に淸潔なる綿を布き、上に馬鈴薯葛粉を置き、暫く其儘になし置き、のち之を拭ひ去り又た前の如く馬鈴薯葛粉を置き、斯くて其斑點の除き去らるゝに至る迄持續くべし。

赤葡萄酒が白き衣服類にかゝりし時、この斑點を拔き去るには、
上等なる「アルコール」を以てすべし。併しこの法の効用を有するは唯た正眞葡萄酒に限るとと知るべし。

麥藁帽を洗濯するには、
少量の黃硫粉をふり之を橙々酢にてとき、些さ「ブラシ」にて帽にぬり付け、暫時すぎて水に浸たせし布切にて拭ひ去るべし。

東京自慢

三越と白木屋

東京御在住の御方々は無論の事、博覽會見物に地方からお上りの着道樂の夫人令孃方、自慢ぢやないが、東京で先づ三越、白木屋は相撲で申さば常陸に梅、日本橋を堺にして東西の兩大關、店飾から内部の裝飾設備に至るまで、負けず劣らぬ大店なり。

先づ召物と申して、この兩家へ御注文相なれば誰に後れを取りませうぞ、犬となるとも大店と申す諺あり同じ價段で同じ代物が得られるならば、この兩家へ御注文こそ然るべし……………

新橋からは北行の電車に召して京橋を渡り日本橋停留塲に近い右側に土藏作りの一棟はこれが白木屋、寛文二年の頃美濃の住人大村彦太郎が、今のところへ小間物店を出したのが初めとやらで、今では三越と相列んでの呉服店、賣出し當日の來客が平均毎年二萬を下らずと聞いてさへ、其の繁昌も思ひやられる、陳列塲も立派なれば、施備も完全して居る。子供の遊戯室、十五錢均一の食保痒いところへ手の屆く接待法は、一度同店を訪ふた人の必らず口にするところで、呉服店に押列んでは洋服店、入口から右がそれで、歐米の流行服も自由に得られる、この呉服店は昔から呉服の外に特殊の物を賣つて居る、それは小兒諸病に特効ありと云ふ奇應丸（一袋五錢から）濟書墨、山路の手拭、算盤染の三尺帶なども他店にはない賣物である、博覽會はまづ其一館を晝過ぎから悠々見物の事とすれば、朝のお化粧が濟み次第、先づはこの店へお立ちより、陳列塲で目を樂ませて、さて御晝飯は例の食保がありお鮨にても、お汁粉にても自由自在、お買物があれば屆けてくれる便宜もあれば、大きな包みを提げるに及ばず、直ぐに電車で上野へ向はれ、博覽會の御見物も滿更野暮に候はじ。

日本橋を眞直ぐに、室町から駿河町、こゝに折廻はして眼覺むるばかりの店飾り、櫻の頃には花がある、

藤の頭には藤がある、菊の頭には菊のいろ〳〵、落つるは瀧の帶美はしく、波に紅の縮緬眩ゆし、入口に先づ若い者、下足を預けて見て廻れば、陳列棚は總硝子何を選らうと思ひのまゝなり。樓上樓下の休憩室にはビスケツトは杉形に盛上げられ、美くしい給仕女のお茶召しませも、何處やらゆかしきところがあり、このまた接待のビスケツトが一日に五百斤、代價百圓餘とは嘘のやうだが嘘ではない、樓上の應接室から直ぐに庭とは思ひつき、瀟洒な茶室が建てられて、空中庵とは面白からずや、貴賓のこゝに茶を召せしも二度や三度でなしとこそ。此店でも目下食保の設計最中で、三越博覽會も開かれる、呉服の外に洋服は無論の事、日用品一式、化粧品、舶來品も備へてあつて、一切こゝで用は便じる、御注文とあらば年格好さへ申さるれば、嫁入道具は一切店員の計らひにて調達せらるゝ便宜もあり、また同店の流行と價格とを御覽したくば、同店發行の「時好」に詳しく書いてあり、送達には自働車の、丸に越字の目標有繫に拔目のない沙汰なり。

成程さう聞けば手輕だが、半襟一掛手拭一條の注文は出來まいと被仰る方々もあらんかなれども、三越、白木兩家ともに、そんな姑息な商賣は仕らず、十千萬兩を積んでのお客様も、手拭一條のお客様も、お客様に差別のあるべきやうなければ、何粗略に致しませう、只陳列場を見て下されても、それで兩店とも光榮とするところ、何の御遠慮に及びませう、それでもどうやら氣がさすと思召さば、先づ松屋など然るべし、同家は今川橋の橋詰にあつて、烏渡買好い店構へ、價格も廉いと申す事、半襟では赤暖簾、德海屋、襟治などが先づ有名、博覽會に近く松坂屋、呉服で古い店の一つ、大丸もまた御他聞に洩れぬ方、こゝは三越白木と異り、さまで廣告に意を注がねど、極つた顧客で滿足し、古風を其儘土藏造の近日陳列場を設けたれ、店飾りに華美を見せず、質素を本位として居るなり。

（梅生）

會席料理

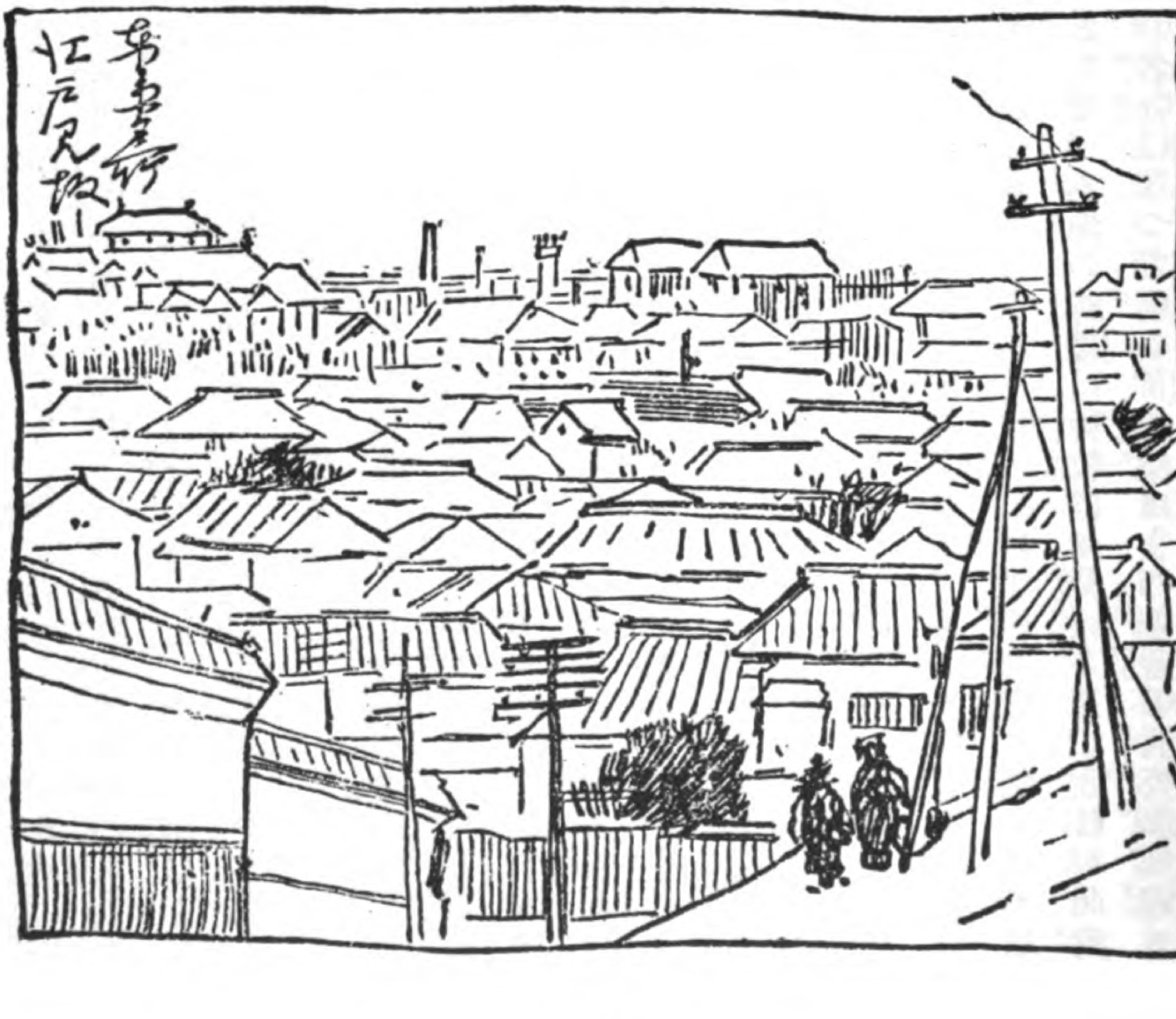
お手製の西洋料理も旦那樣のお好み、自分は臭ひを嗅ぐのも不好なのよ、と被仰る江戸前のお內儀は更にも云はず、鳥渡博覽會 見物旁々 東京の名物を食べて歸つて、話の土產にしやうとある方々に、食道樂の御案內を申上げるとする。

それで先づ會席の方から申さうならば、博覽會に近き常盤華壇がある、こゝは舊梅川樓の跡を股野幾造氏が引繼いだので、新聞には牛鳥などゝ云ふ廣告も見えたが、それは何かの間違ひで、會席を專らとし、大勢樣の宴席にも向けば、二人三人の淺酌にも適して居る場所は名にし負ふ櫻ヶ岡にあつて、三階樓に上れば、東京の半分は眼の下なり、冬は少々寒いか知らぬが、夏の涼しさいかばかり、本會席が先づ三圓、中酒が一圓五十錢との相場、先づは高い方ではない、これから山を南へ下りて松坂屋を左へ取ると伊豫紋と云ふ舊家こゝも會席專門で、本會席が先づ二圓、中酒が一圓五十錢と見れば大差がない、若夫れ鳥渡晝食となら、元黑門町に揚出しあり、廣小路の忍川、五條町のだるまで澤山なり。

日光を見ざれば結構を云はれぬやうに、東京で八百善の料理を召さねば、料理通とは申されまじ、同家は江戸時代から凡て抹茶の例式を追ふて居るので、今の主人は栗山善四郎と云ふ人、本會席で先づ三圓五十錢中酒で二圓五十錢と云ふ相場、營業時間は每日午前九時乃至午後七時で、每年夏は休業する、此處の料理の特色は、庖刀の冴へと料理の吟味に念の入るので、爼にせよ、庖刀にせよ、葱を切るのと、野菜を彫むと、肴を料ると、それ〴〵別になつて居る。要は只其移香を避けるので、葱を彫んだ爼で、直ぐに刺身を料つたら、其刺身は食べられたものでないとの注意である。家庭の料理もこゝまで進んで貰ひたし、一つテンピで西洋菓子を調進されたまではよかりしが、其跡でお晝の鰯を燒かれては堪つたものにあらぬなり。此他東京の會席には、連雀町の金淸樓、宮本町の開花樓、濱

町の花屋敷、岡田、新葭町の百尺、高砂町の福井樓、京橋の築地で有名の香雪軒、野田屋、竹川町で花月、烏森で湖月、芝公園で紅葉館、日影町で濱の屋、赤坂で八百勘、三河屋、牛込で吉熊、淺草平右衞門町に龜淸、本所で八百松、植半、柳島まで遠伸せば、そこに橋本と云ふやうなものであるが、いづれも似たり寄たり、花月、香雪軒などが烏渡一頭地を拔いて居るだけの事、紅葉館は會席と云ひ條烏渡風變りの一つなり。

こゝに同じ會席ながら、ぐつと風變りのそれがある星が岡茶寮と申しまして、麹町公園は老杉繁れる中にある。會席は先づ一人前が二圓五十錢以上と云ふ振込み、韻士淸遊のところとあつて、女中も綿服に立矢の字、お世辭一つ申さぬが一つの名物、設備は凡て茶道に據つて、菓子も料理も神さびたもの、開席時間は毎日午前九時から午後六時までとしてあるが、會員組織になつて居るので、一寸飮みに行くと云ふ譯には參らす、會員の紹介を得るの必要あり。それだけに高尙至極、こゝの料理も一度は味ふて、茶式料理のいかなる



ものかを見給ふも學問ならん。

食道樂

先づ東京で蒲燒を召しますれば、京橋は南島町に大國屋と申すがござりまする。同家は江戸時代からの舊家で、蒲燒は東京で有名なもの、御一人前一圓とあつて、大小御好み次第、新富町には御馴染の竹葉あり、尾張町に支店もござりまして、こゝも一人前一圓以上大串ならば二串で、座敷はちと陰氣だが、本店には風呂の要意もござります。この他で屈指の店と云へば麻布で大和田、神田の神田川、淺草でやつ子などで、由來お鰻は御婦人向き、同じものを召食がるならこの邊のを召上れと切にお薦め申すなり。

牛鳥

牛食べるならば滋養をこそとの思召なら、牛には四谷の三河屋、土橋の黄川田、京橋の河井など先づ上等、鳥ならば日本橋新和泉町の菊水、これは料理一切鳥料理、曾て魚肉を用ゐぬ會席流で、料理五品で一圓半、鍋が二拾錢と云ふ相場、京橋の壽鶴亭も又此筋なり、此處では魚も使ふから、鳥のお嫌ひな方でも、煮肴なりお刺身なり自由に召食られる、此他下谷は元黒門町の鳥又、鳥八十、須田町新道の牡丹など手輕なところだ。お鮨では先づ蛇の目、大黒、柳などゝ種々あるが御婦人方の上つて食召らうと云ふやうなところも尠いから、これは略すとして、

蕎麥

ぞろりと長いお蕎麥なら、鳥渡御晝食の代りにならう、これにはまづ藪と更科とあつて、藪は堅く、更科はつるりと辷り、好き〱で、藪がいゝと仰せらるゝ方もあり、更科こそと御贔屓の御方もあれど、つゝくるめて、先づ藪と更科で東京の蕎麥はもつて居ると云つても好い位のもの、藪は神田の連雀町更科は麻布の長坂、藪は知らずこの長坂の更科では殆ど全市の注文を受けて居るので、配達車を驢馬に挽かせて、大方の需用に應じて居る、座敷も綺麗で種物は天麩羅ばかり、そのまた天麩羅が伊勢蝦に限られて居るので、不漁の時には種物はお生憎さま、これが此處の名物になつて居る。此他はまづ普通の蕎麥屋に過ぎぬが、各區に更科と藪そばと砂場とが入混つて居ると

云ふだけ、この中で池の端の蓮玉庵などは稍々風變りの一つと云つてよからう、博覧會からは池の端の賣店に添ふて橋を渡れば、池に面して二階建の一棟、鳥渡は蕎麥屋と譯り惡いが、蓮玉庵の名に訪よれば直ぐ知れる。

天麩羅

これまた東京の名物なり、京傳が名けたりや否やは知らず、兎ても角ても天麩羅の名は東京に起つたものと云ふ事は爭はれまい。其處で今の處天麩羅で名高いのは、日本橋堺町の三定本店、銀座で天金、芝で橋善に今庄など能く人に知られて居る。天金は數寄屋橋から尾張町へ出やうとする左側で、天金の目標高く掲げられ、千客萬來の繁昌は驚くばかり、天麩羅は芝蝦に貝柱がお定りで、能く〱蝦の拂底か貝柱の足りない時には他の魚類で間に合はす事もあるが蝦が全く無い時は直ぐに休業の札を懸ける、何分入口で揚げて、二階で食べるのであるから、油煙は朦々と立籠めて、上ると直ぐにムッとする丈けの難はあつても、御飯つき一人前三十五錢と云ふもので、御婦人のお晝食には極めてお手輕、橋善の方は新橋から南へ半町程、左側に間口二間ばかり、これが有名の橋善かと先づ驚かれる、座敷と云つても四疊半が二間ばかりついて居るのと、物干然とした狹い二階があるばかり(能く〱込めば奥の座敷を用ゐる)づらりと列んだ有様は五百羅漢に似たりけりで、天麩羅は並十二錢の上十六錢、それに刺身と云ふものが出來て、二つながら風味卓越!これは少し過褒に過ぎるが男ならば紳士も見える、女ならば淑女も來る、袢纒着と紳士と膝を交へ、夫人とお神さんと差向いに箸をとられる有様は頗る奇觀と申すべし。けれども天金に比べては品位に於て確かに二三等を讓るだらう、二つながら忙しいので女中のお粗末には恐れ入るばかり、天金は出前をするが、橋善は出前をしませぬ

後頭部を打ちつけて頭蓋骨を碎きたる患者醫士診察を受け乍ら「僕は隨分見識の惡い者でせう。」
醫士「何うして、何うして、骨が幾片にも碎けて、雪片の六花を見るやうで、誠に美事です。」

東京の芝居

東京の劇場は何時頃から出來だか、これが起源を訊ねれば、寛永の頃猿若勘三郎と云ふ者日本橋に歌舞伎を開き、次いで岡村長兵衛なる者山村座と云へるを京橋木挽町に起す。爾來年を閲する二百八十餘年、起きては倒れ、倒れては起き、今は市内に在存するもの十入座、寄の開場あり、夜興行あり。いづれをそれと定め難きが、先づ其中の主なるは、歌舞伎、明治、新富、本鄕、市村、東京等で歌伎舞座は帝國演藝場建設まで、其お身代りと云ふ振込み、東京第一の劇場と銘うつての大劇場、出方に洋服を着せたなどの噂もあつたれど、兎に角舞臺は一二流の俳優で固めて居るので、場代も高いが入もある、新富座はまた歴史に古く、明治三年の創立と傳へられ、明治になつてからも守田座となり、深野座となり都座となり、やがてまた固の新富座に返つて、こゝもまた一二流の俳優で固め、いつも相應の入を占めて居る。明治座は左團次が根據地とし、高尚流の結構、遣口が派出なので入がある。初めは兩國廣小路に在つて、俗に「おでゝこ芝居」と稱されて居たものだが、道路取締の爲め取拂を命ぜられ、久松町で喜昇座と云ひ、こゝへ移つて千歳座となり、廿六年に今の建築、今の明治座になつたと云ふ。本鄕座は明治六年の創立で、初めは奧田座と稱し再三祝融の災に罹つたか、今の小屋は三十四年の新築。新派俳優の根據地で、高襟物を演ずるから男女學生の觀客が多いとの事。この他日本橋中洲の眞砂座、淺草千束町の宮戸座、同公園常盤座、本所緑町の壽座、神田三崎町の三崎座、溜池の演伎座、深川富岡門前の深川座、淺草の柳盛座、開盛座、國華座、四谷荒木町の桐座、大方は中流以下の俳優で固められて、歌舞伎、明治、新富などの芝居から觀るとズツと御格好に一日の興を貪る事が出來る。其處でまづ新舊兩俳優の主なるものを擧げて見ると、舊俳優の方には、市川で、八百藏、高麗藏、壽美藏、左團次、猿之助、小團次、女寅、尾上で梅幸、菊五郎、榮三郎、松助、中村芝翫、時藏、吉右衛門、澤村源之助、同訥升、同宗之助、中村羽左工門、女俳優には市川九女八、同粂女、川上貞奴新俳優には伊井蓉峰、川上音次郎、高田實、中野信近、福井茂兵衛、藤澤淺二郎、兒島文衛、河合武雄、佐藤歳三、水野好美　鐵中の錚々たる者。これ等の新俳優はたま〳〵歌舞伎、明治の舞臺へ現はれる事があるが、まづは本鄕、眞砂、東京座などを根據地として開演する、そこで場代の一樣であるが、これは時と場合、出演俳優の等級によつても一定せぬが、大摑みにしたところ、歌舞伎、明治、新富等の大劇場は桟敷七八圓、小劇場は三圓位が相場である。だから大劇場の土間で、極切詰めた勘定が一人先づ三圓、小劇場なら其半分と云ふもので、大劇場を一度觀るか、小劇場を二度觀るかと云ふ釣合になる。そこで芝居は一日をこれに潰さればならぬ。何か短かい時間で面白い事はあるまいかとの山訊れ、それには寄席といふのがござりまする、

劇と能狂言

木戸、場代　木戸、旗代等は出勤俳優の格によつて、高低あることは勿論だが、從來の例により大凡の定價表を記せば、左の如し。

▲歌舞伎座▼――三階棧敷一名二十五錢、上等棧敷一名一圓三十錢、上等高土間一名一圓十錢、正面棧敷一名一圓、上等平土間一名九十錢

▲明治座▼――上等棧敷一名八十錢、上等高土間一名六十錢、正面棧敷一名四十錢、大入場一名十錢

▲本鄕座▼――一等一名一圓半、二等同壹圓、三等六十錢、四等同三十錢。

各座の特長――歌舞伎座は團菊の名殘を留めて、主として舊劇のみを演じ、明治座は舊劇の外屢々時代世話の書卸しを演じ、本鄕座は所謂新派の根據地であつて、專ら文士の新作、飜案物を演じてゐる。その他舊劇では宮戸座の小團次、源之助、訥子、鬼丸等の一座、次に新派では新富座の伊井、河合一座等、眞砂座の水野の一座等、おの〳〵特長あつて面白く、三崎座の女俳優一座も亦華やかで一顧の價なきにあらず。

俳優――俳優には舊派の俳優と新派の俳優と二通りある。舊俳優は古來の歌舞伎の流を汲み、新俳優は元と壯士役者と云つたので、專ら事柄を寫實的に演ずるのである。

能樂――能樂は、由來觀世寶生、金春、金剛、喜多の五流に分かれてゐるが、當時最も盛んに行はれてゐるのは、觀世と寶生の二派である。そして觀世には觀世會、寶生には寶生倶樂部の設があつて、月々會員の稽古能、或は素謡等の催がある。

觀世會の舞臺は牛込區新小川町二丁目にあり、又寶生倶樂部の舞臺は神田區淡路町二丁目に設置されてゐる。この外別に一派を立てゝ家名を極めてゐるのは、淺草厩橋の梅若であつて、流儀は觀世であるが、宗元派、寶生派と鼎足の勢を示してゐる。なほ日本橋區濱町には、觀世流の名人瀧五郎の跡なる山階の舞臺があつて、例月能樂を催してゐる。

觀世流の得意は女物で、寶生九郎と梅若實とは斯道の名人と賞せらるゝほどあつて、何が得意と定め難いが、二人の藝風を評すれば、九郎は華やかであつて、故人菊五郎の如く、實は故人團十郎といつた風で、頗るの大器である。

見料――總じて見料は觀世月並三圓、別會五圓、寶生と梅若とは大差なく、月並二圓、別會三圓位。

遊樂の東京

麻軒生

彼岸前寒さも一夜二夜かな　路通

寒さの嚴しい中に、清い香を放つて、咲きほころびた蒲田、小向井、さては江東の梅の花も、彼岸へ入つて急に温暖になると、そよ吹く風にも、ちら〱と零れるやうに散りかける、梅が散つて了ふと、やがて櫻を待つ樂しさ、それも束の間、今迄のうそ寒い陰氣な世界は、彼岸を境に、がらり變はつて暖かい、陽氣な世界となる、最う斯うなると、吾妻が重くなり、肩掛が煩くなつて、一枚小袖の肌障りが心地よくなる。去る程に都は是より柳櫻をこきませて、色どり面白き花の世の中。

さて東京で、花見の場所と云へば、誰しも先づ上野に指を屈する。上野の次は向島を聯想する、それから飛鳥山、九段、扨は小金井を聯想するのである。

上野の櫻は、今から二百八十年前、寛永二年、かの東叡山の開基以來、將軍家に於て年々植え込んだものであるから、隨分老樹が多く、其れが花時になると一時に咲き出づるので、滿山櫻花を以て飾られ、其の美觀言ふ許りもないのである。

上野には彼岸も一重も八重もあるが、殊に此處の彼岸は東京中で一番早く、遲咲の梅にも魁けて開くから、一入賞觀さるゝのである、その中でも、清水堂の前にある二三本と、動物園の前の一二本とが、例年々々最も早く、彼岸の中日には、最うちらりほらり咲き初めるのである。すると『さあ、上野の彼岸が咲いた、咲いた。』といふ噂が東京市中にぱつと廣まつて、都の空はいよ〱陽氣になる許り、さあ、花が咲いたと聞いては、都の人の常とて、男も女も老も少きも、心はふか〱と浮き立つて來て、いはゆる猫も杓子も、身のほど〱に花見衣を引つかけて、花を觀に行くのやら、人を見に行くのやら、たゞ譯もなくだら〱と散歩の足を空にして、此園へ向つて來るのである。

清水堂の後ろに秋色櫻といふのがあつて、一株の碑



誰が石井の上にかゝつてゐる、是は其角の高弟秋色女が年十三の時「井の端の櫻危なし酒の醉」といふ句を下げたので、有名である。

上野の花盛は、大抵四月の五六日から十二三日の間であつて、觀處は先づ三枚橋から、山王臺を右に見て淸水堂の下を通り、眞直に竹の臺へ行かうとする處である。左手はずつと櫻の樹が並んでゐて、薄紅の雲が棚引いたやうになつてゐる。右手は一帶に綠濃き老樹その間々を、櫻の花が所得顔に彩つてゐる景色は、あでやかなものである。

竹の臺の正面には、博物館の方へ一文字にずらりと櫻を植え込んである、これが仲々の觀物であるが、今年は博覽會の第一號館が建てられたから、これは見えぬ、博覽會第一會場の中庭にかこひ込まれたのが其である。

また不忍池の辨天へ下りる石段の上に立つて、池を見越して、遙かに本郷の向ケ岡を望むと、家々の間、木々の間を點綴してゐる花が見えて、これも仲々捨て

難い眺めである。

淸水堂の前や、動物園の前、それから鶯谷の上などの櫻の花の下蔭には、赤い毛布を敷いた休憩臺が幾つも並んでゐて斷えず花見の客が、花を眺めながら休んでゐる。見ると櫻餅を食ひ〳〵顏を紅めて笑つてゐる島田の娘もある、麥酒のコップに櫻の花瓣が落ちたのを面白しと興じてゐる洋服の紳士もある、又た番茶を啜つてゐる梅干婆樣もある、お鮨の山葵が鼻を衝いて泣き相になつてゐるお垂髮もある、玩具のサーベルを揮つて大將だ大將だと言つてゐる腕白もある。一張羅の被布に茶を引くり返して心配相に手巾で拭き取つてゐる束髮の少女もある、これは〳〵とばかり一つ二つ唸りさうな、俳諧師の樣な骨董屋の樣な白髯の老人もある、安香水をプン〳〵させて、頭を狆の脊の樣に綺麗に分けてゐる番頭もある、御振舞酒に元氣をつけて髮の毛をしどけなくしてゐる主婦さんもゐる、乳が欲しいと泣く赤ン坊、パノラマを見たいといふ小僧、それは〳〵千種萬樣の人々が、此の花の下蔭に集まるのである。

今年は此の花の中に博覽會といふ大建物が出來たので、都の人士は言はずものこと、田舍の人の出ること夥しく、平年に比べて幾倍の賑ひか知れぬ、それで、花の雲の下は人の雲で、流石の上野も、花見と博覽館見物の人で以て溢れてゐる。だが、黃昏近くなつて來て、鐘の音が花にこもりて、ぼーんと響くやうになると、人は初めて浮かれ心から醒めて、夕陽を浴びつゝいそ〳〵と家路に向ふのである。

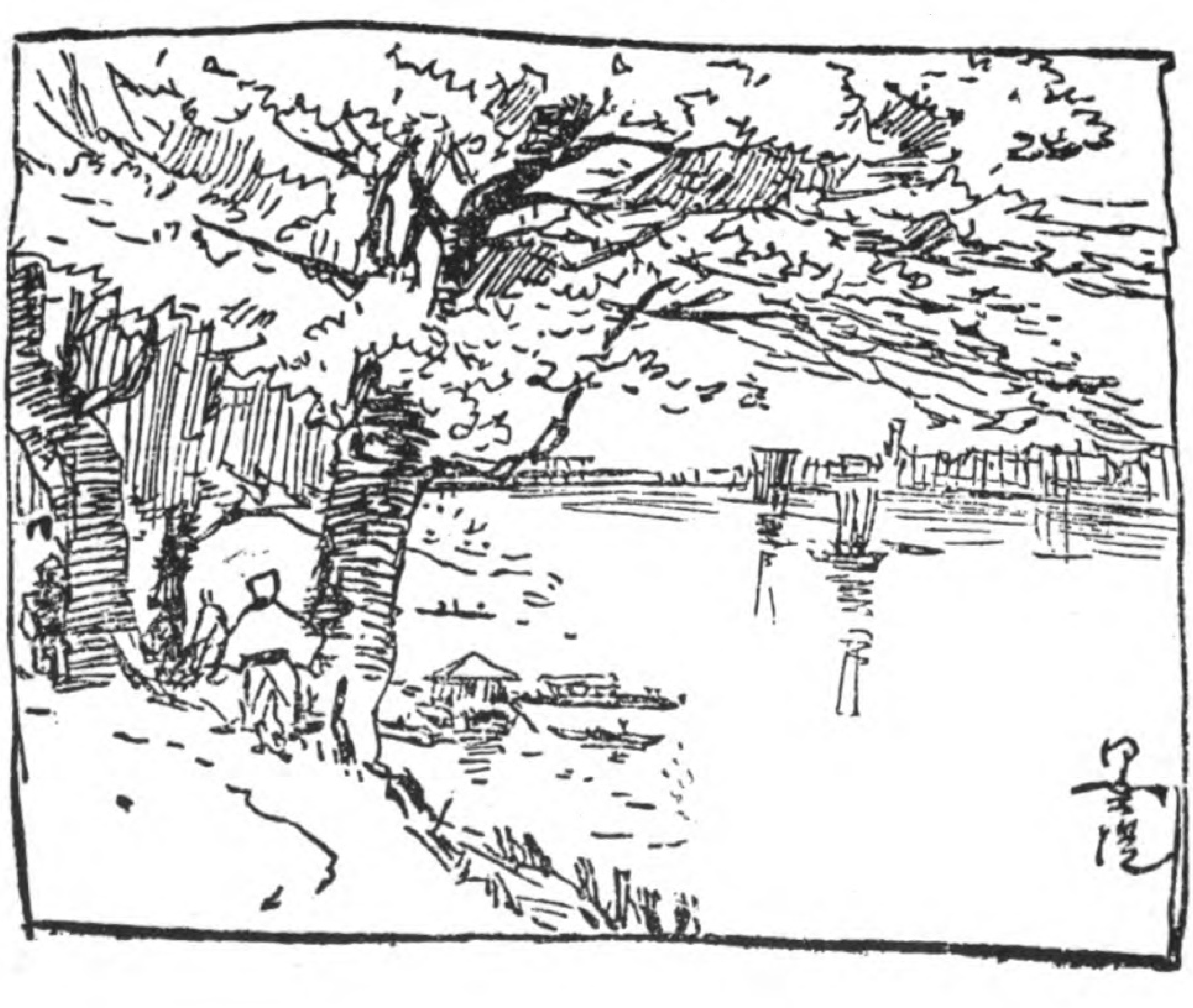
けれども、夕方から出掛けて來て、夜櫻を見に來る士女も少くない、華やかな大電燈の光に照らされる花の雲は、ぼんやり白く、まるで白雲が地に宿つたやう、その艶なる姿を見ては、誰も彼も恍惚として『おう、奇麗だ』『あゝ美いな』と、思はず感嘆の詞を發しないものはない。

春の夜は櫻に明けてしまひけり　　芭蕉

向島の花は、上野の花より四五日おくれて盛となるけれども向島を見て、それから上野を見たとて決して

遲くはない、まづ、大抵同じ頃に咲くのであるから、上野と向島とを一緒に見に行く人が多い。それに上野と向島との間には電車の連絡があるから、觀櫻の人には至極便利である。別けて向島の方は、大川に汽船の便があつて、花見の人を運んで呉れる。花の頃は電車も船も客が一杯で、大變な景氣である。

電車で來ると、まづ雷門で下りて、吾妻橋を渡り、そこで川上の方を眺むると、例の長い隅田堤は、長い長い花の雲を戴いて、その花の雲が又たうつすりと美しい影を水に流してゐる。そして此の花の雲の下蔭を花見客の密集部隊がゾロ〳〵と一續きに成つて動いてゐる。また河面に目を移せば、相變らず端艇競漕があると見えて、赤帽の人、青帽の人、白帽の人などが楫を揃へて漕いでゐるのが看える。なほ又た上る船、下る船、薪の船、炭の船、船のいろ〳〵が點々として往き交うてゐる樣も雅美てある。其より札幌麥酒會社の前を過ぎ、枕橋を夢と渡つて、いよ〳〵土手へ出ると、花の雲と思つたのは、櫻の並木で、土堤の兩側に並ん



東京名所寫生——墨陀堤

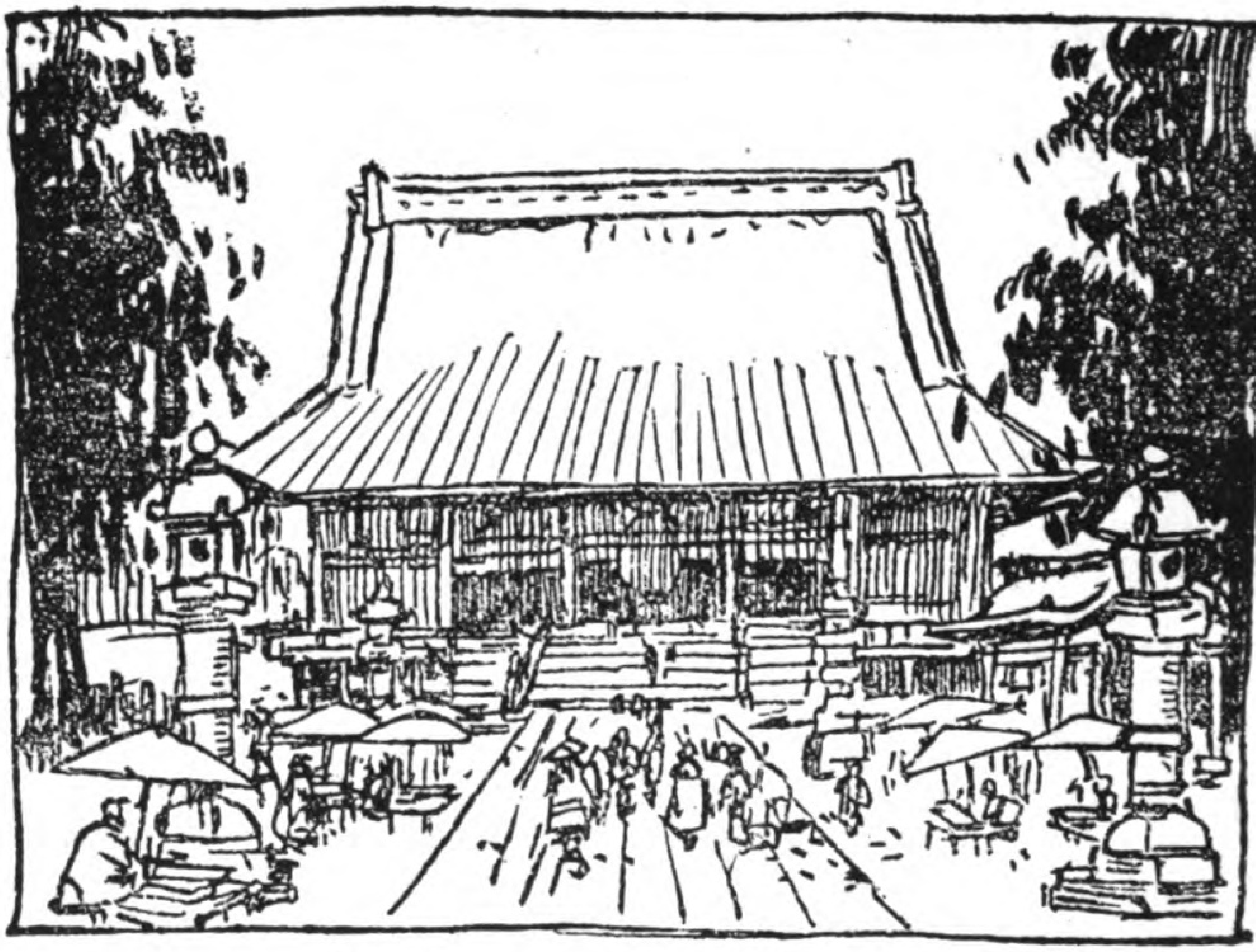
だ櫻は枝と枝と相交り、花と花と相接して、さながら花の隧道を形造り、どこまで行ても花又た花の美しい道が續いてゐるのである。

其角の句で名高い、夕立や田を三圍の祠を過ぎ、牛の御前近くなると、花は益々其美を加へ、人は彌が上に雜沓するのである、競漕が始まつたと見えて、合圖の銃聲が鳴ると、赤！青！白！と呼ぶ聲が頻りに聞える、堤上の人は之を見ようと、皆な立ち止つて川面を眺める。そこへ若い男と若い女との彼是三十人許りの花見連がやつて來て、皆な御揃ろひの花見手拭を擕さへ、女は姐さん冠りをかしく、男は向鉢卷威勢よく、中には酒樽を叩いて、足もしどろに醉うた〳〵と浮かれ調子で、群集の中を踊蹣き行くのもある。

こゝは上野とは違て、些か町離れてゐる故か、ボート、レースなどのある故か、至て陽氣で、それは〳〵賑やかなものだ、そこへ又彼方からも瓢簞酒を立ち飮みをして來る四十前後の商人體の男があつて、行き違ふ十七八の女學生風の婦人を捉へて、『姐さん、一杯獻上』と言へば、婦人は突と之を避けて人込の中へ這入つて行く。『どうも、今時の婦人は愛嬌が無さ過ぎる。』などゝ、縺れた調子で呟いて行くのもある。すると又た『さあ、一獻差上ませう。』『オヤ、ありがたい。』など、相互に獻しつ酬されつ、知るも知らぬも一緒になつて酒のみ交して、ぐでん〳〵に成つて行くのもある。そして此の四五年前までは、茶番式の異様異態な扮裝、たとへば手習草紙の鎧着た五郎時宗や、頭を剃つて向鉢卷の辨慶や、風呂敷の素袍を着た朝比奈、それから、帽子から足袋まで、半分赤くし半分白く裝うた剽輕もの、子供の赤いちやん〳〵こを着て、ピー〳〵と玩具の笛を吹いて來る道化た者が、必度六組や七組はあつたものだが、この頃は警察が馬鹿に喧しくなつたので、この種のものは頓と出なくなつた。

何せい、都下第一の雜沓を極める向島のことゝて、花時に酒や櫻餅を鬻ぐ掛茶屋の收入は大したもので、優に一年の糊口をつけるに足るとは又た盛んな譯である。別して繁昌を極めるのは言問團子で、花より團子、

囀りや山々はみな薄くもり　有岳



東京名所寫生――淺草觀音

汁粉の連中が何時も一杯に詰め込でゐる。それから長命寺の櫻餅、これも仲々賣行きが宜い。なほ喰べ物では鳥料理だの、鮨屋だの、ビーヤホール、一品料理、駄菓子屋など、いろんなものがある。そして何れも此れも繁昌することゝ云つては非常なもので、從うて殺風景極まることも隨分ある。殺風景といへば、彼の齒磨や中將湯などの廣告看板で、之が爲に何の位花の向島を傷つけてゐるか知れず、さぞや花神も泣いてござらうと思ふ、

だが此の賑ひは陸ばかりでなく、川の中も亦凄じい景氣である、屋根船又は傳馬船を艤した花見船が、彩旗を川風に翩飜と靡かせ、三味線や大鼓を亂調子に囃し立てゝ水神を驚かしてゐる。ラッパ節を唄ふもの、都々一を歌ふもの、それは〱賑やかなことである。かくて此等の連中は面白く花を賞して、酒を呷りつゝ快を叫ぶのである。

花は風かるく來て吹け酒の泡　嵐雪

竹屋の渡津は大繁昌で、大混雜を極るから、いつも

巡査が人を量つて、乘船せしめてゐるなどは、隨分御苦勞のことである。

上野から汽車に乘つて行けば、日暮里、田端を超えて、次は王子であるが、こゝで下車るとやがて飛鳥山汽車賃も二等で漸と十錢位である。

王子の停車場を出でゝ、鐵道の踏切を越すと、小さな川がある。これは秋の紅葉で名高い瀧の川の支流で、清冽な水がサラ〳〵と流れてゐる。ちよつと橋を渡つて、左手の小高い處は、即ち飛鳥山で、右手に折れて川に沿ふて行くと王子の權現はぢきである。

飛鳥山の公園は、南から北へと。至つて緩やかな勾配がついてゐて、地上は到る所、綠の芝生を以て敷き詰められてゐる。廣さ一萬四千坪ばかりの平坦なる山上の、あらゆる樹は悉く櫻で、紅くなつてゐる。その間々を靑い松の樹で點綴してゐるのである。で、この滑かな芝生の褥には、寢轉んで瓢簞酒を呑みながら、花を賞してゐる人も少くない、又た花の下へ赤毛布を敷いて、重詰を擴げてゐる連中もある。また、どこかの小學校の運動會もあるといつた樣な工合で、こゝもなか〳〵盛るのである、わけて此處は上野や向島と異つて、家からお辨當を持て來て、擴げるには至極適當の場所になつてゐる。

北へ登りつめた所には、ずらりと掛茶屋が出來てゐて、直ぐ下は王子の町になつてゐる、こゝへ來ると製藥會社の械機の音が聞えて感興を殺ぐのである。けれども、こゝは一望豁然として、遠く東に總房の連山、西に富士秩父、北に二荒、筑波を望み、近く葛飾の田野を瞰下し、微に隅田川に白帆の往き返うてゐるのを認めるなど、風景なか〳〵の壯大で、また佳絕である。

こゝは市からざつと一里餘しかないから、運動がてらに老人、子供などが步いて來るに左程遠くもなく、丁度宜い頃加減である。だから、一家擧つて行厨を携へ來つて、家庭運動會、家庭觀櫻會を催す連中が頗る多いやうである。そして黃昏になつても、花の木陰を去るを惜しみ飽かず遊び暮らしてゐるのである。

孤兒を捨つる思ひや花の山　嵐雪

藤の花



春の山水





春季休業 女學生の旅

若菜

これは東京に於ける某女學校の生徒たち、春季休業を利用して京阪地方へ旅行したる折の日記なり。

汽車の中（四月一日。快晴）

昨日、嬉しかりし卒業證書授與式も濟みて、待ち焦れし四月一日は遂に來りぬ、歐米の諸國にては女子も男子に劣らず、修學旅行の裝ひ勇ましく出で立つと兼てより羨ましく聞きゐたるが、今日ぞ此の西國の夢の華、嬉しくも移し植うるを得るなれど、少さき胸のそゞろに躍るを覺えき、午前九時半といふに新橋の停車場に行きぬ、一行は國子の君、淸子の君、捨小舟女史、百合子の君、監督がてら行き給へる百合子の君の御兄上一郎の君と、妾を加へて凡て六人なり。女ばかりならむには草枕、遠き旅寢のいかに心細くや覺ゆらむも、日ごろ妾たちを慈愛み給へる一郎の君の在すからは、縦や鬼棲む大江山の奧深く分け入るとも何どや恐れむと、勇み勇みて出で立つ、停車場まで送りにとて來給へる同じ學びの窓の友どちに惜しき名殘をのこして、汽笛一聲、列車は緩かに動きそめぬ。三等室の賑へるさまよ、妾達の一團は客室の眞中ほどの所に小さく圓欒すれば、前に後ろに、或は田舍ものらしき女づれの汗臭きが居れば、或は中折帽子に煙草燻らしながら、古びたる背廣の洋服着て、三十未だ家をなさぬとや云はまほしき、浮世の鹹らき皺波額は深く刻まれたるがあり。男、女、若き、老ひたる、さま〴〵の裝ひして、客室の光景は、やがて社會を縮寫せるに似たる。品川の沖津邊に眞帆片帆宛ら鷗の浮ぶが如く漂ひて、晴れやかなる空の、心地すが〳〵しや。世は春ばかりならむには、富貴貧賤の差別も無くて、同じ樂しみ、同じ喜ばしさは、金殿玉樓中の貴人も、一葉に掉す漁人

も異なることのあらめやは。

大森、蒲田を過ぐれば、滊車は暫時青海原と袖を別ち、萬頃に連る梨畑の眞中をひた走りに駛りゆきぬ。東京を離れてより僅かに一時あまりにて早くも四邊の景色は頓に田舍びたり。右手の方には低き小山の立ち添ひて、その裳裾に小さき祠、石くれの地藏尊なんどの立たせ給ふも可笑しや。滊車路に添へる茅葺屋根に菖蒲に似たる怪しき草の葺と植ゑたるなぞ、南洋の風俗畵を見るが如くなるも可笑しや。

横濱には寄らで過ぎゆき、軈て相摸路に入れば初めの程こそ武藏路と同じやうなれ、大船、藤澤と過ぐるほどに、誰れやらが云ひけむ『松多き相摸路』の風景は目のあたり顯れ來たりぬ。小さき小松林の群立を越して、相模の海の水碧なるを眺むることそ實に絶なれや。國府津より沼津までは再び洋々たる青海原と暫時別れて、足柄の山間を驀然に駛りぬ。山北小山間の扨ても風景うつくしきことよ。足柄の山脈相重疊したる間を滊車の軌道はつとめて平かなる所を通るなれど、尙ほ幾個となく山の麓を切開き、トンネルを出入する事數を知らず。トンネルとトンネルとの間には鐵橋架て、橋の下には溪河の流れ巖に激して宛ら白布を洒すが如しと思へば、忽ち碧なす淵を湛へて嶮しき山の姿の倒まに影を映すなぞ、得も云はれぬ美しき溪河の右に左に屈曲して流るゝさま、妾等を載せたる此の滊車と、自然の絶佳景を浮べし此の溪流と、相抱き、相離れ、暫時は足柄の山裾を舞臺として舞踏をするに似たり。

小山を過ぐるほどに滊車の進行漸く緩かになりたれば、首差のばして顧みるに、滊罐車は二個附きて、一個は前に、一個は後邊より押して、富士の裾野の高原に向ひて徐ろに登りゆくなり。暫時ありて列車は止りぬ。『御殿塲、々々々ー』と驛夫の聲に不圖見渡せば、右手遙かに、白雪を頂く富士の姿の神々しき哉。折から御空の氣色少しく曇りて、甲斐路、駿河路の山々峰々は、霞に裹まれながら波のやうにぞ漂へる中を、一きは麗はしく秀で給ふ富士子姫の、御顏恥かしとや、うすき薄絹ひきかづき給へる御姿は、昔も今も變りな

く、雄々しくも又麗はしき哉。此の富士子姫、又の御名は木花咲耶姫とぞのたまいて、日本一の靈山は男の神にはあらで、いとも優しき女神なりとは知り給はずや。何處の深山にも祭れる山の神とし云へば、大概大山祇の神とて荒くれたる山男のやうなるが多きに、此等の山神を支配し給ふは眉目麗はしき女神なる事、天照皇太神のその昔より變る事なきをば知り給はずや。

御殿塲よりは美しき女神の御姿を横に拜みながら一瀉千里の勢ひにて沼津まで下りぬ。沼津より靜岡までは、右手と左手に折々富士の嶺と青海原と見え隱れしつゝ、富士川の鐵橋を渡りて、興津の濱邊に岸打つ白浪の飽かぬ眺望をながめしも暫時、やがて三保の松原を通るほどに、幾千代かけてぞ緑なる松の葉ごしに春の海の長閑なるを眺むれば、氣も心も夢路を彷徨へるが如く、彼の天女が天の羽衣を置き忘れしたるも實に道理なりとぞ覺えし

靜岡より濱松までは、燒津、藤枝島田などゝ昔床しき驛の名はあれど是れぞと思ふ勝れて美しき景色も無く、天龍川の鐵橋を越ゆる折しも、夕暮の色そこはかとなく迫りて、曇れる空の遠つ邊に、入る日のいとゞ夕燒して沈みゆくさま哀れに物悲しう、片岸に群立つ



女學生特種風俗

木立を横さまに照して、眩きばかり橙黄色に輝きぬ。
午後七時過ぎ、濱松へ着きけり。皆な〳〵汽車より下りて、停車場のほとりなる花屋と云旅館に宿りぬ。汽車の中にて面白かりし事のいとゞ多かれど、筆のゆきかひ拙きまゝ、心にも無く書きつけがたう、いと口惜しくて。(花屋にて胡蝶しるす)

濱名と琵琶(二日。雨降る)

今日の日記は妾のお役目ですつて…書けるかしら、書いて見ませう。

明日七時二十五分の汽車で立つのですから夙く起して下さい、と昨夜旅屋の女中に左様云つて置いたので、今朝六時半に起して呉れました。眠くつてもう少し寢かして下さいと云つたら、兄様に、置いてきぼりにして仕舞ふ、と云はれて辛と起きあがつて朝餐を濟まし、皆様と一緒に西行の汽車に乗りました。雨が微し降つてをります。

濱名の湖水はなんて佳い景色なんでせう、細い堤の上を汽車が通つて行くと、兩側は眞碧な水、緑色の松の樹、この松の林が湖水の中に島のやうになつて生へてゐるのです。松島の景色も恰度斯んな所だらうと思ひました。細い雨が降つてゐるので、松の緑は一入はつきりと濃く、漁船には苫が掛かつて居ります。妾は東海道第一の景色だと思ひました。

名古屋の黄金の鯱は、雨が降つてるお蔭で到頭見えず仕舞ひだつたのは殘念でした。名古屋には關西線が岐れてゐて、之は昔の東海道を通じてゐるのださうですが、官線は美濃路へ這入つて岐阜、大垣、それから近江の米原に着きました。此處でお辨當を喰べて、琵琶湖の東岸を繞て馬場で下りました。此の間は別に是れと云ふほどの景色の佳い處も無く、琵琶湖を見たつて迚も濱名の湖には及びません。如何しても東海道では濱名が第一等の景色です。けれど兄様は興津の海岸が一番景色が雄大で佳いて被仰るし、濟子様は山北小山間が恰度山水畫のやうで好いて被仰いました。馬場から坂本までは三里許り、腕車で行きました。

雨が降らなかつたら歩いて行くのでしたけれど、到頭詮方なしに腕車に乗つてしまひました、大津の街は琵琶湖に沿うた櫛形の街で江州第一の都會ださうですけれど、街の幅が狭くて、薄暗さうな家ばかり。田舍の腕車は乗つてゐて心持が悪う御座います。後ろの方に淺黄の旗だか手拭みたやうなものを靡かせて、ガタリビシリと腕車の輪を軋らせながら駈けてゆくのですもの、皆様は後で身體が痛くなつたと被仰いました。

併し、大津の街を外れて畑道へ出ると流石に湖畔の風景は得も云はれませぬ。湖水の岸邊には葦の葉が戦いでをり、田圃には麥が漸と三寸ばかり伸びて、雨雲がゆつたりと比叡山の峰に棚引いてをりました。あゝ明日は彼の嶺を越して叡山越をするのかと思ふと、何だか斯う恐ろしいやうな感じが致しました。

雨中の唐崎の松實に繪に見るやうな好い景色です。唐崎から坂本まではもう直きで、此村は比叡山の麓の淋しい村です。斯んな淋しい村に棲んで一生を暮して仕舞ふ人があるのかしらと思ひました。

比叡山の直ぐ麓に彼の有名な日吉神社の鳥居が花崗石で立つてをります。日吉神社と云へば歷史上八釜し



女學生特種風俗

い比叡山の山法師が何時も皇室に對して不平がある每に、日吉の神輿を舁ぎ出して京都へ暴れ込んだと云ふ其の神社では。今も其の昔の面影を殘して、鳥居から二三町も奥深く、其間は馬場になつてゐて石燈籠が疎らに並んでをります。神社の前を溪川がサラ〳〵と流れて、大きな石橋が三つ架かつてをります。此の石橋の上に佇んで遙かにこんもり茂つてる森を透して朱塗のお社を眺めたら、一種嚴かな感に打たれました。

この夜は三橋樓と云ふ旅屋に寢ました。枕の下には溪川の流れが吼めいてをり、折々ドッと吹き下す比叡颪に大きな森が魔物のやうな叫び聲を出してるので、昨日まで都にゐた妾たちは既う何時か深山の中の人となつて仕舞つたやうな氣がして、何となく心細う御座いました。

此處のお料理は主に河魚ばかりで、殊にひがひといふ小さな魚が名物ださうです。二時間ほど皆様と汽車の中の種々のお噺をした後、八疊の室を二間、境の襖を外して、兄様を眞中にして皆様が取卷いて寢ました。硝子障子だものですから、眞黒な森が轟々と風に搖いでるのが見え透いて、恐ろしい夜でした。（百合子記）

叡山越（三日。晴天）

四月三日！維れ神武天皇祭の日、式部連中に取圍まれて叡山越を企てむとす。夜來風雨歇みて斷雲山頂を繞り、祝氣溪間に通ず。比叡山麓より比叡山頂なる四明ヶ嶽に至るまで約三十三丁、四明ヶ嶽より山腹を迂廻し京都白河口までは大凡そ二里半なりといふ。合計三里半の山道を纎弱き婦人の足にて踏破せんとす。三橋樓の下婢注言して曰く、御婦人の足にて叡山越をなさるのは頗る御難儀なる故、登りだけにても山駕籠を召し給へ、それがお厭ならば切めて「腰推」に推させ給へといふ。「腰推」とは不思議なる名なり、如何なるものぞと問へば、對へて曰く、三尺許りなる棒の先端に袴の腰のやうなる物を附け、其れを御婦人の腰に當てがひ、後ろより村の人足が推すの故、御婦人は足さへ動かし給へば、身體は自から前方へ進みて、山を登

りゆく事極めて妙なりと云ふ、即ち式部連中を顧みて腰推に腰を推して貰はむやと問へば、ドッと笑つて顔を赤くし、村の人足などに腰を推されながら登り行かむは死んでも厭なりと云ふ。此に於てか巳を得ず何等の力をも借らずして山越する事に決し、式部連中は朝風に紫の袴、海老茶袴、古代紫、薄褪色の袴を翻し、洋傘を杖きながら、奮然として下駄穿にて登りゆく。

登山の道路第一着に「比叡山延暦寺」の石碑あり、登ること僅かに一丁にして徑路頓に狹まり漸う二間許りとなる所、比叡山大中學あり。大祭日なるにも拘らず、圓顱群を爲し、或は西行法師の如く黒染の法衣を纏ひたるあり、或は僧正遍照の如く華かなる袈裟を掛けたるあり、ゾロゾロ〱と學校の門内より出で來り、式部連の美しきを横目に眄め、宛ら遍照が五節の舞姫に見惚れたるやう將に垂涎三尺ならむとす。吾人意氣大に昂り、コレ見ろと云はぬばかりに徐ろに煙草を燻らせながら洋杖振りつゝ低唱微吟す。遍照等が面相愈々羨ましげに吾等の後見送りて茫然として佇立す。

山徑の兩側は一帶の松林にして、躑躅其他の灌木類相雜生す。七八丁の所は五十二段といふ極めて勾配急



女學生特種風俗

なる段階あり。其れを登り終つて一息つき、更に勇を皷して登る。式部連は初めての山路なれば欣ぶこと限りなく、軟風に面を撫されながら嬌舌を振つて喃喃喋語し、林中の黄鳥を驚かすこと屢次なり。山路或は峻に、或は緩かに、一時間許りにして老杉古松の間より蒼甍朱殿の朝暉に映ずるを認む。是根本中堂なり。其の昔元亀年間、信長曾て叡山を焼拂ひしが、其後再び建立せられたる堂院多く、根本中堂、講堂、浄土院、釈迦堂等は建築の莊嚴なる物にして、小さき大黒天等の小社祠までを數ふれば尚ほ百を以て數ふるに足る。天台の宗旨未だ全く衰へずと云ふべし。講堂の前庭に樫と云ふ樹あり、日本唯一の珍樹にして、支那の天台山より移し植えたるなりと木標に記せり。日本にては比叡山の外決して移植し難く、東京の植物園に其の種子を播きたれども生へざるは、比叡山の如き靈地に非ずむば成育し難きなりと、聞けば有難く聞ゆると雖ども、恰度樅と松の雑種木のやうなる樹なり。

此れより叡山の絶頂四明ヶ嶽までは僅かに八丁、中堂の前なる茶屋にも寄らず、千年の老杉矗々として空なほ小暗き間道を過ぎ、茅、徙などの風に蕭々たる急坂を攀ぢ登り、漸うにして山巓に達す。先づ最も好き位置に立ち、両手を背後にして、洋杖に倚り、胸を反し、遠く元來し方を眺むれば、琵琶湖は宛として圓内の小池の如く、白帆の翩翻たる恰も白蝶の水中に落ちて煩悶するに似たり。更に眸を轉じて背後の脚下を俯瞰すれば、靉靆たる春霞縦條、起伏せる小丘幾峰、宛然活畫を見るが如く、我が心夢の如く、現の如く、恍惚として夢幻の境を彷徨せる時、陽炎徒らに燃えて四顧の光景連波の如く微動せり。吾れ、身を揚して踴躍すれば、燕の如く、鳶の如く、丘上幾尺の所を疾翔する、豈難からむ哉。

天慶の昔、平親王平將門が謀反氣を起したりと云ひ傳ふる將門岩に踞して遙かに京都の一市割を望めば青山翠峰に圍繞せられながら灰色の寄木細工の如く鼻先に横れり。猿が腕をのばして水中の月を掬ふを擧ばゝ、正に洛中の十萬戸は吾が掌中に在らむ乎。

長閑なる春日も山上は風強く、一帶の草本科植物冠を揮て微吟せり。雲雀は尙ほ高く頭上に囀り、黃鳥は脚下を水の如く囀々す。嗚呼何等の絕景ぞ、吾等、暫時夢の人たらざるを得ざりき。

較赤味を帶んだる菫花一朶、根こぢにこぢて叡山土產にとて紙に包みながら、徐ろに元の山路を降り、根本中堂の前なる茶店に休憩して駄菓子澁茶に强か腹を拵へ、ダラ〳〵道を右に折れて降る。

是れより京都白河口へ出づるまでは重疊せる山腹を繞る事數次、或は大木老樹の蓊鬱たる森林あり、或は數十仭の絕壁、危うして毛髮の樹立するあり、或は坦坦として曠野を步むが如きあり、或は枯藪の繁茂して峠路を步むに似たるあり、或は溪流と共に降るあり、その爽、その快云ふ可らず。殊に鶯聲の斷續して限りなく、何處の林間も、何處の溪谷も法々華經の聲絕え間無く、滿山是れ盡く鶯聲ならむとす。聞道く、鶯兒と杜鵑と、白百合と鹿の聲とは、即ち叡山の名物なりと、殊に鶯聲に至りては春暖漸う樹皮に滑かなるの候より、暑中八月頃まで絕ゆる事なしと云ふ。



女學生特種風俗

白河口に出づる尙ほ遠き所に無動寺の辨才天あり。陰森たる溪間、轟々たる飛瀑の響と、裂帛の如き怪禽

の聲とに包まれて、世に離れ、人に離れ、一毫の俗塵なし。即ち面手を淨め、社前に禮拜すれば、一道の彩雲忽焉として生じ、仄かに神靈の髣髴せむとするを覺ゆ、彼の不忍池畔に於ける辨才天の俗惡なるに比すれば、崇高なる信念を生ずる事殆んど同日の談に非ず。

愈々白河口に近くに從ひ、西南部に面せる叡山の溪流幾條、相合して一となり、水勢滔々として巨岩大石を轉せしむるに至るや、利に鋭き者、此處に無數の製造工場を起し、水車を仕掛けて絶えずガタン〱と廻轉せしむ。又彼等は溪流を利用して水車を運轉せしむるの他、傍ら家鴨、鵞鳥等の水禽を飼養し、其の番人には態々人を雇ふにも及ばずと思ひてか、意久地無さ相なる田舍犬をして、之が番犬たらしむると雖ども、春日の長きに倦むが如く、四肢を伸して惰眠を貪りつつあり。然も吾等の一行、其の傍らを通らむとするや、俄然として蹶起し、一大事起りたりと吠ゆる事急なり。是れ未だ洋服着たる者に接せし事稀なるが故なるべく其の喧囂、尻尾に火の點いたるが如し。之に加ふるに家鴨、鵞鳥までが何が何だか分らぬながら、同じやうにグワッ〱と仰々しき鳴聲を出して、お尻を振りながら背ろ向きに逃げゆく狀態の可笑しさよ、豈夫式部連中の歩き姿をアテつけて見せたのにも非ざるべし。

白河に出づれば既に叡山の領域を脱す。(一郎生)

京見物(四日。晴天)

東京に住んでゐては迚も東京の眞相が分らなかつたが、京都へ來て見ると自分の住んでゐる首府の有樣が能く分る。京都の市街は槪して道路が狹く、家屋の構造が陰氣臭い。それに比べると東京は一見して新らしく出來た都會だと云ふ事が直ぐ知れる。京都では迚も上野の廣小路や、新橋の停車場前や、麹町の内幸町のやうな廣い立派な道路は見る事は出來ない。賑かな市街と云つても唯だ四條通があるばかりで、其他はマア槪して云ふと塲末の規則正しい町に澁汁を塗つた、燻んだ色に染め揚げたやうなものだ。東京には殆んど見る事が出來ぬが、往來の所々に紅い壁の家がある。

これは大石藏之助が一力で遊んだ以來一寸京都の專有と云つたやうになつてゐるが、關西地方には紅壁の家は那麼に珍らしくは無い。家屋の構造と云へば、表は格子造で障子がはまつてゐる。井戸は大概臺所にあるので、雨水が這入つたり、其他の不潔物が飛び込む事は少いだらうが、井戸の水が何となく新鮮で無いやうに思はれる。それに桔槹は大概四角か、圓形ければ小さくてきやしやである。東京の桔槹を汲むやうに、太い井戸繩を摑んで一生懸命になるには及ばず、直ぐガラ〱と汲む事が出來る。成程京都は萬事きやしやだ。



女學生特種風俗

電車は東京のやうに立派で無く、加之に四錢均一で無いから甚だ不便である。全體電車は東京のより先に出來たのださうだが、一向に其後は進歩してゐない。東京の往來には荷車を挽くのに馬だけれど、京都では大概牛だ。ノッソリ〱と市中を歩むなぞは宛ら平安朝式だ。其れに荷車も東京の大八車のやうに大きく丈夫にしたのでは無く、格好の小さいのに丸太木二本差渡して、其の丸太木が撓ふ程米俵を積む。斯んな不自由な事を爲ずに何故大きな大八車を使はぬかと聞いて見ると、税を高く取られるからださうだ。成程京都人

は勘定高いと云はれてゐるが道理だ。

女は概して美人が多いやうだ。併し東京のやうに顔が生きては居らぬ。京都は山も川も美人も凡て皆な舊式で、追つては美人までも骨董になつて了ふのだらう。

祇園の夜櫻は未だ早いが行つて御覧なさいと云はれて行つて見た。ナンだ、唯た一本しきや有りやしない。なるほど樹は古く、枝振も立派だけれど、祇園の夜櫻夜櫻と騒ぐほどのものぢや無い。未だ少し早いが、其れが眞盛りの時分には、圓山公園一杯に衆が出て、芝生の上へ隙間も無く毛布を布いてお辨當を使ふのださうだ。唯た一本の枝垂櫻を取巻いて、何千人、何萬人と云ふ群衆が、カンテラの油煙や砂埃を浴びながら悠然坐り込んで、金の蒔繪のお重詰に、芋の煮ころがしのお辨當を使ふのださうだ。お話を聞いただけで澤山になる。

祇園の都踊は成程美しい。五六十人の舞妓が光彩やかの舞臺で踊を踊る。姉様株が三味線を彈く。若いのが大鼓、小鼓、太鼓、笛、宛で雛段のお雛様が踊り出して、五人囃が大勢居ると思つたら恰度好からう。都踊には西洋人なども非常に喜んで見物に來る。神社佛閣を除いて京都で見るべきものは唯だ一つ、此の都踊ばかりだ。東京の歌舞伎、大阪の淨瑠璃に併せて三幅對に數へる事が出來る。名所舊蹟は京都の名物で一々數へる事が出來ない。俥で駈廻つても半月や一個月はかゝる。迚も一日で廻り切れない。だから自分達が行つて見たのは通天橋、三十三間堂、祇園、清水智恩院、南禪寺、金閣寺、銀閣寺、上加茂、下加茂、北野天神だけである。何れも古代めいて、鐘の音を聞いてさへ千年も昔の人になつたやうな氣持がする。此等の名所は大概繪葉書や寫眞版にあるから一々記す事は已めて置かう。(一郎生)

保津川くだり(五日。晴天)

二條より龜岡までは汽車の旅路。

龜岡にて下車しぬれば近きわたりに舟の小屋あり。

「さあお乘船んなさい。」と舟人の聲に、吾等はゆらゆ

らと漂ふ細長き小舟に乗り移りつ。一郎の君は舳に近く坐り給へば、續いて百合子の君、捨小舟女史、國子の君、胡蝶の君、艫に近く妾は坐りぬ。

「えいや？」とばかり掛聲しつる程こそあれ、舟を操る舟人二人、一人は艫に、一人は舳に。

初めのほどは水の流れいと緩やかにて少しも恐ろしう思はざりしに、一二町ばかり漕ぎ下りしと思ふ頃、河の幅漸う狹うなりて、兩岸の巖は宛がら屏風のやうにぞ聳立ち、躑躅霧島なんどの犇とばかり岩ケ根に匂ひつきぬれば、皐月の候ならむには、紅を吐ける血汐の花、山杜鵑のいかに面白からむと思ふ時しも、水勢急に、舟は巖と巖と互ひに對ひあひて聳立つ間を衝と通らむとしつ。

『あんた達、手を舷へ出しなはつてると喰はれなはりますぞ。』と舟人の言葉も終らぬに、舷あやしく軋りつゝ、左らでも細長き小舟の巖に狹まれて一入細うなるよと思へば、舟人が巖の穴目懸けて『えいや』と竿を挿込みて力任せに推すと諸共、宛ら彈丸の砲門を迸ばしるがやうに巖の間を辷り出でつ、咄嗟矢のやうにぞ流れゆきぬる。河底淺く見え透く時は、いかにして此の舟の浮ぶやらむと危ぶまるゝに、船底の平なる故に



女學生各種風俗

や河床の上をいとやす〳〵と滑かに辷りゆくなぞ面白きこと限りなし。ところ〳〵に流れを堰いたる所ありて、二三尺ばかりも低き所へ落下する水勢の、泡沫を飛ばし、白雪を漂はし、此の難所いかにして過ぎぬらむと思ふ中、早や舟の舳は水中へ沒するかと思はるゝほど前へ傾き、妾等は俯伏に倒れしまゝ咄嗟水底に葬むらるゝよと魂も身に添はぬ一瞬時、此度は舟の舳天に冲し、仰向けに倒れむと思ふ間も無く、ゆら〳〵と二度三度搖られながら一瀉千里に河下遙か流されゆきぬ。斯かる危き思ひの初めのほどは、小さき膽の縮みあがりて、この儘底の藻屑と消え果てむかと、悔恨の情胸に漲りしも、何時しか暴虎憑河の興を催し、低聲に唱歌を唱ふぞ面白き。中にも一郎の君は聲ほがらかに、

朝辭白帝彩雲間　千里江陵一日還
兩岸猿聲啼不住　輕舟已過萬重山

と、舷を叩いてぞ謡ひ給ひぬる。

水の流は強ちに駛きところのみならで、緩かなるところは大江の悠々たるが如く、又所々に綠色を湛へたる深き淵ありて、如何ばかり恐ろしき大蛇の潜めるにやと身内冷やかに粟立ちぬ。

一時間餘りにて舟は端なくも嵐山の麓に着きけり。嵐峽館てふ溫泉宿にて暫時憩らひたる後、大悲閣に詣で、未だやう〳〵咲き初めしばかりの櫻花を眺め暮しつ、渡月橋を渡りて、やがて小督の局が跡詣づれば、草深きわたりのいとゞ寂しく、昔の人を偲ぶ涙か、胸の中怪しう曇りぬ。

嵯峨より小室へは名所舊跡のいとゞ多かれど、さばかりはとて天龍寺のみ參りて、夕告ぐ鳥の鳴き渡る頃嵯峨の停車場より乘車して京へ歸りぬ。(きよ子)

宇治と奈良（六日。晴）

▲宇治。鄙歌の聲遠く聞ゆれど人の影なく、宇治の河瀨は悠々と流れぬ。何處を池月、磨墨が競ひ渡りしか、歳は去りぬ。

彼方の岸なる平等院は昔のまゝに殘れども、「うもれ

木の花咲く事もなかりしに身のなる果ぞ悲しかりける」と詠せし歌の主ぞ何處にか弔はむ。

此方の岸邊に茂り生ゆる葦の片葉の風に戰ぐは、源氏物語に見えつる美しき姫が亡き魂か。宇治は思ひ出多きところなる哉。

▲奈良。一千餘年の昔にかへりて春日野を徐かに逍遙へば、神鹿人をなつかしみて群り來りぬ。

其の美しき角よ、其の優しき眼光よ、餘りの愛らしさに薄き煎餅を求めて投げ與ふれば、何處までも〳〵從ひ來ぬ。

五丈有餘の盧舍那佛の像は仰ぎみるばかりに大きう昔の榮花の跡淋しきを語りげなり。春日神社は空しく神寂びて、三笠の山の綠深し。ああ奈良の昔の一千餘年、あゝ歲月は逝けり。（くに子）



女學生特種風俗

大阪瞥見記

（七日。晴）

淀川の鐵橋を轟轟と汽車の渡る時しも、大阪の市街は宛ら激戰の眞際中のやうに眼前に開展しぬ。見よや數千、數萬の煙突より吐き出だせる褐色の煙空に漲りつ、日光の色あやしく黄ばめる中を、鳶一羽低う舞ひけり。

梅田にて下車し、停車場の構内を出づれば、縱横に

列を作りて居並ぶ人力車より數多の車夫ども犇と群り來りて、乘車を勸むるに、その煩きこと苦しきほどなり。

電車は殆んど見當らざれど、自働車のプップップーと大いなる喇叭を鳴らしつゝ、石油臭き生温き瓦斯を吐きながら魔物の通る如く、路幅狹き往來を疾走すると見るに、自轉車は春の燕の如く飛び來り、飛び去り、目まぐろしく肩を打たむとしつ、東京よりの田舍者は、恐ろしとも恐ろしく思ひぬ。

大阪は水の都にて淀川が市の北部を流るゝこと、墨田河が東京の東部を流るゝに似たり。又、大阪市民はこの淀川を源として、幾條の堀を通せしめたれば、東西横堀、土佐堀、江戸堀、京町堀、阿波堀、立賣堀、道頓堀など〻、堀の數甚だ多く、東京の三味線堀のやうに小さきものにはあらず、此等の堀には巡航船たえず行きかひ、機關のひゞきガッタン／＼と喧まし。大阪市人は陸上を往來するよりも、水上を通ふを便なりとせるが如し。

家屋の構造は一般に低けれど、堀に面したる方は中中に高く、且つ物干場の水上丈餘の所に突出でたるは、恰も鳥籠の破れかゝりたるやうにて、人の家の裏は見ぬものなり。

賑かなる町は心齋橋通が第一にて、天井を取拂ひたる勸工場のやうなり。大阪市は効外へ出づるにあらざれば、緑色を眺むるに由なく、公園は唯だ中之島にのみあれど、日比谷公園を小さくしたるに過ぎず、上野公園の幽邃なるは大阪にては見ること能はず。

大阪見物に來る者の、名所として訪るゝは桃谷、天王寺などの一二個所位にとゞまり、櫻の宮は淀川の畔にありて、向嶋に似たりと云へど、櫻の宮は名のみ櫻の宮にて、櫻の木は大方枯れてしまい、今は花見にゆくよりは雪見に宜しとは可笑しからずや。

遊覽の場所は極めて少く、道頓堀の五劇場は迚も東京の歌舞伎劇と比べものにならず。唯だ文樂一座の操人形は天下一品、必ず見て置くものなりとぞ、大阪市人の趣味は極めて卑く、文學的價値なぞは口にする人

さへ無く、又音樂の趣味も極めて乏しく、折々音樂會の催さるゝ時なぞは、聽衆は一般に寄席へでも聞きに行くやうに思ひて、會場の禮式すら知らずてかや、況して舞踏會なぞに至りては殊更甚だしく先頃大阪ホテルにて舞踏會の催されし其折、觀覽人は男女が相携へて躍れるを見風俗壞亂なりとし、中に某高等女學校の女教員が交りゐたる故、延いて教育界の一問題となり、その女教員は哀れや始末書を徴せられ、ポンチ畫に書かれて、あらぬ恥をかきたりとぞ。大阪市は半ば舊式の思想なり。活潑に活動せるは商工業のみにて、住むは呼吸せわしく覺ゆる所なり。

殊に京都にては名所舊跡の多くして、探るに苦みしが、今は行くところ少きに苦しみ、匆々として市中を馳せ廻り、茫然として道頓堀の旅宿に歸りぬ。終夜、劇場の太鼓の喧騷しくえも寢らるればこそ。實に大阪は奮闘の巷なり、修羅の巷なり。遊樂も、飲食も、悉く生活競爭の兵器糧食かと覺え、心地わるきこと限りなし。明日は東京へ還る日なり、嬉しき哉。

（捨小舟）



女學生特種風俗

珍らしき體操器械

YM生

體育館は、第三會場で、圖書館の傍になる、場所が場所だから餘り目につかぬ、從つて入場者も少い、總建坪が十間四面許り場内を二つに仕切つて、入口正面の間が體操器具陳列場で、兼ねて運動場である、そして此の運動場は、大略五十坪ばかりの廣さである、此運動場の背後が即ち游泳場で、八間半に四間、深さが五尺、即ち三十坪ばかりの廣さです。

運動場は板敷きですが、此の中に具へつけてある運動器具は、廿六種で、其の中には鞦韆、棍棒、鐵亞鈴のやうな、普通有り觸れた、器械もあるが、大抵は西洋から最近輸入した、珍らしい體操器具許です、婦人方の體操に適した機械の種類の重なる者を說明して見ませう。

▲チエストウエート

チエストウエー(一名助木と云ふ)は、恰も障子の紙を剝いだやうな者で、之を上より吊し置き、其の骨に手を掛け、縱橫に飛鳥の如く動きつゝ運動する機械で、専ら上肢、下肢、胸部、腹部、呼吸器の發達と意志の鍛錬を期するを目的とするものですが、是れは勿論御婦人方にも、容易に出來ます、其の大きさは、約一間四方位の者です。

▲獨逸式室内自轉車

是れは自轉車の形で大きさは同じいが、只だ普通の自轉車と違つて、下に臺がついて居るから、矢鱈外を乘り廻はす譯には參らぬ。で普通自轉車の上に乘るやうに乘つて、體を前後に動かして、運動するのですが其仕掛けは如何にも巧みに出來て居て、且つ中々興味がある、是れは普通の自轉車に乘れぬ者にも自由に出來る仕組ですから、婦人方には誠に適當だと思ひます。

▲腹部運動機械

是れは長さ五尺、高さ一尺五寸、幅二尺程の臺であつて、此の臺の上に跨りながら、兩方の脚を、拔けぬやうに緊かりと足掛けに嵌め、同じく腹部を緊かりと臺に縛りつけて、仰向け樣になるのですスルト體の頭の方半分程は、臺の外に出て、首は下方へ垂れるが、足も胴も固く縛つて居るから、臺の外へ轉かり落ちる虞れはない、扨て斯うして置いて、首を上下に動かすので、誠に甘く出來て居ます、斯の腹部運動機械と同じ運動の目的で、腹部運動椅子と云ふがある、是れは普通の椅子と多く變る所はなく、腰を掛けながら、脚を上下左右に動かすばかりですから、婦人には最も適當です夫れから此の二つの器械の目的とする所は、專ら胃と腸と腹とを強くするにあるのださうです。

▲奇妙の身長器

是れは身の長を長くする器械です此の身長器の仕掛けは、少し込み入つて居ます、先づ大體機械體操のやうな構造で、兩脚の甲を下の臺へ緊と結ひ附け、夫れからブラ垂げてある紐に、顎を引つかけ、手を背へ廻はして、顎を引き掛けた紐を引き張るのですが、實に滑稽の仕掛けで、何の事はない首縊りを見るやうな體裁ですから餘り見つともよくないですが、併し身長を伸ばすには、非常に有功ださうですから、身の低いのを嘆ずる婦人方は、試みに遣つてごらんなさい、此の體操機は、英國式で彼地では婦人間に盛んに行はれて居るそうです。

▲移行吊環

是れは一間置き位に、四箇の環を上からブラ下げて置くので、環は鐵製で徑三寸許り、先づ一番端の環に右手をかけて、體を左右に打ち振りつゝ、機を見て其の次ぎの環に飛び移るのであるが、斯くして順次次ぎの環へと移つて行くので、脆弱なる我國の婦人には少々困難かも知れぬが、何に遣ふと思へば、出來ぬことはなからう、現に西洋の婦人は、盛んに此の運動を遣つて居ると云ふことです、總じて日本の御婦人は、

古來の慣習とは云へ、意氣地がなくて困ります、何に御轉婆と云はれても構いませぬからやつてごらんなさい以上は此の運動場へ備へつけてある、運動機械の一部で、其の他頸部運動機とか、胸部運動機とか、拳鬪術練習機だとか、同新らしいものが澤山ありますが、一寸御婦人には向きませぬから、略すことにしますが此の體育館の體育の方針は、足より頸、頸より胸乃至腕と云ふ順序に、其の鹽梅を平均的に、全身に及ぼす運動をするのに適せしめ、腹部腰部等の活用を專一とするのであつて、現に角最新式を應用して居るのです。

▲水泳場の裝置

水泳場は前に云ふ通りの容積で、總體木造である、水管が二個、湯管が六個あつて、湯は蒸氣仕掛けで二十分間に、沸くと云ふことである、で百廿二人までは入る事が出來る隨分大きな湯殿ではないか、併し游泳練習が目的で、入浴が目的ではないから、游泳者は一時に六七名を限度とするさうである、此の游泳場の目的は、勿論體育にあるが、兼ねて未熟者に水練を敎えるのであるから、水練の方法は其道の大家が、傍に居て敎えて居る、此の水泳場は、重に女子に水練を仕込むが當事者の目的であるさうだから、女學生諸君も夏期休業に海水浴に行く前茲で水泳を稽古して置きなさい、そして熟練の功を茲で積んで、毎年英國邊りで行はれる。萬國婦人水泳競爭に出掛けるのもよいでせう

▲シヨワーバス

シヨワーバスを譯すると、驟雨の浴みであるが、此のシヨワーバスは水泳場の直ぐ背後にあつて、運動後身體の汗を洗ひ流す器械である其の構造は、丁度交番所型の骨組で、三本のアルミニーム、鍍金鐵製の線を組み立てゝ造られ、其の線の中には湯が通つて居て、左右と上方の栓を動かすと、湯の雨が霧のやうに降つて來る、誠に心持ちが好い、此のシヨワーバスの外に今一つニードルバスと云ふ器械がある、矢張りシヨワーバスと同じ目的で、運動後汗を洗ひ流すのである。



世界各國 婦人の好尚

諏訪東城

西洋と東洋では生活狀態も變つて居まするし、從つてまた風俗習慣も異つて居りまする。いや、そればかりではない、同じ東洋でも、支那と朝鮮と日本とは、それ〴〵趣きを異にして居りまするから、婦人の風俗も其國〴〵によつて、自から異つて居る事はこゝに云ふまでもない事です、ですから同じ美人と申しても、東洋で云ふ美人と、西洋で云ふ美人とは、大層其間に懸隔がござりまするので、其國〴〵でまた美人の標準が立つて居ります。それは印度で第一と云ふ美人をもしこの東京へ連れて來たら什麼でせう、東京の人は恐ろしい色の黑い女と思ふばかり、誰一人美人と想ふ者はありますまい、國柄が違ひ、風俗が變れば、美人の標準も自然變つて居る筈であります。今こゝに世界の婦人風俗を御紹介申すに當りまして、先づ手近から始める事に致しませう。

△韓國▽

御承知の朝鮮、今では殆ど我國の勢力範圍になつて居りますのですが、昔は文物族に開け、織物や美術に於て我邦を導いてくれた事もあるのです。此國の婦人と申すと、大抵は早婚で、其中の早いのとなると、もう十歳位で結婚してしまひます。現に今度の皇太子妃殿下が御年僅かにお十三にならせられると云ふ事ではありませんか、朝鮮婦人は元來美くしい方で、額を丸く剃り上げて居りますが、官妓などゝ來ると、日本人の眼から見ましても、可也美人が多いやうでございます。で、中流以上の婦人となりますと、それこそ深窓に養はれて、決して他人に顔を見せないと云ふ習慣で、萬止むを得ず外出をする時がありとすれば、深く被衣に面を包んで行くのでございます。それは眞個にゆか

しいもので、日本で深張の洋傘を翳すよりは、また一層要心深いとでも申しませう、けれども下等社會の婦人となると、それこそ曝露で、穿物なしの素裸足で頭へ貨物を載いて行くところは、恰度我邦の小原女と云ふ格好、何しろ前申上げたやうな早婚國の事ですから、もう七八歳から結婚の約束が出來るなどは珍らしくない事で、一體にまた進取の氣象に乏しく、女ながら獨立しやうなどゝ云ふ精神は少しも無いやうです。既にかう云ふ人同志が、未だお互ひに思想の定まらない時分から結婚して一家を爲すのですから、獨立の精神とか、進取の氣象などが起りさうな筈はありません、今の朝鮮があのやうに意氣地のないのは、確かにこれ等の弊から累を及ぼしたものと思ひます。服裝は御承知の通り極めて優美で、且つまた輕く出來て居りますが、其他に取柄のないと云ふのは困つたものです。

△清　國▽

清國即ち支那では甚麼のを美人とするかと申しますと、顏も成程美しくなければなりませんが、先づ足の小さいのを美人としたものです、いくら顏は美くしくつても十六文甲高の足袋をはくやうでは、支那では美人と申しません、何でも足が小さく丁度日本人の拇指程でなければ美人とはしないと云ふ習慣、これは御承知でもございませう、纏足と申して、生れると恐ろしい固い靴をはかせて、無理に足の發育をとめるので、恰度甲が足の裏へ減込んで、捻くれた松の枝のやうになり、三角形になつてしまふ、ですから身體はだんだん大きくなりましても、足だけは生れたてと同樣で異個に可愛らしい靴を穿いて居る、中流以上の婦人となりますと、この纏足の爲めに歩行く事が出來ず、一々男の肩を借りて歩行いて居るやうな有樣です。此國の婦人もまた他人に顏を見られるのを甚だしく嫌ひまして、朝鮮と同じやうに始終一室に垂籠めて居るが多く、外出は輿と云ふ贅を極めて居りますけれども、近來西洋の文物が輸入されるに連れまして、この纏足が不自然で、衞生にも能くないと云ふ上から、或る一部の

婦人が主動者となつて天足會と云ふ會を組織し、それこそ十六文甲高の足を尊む事になりましたから、今に此の國の美人の標準も違つて來て仁王樣の足のやうなのが美人と云はれる時代が來るかも知れません、衣服は朝鮮に比べると稍優美と云ふ點を缺いて居りますが、赤や青の刺繡などがしてあつて、中々凝つては居るやうです、顏は圓い方で、中には耳環などを下げて居るのもあります。尤も支那は廣い國で、南滿洲と北滿洲とは風俗習慣を異にして居ますが、この足の小さいのを美人とする事は一のやうです。結婚も先づ何方かと云へば早い方ですが、朝鮮程では



ありません、何でも金のある處へと婚家を望むのは、例の支那人氣質で止むを得ぬ次第でせう。

△露西亞▽

暹羅安南は尙支那の風俗に近し、露西亞の領に入ますと、もう既に萬事歐化して居るのでございます。この國もまた支那と同じく廣いので、人種の數も多く、所によつて風俗習慣を異にして居りますが、容貌風俗共に歐化して居る事は事實でございまして、其首都のセントピーターースブルグや、乃至モスクワになりますと、婦人の風俗なども全く歐羅巴式で、巴里の流行も追へば、倫敦の流行も採ると

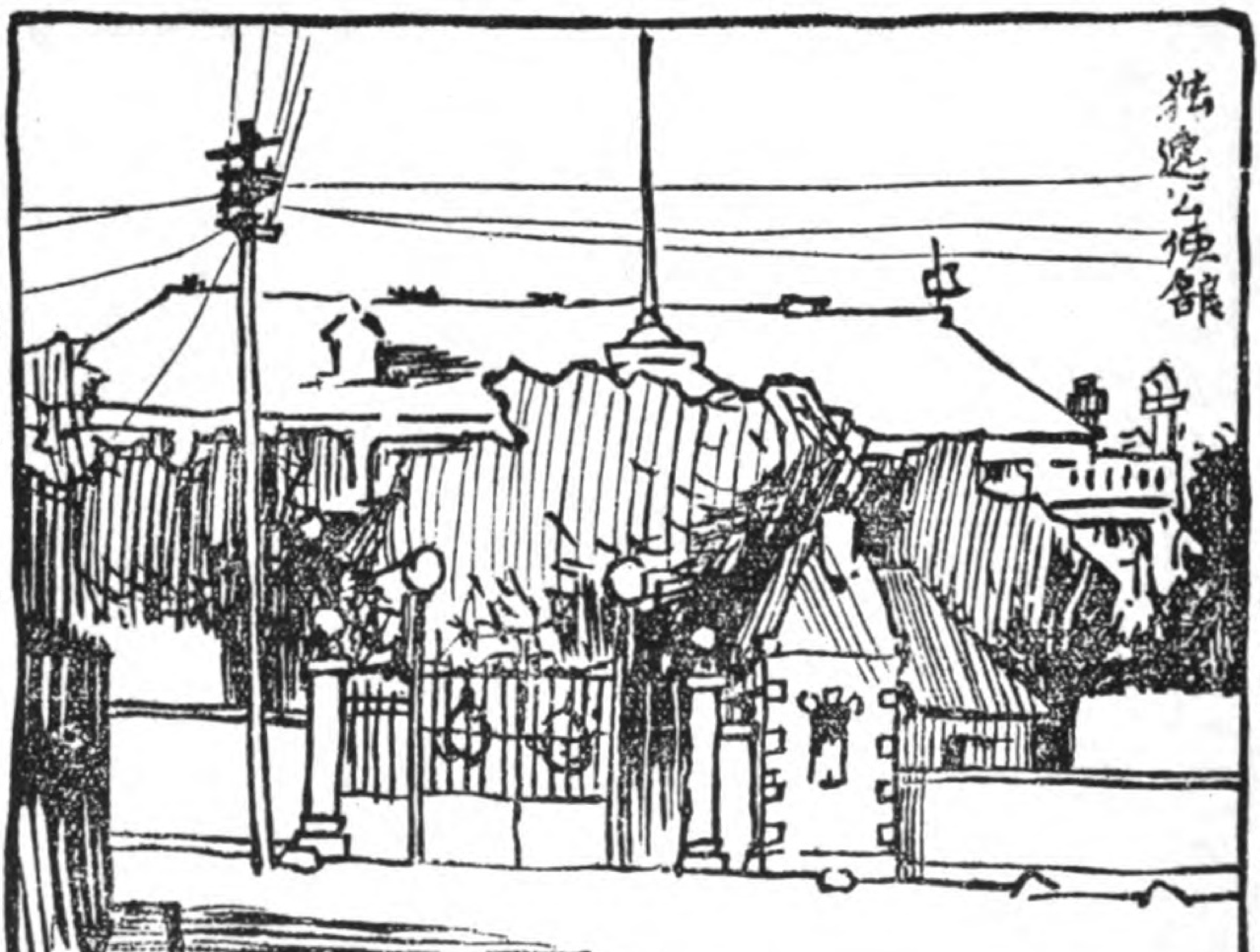
云ふ次第、けれども國柄が國柄だけに、巴里の婦人のやうに華美は競はず、何方かと申せば先づ質素の方でございます。只雪國だけに冬の衣裝は頗る贅澤で、毛皮の襟のかゝつた外套に包まれ、白、皚々たる中を馬橇で芝居見物などゝ云ふ風流は他國に見られません。容貌は概して柔和しい方で、脊も餘り高い方ではありません、婚禮は矢張婚期を以て行ふので、其儀はまた歐米と變りませんが、宗敎はハリストを信ずるので、多く果斷に富んで居るやうです。美くしき上衣、美くしき靴、温きマツフ、毛皮の襟、これを露國婦人一般の風俗かと思ふと大違ひ、下流社會や百姓の婦人となると、それは〳〵お粗末で、我邦の勞働者と格別の差はないやうです。

△獨　逸▽

同じ衣服を纏ふにしましても、東京と京都とでは既に其嗜好を異にし、柄を異にし、着様に相違がございます。其通り西洋諸國の婦人にしても、各國其嗜好を異にし、其柄を異にし、同じ流行を追ふにしても、到るところ多少其趣きを變へて居る事はこゝに云ふまでもありません。獨逸婦人の風俗と申して、別段佛國や英國と變つた事がない、結局は洋服を着た淑女に過ぎぬやうですが、一々解剖して行つたら、根本的に相違のあるは知れた事、されば獨逸婦人の風俗はと申しますると、巴里に比しては質素、露國に比しては華美と申すまで、何處に特種の風俗を見出し得ませんが、決闘好きの國民、軍事好きの國柄だけ、婦人もまた活潑輕裝を喜ぶ風で、中には男性其儘の風俗をして居るものが澤山あります、軍人の姿勢で寫眞を撮つて見たり、勇士の服裝をして綸に𩴴かせたり、活潑と云はゞ活潑お轉婆と云はゞお轉婆な風俗を喜ぶ風で、寧ろ雄々しいと云ふ點に絶えず注意を拂つて居ります。それは恰度聲の惡い禽が羽を美しくし羽の醜い禽が聲を美しくして、異性の愛を迎へると同じやうに、軍人大將ての國柄だけ、異性の愛を估ふには、是非かうなければならぬかと思ひます。

△佛蘭西▽

其首都巴里は世界流行の魁けと呼ばれるだけ、男女ともに身の廻りを飾る事に懲はない筈です。巴里の婦人！　世界中で一番華美な事を好きな人種で、これ等の婦人が流行を生み出して居るかと思へば其贅澤は措いて、屢らく先づ此國の婦人がいかに流行と云へる一事に苦心して居るかゞ譯ります。佛國の婦人は概して嬌姿妖艶を貴び、けば〳〵しい服を纏つて、劇場や公園に華美を競ふが唯一の樂み、其の美反つて障碍をなして、肝腎の婚期を通り越し、生涯寡婦で暮す人が多いと云ふ事も聞きました。佛國人口增殖の緩なるはこれ等の點も多少は與つて力あるものと考へます。近日佛國から歸朝された某氏の說によれば、近來巴里の婦人風俗は、從來の如くけば〳〵しからず、頗る質素に傾きました。殊に時計、指環、頸飾りの裝飾に、金や、ダイヤモンドや、ルビーなどは今廢れて、眞珠が尤も流行つて居る、時計の鎖なども極めて細いのが流行するので、衣服の如きも縞の細かい、寧ろ無地物が流行するとか聞きました。餘りに華美になり過ぎると、其の反動でまた質素に返る、恰度流行は波の打ちかへし〳〵して居るやうなもので、これは何處



でも變りませんが、日本なども既に其傾向を帶びて現に頸などは細いのが流行し始め、眞珠もそろ〳〵芽を吹きかけました。流行程恐ろしいものはありますまい。また巴里で流行の魁けはと申すと、大抵は呉服屋さんから始まりますので、一つの呉服屋さんが、先つかう云ふ體裁の服を流行らせやうと思ひますと、その服を幾組となく拵へて、多くの婦人に着せ、呉服市の立つ當日其の附近を徘徊させますと、獨逸白耳義乃至は北境邊からやつて來た呉服屋さんが之を見て、成程巴里ではあゝ云ふ服が流行つて居るのだな、と國へ歸つて直ぐに其眞似をして賣出す、それで忽ち世界の流行となるのださうですが、何と拔目がないではございませんか。

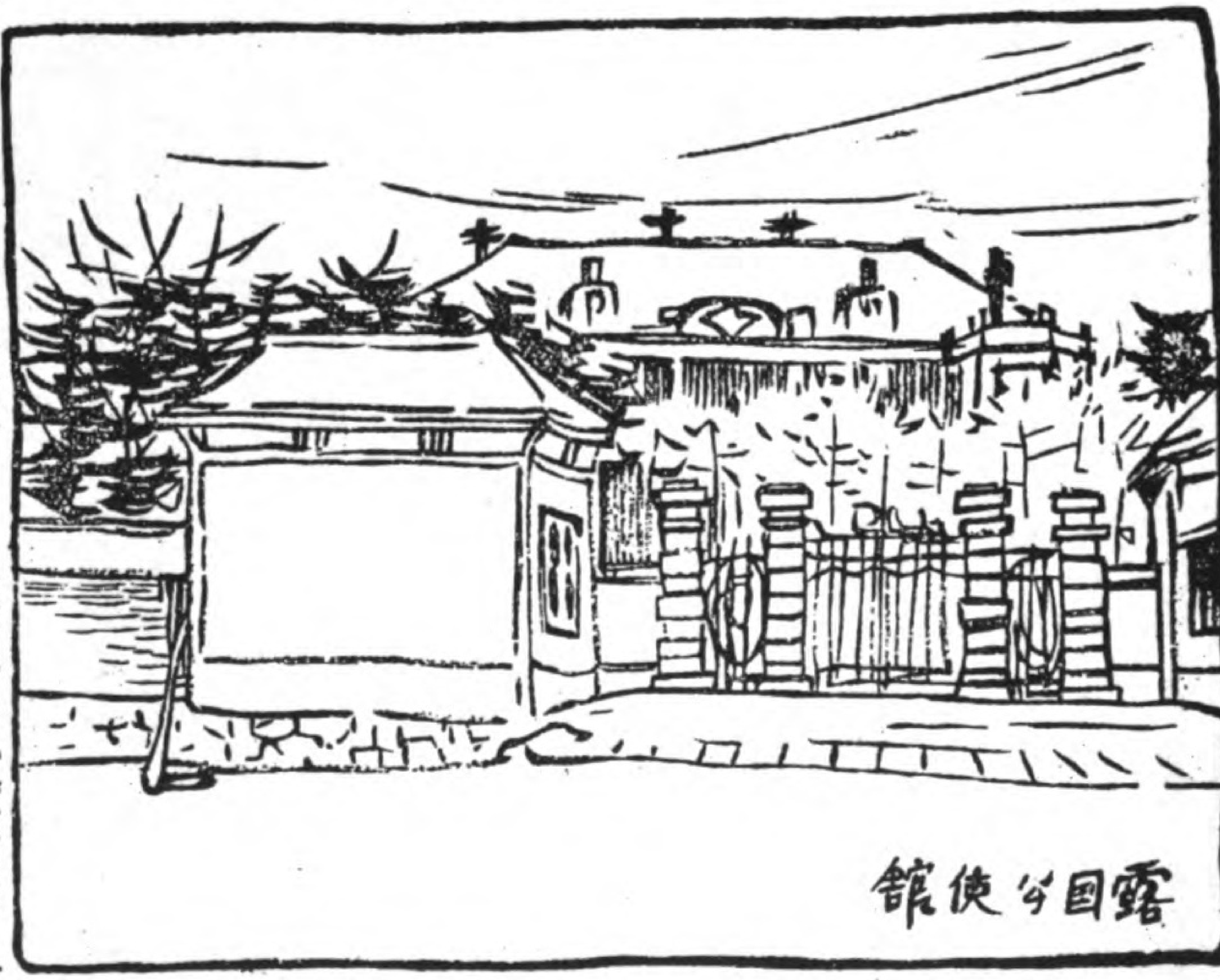
△英吉利▽

巴里の婦人を粹としましたら、英吉利の婦人は高等で人柄とでも申しませうか、服裝も餘りけば〳〵しからず、それかと云つて質素でもない、程の好いところに價値もございますので、言語動作も愼しましく、輕佻のところが少しもございません。それと申すも國柄が世界での紳士國、品性が高く、理想の高い人々が樞要の地を占めると云ふ有樣ですから、自然婦人にも見識があり、異性から輕蔑と見られ、お轉婆と云はれる事は、死ぬより辛いと仰せられる、それ故夜會舞踏にも華美は競はず、衣裝や化粧に異性の愛は引かじとの權式と見えます、かくてこそ其國は洵に良妻賢母に富み世界強國の首位にあるも、無理ならぬ次第ではありますまいか、黑き衣服、黑き裝、かくても品性の美くしさは、其言語、其動作に現はるゝものを、何を苦みて衣服の華美を衒ふ事がございませう、こゝに至ると英國婦人の風俗は洵に美はしいと云ふ事が證據立てられるのでございます。

△伊太利▽

伊太利と云ふ國は御承知の通り、古くは羅馬の盛な時代から、美術に於て名ある國で、從つて、男女共に

有名な美術家が澤山出て居る、かう云つた國柄だけに、建築にせよ、庭園にせよ、隨分凝つた工夫を致しまするので、婦人の風俗も亦他の强國と比べて見ると、凝つた服装を致して居ります。日本で申したら澁味のあると云つた風で、上衣を短かく、二の腕で孕ませて、手首で締めると、伊太利式の婦人が出來ます。で、また美術國だけありまして、大抵の婦人は水彩畫位自由に書き、並びに品隲して娯樂とすると云ふ風ですから自然動作も優美になり、畫板を携へて、縁の廣い帽子を冠り、郊外を散歩して居る姿などは古羅馬の昔を偲ぶ好材料とも云ふべきです。况や月夜のゴンドラ船に、相思の人と棹を操つて、バイオリンの音に耽るなどは、繪にも畫きたい風情ではありますが、要するに伊太利婦人の風俗と云ふものは粹と申すより先づ澁いと云ふ方でありませう。それがまた百姓の婦人となりましても、長く毛を後ろへ下げて、頭には白い巾を卷いて、これまた後へはね、服の上へ前垂やうのものを懸けて居りますので、日本で申すと宇治の茶摘みと云つた風俗、これも可愛らしいもの丶一つであります。



△亞米利加▽

北亞米利加合衆國の婦人は、矢張巴里や伯林の流行

を追ふて居る事は疑もありませんが、凡てが例のヤンキー主義で、餘り目立たないところへ金を掛けると云ふやうな事はございません、只見掛けが立派ならばそれでいゝので、眞珠よりはルビー、ルビーよりは金剛石を裝飾にすると云ふ風です。で、また合衆國の婦人は萬事に儉約ましく、金と云ふ事に就いては不尠趣味をもつて居る人種で、子女の教育も多くは此方面から始められると云ふ話、首都ワシントン乃至ニユーヨークはまだ〳〵美術や文學に心を傾け、閨秀作家、女流音樂家なども見えまして、多少精神的の趣味も鼓吹されて居るやうですが、桑港乃至シヤートルと來ては形無しで、全然金貨本位、趣味も嗜好もあつたものではございません、これは日本に在つて、横濱乃至神戸と云つたやうな開港地の婦人が、多くは拜金宗の傾きあるのと格別變つた事はございませんので、無理もない次第と思ひます。

△其他の國々▽

以上でまづ大體世界で名ある國々の婦人風俗は御覽に入れた積りでございますから、其他の國々、殊に野蠻國の奇なる風俗を御覽に入れませう、野蠻國と申せば、厚い毛皮を纏つたエスキモー、それから夏冬羅衣一つで居る印度婦人の奇習をお話申せば、

△エスキモー▽

エスキモーと云ふのは北海の端に住んで居る人種でヒパァポリアン種屬に屬して居るのであります。性質は黃色人種と大差がないさうでありますが、何しろ北海の端と云ふものですから、始終雪に降込められて、其家なぞも氷で造り、男女ともに厚い毛皮を纏つて、其多くは海獸や魚を獵して生活して居ますので、男も女も熱帶地方の野蠻國に比べると柔和しく、家庭は勿論の事、隣人とも極めて仲の睦しい人種ださうでございますが、其婦人の風俗はと申すと髮は多く結ばず、よし結んでも只ほんの束ねたまゝで、下から上まで毛皮を纏ひ、容貌は頗る日本人に似て居ります。で、面

白い事には倫敦や巴里で非常に高價な海獸の毛皮がここでは容易に得られるものですから、如何なる貧乏人も着て居ると申す風で、また別にこれを高價なものと思つて居ない事でございます。

△印度▽

同じ印度人と申しましても其名々住んで居る土地によつて、アンチス印度人とか、バタゴニア人とか、ボリビアンとか、リオ黒人とか、モヘーヴ印度人とか、ナヤ印度人とか、ザムベシ黒人とか、種々名稱もありますが、或は東方印度に住んで居るものがあり南亞米利加の者もあり、濠洲に住んで居る者もありますので、其の奇習風俗は一樣でありません、先づ此中の際立つて不思議なものばかりを擧げて見まするど、アンチス印度人の婦人は兩の頬へ恰度男の鬚のやうに、鼻の兩側から耳へかけて三條の點墨をして居ますし、ボトクド人の婦人は耳朶へ齒を箝めて飾りとし、下唇を前へ引伸して、其長く突出て居るのを自慢とし、モヘーヴ印度人の婦人はまた身體中へモザイク式の點墨を施して飾りとし、ザムベシ黒人の婦人はまた、額、頬、いづれと云はず點墨をして、これは上唇を前へ突出し其上へ鐶を穿めて誇りとする習慣があり、或は頭の毛を額の兩方で結んで角のやう



にして居る者や、或は人の骨を頸飾にして飾りとする習慣や、種々奇習も多い事でございますが、これ等異人種に屬する婦人は一體に氣も荒々しく、女らしいところがないやうですが、若夫れ印度人の眼から見ましたら、或は淑女もあり、美人もあり、或は秀才もあるのでございませう。

それからまたこの印度の婦人が多く點墨をして居る事に就きましては、文明人の眼から見れば、或は無用のもの、若くは氣味の惡いもの〻やうにも思はれますが、身を飾らうにも別に衣裝と云ふ必要もない所から自然肉體へ裝飾をする事は自然の道理で、印度人の目から見ましたら、いかに美しくそれが見えるでせう、文明國の人が衣裝へ華美を競ふも同じ理屈ではございませぬが、世界中の婦人風俗を詳く調べて書いて見たら隨分面白い事實もありませうが、こ〻にはこれで御免を蒙ることゝ致します。

泰西名家言

◎婦人は家庭の魂となり、裝飾とならざるべからず。

◎家事經濟に長けたる婦人は家庭の寶なり。

◎妻女は良人の、外に儲け得たる所を、內に保つものなり。

◎貞淑なる婦人は菫に似たり。

◎母は天の授けたる家庭教師なり。

◎妻なく火なき家は魂なき家なり。

◎良人の賢明、妻女の耐忍とは家庭平安の礎なり。

◎婦人の品位は人に知られざるに在り、其の名譽は良人に尊重せらる〻に在り、其の愉快は家庭の幸福に在り。

◎人の話柄となる男子は名譽なれども、人の話柄となる女子は不名譽なり。

◎女子は樹蔭に香ふ花なり。

◎虛弱なる母には神經質の娘多し。



奥様の趣味とお神さん趣味

張飛燕

お神さんとは如何、奥様とは如何、これは頗る六ケ敷問題です、由來日本には人の妻に種々な名稱があつて、試みに擧げて見れば、夫人、奥様、御內儀、御內寶、女房、細君、御新造、お神さんと云ふやうに、極めて多方面に亘つて居るが、さて其判別と云ふ事になると、これがまた頗る難解の問題で、夫人と奥様とは大抵似た者、細君と女房、御內儀は別に甲乙もないやうに思はれるが、そんなら何處までの程度の妻を夫人奥様と呼び、細君乃至御新造とはいかなる程度の人であるかと云ふと、これは一々說明する事が出來ませぬ。山の手へでも行つて見ると、家賃三圓の棟割長屋に住んで居る細君が湯屋では奥様と呼ばれて居るのもあるし、堂々たる紳士の口から飛でもない「家の嬶が」と御意遊ばさるゝ場合もあるので、夫人も時には嬶と呼ばれ、山の神もたま〳〵奥様と呼ばれる、要は只時と場合、殊には品性にも關するので、夫人には夫人の品性あり、お神さんにはお神さんの品性がちやんと備はつてある。表面ばかりは奥様でも、其品性嗜好に於て山の神に劣るとしたら、其人は既にお神さんの域を通り越して山の神に近くまた表面嬶左衞門であつたとしてが品性嗜好の高ければ人は奥様と云ふだらう、奥様とお神さんと其間別に差等のあるべき筈もない、けれどもこの品性趣味と云ふ事に就いては、其各自の境遇にもよるとして、お神さんは御新造として、御新造はまた奥様としてありたいと思ひます。

さらばこゝに奥様の趣味とお神さんの趣味とを比較研究する。これもまた六ケ敷い問題で到底具體的に述べ得られるものでないが、先づ奥様は什麼云ふ趣味をもつて居るか、お神さんはまた什麼云ふ趣味を有つて

居るか、乃至奥樣は如何なる趣味を養ふべきか、お神さんはいかなる趣味に慰藉され得べきか、この點に於て少しく研究して見やうと存じます。

先づ今日のところ、普通奥樣と呼ばれる方々は、少くとも社會に名を知られた細君を云ふので、其家庭はまた少くとも下婢一名以上を使傭し、炊事の業に携はらざる人々を指すとする。否、此の程度を越へて、何爵夫人、勅任官、會社の重役、大實業家、これ等の妻女も凡て奥樣の稱に列するので、要するに中流以上の妻女の謂―

そんならお神さんと呼ばれる程度とは甚麼ものを云ふのでせう、これは先づ今のところ中流以下、即ち小商人、勞働者の妻女を指すので、先づ〳〵敎育のない方面、夫婦共働ぎの側を云ふのである。

既に其實體に於て如斯き差があるのですから、奥樣趣味とお神さん趣味とは自から異らさるを得ぬのであつて、一方は高尙、一方は下等である事は云ふまでもないが、銘々又其趣味に特殊の長短がなければならぬ

△奥樣の趣味▽

一概に奥樣の趣味と云ふ。これが豫め一定して居るものなら、別段こゝに云ふまでもないが、同じ梅にも紅梅と白梅とあり、同じ鯉にも眞鯉と緋鯉とあるやうに、各々色を異にして居るから、其處に面白い味もあらうと云ふもので、夫人と云ひ、奥樣と云ふも、一つ土から生へた者ばかりはない、大名のお姫樣もあれば學校出のお方もある、若夫れぐつと下つては、左褄を把つて居た御連中も在しまさぬと限らぬので、其趣味嗜好も又自から異はざるを得ませぬ。

けれども奥樣と云はれる身分は、大概先づ臺所の事は下婢に委ね、玄關の事は書生に任せ裁縫はお針に預けると云ふもので、今から四十年前に在つては、所謂床の置物で、歌の一つも詠んで、きちんと濟して居れば、それで奥樣の義務は盡されて居たのでありまするが、今日ではさうは參りませぬ、奥樣には奥樣だけの用があるので、やれ何々慈善會の、それ何々婦人會の

と、随分眼の廻る程の忙しさいつそ貧乏人の神さんになりたいと、さる奥様の宣ひけんも、満更嘘でもなし。

衣服に流行を追ひ、劇は替り目を缺かさず、西洋料理のお稽古に通ひ、茶も遊ばせば花も少々は生けられる、これが今の奥様の趣味としたら、極めて平凡な趣味である、これをしも趣味と云ふべくんば小供が翫具を欲しがるも趣味犬が欠伸をするのも趣味、蠅が障子へとまるのまで趣味と云はねばならぬ事になりまする。

成程犬の欠伸にも趣味はあらう、蠅の障子にとまるにも



東京名所寫生——九段の上

趣味はあらう、けれどもそれは客觀的で、犬は趣味を以て欠伸をせぬ、蠅も趣味を以て障子へとまらぬ、或は夫れ自然の勢で、犬にとつては苦しいのかも知れぬ蠅にとつては可厭なのかも知れぬ。

其通り奥様の美服を纏はれるのも、芝居の替目を御覽になるのも、乃至は西洋料理のお稽古に通はれるのも、茶や花に耽られるのも其趣味から遊ばされると云ふよりは寧ろ交際上の必要から、苦しいながら遊ばされる方が多いと見ました、美くしい衣服を着ると云よ

事に就いても多大の趣味はある、模様の工夫、色の配合、それ等を研究するのも一つの趣味である、芝居に於ても然りで、脚色の甲乙、技藝の如何を判別すると云ふ事も趣味なれば、心を以て見る日には何でも趣味ならぬはない、けれども今の奥様の多くが、果して心の眼を睜つて、これ等のものに對せられるであらうかそれは疑問です。

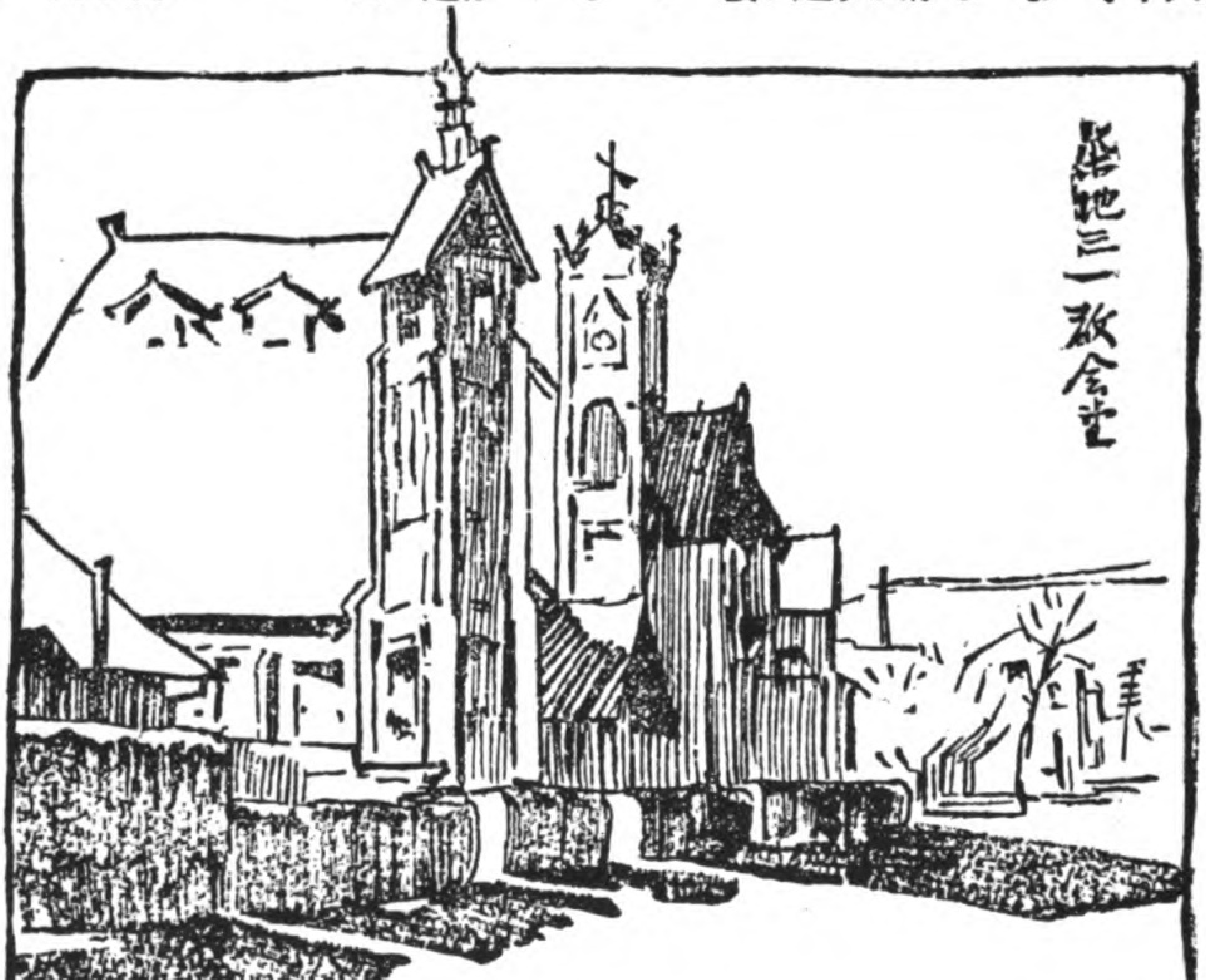
趣味と云ふよりは、先づ見得と云ふ事が先きに立ちます、美服を纏はれるにも模様の工夫や色の配合は、一切これを呉服屋の番頭の手に任せて、只其仕立上つた物を無意味に着て流行を衒ぶ、それは決して趣味ではありませぬ、只誇りといふのです、見得といふのです、自分の才を其方除けにして何でもやれば出來るのと、矢鱈に茶もやれば、花もいける、西洋料理の稽古もする、これに趣味のあらう筈はない、お隣家の奥様が此頃西洋料理のお稽古にお出でになるから、自分もやらなければ恥を掻く、お向ふの奥様が今度三越でかう云ふお召を拵へたから、此方も劣けずに白木へ盼附けやうといふ様な按排、これでは競爭の上から來た贅澤と云ふもので、其間に趣味の生れやう筈がないのです。

今では奥様の趣味と云ふものが、大抵はこの虚榮心から來た自衛に過ぎぬかの觀がある尤も趣味と云ふものは物に當つて始めて生ずるので、始めは義理一遍で修めた事が、後には其趣味と同化して、愈々益々面白くなる事は誰しも經驗するところで、始めから趣味をもつと云ふ事は先づ至難であります。

其處で今の奥様の趣味はと云ふと、よし例の虚榮心から來たものとして、隨分其數は多い、曰く流行、曰く音樂、曰く演劇、曰く料理、曰く文學、曰く美術、曰く茶、曰く花、曰く盆石、曰く裁縫、曰く刺繡、曰く編物、曰く養鷄、曰く盆栽、曰く人形、曰く猫、曰く犬と數へ來れば際限もないが、この中には實用と趣味とを兼ね、更に經濟と趣味とを兼ねて居るのもある而も以上は只普通奥様が其無聊を慰する手段から、乃至は前にも云つた通り虚榮心の高上から來た趣味です

が奥村五百子女史の愛國婦人會に於ける、山脇夫人の女學校に於けるが如きは、事業より生じた趣味、趣味から生じた事業であつて、事業の發展と共に趣味は益々加はり、趣味の加はるゝと共に事業も發展すると云つたやうなものでこれ等は趣味の尤も大なるものと云なければなりませぬ。

そんなら趣味は什麼云ふ邊に存するかと云ふに、これは其人々の心に生ずるので、一概にそれと斷定は下し難い、同じ美服を纏ふにしても、模樣の精疎、色の濃淡に各々好みがある、櫻に趣味をもつて居る人と、梅に趣味をもつて居る人とは自から別で、只



梅は其寂しいところに趣味があり、櫻は其賑かなところに趣味があると云ふ事は何人も首肯する處でせうが其趣味を迎ふる心に於て異ふばかりです。

例令ば劇の臺詞に趣味をもつ人もあれば、科白に趣味をもつ人もあるやうなもので、各々其好むところに趣味をもつのですから、あらゆる事に趣味をもつ事は六ケ敷いが、希くは江湖の奥樣方！　私は其あらゆる事に趣味をもつて戴きたいとは思はぬのであります。

それは此趣味と云ふ上に厚薄はあらう、盆栽に多大の趣味をもつて居られる方

は、茶や料理の趣味はさまでに深く感せられぬのであらうが、趣味と云ふ心を以て觀れば、一事一物悉く趣味ならぬはない、それこそ欠伸にも趣味はある、笑ひにも趣味はある、古人の心眼と云ふ訓へは即ちこゝであらうと思ひます。

あらゆる事に趣味をもつ、これがまた子女敎育の上に大なる力を有するので、一事一物に趣味を有てば、自然心が融和する、心の融和は即ち家庭團欒の道で、家庭團欒は即ちまた子女敎育の最良手段である。

△お神さんの趣味▽

さてこのお神さんの趣味となると、鳥渡六ケ敷い、それは境遇上奥様女史のやうに多くの趣味をもつ事は出來ませぬ、其また趣味を發揮して大に誇りとすべきでもありませぬ、だから多くは今日の生活に追はれて、高尙な趣味を迎へる餘裕がないと云つているのです。

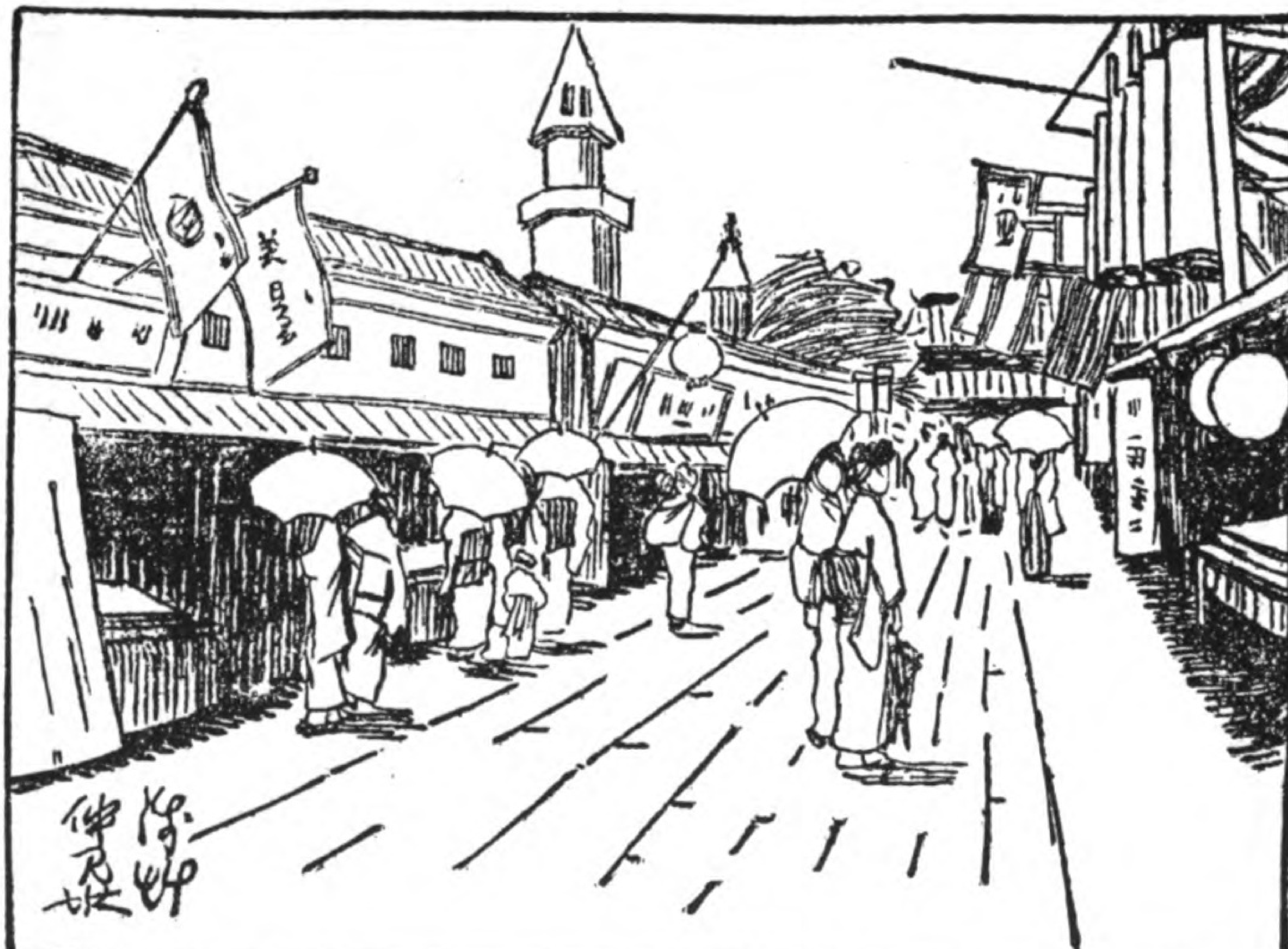
それはお神さんと呼ばれる側にも、多少の敎育を受けたものがないでもない、多少の趣味をもつて居るものゝないでもないが、糊口と云ふものゝ上から云つたら、何の趣味どころかと云つたやうな勘定で其の多くは無味乾燥な生活を送つて居る、結局は何方の趣味をも感せずして、一生を了つて居るかのやうに見える。

結び髪に袢纏を引掛けて手内職に暇なき所謂お神さん、其人に趣味を說くも何の力があらう、又其人の趣味を探るに、何の便があらう、けれども鉢植の海棠にも花は咲く、喪家の犬も能く吠へる、壁洩る月にも風情はあり、配所の花にも眺めはある道理で、乾燥した生活の中にも多少の趣味はなければなりませぬ。

例へば夫婦晩酌の差し向ひ、鰯を肴に冷飯を食ふても、其間に無量の趣味は含まれるのです、亭主と女房との間には、煉瓦を積んだ車が置かれて、H字形に挽き出された時、他人の眼からは辛くも見えやう、けれども當人同志の間に在つては、共稼ぎの趣味津々、結句幌馬車でお練りになる貴夫人の御存じあらざる味はあると云ふものです。

されぱこのお神さんなるものゝ趣味、それは夫人、奥様の如く、或物を獲てそれから趣味を手繰らうとするのではなく、冥默の間に生れるので、云はば自然の趣味とも云ふのでせう、もし此の趣味を感じ得るとしたら、これ程結構なものはないのであります。

ところがお神さんなる側の境遇から云ふと、これ等の趣味に同化する暇はないよしあつたとしてこれを感得するだけの智育が缺けて居ます、だから多くのお神さんなるものは得て墮落せざるを得ぬと云ふ有樣。



貧すれば鈍すの譬へで、天然の品性、天然の趣味を獲得せざる以上、我から迎へる趣味などは、要するに恒產あつての上の事、其日其日の生活に追はれるやうでは、到底趣味を感ずる暇はありませぬ。

田園趣味など云ふ事も、畢竟は都の詩人が偶々郊外を遊んで、其趣味を解し得るからの事で、水吞百姓に田園趣味を說いたところが、「はゝアさうか」と手を拍つ氣遣ひは決してない男はてゝら女は二布の夕涼みも、袷に畫いてこそ趣味はあれ、客觀的あればこそ

興もあれ其當人同志果して個中の趣味を解して居るか什麼かは疑問であります。

試みに無教育の所謂お神さんなるものを捉へて、「お前さん趣味を知つて居るかね」と訊ねたら、「汚點位な事知りませんで」と答へるだらう、それは先づ極端な話として、多少教育もあり、品性も高いお神さん、と云ふのも語弊はあるが、先づ其邊の御新造にも、眞個の趣味を解し得るものは尠からう、それは前にも云つた通り、彼等お神さんなるものも、必らずや其生活中に趣味を感得して居るので、只其趣味の趣味たるを理解し得ぬまでの事である。

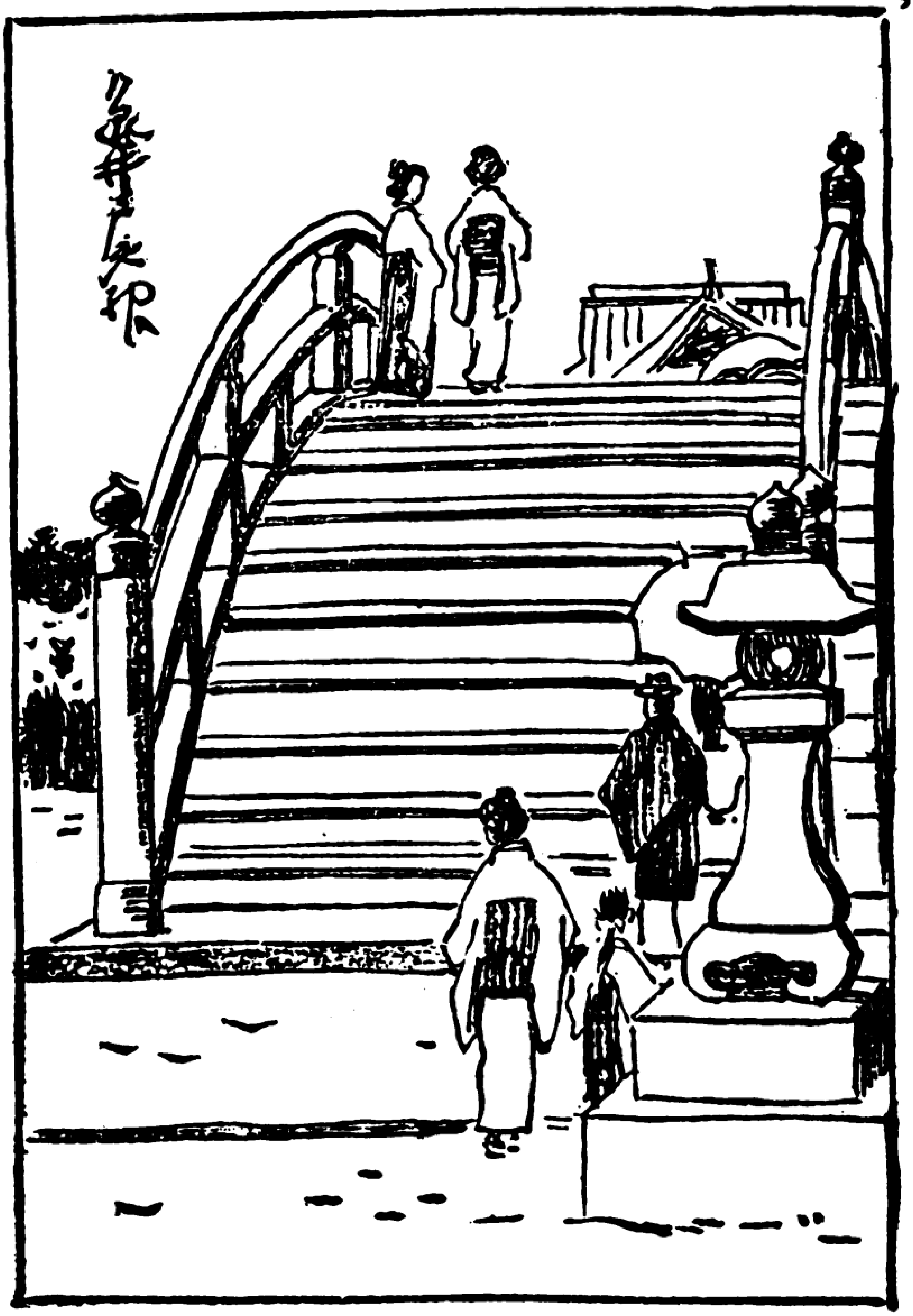
二間々口の框から直ぐに納戸もお座敷も兼ねた一室箪笥やら葛籠やら、さては米櫃までが一つ壁に押列んで、櫺子の破れから青空も仰かれる詫住居にも、尚其壁には繪葉書の古いのが粘りつけられる、石版刷の軸も下げられる、緣日物の植木鉢まで擔ぎ込まれて、それ相應の裝飾も一種の趣味ではあるまいか、奧樣の美服を纏ひ、流行を追ふて誇とする、それにも優して床しいところがあるではないか。

さる大盡が零落して裏屋住居と云ふ羽目になつた時其大盡に連添ふた舊奧樣のお神さんは、始めて人生の趣味を知つたと仰せられたと云ふ事を聞きました、それも決して劣惜しみではなかつたらう、自然の趣味快樂は、反つて此社會に存するので、先づ汽車旅行をするとしても、上等よりは中等、中等よりは下等に趣味はある、無遠慮の高笑ひ、無邪氣なる觀察、凡てこの下等乘客に見るところで、上等、中等の客と來ては、殆ど乾燥無味、何等興味を以て迎ふべき話柄すら捉へ難い、これは平常旅行者の口にするところである。

それと同じ理屈で、自然の趣味と云ふ上から云つたら、上流よりは中流、中流よりは下流に深い、只其趣味が生活難の爲めに掩はれて深い印象を與へぬばかりです。

其處で先づ大體このお神さんと呼ばれる側の趣味、それが表面、事實から列べて見ますると、曰く貸本小說、曰く演劇の立見、曰く緣日步行、曰く寄席、曰く

義太夫、曰く法界、曰く念佛、曰く遊山、曰く酒、曰く煙草、曰く花合せと云ふやうに、奥樣の趣味に比しては、殆ど霄壤の差でありますが、もし彼等にして其趣味を感得するとしたら其感應の程度は相等しいものであらうと思ひます、上流の夫人令孃にヴオリンの趣味があれば中流以下のお神さんには三味線の趣味もあらうし、彼に舞踏の嗜好がありとすれば、此れに踊りの快樂も得られる、趣味を感ずる上に於て決して甲乙はないのであるが、兎角氣に終たがるのが此社會の常であつて、趣味を感得するより以上の趣味を沒却する事が往々あります。



貴夫人が婦人會若くは慈善會に品を作つて御出席なされる趣味と、お神さんが天眞爛熳の快辯を井戸端會議に揮ふのとでは其の趣味の厚薄多少は到底比較になりませぬ。

貴夫人が紋羽二重に華美を競ひたまへば、お神さんは銘仙で流行を追ふでせう、其品の高下こそ異なれ、同じ程度に於ての誇りは格別變

つた事はあるまいと思ひます。差向ひの膳に一合の德利を添へて、これに陶然の醉を估ひ得た夫婦が、何の沮まるべきものもなければ、戸も締よせたまゝ、袂を連ねての緣日歩行き、乃至は寄席へ行くなどの快樂は、上流社會の夫人には得られぬところで、また温室の植物を培ふて、其花を賞づるの快樂は、この社會のお神さんには見られぬ快樂ではありますまいか。

△趣味の涵養▽

要するに奥樣と云ひお神さんと云ふのも、人間階級の上の問題で、趣味の上から云つたら別に差等はない上流社會の夫人にしても、花を見て美しと感せぬ人もありませう、月を觀て思出の材とせぬ人もあるでせう、お神さんと雖も花を觀れば美くしいと感ずる人もある、月を見て思出の料とする人もある、其人々の心心で趣味の感應に上下はないが、奥樣と呼ばれる側の人々は周圍の關係上、更に自個品位の自衞上、什麽しても此の趣味の涵養と云ふ事を心懸けねばならぬから自然品性も高尙となり、子女敎育の上にも大なる力を得るのでありまするが、中流以下のお神さんにあつてはこれが涵養の暇がない、只一時の趣味も趣味として滿足する位が關の山であります。

奥樣趣味とお神さん趣味と云ふ事は、其の大體に於て異つたところはないのであるが、只奥樣は趣味の涵養に便利であるだけ、花を見て美しいと感ずれば、直ぐに歌でも詠んで見やうと云ふ事になり、歌を詠めば更に今樣にして見やうと云ふやうに、漸く趣味は高上し、變化し益々深くなるのであるが、お神さんの趣味は、一旦物に當つて趣味を感じても其時限りの趣味にとゞまつて、更に新らしい趣味を迎へるまでは、前の趣味は雲烟過眼すると云つたやうなものではあるまいか、さはれ此の趣味の涵養と云ふ事は、將來社會の上下を通じ、奬勵さしたいものと思ひます。今度の博覽會などにあつても只商工業の發達を期すると云ふ次第でない、此の趣味の涵養と云ふ事に就いても、注意を拂ふべき必要があるのですから、貴婦人も、奥さまも、御新造も、細君も、お神さんも、一度は必ず行つて見て、子女敎育の一助たらしめて然べし、趣味の涵養は目下人の母たる方人の妻たる方の努むべき事で有ます。



關東の婦人と關西の婦人

黃鸝子

一　容貌

東男に京女とは昔から云ふ事であるが、これを廣義に解すれば、近畿地方の婦人は美はしく、關東地方の男子は粋であると云ふ事になる。こゝに近畿地方の婦人と關東地方の婦人を比較するに當つては、先づ其美人系なるものから說かねばなるまいと思ふ。

で、先づ關東地方とは何處からであるかと云ふと、東京を中心として、武藏、相摸、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、これに駿河、甲斐を加ふるも可からう、さてまた近畿地方と云へば、京都を中心として山城、大和、河內、和泉、攝津、丹波、丹後、播磨、淡路、紀伊、近江、志摩、伊勢、伊賀等を含んで居る、さてこの兩地方に產れ、この兩地方に住んで居る婦人其性格、其容貌、其風俗に於て各異つて居ねばならぬ地理上の見解は暫らく措き、美人系の上から申せば近畿地方は大和民族の後裔、關東地方はアイノ種族の末孫である事は今更云ふまでもなく、大和民族とアイノ種族との性格容貌がまた著しく異つて居た事は、更に云ふまでもない事である。

試みに今此二種族を比較すれば、大和民族は長い面の隆い鼻を有した種族で、比較的鬚髯に乏しいが、アイノ種族は今もアイノ人に見る通り、其多くは平い面低い鼻、大なる口、男女ともに鬚髯が多い、だから大和民族の子孫に美くしいものが出來、アイノ種族の後裔は餘り美人の產れぬのは理の當然で、東男とは其容貌に於て美はしいと云ふのではなくて、心の雄々しい男らしいと云ふところを估つたものでせう、さう考へて來れば京女も其容貌のみではない、心のやさしい、女らしいところを賞へたものとも思はれます。

何はしかれ、近畿地方の婦人は大和民族の血統であ

るが上に、中世平家は此地方に向つて熾んに美人の種を播いた。世俗では淸盛入道などゝ恐ろしい鬼のやうな法師のやうに言傳へて居るが、高山博士の說に據つても、淸盛は極めて美くしい男子のやうに見受るし、また博士の說が當つて居るものに相違ない、芝居でしても淸盛のみは恐ろしい荒法師だが、重盛以下皆好個の紳士である、桓武天皇の後裔たる平家は必らず大和民族の粹を拔いて、男も女も美くしかつたに相違ない。

先づかう平家の一門は美人であつたとして、これ等の子孫は平家沒落後近畿地方に散布した、時移り世は變つても、この美人の系統は綿々として存し、遂に今に及んだのではあるまいか。

一說によると近畿地方に美人の多いのは、是昔朝鮮の船が出雲地方の海岸へ能く漂着して、其處に歸化した朝鮮人が多く、これ等の子孫が撒布して、こゝに今日の美人系を形成したと云ふ事、これも一理ある話と思ふ。

兎ても角ても其容貌の上から云つたら、近畿地方の婦人と關東地方の婦人とは比較にならぬが、尙關東地方には關東地方の特色を有するので、關西地方に比して美人は全くないものとは斷定されぬ。

今假りに其容貌の上から甲乙を比較したら、概して近畿地方の婦人は色が白く、鼻が隆く細面で、眼が大きく、口が少さく、云はゞ人形のやうであるが、其代りに活氣に乏しい、生々としたところが見えぬ、關東の婦人は色が比較的に黑く、丸顏で、鼻が低く、口が大きく、さまで美人とは云はれぬが、何處かに活氣があつて、雄々しいところが見える。

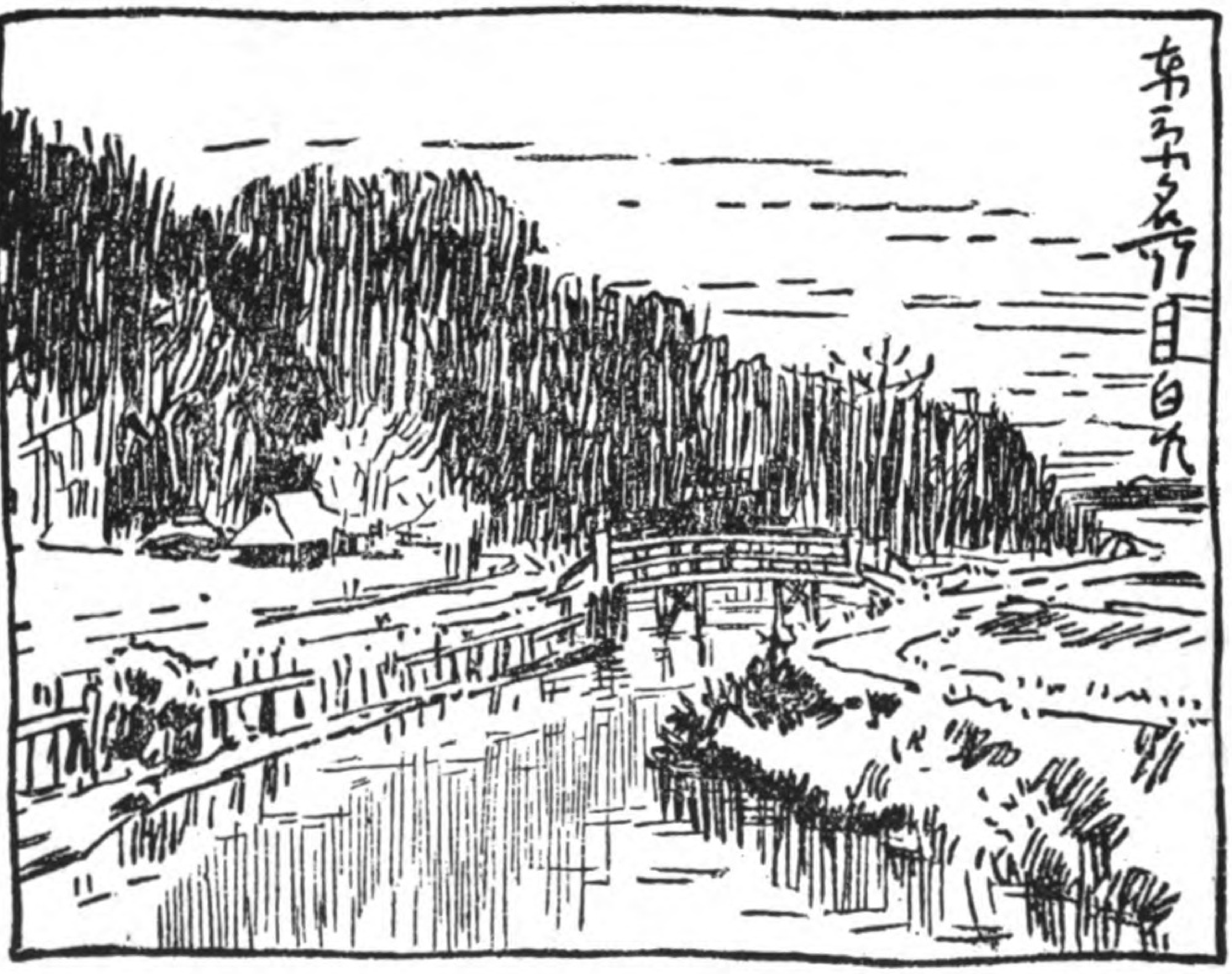
二　性格

性格の上から云ふと、關東地方の婦人は優に柔しく關東地方の婦人は意氣に富んで居る、これは男も此例に漏れぬところであるが、殊に女は此區別が明かで、即ちこれを喩へたら關西地方の婦人は湖、關東地方の婦人は海、前者を櫻に比べたら、後者は松とも云ふべきらだう、濃艶は關西地方の婦人に見るべく、瀟洒

は關東地方の婦人に見るべしである。

保守の念に富んで居る事は關西地方の婦人に多く、進取の氣に富んで居る事は關東婦人の特色であらう、

京の着倒れと云ふこと、東京の食倒れと云ふ事、凡て此特色を能く言ひ現はして居る。であるから關西婦人は人情に於て厚い、けれども保守の念に驅られるところから、進取と云ふ事は甚だ鈍い、從つて意氣と云ふものが藥にしたくもない右と云へば右、左と云へば左と云ふやうな風で、更に反抗力と云ふものは見られ



ぬが、關東婦人は進取の氣に富み、意氣を重んずる處から、時にそれが人情を沒却して、冷酷灰の如き觀をなす事が珍らしからず、又突飛狂に近い事などもある

これを假令ば君寵頓に衰へて秋の扇と捨てられけん時、黒髪ごそと剃こぼちて一首の歌に憂世を忘れ、捨てられし君の情を身に締めては、思寝の尼寺に鐘を聞きつゝ淋しき床に咽ぶなどは關西婦人の特色なるべく千金の寶は積まるゝとも思はぬ人の情に染まじと指一本づゝ斬らるゝも、自若として動かざるが如き意氣、

これは關東地方の婦人ならで爲し得ぬ事であらうと思ふ。

三　言語

關東と關西の婦人とは其容貌性格に於て著しく異つて居る、言語もまた關西地方は優に柔しく、關東地方はスツキリと男らしい、それは近畿地方と云つても必らずしも一樣ではない、關東地方もまたそれで、近畿は京都を中心とし、關西は東京を中心として云ふのであるが、要するに關東と關西とでは、其の音調に於て既に異つて居るので、近畿の調は緩く關東の音は詰つて居るから、自然優長に聞えるのと、荒く聞えるとの別が生ずる、それは東京語にヒとシとの誤りもあらう近畿もまた狐を狐と云ふが如き誤りも無いではない、雙方に訛語はある、けれどもそれはこゝに云はぬとして、其語調の如何をこゝに文字で現はすの必要がある。

近畿	關東
さうだすやろ(京都)	さうですともね(東京)

共に左樣であらうと云ふ意に用ゐるのであるが、近畿地方の調は語尾が上り、關東地方の調は語尾で詰る

そやおまへん(大阪)　おやないことよ(東京)

共に左樣ではなしと云ふ意であるが、一方は語首に明らかに語尾で拔け、一方は語首に詰つて語尾で制へて居る。

はたいはなア(近畿)　はたしはねイ(關東)

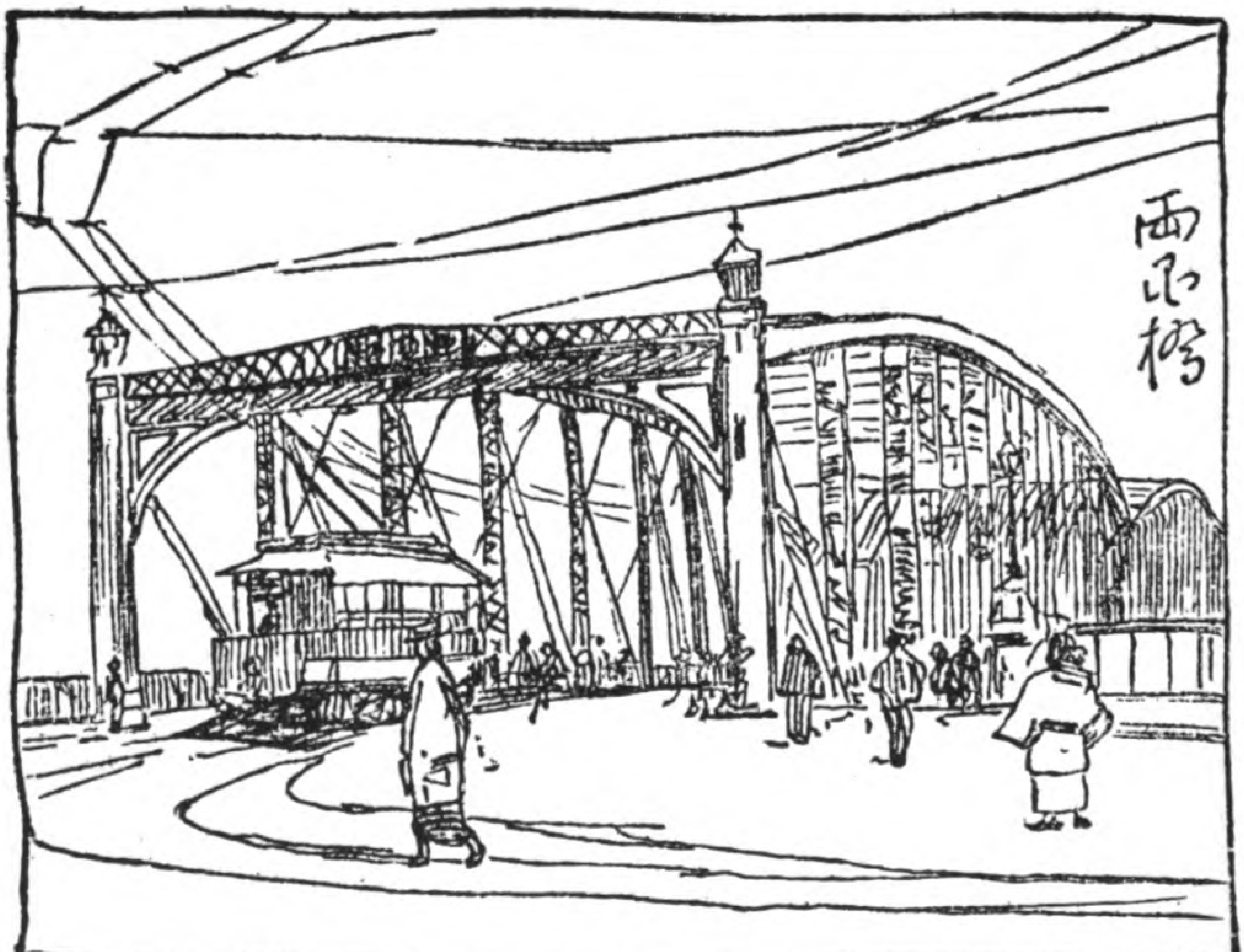
共に妾はと云ふ意で、近畿地方の婦人はなアの間投詞を語尾を上げ、關東の婦人はねイの語尾を抑へる。

此他未だこの例は二三に止らぬが、要するに關西婦人の言語はやさしく、關東婦人の言語は男らしいと云ふだけの事にとゞまる。

四　風俗

風俗は什麼であらう、今や交通機關の發達と共に、日本全國の風俗は一致されつゝあるのであるが、それは只表面ばかり、男女學生の風俗が略相肖て居るのみで、内容に於ては大に異つて居る、衣服の着こなし、

帯の締樣、凡て異ふまた、其同じ衣服を選むにしても柄に於て、質に於て、さては模樣に於て、全然趣きを異にして居る、成程其時々の流行は大阪から次第に東漸するものあれば、東京から關西地方へ流れるのもあつて、遲速はありとも、必らずこの兩京から流行し始めたものが全國へ行渡らぬと云ふ事はないが、それはほんの一時の流行に過ぎぬので、大體に於ては全く趣きを異にして居る、近畿地方の娘が俗に「だらり」と稱する帯を締める、これなとは昔からの風俗で、關東



へは及ぼして居らぬ、廂髪に蝦茶袴の女學生は、關東地方に於ても、關西地方に於ても、其言語を聞かぬ中は、少しも異つたところはないが、高島田に盛裝の娘風俗となると、大に違ふ、第一能く注意して見ると、京阪の婦人と東京の婦人とは足の運び方が違ふやうだ化粧の濃淡、衣服の着こなし、自然と其流義を異にして居る、東京で元祿姿が流行つてから、京阪地方へ追及ぼして、果ては津々浦々へまで傳播したが、今また東京に辰巳風俗とやら云ふものが芽を吹きかけて居る

いづれも花柳社會の流行を追ふに過ぎぬので、この流行は決して善良なる家庭に入るべきでないとして、早晩辰巳風俗が京阪地方を風靡せぬ事がないとも限らぬけれどもそれは一時の流行、本源に於て關東關西の風俗は自から異つて居るのである。

五　習慣

浪華の葦は伊勢の濱荻、所によつて名も變れば、所によつて習慣も自から違つて居る、東京に東京の習慣があれば、京都に京都の習慣あり、大阪にはまた大阪の習慣があるのは云ふまでもない事で、冠婚葬祭凡ていづれにか特殊の習慣が存して居る、それは土地の模樣にもよるので、先づ鳥渡したところで、東京の婦人は、風呂へ行くにも黒縮緬の羽織を引懸けて出掛けるから、まア甚麼に衣裝持ちかと思へば、晴衣なしの一張羅で、芝居へ行くにも、親類へ不沙汰廻りをするにもいつでもそれが應用される、引代へて京都の婦人は中流以上の御方々ともあらんずるに、先祖代々の傳來とも見える古布子を引懸けて濟して居るから、さてはお手元御不如意かと思へば、どうして／＼簞笥七竿に入切らぬ程の御衣裝持、いざ花見と云ふ時には、いづれの令夫人令孃とも見疑ふばかりの華美を競ふと云ふやうな對照は頗る面白い事だと思ふ、それからもう一つ商賣と云ふ上から云つても、東京の商人はある丈けの代物を店へ飾る、けれども京都の商人と來ると、何一つ店へは置かぬ、少し大きな商人になれば、注文の品は悉くこれを土藏から運ばせる事にして居る、尤も近來東西兩京は更にも云はず、全國至るところ陳列場などゝ云ふものが奬勵されて、京都商人に於けるこの仕舞込主義も追々取去られつゝあるが、一體に東西兩京の習慣を比較すると、東京は積極的、西京は消極的、東京は抽象的、西京は具體的であると云ふ事は免れぬやうだ、これを人に喩へたら、東京は豪放、西京は細心、いづれにも長短はあるので、其の習慣の異つて居るだけ、風俗、言語もまた從つて異つて居る事は、爰に云ふまでもない次第である。



女百景

佐々涙子

▲田舍には三越はあるまい

ある官吏、なる富豪から妻を迎へて、琴瑟兎も角も和合をしたが、根が贅澤三昧に育てあげられた令夫人夫の月給では例の虚榮心を充たし兼ね毎月それ以上のお小使を、實家方から送らせて居た。

それ計りならまだよいが、やがて夫は役目の都合でさる地方へ轉任の事になると、令夫人御機嫌宜からず「田舍には三越呉服店はあるまい。歌舞伎座はあるまい。天賞堂も、白牡丹もあるまい。そんな所へ行くのは眞平。」と、遂に同行を肯んせず、御自身一人實家方に移つて、再び送る令嬢の境涯、結句この方が氣樂だワ」とは、乳母に甘へての言葉である。

▲富豪の娘禁制の事

されぱこの夫の君、特の外これに懲りられたと見えて、やがてその弟子の人の、見事大學を卒業して、いよ〳〵求婚と云ふ場合になり、さる人の肝煎にて、ある銀行家の令嬢と、ほゞ話が纏まりかゝつた時、遙かに書を任地から飛ばせて、此縁談大に不承知。忘れても富豪の娘は、我に鑑みて妻に貰ふな。』と、嚴しく注告に及んだので、折角の似合の縁組爲めに破談になつたと云ふ。

その癖この令嬢の父は、富豪の中でも天晴れ紳士、母は名ある賢夫人、家庭も聞えた良家庭であるのに、……スープに舌を燒いて他のサラダをも吹き立てる、おのれの兄君の手懲りお加減、思ひやられてお氣の毒千。

▲折にはお白粉臭うなりて

同し家に育ちながら、姉は當流の紳士に迎へられ、

妹はかいなでの腰辨に緣付けり。

姉は令夫人と、案内狀にも夫と並べて書かれる身分

妹はおかみさんと、八百屋にも聲をかけられる身の上。

「おなじ同胞でありながら……ほんとに姉さんは羨ましい。」

と、ある友に洩らした妹の愚痴を、何時聞きつけてか姉の許から辨解じみた手紙が來て。その文句にこんな事が、

「ほんに其許こそ羨ましく候、御良人は日毎の御出勤ありても、時刻には必ず御歸宅被遊、夕餉も一所に樂しう物し給ふべく候、此方のはさにあらず、今日は何某の招待、明日は御殿の宴會と、夜として更けねば御歸宅は無く、其都度熟柿臭う……折にはお白粉臭うなりて來給ふを……云々。」

▲旅館へ留學

至つて氣の付かぬ細君を持つた紳士、至つて行き屆く旅館に泊まり合はせた。部屋附の女中、又至つて心利いた女で、行李の仕末、衣服の世話、云ひつけぬ中から萬事引請け、ハンケチが汚れて居れば、何時の間にやら洗つておき、煙草入が空になれば、出るまへにちやんと入れて置く。留守に來た客の傳言も、洩れ無く旨を傳へれば、代りに電話を掛けさせても、少しも誤まらずに用を達す、實に痒い所へ手の屆く世話振りに、紳士殊の外感心して、自家よりは此の旅館を居心好がり、私かに人に語つて曰く、

「おれの妻も、ちとこの旅館へ留學がさせたい。」

と。

▲女房こゝに在り

ある亭主、不圖した事から投機を試み、初めの程は大分賽の目も出たが、後には劇しく左廻りに成つて、財布は空、貯蓄はフイ、家も藏も他手に渡つて、友達には見放され、親類には愛想盡され、元の杢阿彌、裸百貫、振つても鐚一文出ぬ腕を組んで、

「あゝ酷い目にあつた。今日からもう天上天下に、おれの躰は、無一物になつた。」

と、青い息を吐く時、傍に居た女房は、ニッコリと笑ひながら、

「郎君も男に似合はない、なんでそんな心細い事を仰有る、此所に私と云ふ、郎君の女房のある間は、決して無一物とは云はせません金は無くなり、家は取られ、お友達や親類は來なく成つても、私はまだ郎君の有です。ハイ、誰が何と云つても女房は郎君に附いて居りますよ。」

と、立派に云つた言葉には、亭主殊の外感激して、思はず女房の手を取り、



『オヽ、よく云つてくれた。それ聞いて千人力だ。』

と、一旦挫けた氣を取り直し、それから夫婦共稼ぎ、一心不亂に働いて、遂に再び旗を揚げた。

▲愛は自由なり

非常に夫を愛する妻隨つて嫉妬も伴ひ、何卒夫の心の他に移らぬ樣にと、一生懸命に心を砕いた。

然るに夫はその氣も知らず、兎角餘所の花に戯れて又しても妻に世話を燒かす。

妻も初めはヤキモキしたが、ある時豁然として、『あゝ私は夫を愛して居る。愛するのは私の自由だ。けれども、夫から愛してもらはうと思ふと、いろ〳〵に氣を揉んで、折角自由で樂しかるべき愛が、不自由で苦しい事になる。こんな約らない話はない。よし、此れは夫は如何あらうと、私は私だけの自由を以て、夫を愛してさへ居れば要らぬ心配も無くなつて、眞に愛を樂しむ事が出來やう。』

と、こう大悟してからは、決して夫に厭な顏を見せず終始滿腔の愛を捧げて、夫を大切にした所が、果は夫もそれに感じてか、後には愛を妻にばかり寄せて、更に餘所の花を顧みなくなつた。

▲なまじ側に居ない方が

それは又、むしろ病的と云ひ度いほどの、大の嫉妬家の細君、兎角浮氣勝の夫の爲めに、今まで幾度逆上つたか知れない。

然るに此頃、その夫公務の爲めに、遠い外國へ赴任する事となつた、元より嫉妬深い細君、若しや此儘本國に於いては、殆んど氣絶してしまふであらうと、元より嫌ては居らぬ夫の、細君に同行を勸めると、その返答が面白い、

『イヤ、私は御留守番致しませう。なまぢお側に居ない方が、氣が揉めなくて可いでせう。』

と、別に懸引らしくも聞えぬ。

それで夫は、餘儀無く獨りで赴任して、細君は家に殘つたが、巣守の身のさぞ淋しからうと、人が心配して尋ねて行けば、細君案外顏色もよく、

『何だか此頃は、御飯もおいしく戴けて、肉が大そう着いて參りましたよ。』

と、櫻色になつた腕をまくッて見せる。

▲吝嗇が基で離縁

嫉妬に病的のがあれば、吝嗇にも病的のがあると見える。

ある軍人の細君、これも立派な將軍の娘だが、持つ

て生れた大の吝嗇、下女には燒芋を買つてあてがひ、夫には豆腐以上の菜をつけず、自分も三度の所を二度飯にして、一度分は郵便局へ預けてしまひ、たま〳〵夫の友達が來ても、たか〳〵が澁茶一杯。飯時が來ても膳を出す事か、夫までも饑死にさせかねぬ仕末、元より軍人肌の夫の何でこれが辛抱出來やう。

容貌に申分無く、敎育もあれで澤山だが、何分その吝嗇ではと、遂に離縁になつたとやら。



▲家庭次第の奉公

ある家の娘、わざと慶庵の手にかゝらず、お出入の商人の世話で、さるお邸へ小間使に上つた。

然るにそのお邸の奥様は、大の好人物ながら年來の病身に、萬事をお妾の何某にまかせて、自分はあつて無きが如く、殿様はまたそれを好い事に、外にもまた美しいのを圍ひ、大方は家を外。たま〳〵御歸りの事があつても、奥様には荒々しく、お子達にも餘所々々しく、只召使ひの女中共には、い

つも程の好い事ばかり。

娘の母これを聞いて、半月ほどに下げてしまつた。

そして世話した者への口餘に、

「うちの娘は行儀が見習はせ度いのですから、もつと小さいお邸でもよろしい、何卒御夫婦間のお宜しい所へ、改めて御世話下さいませんか。」

と、あつた。

▲餘所から借りた鎹

十年連添うて居ながら、ついにまだ子の無い夫婦。

長火鉢のさし向ひも、果は欠伸の移し鏡となつては、なんでその家が面白からう。

あれほど堅人の亭主が、此頃では兎角夜歸りが多く歸つてもろくに物も云はぬ樣子に、時態穩ならずと見て取り、女房肝膽を碎いた揚句が、夫の知人の家に、此頃もまた子の出來たのを幸ひ、是非共貰ひ受け度いと申込んだ所がつい口が辷つて、

「可愛い玩具が出來ましたら、夫の夜遊も直りませうか。」

と、云ふたら、先の母親ムッとして、

「餘所から借りた鎹では、所詮長持は致しますまい。」

と、とう〳〵斷つてしまつたとやら。

▲褄取つた手で造花の稽古

元は左褄を取つた身の、好いた客の所へ引取らるべく、遂に落籍はしたものゝ、先方の親が不承知、此方の兄に惡いのがあるので、所詮一つには成れぬ事になつた。

けれども一旦足を洗つては、再び卑な稼業はいや、と、邊鄙な山の中に漸次住して、一生堅氣に送り度い斗りに、此頃流行の造花を習ひ覺え、わづか斗りの賃錢に、細くも煙を立てゝ居る。

所へある日尋ねて來たのは、兼て知合のさる紳士の細君、一時は何新道の何某と歌はれて、絹布に許り包まれて居た身が、今は布子の筒袖を、糊だらけにしての内職に、不憫の涙催すにと思へば却て冷笑の樣な口

話に、
「お前さんも好事では無いか。彼の人と一所に成れないなら、又元の場所へ出るが可いぢやないか。何もそんなにしみッたれて今更内職なんぞする事はあるまい、ほんとに私なら疾うに出勤して居るよ。」
と、さも歯痒ゆさうに云つた。
歸つたあとで此女その後影を見おくり。
「まア……あれでも奥様と云はれて居るのだらうか、素人衆と云ふものは、ほんとに恐ろしい了簡なものだ。

△悋氣は損氣



さまで不和でも無かつた夫婦間に、不圖魔がさして夫は年甲斐も無く、近所の家の娘と通じた。女房は悋氣の炎を燃やし、家内漸く穩ならず見えたのを、夫の友達共見るに忍びず、熱心に忠告に及ぶと、夫は只恐縮の他無く、やがて娘とは手を切らうと成つた。
所が女房は、それまでが待ち切れず、人にさへ會へば愚痴たら〳〵、口惜しさを觸れてあるくに、評判忽ち八方に廣がつて、自然夫の名譽を傷け、先の娘も瑕物になれば、今は兩人捨撥となつて、遂に家に寄りつかず、友達も今は調停の餘地を失つて、眉を皺めては高身の見物——女房獨り

躍起となつて、罪も無い子供に當たりちらして居る。

▲それでも子供が五人

親と親との許嫁、好きも好かれもせぬ間を、無理に盃強られて、屛風の內へと押しやられた。

その友にハイカラ紳士あつて、

「可哀さうにあの男は、機械的の結婚をして、遂に一生の幸福とも云ふべき、家庭の快樂を犧牲にしてしまつた。」

と、我事の樣に呟いた、

それでも案じるには及ばぬ事よ。爾來七八年何の風波も無く、ハイカラ紳士はまだ獨身で居るのに、此家にはもう子供が五人。

▲貴婦人氣質

あの所の園遊會に、貴婦人達大勢招かれて來た。

やがて食堂が開くと云ふ時、接待の者手ぬかつて、甲の貴婦人より先へ、乙の貴婦人を先に案內した、直し乙は甲に對して、一段次なるべき人の妻である。

で、其時は事無く濟んだが、爾來甲の貴婦人、園遊會が嫌ひになり、宴會も席禮の有る無しと聞いて初めて案內に應ずる樣に成つたとやら。

▲成金の奧樣

夫が逼塞して居る間、覺えた腕の活花を指南して、懇意な所を此方から賴みまはつては、若い細君や娘達に、云はゞ押賣稽古をして居た所、不圖運の針が向いて、夫は忽ち成金の仲間入りおかみさんも奧さまに成り濟まして、表の看板も取り外ずす斗りか、家も立派な新築へ移つた、

所へわざ〳〵尋ねて來たのは、以前稽古に來たある所の娘、

「まことに濟みませんが、明日宅で御宴を致しますから、お座敷へ活けに來て下さいませんか。」

と云へば、奧さまツンと御不興の體で、

「出入の花屋を遣はしませう。」

▲姑の遠慮に油断すな

姑はやかましい物と極まつた樣で、中にはやかましくない許りか、諸事嫁に遠慮勝ちの、云ひ度い事まで云はないのがある。

但しかう云ふのが油断はならず、うつかり嫁が附け上つて見よ、家に居てこそ處女の如き姑御、餘所へ行つては脱兎の如く、立板に水の勢で、平生の不平たら〳〵、あらひざらひさらけ出して、嫁の蔭言に溜飲を下げる例、隨分世間に少くはない。

これを思へば、世間への自慢にせうと、常から嫁を仕込まう爲めの小言を云ふてくれる姑御とは、嫁としては難有がらねば成るまい。

▲女は餓上る

有婦の夫の姦淫も、共に罰せよとある例の建議案。一度通過させて見るがよい。上、大臣大勳位から、下八兵衛熊公に至るまで、忽ち縲紲の身となつて、殘る社會は女斗り――但しその女共が、皆餓上る事であらうとは、さる當世の紳士の惡口、こゝに一寸拜借して敢へて世間の女さん方に紹す。

▲一人で一皿

まづい物ながら、一人で一皿占めて食べるがよいか甘しい物ではあるが、二三人の中に一皿より無いのがよいか、男は知らず、女はやはりまづくても、一人で一皿が食べたいもの。

但し此所に皿の食物とあるは、つまりその夫の事だまづくても一皿を、一人に食べられて動かぬ夫、其名を石部金吉と云ひ、甘しいが一皿の物は、二人にも、三人にも食べられんとする夫、其の名を光る源氏と云ふ。

兎角人にはまづかれ自分にはおいしかれ。そして全き一皿に、自分一人の腹肥やして居るが、家内安全、天下太平。

滋養物に就ての注意

◎肉の良否を選ぶには先其色を見るべし肉中の脂肪に光澤ありて餘りに收縮せざるは良肉なり、其桃色なるは疾病あるの徵なり、暗褐色を帶びて臭氣あるは病死せるものと知るべし、其光澤なきは陳き肉なり、軟かにして溫氣を帶び脂肪が粘液の如くなりたるものは腐肉と知るべし。牛肉は其場所によりて其味を異にするは一般の知る處ろなるが牛の鞍下の肉、羊の股肉、熊の掌肉は古來最も人の賞味する處ろなり、且つ獸肉は屠りて直ちに調理するよりも二三日間空氣に觸れしめ、多少の分子を去りて後、食ふ時は却て其味ひ美なるべし。鳥肉も又數時間を經て後に調理するをよしとす、たゞ魚肉のみは之に反して最も鮮がよし。鳥肉類にて、鷄、鴨、家鴨等の肉は其滋養、獸肉に亞ぐものなり、水禽の肉は其脂肪分多きに過ぎ、消化遲く且つその滋養も獸肉に及ばざると遠し。

◎鳥肉を選ぶには第一に其鳥の眼と嘴とを見るべし、眼中活るが如くにして羽毛の容易に脫落せざるものは鮮しきなり、眼中に水氣を帶び嘴中に粘液を生じたるは日數を經たるものなり、脂肪水液の浮びて羽毛を拔きくに莖の先に脂肪の附着せるものは、殆んど腐敗に近きものなれば廉くとも買ふべからず、又肛門暗褐色に變じ、粘液の泄れ出るものはタトへ鮮しきものと雖も病死せるの徵なれば取るべからず。

◎鷄卵鶩卵何にても滋養の効能は相均しきなり、されど鷄卵こそ尤も蛋白質に富めり、但消化は料理法によりて遲速あり、生卵は最も速く、半熟之に次き、能く煮若しくは燒きたるもの最も遲し、故に卵は煮炙の度餘りに過ぐれば宜しからず、又卵の新古を驗するには水凡そ一合に鹽二食七を加へ其中へ卵を投ずべし鮮しきは水底に沈み、次は水中に漂ひ、陳きは水面に浮ぶべし。

◎魚類は滋養に於て、獸鳥の肉に及ばずと雖も、消化に於て勝るを以て胃弱者には營養に益あり、然れども鮭、鱒などの肉にはまゝ寄生蟲あり過ちて食すれば腹中に入りて繁殖するとあり、故に右に屬する魚類の鱠は成可食すべからず、又蟹、鰕の如き食傷し易きものは暑氣の甚だしき節などに食せざるをよしとす。

◎魚肉を選ぶには其眼と腮とを見るべし。眼膜、水晶の如く腮肉濃紅色にして鱗子の固く着けるものは鮮らしきなり、眼膜白色を帶び腮肉褐色にして鱗子の脫落つるものは鮮魚にあらず、又大魚にして全身を見る能はざるものは其肉片の色を見るべし。鮮かにして光澤あるものは良肉なり、光澤なく汗の如き水分子の浮びたるは殆んど腐敗に近きものなり、魚肉は殊に腐敗し易きものなれば暑氣甚しき時はよく注意して購ふべし。又貝類は滋養魚肉に次ぐものなれど大方は消化し難きものなれば老人、小兒、胃弱者は食はざるをよしとす。

世界各國 婦人談話會

黄鶴子

ゴシック造りの一會館、入口には草花と緑葉もてアーチ形に裝飾し、萬國の國旗を蜘蛛手十文字に懸け渡して五彩爛然たり、館内は廣さ數千人を容るゝに足るべく、前面には華麗なる花毛氈をかけたる卓を据へ水注、コップなど配置正しく、傍らには、紅紫爛熳と百花咲き亂れたるを七寶の大花瓶に挿し、壁上の花紋は背面の金屏風と映り合ひて一際莊嚴に見へたり、會場には世界各國より參會せる婦人一堂に充ちて、異れる容貌、殊れる服裝、さながら春の野に百花の咲き誇れるがごとく實に異様なりき、間もなく開會の合圖とおぼしく振鈴の音、滿場に響き渡り衆目一齋演壇に注げる折しも、一人の貴婦人徐々と現はれたり、その扮裝を見れば

黒羽二重裾模様の紋付を裾長に着なし、下には白綸子の二枚重ね、同じ襟の肌着、丸紋に光琳風の淡彩したる花物を織り出したる倭錦の帯の上には、更紗模様の紐に寶石入り浪の花の金具附きたる帯留を締め。恰好よき丸髷、一條亂れず、麗々として光れるに、本鼈鼈甲臺高蒔繪、葦手風疋田入りの菊の模様ある櫛笄を挿し、廿金に白金の象嵌、片切彫にて玉堂富貴の模様を現はしたる根掛、珊瑚、金脚の後挿など、寸分隙なき髪飾り、左右の手指に光るはルビーかダイヤか。年の頃は二十七八にもやあらん。黒目がちなる眼いと涼しく、鼻筋通り口元締り、痩せず肥えざる肉附に薄化粧したるさま、世界萬國の婦人の前に立ちて天晴れ恥かしからぬ風采と見えたり、しとやかに會釋して、さて聲爽やかに説き出すやう。

滿堂の淑女諸君此度我邦で婦人博覽會を催されましたのを幸に、世界各國の婦人が一堂の中に集つて、相互に婦人に關する意見を述べ、また各國の異風奇俗を語り合ひましたならば、さぞ趣味のあることでせう。のみならずその趣味の中に自から學術上多大の利益もあらうと存じまして、不肖を顧みずこゝに本會開催

の企てを致した次第でございます。然るに皆さんは千萬里を遠しとせずして、かくも盛んに御參會下されましたのは、私に取つて此上もない光榮と存じます。
皆さんは定めて有趣有益な話題を澤山に御持參下さつたことゝ存じます、そこで皆さんにその有益なる御話をこの席上に於て一つづゝ御演説を願はふと存ずるのであります、就きましては何分世界各國からの御集りで御覽の通り、澤山な御人數でありますから、御一人に充分の時間を御願ひ申すといふことは遺憾ながら出來兼ねまする。それ故此席上に於て皆々樣に五分間の演説を願ふことに取りきめましたから何卒其で五分間の御演説中に於て皆樣の國々に於ける固有の風俗と特殊の習慣とを御話になつて、一般婦人の心得になる樣にと只管に御希望致す次第でござりまする。
辯舌よどみなく述べけるにぞ、拍手の音は急霰の如くに起りける、さて第一に登壇せるは

▲男女の交際と父子の義絶▼

只見る金髪碧眼の美婦人頭に白き羽毛に星の如き寶石を飾りたる帽を戴き、空色のドレッスに同じ色のスカーレットを長く地に曳きつゝ楚々として演壇に登れる其樣艶麗いはん方なく、誠に天人の來降とも見まがふばかりなりき。
私は今日我が同盟國なる大日本の首都に於て開かれたこの趣味あり利益ある婦人大會の一員として參列することを得ましたのは、誠に光榮と存じます。思ふに世界各國に於て、婦人が或る目的主義の下に團體を組織し居るのは少くはありますまいが、かやうに世界各國の婦人が悉く一堂の下に會合したことは、空前の事でありませう。隨つて此の會の効果は唯婦人の上に止まらずして、歴史學地理學人類學などの上にも定めて多大の利益を與へるとであらうと思ひます。ところで私も隨分澤山にお話の材料を持つて參りましたのですが、先刻會長のお説の通り私一人お饒舌りをする都合にまゐりませんから、唯我國の青年男女の交際に就いて、お話しを致しま

せう。私の國では結婚は條件付の自由結婚でありまして、年頃の婦女は或る條件の下に自由にその夫を選擇し得る幸福を持つて居ります。隨て妙齡の男子と女子との交際についても干渉主義ではありませぬから其の父兄たる者が束縛は致しませぬ。斯樣申せば水の出ばなの若い男女を勝手に交際をさせておいたならそれこそ間違ひが多いだらう、まだ正當の結婚をしない前に野合するといふ弊が多からうなどと、御心配なされるでせうが、決して左樣な事はござりません。ある日本の紳士が私の本國へ參られました時、

女學生特殊風俗



かういふ事をいはれました、日本も近ごろは歐米の風が流行つて來て、青年男女が交際を初めるやうになつて來た。これは絶對に惡いことではないが、どうも日本の若い男若い女は、ちよと交際すると、すぐに其の間に變な關係ができる。どうも英國のやうにうまくゆかぬ。これは日本の青年男女に自制心が乏しいのか、但しは他に原因があるのか。甚だ困つたものであると申されました。併し皆さんに御斷りして置きたいのは私の國では義絶といふ一つの社會的制裁がある事です。これが即ち青年男女間に間違ひの

少い一ッの原因だらうと考へます。
勿論我國では結婚の契約は全く本人同士の自由ですが、併し其の前途の見込もなく、確かな契約も成り立たず、且つ親にも話してない前に、野合などいふ事は決してありません。若しもさやうな後先の考へのない不品行な事をしたならば、親は其の子を義絶致します。よしや心の中では義絶したくなくても、社會が許しません。不品行な子を義絶もしないやうな人物は齒することが出來ぬといふ歴然たる制裁があつて社會から擯斥せられて、終には自分の社交上、生活上、營業上にもさし響いて參りますから、若し其の娘に不都合な事があれば親は容赦なく義絶を斷行し朋友は容赦なく義絶致します、その義絶せられた娘はタトヱ他家に下女奉公をしやうと思つても誰も保證人になつてくれる人はない。終には流浪せねばならぬ境遇となります。かやうな一つの制裁があるために、若い女と男と自由に交際させておいても墮落する者が少いのであらうかと存じます。

▲女尊男卑の弊▼

之に次ぎて、純紅色のドレッスに同じ色なるスカーレットを裾長に着なし、頸にも胸にも袖口にも裾にもレースの飾りいと精巧を極めたる上に惜げもなく金銀寶玉を鏤め、頭には飾り帽を戴きたる婦人、いと活潑に壇上に進み、その薔薇色なる顏に愛嬌を浮べ、朱唇を動して說き出すやう。

　私は世界の富國と言はれた處ろの婦人であります凡そ世界各國の中で私の國ほど富の權力と勢力の偉大なる處ろはありますまい、又それと同時に甚だしき女尊男卑の國であります。かく申さば東洋各國の御婦人方は、それは誠に幸な事であらうと申されるでせう。私とてもそれを思はぬではありませぬ。併しながら公平に考へて見れば私の國のは、あまり極端に過ぎては居ないかと思ひます。元來私の國は殖民時代に女子が最も少かつたので非常に珍重（尊敬ではありません）せられたのと弱者を助けよといふ

宗教上の教とによつて、今日のやうに女子が持てはやされるやうになつたのであります。私はわざ〳〵日本までまゐりまして、我が本國同胞の惡口を申すではありませんが、どうせ此の會には女子の天職といふやうな論題も出るであらうと思ひますから、こゝに私の國の婦人の内情を少しばかりお話し申すのであります。さて私の國でも上流社會はさすがに氣品も高うございまして、眞に家庭の本尊たる品格を保つて居りますが、中流及び其れ以下のものになりますと、まるで世界の特權を自分一人に授けられたかのやうに思つてむやみに鼻を高くして女權など申して何事にでもさし出がましくまた夫にばかり働らかせて自分は樂な方に廻りたがつて居るのもあります。何か氣に入らぬ事があれば直に離婚の訴を持ち出すといふやうな有樣で、終には女子に參政權を與へようとまで言ひ出す者が現はれましたこれには夫々理由の有ることでせうが、私共の考によりますると子女を養育し家庭を整理し夫をして内顧の憂なからしめるのが女子の天職の第一ではなからうかと思ひます。現大統領ルーズベルト閣下に於ても大いにこの邊



女學生特殊風俗

に心配をされて盛んに家庭圓滿主義を皷吹されるのでありますそれ故近頃は同志の者も漸々出來まして頻りに之を唱道して居るわけでございます。つまり東洋の男尊女卑も極端ですが、私の國の女尊男卑もまたあまり極端かと存じます。皆さんは米國の婦人といへば皆お轉婆ばかりと思召すかも知れませんが私のやうな考を持つて居る者も中には少くないといふことを、お認め下されたいのでございます。

▲持參金に衣食する陋習▼

さて次なる婦人は寶石とレースとにて盛飾したる上衣の袖短くして僅に臂に達し、手首には長き手袋を嵌め、胸はつき出で、腰は切れんばかりに細く、世界流行の粹を集めしといふ艶なる絹地のスカーレットを裾長く曳き、黃金色の縮れ髮にはうるはしき鳥毛と輝ける寶玉とを飾りたる帽を戴き。眼は水晶の如くに光り色白く皮膚滑やかなるが上に巧妙なる美顏術を施したりとおぼしく容貌さながら名玉を磨き出せるが如し。

嫣然一笑して鶯舌巧みに說き出す。

私は世界の都と言はるゝ巴里の婦人であります。前に婦人の結婚のお話しがありましたから私も聊か結婚に付いて申述べやうと思ひます。私の國は英米とは、よほど樣子が違ひまして、青年男女の交際を甚だしく束縛致します。これは宗敎上、社會上やかましき制裁でありまして少い娘が少い男と手を取つて散步するなどのことは決してありません。常に母の嚴重なる監視を受けて一擧一動その許可を受ける程ですから、自由結婚などゝいふことは全くありません隨て男子から直接に少女に結婚を申込などは甚しき無禮の事と致してをります。それ故結婚は大抵媒介人の周旋によつて成り立つものでございます。その儀式は中々莊嚴なもので他の基督敎國の如き簡易なものではありませぬ、就きましてはこゝに一つ申しておきたいのは婦人の持參金の事です。外の國々でも定めて持參金の習慣がありませうが、私の國では、ことにひどいのであります。御承知の通り

私の國は隨分生活の困難な處ろですから、夫婦持ち寄りの世帯でなければ安樂な生活ができません依て男子は皆身分に應じて、女の持參金を狙ひ、中等社會でも數千乃至數萬フランの持參金を要するといふ有樣です、もし之がないと、相當な美人でも又相當な賢婦人でも適當の配偶を得られないのであります。こういふ事が主なる原因となつて、お恥しながら我國の婦人の裏面は甚しく腐敗して居ります。

▲新夫婦の目隱し▼



女學生特殊風俗

英米佛國婦人の服裝は、或は華麗を衒ひ、或は淸楚を旨とし、いづれも數寄を凝らし、流行を追ひたるものと見えしが、今壇上に顯はれし婦人は顏色こそ白けれ、化粧したりとも見えず、裝飾なきにあらねども人目を惹くほどにもあらぬ質素なる服裝、これなむ勤儉を尙ぶ獨逸の婦人にぞある。

結婚の御話ついでに私も一つ申上ませう持參金は結婚條件の必要なるものとなつて居ります。併し藝のあるものはその不足を補ふことが出來ますので、これが佛國に比して幸福な點でありませう。さて其の結

婚の儀式は別に變つたこともありませんが、私の國の田舎に參りますと一寸奇習があります。それは祝宴の席上で祝餅音樂茶番などが濟だあと、新夫新婦の目隱をして中央に立たせ、未婚の男女がその周圍を唱歌しながら歩き廻つて、やがて止まりますると、中央の二人は各或る一人を捕へるのです。その捕へられた者が、此の次に結婚するというて大に緣喜を祝ふのであります。かういふ事は他國には例の少いことだらうと存じます。

▲纏足の眞理▲

次なる婦人は空色緞子の寛濶なる筒袖、袖口と襟とに刺繡おきたる上衣の胸部を紐釦にて掛け合せ、下部には緋緞子の袴、裾のあたりに二條の線を縫ひ付けたるを着け、其の上に紫襦子に草花と蝶との縫模樣ある袍子裙を纏ひ、足には錦の襪、刺繡したる沓を穿き。頭には金銀の瓔珞下げたる簪を插し、鬢角剃り上げたる顔には厚化粧して、眉はさながら蛾の如く、耳には黄金の輪を嵌め、これに金銀珠玉を懸けたり。頭飾といひ服色といひ、鮮麗華美、人目を眩するばかりなるは、問はでも淸國の貴婦人なることを知るべし。

私は日本と唇齒輔車の關係ある國の者でありますが皆さん御承知の通り地域の廣い國でございまして、各地の習慣風俗はそれ〴〵異つて居りますから、それを一々お話し申すことは、出來難いのです。それ故お珍らしうもありますまいが、我が國の婦人に取つて、此の上もない有害な纏足の事をお話し申して皆さんの御同情に訴へたとい存じます。元來此の纏足といふことは、おもに中流以上の婦人に行はれるのでございます。(下等勞働者は無論、滿人及び廣東人には此の弊風はありません)ところが私は漢人でありまして、家庭も相當の資格がありましたから、纏足の苦痛を受けまして、御覽の通り、室内の步行も覺束ないほどであります。今日こゝで皆さんの御姿を拜見致しまするに、千種萬樣ではありますが、私のやうな足をして居らるゝお方はお一人も見受け

ないやうです。

この纏足をしまするのには、通常六七歳からとりかかり先づ足趾を下へ屈げて纏脚布といふ布片で、強く踵に巻きつけてそして狭小な靴を穿かすのであります。さうしますると、血液の循環が止つて、局部が脹れ上り大層痛みますが、決して之を解くことを許さないのです。かやうにして五六年間も續けまするると、足趾は皆蹠の中央へくつ付て、てうど馬の足のやうな恰好になつて、踏みつける力を失つてしまふのであります。が、私の



女學生特殊風俗

國では、こんな歩るき方でも、運歩などゝいつて、品位があると貴ぶのでございます。近年此の惡弊を矯めやうとして獨立天足會といふものも出來ましたが、まだ容易に止みさうにもありませぬ。

處で皆さんは一體この纏足といふものは何の必要あつてかゝる奇習を強ゆるかと仰せらるゝのでせうが表面上の理由は婦人の貞操を保たしむる消極的の政略、即ち婦をして仇し男に走らしめざるの策だと申しますが、眞理は却て意外な處にあるのであります、それは只今此の席上で

申述べる事を憚ります、が兎に角、男子が婦人に對して恐ろしく翫弄の意味を持つたものだそうであります。

▲洗濯に忙殺。賄賂を食ふ▼

次に現はれたる婦人は、黄色な支那緞子に白羽二重の襟を着けたる筒袖、長さは乳のあたりまでに過ぎず、袖口と襟と脇下とに紫色の縁とりたる上衣（チヨゴリ）を上部に着。下部には絹地薄桃色の裳（チマ）を穿く。髪は後頭部にて束ね、頭上には絹織物と獣皮とにて造り前後に赤の總を垂れたる額捲を戴き（此のアヤミの後部には又別に支那緞子にて造りたる瓔の如きものを垂れ、これに琥珀、白玉、南京玉などを飾る）刺繍したる支那靴を穿き、腰のあたりに羅紗製の巾着（トモニー）を懸く。此の婦人の顔色容貌、我が日本人と見まがふばかりなれど、其の生え際は殆んど一直線をなして本邦婦人の富士額なるとは、大に其の趣を異にす。口を開きて徐に説き出すやう。

私は大日本帝國の羽翼の中に保育されつゝ生存する處の一獨立國の婦人です私の國では洗濯といふことが婦女の重要なる職務でありまして、一年中それに追ひまはされて居るのでございます近年は日本勢力の普及によりまして追々色物や縞物やを用ゐるやうになりましたが、古來の常服と申せば、男女共に白衣でありますから、すぐに汚れ目が見えます。それ故一週間乃至十日目には之を洗濯せねばなりませぬ。之を洗濯しまするには、大抵衣服を河水に浸しおいてやがてそれを平滑な石の上に取り上げ、一尺ばかりの丸い棒で幾度となくうちたゝきますそして垢膩が除れると、之を丘の上に駢べて晒し乾し、それを家へ持つて歸つて毎晩からんころんと夜深までも擣つのでございます。夫故私の國では萬戸擣衣聲が毎夜響き渡るので、唯秋夜に限つたわけではありません。

それから私の國は誠に意氣地の無い風習で雨天の時には容易に外出を致しません、元來私の國では、

降雨の時には油紙で造つた笠冒といふ圓錐形の帽子覆があるばかりで、其の外に傘や雨合羽といふやうな雨具はありませんそれ故、輿に乘ることの出來ない者は、雨の日には家に閉ぢ籠つて居るのであります。なんと優長なことではありませんか。併し今日では日本國の開發指導によつて、社會の狀態が日に日に開けて行ますから、こんな習慣も追々となくなるであらうと思ひます。

それから私の國の婦人の上衣は、此の通り短いものですから、下等の勞働者は皆、兩の乳房を出して居るのです。これは乳を蔽へば乳汁が腐るといふ迷信から起つたことなんですが、日に燒けて、てうど茄子のやうな色になつたのを、上衣と裳との間にぶら〳〵と出して居るのを、他國のお方が御覽になつたら、よほどをかしく思はれるであらうと思ひます。



次に私の國の奇習を申上ますると小用を致しても手を洗はぬ事です、小用は皮膚のきめを細かくするといふので、それを無

暗に皮膚へぬりつけますので、日本から舶來の小町水や美顔水よりも効能があると思うて居るのです、思ふに小用を皮膚へ塗るといふことは、何れの國にも例のない事であらうと考へます。いかゞでせうか。尚は一つ言語の上に就てお話しを致しませう。それは「喰ふ」といふ言葉の用法の廣いことです。飯を食ふ、パンを食ふ、魚肉を食ふ、野菜を食ふといふ外に水をくふ、烟艸をくふ、藥をくふなどゝもいひまして、賄賂を取つた者があれば、あの男は何貫文くふたといふのであります。これも珍らしい言葉づかひであらうと思ひます。此の外冠婚葬祭についていろいろ特殊の習慣もありますが、會長のお希望の通り別紙に認めさしだすことに致しました。

▲結納は牛乳代▼

次の婦人は袖の小なるいと短き上衣に、短き下衣を着、長き膝に達する靴足袋に半靴を穿き、頭髮は上部を殘して、まわりを短く刈り、釜敷やうのものに南京玉を飾りたるを戴けり。

私は昔から日本とは御親密に御交際を願つて居る暹羅の婦人であります。私の國では男子を除く外、裁縫した衣服を着て居る者はありません。私の着用して居るのは禮服でございますが、通常、女は幅三尺に長六尺乃至一丈の晒布を腰部に纒ひまして、其の端の長く垂れ下つて居る所を腰に挿み、尚ほ其の餘を捻つて犢鼻褌として。上部には幅一尺四五寸長四五尺の布を背から乳へかけて巻き、その上をまた三尺に六七尺位の布で巻きつけて居るのでございます。そして貴族の外は門外へ出まするのに皆徒跣でございます。家の中には絨緞や籐筵を敷き、男でも女でもどんな身分のよい人でも皆胡坐をかいて居るのです。

上流社會では家庭教育を行ひますが、其の教科書といふのは一冊の淫猥なる小説であつて、之を母親が、横臥しながら其の娘に教へるのでございます。男の兒はこの外に六冊の小書籍を教へるのですが、

これだけ習つたならば、それで大博識家と仰がれるのでございす。次には婚姻の事でございますが、これは大層鄭重なもので、無論父母の免許を要するのです。それで友人を媒介として往復談判一年に渉ることもある位です、いよ／＼話が纒まれば、カノム即ち結納を贈るのですが、それが牛乳代といふ名義なんです、これは其の娘を幼時から養育してもらつた恩を謝する意味でございます。そして結婚後子供が出來ると、嫁の親元から、其の結納金を婿の家へもどして、育兒の料に充てるのです。これ等は他國に例のない風習であらうと思ひます。結婚の日は豫め卜者に日を選せしめるのです。さて其の日になれば嫁は父母知人に擁せられて、夫の家に行きます。すると僧が來て居つて 其の僧が手に聖水を執つて默禱し、後之を新夫新婦に濺ぎかけます。それで式が濟むので、其のあとで、宴を開いて客を饗應するのでございます。私のお話はこれでおしまいでございます。

▲西洋料理の元祖▼

次は印度婦人にて黒く且長き頭髪を眞中より別け後部にて結ひたる髷に、寶玉を飾り。軀幹長大にして鼻隆く眼大きく、口廣く、唇厚く、顏も黄色に塗り、眼のふちは錫と油とにて塗る、綠色の絹の、緣に刺繍ある敷布の如きものを、くる／＼と身に纒ひ。耳、鼻、頸、腕、手首、指先、足、踝、拇趾に至るまで金銀、寶石、象牙、角貝などを飾りつけたり。

私の國は歴史が古い上に人種もよほど複雜して居りますから、一々その風俗習慣をお話し申すことは僅少な時間では及ばないことです。それ故少しく食事について申述べやうと思ひます。それは外の事ではございません、ライスカレイの事です、日本ではこれを西洋料理として召し上るさうですが、あれは私の國の常食でございまして、椰子の實、蒜、葱鹽魚、生魚などを煮て、胡椒芥子などゝ混せ、それを飯へかけて食べるのです。ですからあれは東洋料

理と申してよいのでございます。然るに私の國では完全な食器といふものがありません。即ち茶碗も箸もありませんので、そのライスカレイを芭蕉か無花果の葉の上に盛つて、右手の指で摘んで食べるのでございます。皆さんが御覧になつたら、さぞ不潔であると御感じなさいませうが、私共は決してさうは思ひません。併しさういふわけですから右の手は至て大切なものとして扱つて居ります。それから私の方では來訪者があつた時に、主人の側で「もうお歸りなさい」といふのが禮儀となつて居ります。此の挨拶のない間は、客は歸りたくても歸れないのですが、その代りまた長く居らうと思つても、此の挨拶があれば、歸らねばならんのです。ところで歐米は勿論日本のお國でも無益な虚禮をお棄になり私の國のこの習慣をお用ひになる事をおすゝめ致すのであります、文明諸國では隨分客の長座に迷惑しながら虚禮の爲めに餘義なく忍ばねばならぬといふ様な弊習があるやうですから。

▲耳朶の長さ肩に達す▼

次にはいと珍らしき服裝の婦人、壇上に現はれたり腰より下、踝までは模様ある布もて蔽ひ、上部には籐にて造りたる輪に眞鍮の針金まきつけたるを幾個も重ねて、乳のあたりまでも嵌め、其の上には陣羽織やうのものを着。背には一種の蒲團に似たる者を負ふ。頭髪は伸したるまゝにて草花を飾りとし、腕にも足にも籐の輪、金屬、貝などの輪を嵌めたり。こゝに來り目を驚かしたるは其の耳にて、耳朶の長さ肩に達す。我國の蛭子神の耳朶も三舍を避く。これに十五も、二十も金の輪を嵌め、耳の緣にも孔をあけて猪の齒など嵌めたり、齒は檳榔子のために黑くなりたるに美しき飾を嵌めたり。こは故らに齒に孔をあけて裝飾したるものと見ゆ。さて徐に口を開きて、

私は必律賓群島中のボルチヲ婦人を代表して出席致しました、私は我地方の家屋の構造について申述べませう。家屋と申したところが決して立派なもの

ではないのですが、其の構造が少し變つて居ります。即ち樹の上に家が構へてありますので、大抵は十間位の高さの上に在るのです。そこへ昇降するためには一の長い梯子がかけてあつて、一條の葛蔓が吊り下げてあります。之を持つて梯子を昇り降りするのでございます。なぜこんな構造をしてあるかと申しまするに、全く敵の襲來を防ぐ爲めです。若し敵が來れば其の梯子を引き上げてしまひまして、豫て用意の小石を上から投げつけるのです。大層よい考のやうですが、ある時歐洲の水兵と戰ひまして水兵のために根元から樹を伐り倒されて大敗北をしたことがございました。併し平生は空氣がよく流通し光線はよく透り、誠に晴れやかな住居でございます。



▲顔形の實印▼

次に登壇せるは膝掛やうの麻布に輪にしたる毛絲を入れて模樣こしらへたるを身に纏ひ。腰には植物の葉を紐に下げたる腰袋を着け頸には石の小さき人形を着けたる紐を飾り毛髪は二つ分け唇には黥したり。壇に上るや否や先づ口を開きて紅舌を十分に出したるは、その敬禮と知られたり。

秋は新西蘭土の婦人であります。私の地方へも段

段歐洲人が見えまして、いろ〳〵の商賣が行はれて居りますが、私の地方には實印といふものがありませんから、すべての契約の時には顏の畫を書いて證據とするのであります。なぜ其の顏の畫が證據となるかと申しまするに、私の地方では男子は皆顏に黥をして居ります、其の黥が各人皆異つて居りまして甲は三本筋が引いてあれば、乙は二本筋、丙はまた渦形といふやうな工合であります。それ故其の顏の形をこしらへて家の屋根の上に飾りつけて一見して誰の家か別るやうにしてあります、また前に申した契約の時には顏の形を書くのです。顏の形は時によつていろ〳〵恰好の違ふものが出來ますが、黥は二本とか三本とか其の顏にある通りに書くことが出來ますから、其の書付の顏の畫と實物の顏と對照してこれは違ふとか違はないとかいふことを鑑定するのであります。さよなら、と再び舌を出して壇を下る。

▲簡單なる結婚式▼

次には何か知らぬ油脂を塗りたりと見えて黝光りに光れる肌膚に、メンダナナスの葉にて造りたる腰簑を着け。顏には黥を施し。美しき貝殼、豚の牙、木實などにて胸部と腕とを飾れる婦人、つか〳〵と壇に上り。

私はパプアン種族の代表者として出席した新幾尼の者であります、私も一つ私の地方の結婚の式を御披露申しませう。それは極めて簡單なものでありまして、ある一種の木像がどこの家にもある。その前に新夫新婦が坐りまして、母がこしらへてくれた料理を食べるのです。その料理と申すのは、檳榔の實と薄荷の葉と石灰とを捏ね合したものです。それを兩人ともに口に入れて、そしてすぐにそれを吐き出します、これが濟むと新郞が新婦に煙草を吸はせてくれます。もうそれで偕老同穴の契が結べたのです。何と簡略なものではありませんか。

▲世界最小の人種にあらず▼

次に登壇したるは寒國の人と見え、これまでの人々

の身輕なる扮裝には似ず、いとおもくろしき服裝なり身に海獸の腹皮にて造りたる外套を着け、頭には毛皮にて造りたる頭巾を被り、手袋はめて壇上に立ちたる所は、男とも女とも判別し難きほどなりしが、やがて說き出すやう

私は北アメリカ洲の北西の端に居るエスキモーの婦人であります。外套も帽子も手袋も着けたまゝ此の壇上に立ちますのは定めて無禮であらうと思ひましたが、私どもの本國の婦人の服裝を皆さんにお目にかけたいと考へまして、此の儘で出ましたわけです

といひつゝやをら外套を脫ぎ帽子手袋を取りたるを、視るに、上部には筒袖の上衣を着、下部には股引を穿き、腰部を帶にて締めたり。何れも海豹の皮にて造りたりと見ゆ。頭髮は眞中にて別け、耳の後にて結び。口と額との間に竪に三筋ばかりの黥あり。耳には石、獸骨、棒などを飾り。衣服の各部にもボタン鈴糸などの裝飾を施し。中指には何やらん指輪を嵌めたり。やがて言葉を續けて



私共は一歲中の大部分氷雪の中に蟄居して居るのですから、何もお話し申すほどの事もありませんが唯一言申しておきたいのは、私共はこれまで世間の人から世界最小の人種と呼ばれて居りましたので、

此の度本會へ出席致しまするにも、何か氣恥かしい心地がしまして、どんなに大きい人ばかりかと想ひの外、不思議な事には私共よりも身長の低い人のあるのには驚きました。私共の國で男子は大抵五尺六寸位はありますから、まづ〳〵これならば世界最小の人種などゝいふ汚名を除くことが出來ると悦んで居ります。

▲大人試驗受驗者の我慢▼

次にはまた異様の婦人こそ現はれたれ。身には獸皮（昔はバイソンといふ牛の皮を用ゐたりしを今は鹿の皮を用ゐるといふ）にて造りたる、袖なくして裾長き衣を着け、下部には鳥羽や獸毛、人毛など飾りたる脚絆を穿き。肩より腕へかけて筒袖とてはなく、唯鎧のやうに獸皮を冠せたるのみ。ことに珍らしきは其の靴にて、獸皮もて造りたるには何の異りもなけれど、其の踵の邊に貂の尾を附けたり。之を引づりて歩むなりとぞ。皮膚は銅色にて、眼窪く鼻高く、頰骨高く左右に張り。頭髪は色黑く眞直にして、恰も馬の鬣の如く、強きが上にいと長きを後方に垂る。耳には耳輪を懸け、頸には貝殻を磨りへらして造りたる管玉の白色または繪具にて着色せるを飾る。此の奇婦人そも何國の人なるかと見てあるに、やがて口を開きて

私は北アメリカの中央部に居る土人を代表して出席したのでありますが。私は私の本國の教育法について聊か御清聽を煩さうと思ひます。教育法と申しても無論、文明諸國のやうに完備したものではありませんが、併しそれ相應に教育といふことが行はれて居ります。即ち女の子は母の側に置いて、食物の調理法や着物の造り方を教へ、男の子には主として獸や魚の捕り方、武器の造り方などを教へ、また擊劍柔道なども教へるのです。これだけがわが地方の教育の重なるものでありますが、こゝに一つ珍らしい事があります。これは即ち大人試驗です。男の子供が大人の仲間入りをするには、此の試驗を經て

己の實力を示さねばならんのであります。元來私の國では身體の强壯なのと我慢の强いのとを貴びますから、此の試驗もつまりそれを驗すのであります。

さて試驗場には一つの鳥居のやうなものがあつて、それに紐が下げてあつて、一方から引くと紐に懸けた物が上るやうになつて居ります。ところで受驗者が、其の下に立ちますると試驗官は先づ其の受驗者の頭や腕や足に木の尖つた棒をさすのです、それがなか〳〵大した苦痛ですが、若しも苦痛を訴へたならば、すぐ落第ですから、涙一滴こぼさずに我慢して居ると、其の棒に彼の下げてある紐を結びつけて、身體ぐるみ引き上げるのです。其の上また其の棒に牛の頭を縛りつけて錘りにするのですから、其の辛抱は容易でありません。ところがまんまと此の辛抱が出來ると、今度は二人の者が受驗者の兩手を取つて彼の牛の頭を附けたまゝで、駈足で走らせます。初めの中は辛うじて走つて居るが、しまひには牛の頭の重みで走れなくなつて、腹這ひになつてしまふ。そうすると足でも手でも頭でも持つて引つ張りまわす。これで始めて及第して一人前の大人となることが出來るのであります。もしも此の試驗中に目をまはすとか弱音を



吐くとかすれば落第で、いつまでも小供並で居らなければならんのであります。思はずお話しが長くなりました。

▲お盆に目鼻▼

滿堂の會員、いづれも、さても世の中には奇妙な風習もあるものかなと、いはぬばかりの面もちして、そこゝに耳語く聲も聞えける折柄、續て壇上に現はれたるは

皮膚稍茶色がゝりて顔容恰もお盆に目鼻をつけたる如く、どこか日本人に肖たる所あれど、其の下唇は目立ちて大なり。否大なるばかりにはあらで、其の下唇には大なる穴をあけて石を嵌めたり（こは何の爲めかと聞くに一つは裝飾なれど、一つは熱き物などを食する時に、暫く此の石の上に載せて、冷すためなりとぞ）身には毛布をくる〳〵と巻きつけ、別に肩掛やうのものを肩に懸け。頭髪は兩方にわけ、之をまた三つ打ちにして左右に分け、肩の方に下げたる其の尖きには何やらん錘を着けたり。やがて其の大なる唇を動かして説き出すやう

私は北アメリカの西部晩香坡の土人であります。ずつと見渡しましたところ、いろ〳〵の服裝、裝飾をして居らるゝお方もありますが、私のやうに下唇に裝飾を施して居るお方は一人も見えないやうですから、少し説明を致しませう。私の地方では婦人は唇の大なるを誇りと致しまして、女同士で何か爭論でも初まりますると、「そんな小さい唇をして居る癖に生意氣な」といふやうな工合にやつつけます。するとその唇の小さい方は降伏してしまふのです。それ故女の小供の時から何とかして唇を大きくしやうと苦心して居ります。それから今一つ食物の煮方をお話し致しませう。私の地方では火を出すことは知つて居りますが、鍋といふものがありませんから、食物を煮まするには、先づ桝のやうな器に水を入れて、其の中へ煮やうとする食物を投りこみます。そして別に火を焚いて其の中へ小石を澤山入れ

て、石に眞赤に燒けたのを、かの桝の水の中へほりこみます。するとシュンといつて石は冷えますが、水が温くなります。こんなことを何度も繰り返して、やつとの事に物を煮上るのであります。ですから私は此度は鍋をお土産に持つて歸りまして、煮方の改良を致したいと考へて居ります。

▲出産に良人の苦痛▼



黄色に染めたる木綿の布片を腰に纏ひ。肌は一面に赤く塗りたる上に青き點をポツ〳〵とうちたり。口の周圍には、黥を施し、下唇には留針やうのものを挿し、膝の下部と踵の所は、緊しく縛りてゆひしきりあり。頭髪は自然のまゝ後に垂れ。頭には植物の實を飾る。これなん南米ヴネエツヲ、グイアナ地方の婦人にぞある。

先刻、大人試驗のお話がありましたが、私の地方にもそれとよく似た話があります。併し方法は少し變つて居ります。それは何うかと申しまするに、紐の先きに何かチク〳〵する刷毛のやうなものを附けてそれを鼻の兩方の穴へ押込んで置いて、またそれを引き出すのです。その時、痛いといふか、涙を出すかすると、落第となるのです。今一つは毛蟲を足に擦りつけて、その剛臆をためすので、この辛抱が出來れば、一人前の大人となることができるのです。それから出産について一つの面白い風習がありま

す。即ち女が子を產みまして、母子ともに無事であつて母がもはやそろ〳〵起きて働いて居るのに、良人は六七日間もハンモックの上で苦しんで居るのです。なぜかといふと、子供のからだは母の腹から產れるが、心は父から受けるのだと。一般に信じて居ります。それで若しも子のできた時に、父親の心得がわるいと、心が其の子に傳はらぬといふので心配するのであります。これは外には無い風習だらうと考へます。

▲世界最大の婦人▼

これまで壇上に現はれたる人の中に、未だ嘗て見ざりし體格の偉大にして、足の特に大なる婦人は今壇に上れり。これは大足國とて有名なる南アメリカの極南端にあるパタゴニアの婦人なり。頭髮は日本人に似たれど、皮膚は茶色に赤味を帶びたり。グワナポといふ獸皮にて造りたるチエリパといふものにて、腰のまわりを蔽ひ。四角形の皮の眞中に孔をあけたるポンチヨといふものを頭より被り、帶紐を結ぶ。足には膝の下より足の甲に達する底なしの長靴を着けたり。

只今出產についてのお話しがありましたから、私もそれに因んで赤子の事をお話し致しませう。私の處では生れてすぐの赤子を馬の腹を割いて一度其の中へ入れるのが習慣となつて居ります。なぜかと申しますると、私の地方では馬に乘るといふことが必要なことですから、出來たその子が馬を怖れないやうに、かやうな事をするのであります。それから文明諸國のお方は、私共は子に對して冷淡なものであらうとお考があるかも知れませんが、決してさうではありません、我々種族が子を愛することは非常に深いものでございまして、例へば水草を逐うて他へ移轉する場合でも、子供の意見によりて決する位なものであります。そんな譯ですから、女の子が年頃になりますと、家の近くに特別に立派な家を建てゝ其處に娘子を入れておくと、村の男が頭に駝鳥の羽を挿し、いろ〳〵の唄を歌ひて其の周圍を踊りまわる

祝典もあります。外のお國には如何でございませうか。

▲早婚、十四歳の母親▼

次に現はれたる婦人は、裾の長き襦衣の上に上衣を着け、前と後とに白色の長き布片を垂れたれば、眼ばかり見ゆるのみなるが、眼の色ことに美しく、其の周圍はアンチモニーの粉と植物の汁にて塗りたり。手指の初めの節は黄色、次の節は黒色に、手の甲は黄色、手掌は黒色に塗り。足には山羊の皮の赤黄色の靴を穿つ。やがて其の下げたる布片を取り除きたる姿を見るに。髪の毛は額の處にて短く切り、一部分は耳の前に長く編みて垂れ。後は十一より二十五までの間の奇數に編みて垂れ下げ、一つづゝに黒き絹糸製の紐を着け、その紐に金銀の飾を下げたり。冠り物は直徑曲尺六寸位の金の皿の如きものに、美はしき絹を幾重にも疊みて紐のやうにし、兩端に金銀の小さき飾したるものを卷きつけて後にて縛り、其の餘りを肩にまはして胸部に下げたり。さてまた鼻には孔をあけて飾を下げ、耳にはいと美はしき飾をつけたり。これなむ埃及國の婦人にぞある。

廣い世界には早婚の國も澤山ありませうが、私の國のは餘程早いのです。即ち十歳位で婚姻をなし、十四五歳になれば立派な母親となるのです。その婚姻は無論媒酌人の力を假るのですが。大抵媒酌人は親族の者が引き受けるのです。いよ〳〵話しがまとまれば、まづ中等の家で百五十弗位の金を婿から嫁の家へ贈ります。これは前の印度婦人のお話しとは少し違ひますが、やはり嫁の身を償ふといふわけではなくて、條約の證據とするのでございます。それで夫に死に別れるとかまたは理由なくして離縁せられた時には、養老金として其の半分を娘に與へるのです。併し離婚といふことを大層重大なことゝして居りますから、夫婦間は誠に睦じいもので、夫が無暗に妻を壓抑するなどの事は少しもございません。此の點は歐洲の婦人方も大に感心して居られるやう

でございます。

▲一種の饗應法▼

手の指、足の指は、おろか、薄黒き全身に波狀或は圓形の黥を施し、腰には一種の腰卷を纏ひ、頸にも腕にも、美しく裝飾したる輪を着け。頭髮は少しづゝ捩り固めて油を塗りたる婦人。これなむ埃及の南方に當れる亞比斯尼亞の代表者にぞある。

私は私の地方の饗應法についてお話を致さうと存じます。元來私共の處で何が御馳走かと申しますると、獸の生肉でありまして、それを骰のやうに切つて、薄平たい圓形のヘナヘナとした一種のパンで包んで噛み込むのであります。それで人を饗應致しまするにも、外に御馳走といふてはありませんから、唯分量の多いのを何よりの饗應として居ります。詰め込み詰め込みして、腹一パイになる、もう口から出さうになるまで食べて、氣が遠くなり、うと〳〵と半ば眠つたやうになつて居るお客さんに、まあもう一つお上りなさいと勸めて、その口を開けて例の肉を入れてやるのです。するともうお客さんは一歩も動けなくなる。醉ひ倒れるのではなくて、食つぶれるのです。これで以て主人側は今日は充分の饗應が出來たといふて滿足して居るのであります。こんな風習は私の地方に限ることでせうか、但しは外の國々にもあることでせうか

とて壇を下れり。我等は此の話を聽きて、竊に思ふやう、我國にても、田舍には今尚ほ來客に對して大いなる茶碗に山盛りに飯を盛りて、幾杯となく取りかへ、大いなる盃になみ〳〵と酒注ぎて限りなく勸め、客の其の座に倒るゝを見て滿足する風習あり。我邦のみの事かと思ひしに、計らざりきアフリカの一部にこれと同じき風習あらんとは、と心竊に失笑を禁せざりき。

▲異裝の三婦人▼

次に現はれたる三名の婦人、一人は埃及の西方なる

△△△△△
チユニス地方の代表者にて、四角の白色の布片にて腰部より下を蔽ひ、餘りを肩より前に懸け。頭巾の額の處に、學校の徽章の如きものを下げたる、いとも簡單なる服裝、一人は埃及の南部なるヌビアの代表者にて、頭髮を肩の邊まで垂れ、少し許づゝ固めて縮らせ、房のやうにしたる先きに粘土の玉を下げ。腰には獸皮を細く截りて帶の如くしたるに注連の如きものを下げ。これに金銀の飾を附着け。肩より膝の少し下に達するまで、大なる布片を懸け纏ひ。腕輪頸輪足輪何れも奇麗なる彫刻して銀の鈴など着けたり。また全身には一種の油を塗りたりと見ゆ。今一人はヌビヤより猶も南部地方の代表者にて、皮膚黑く、縮れたる毛髮を頭上にて幾つも塊らせ、其の先きを尖らせて豪猪の毛を附着す。腰には三角形の獸皮に、南京玉にて種々の模様をこしらへたるものを纏ふ。



此の三人、唯壇上に立ちて簡單に挨拶したるのみにて、談話とてはなかりき。

▲剃刀隊

さま〲の容貌さま〲の服裝したる婦人、續々と壇上に現はれたる中に、今現はれたる婦人こそ、特に衆目を惹きたれ。鼻平たくつぶれ唇反りかへり。大なる眼の周圍にアンチモニーの粉を塗り。純黑なる皮膚に何やらん油を塗り。頭髮は卷縮して頭に緊着し、耳には孔を穿ちて種々の物を吊り下げ、頸には木實と貝殼との飾を施し。腕にもこれと同じき輪を嵌む。足輪

と指輪とは左に絡むるのみにて右方には無し、腰に布片を巻き。其の上に胸より趾に達する布片をまとふ。これなむ即ち亞非利加の西部なるニグロの中のダホメ人種の婦人にぞある。黒き顔より白き歯を現はして説き出ずやう。

私の地方では女子の兵隊があります。その三分の二は未婚者でありまして、それには鐵砲隊、弓矢隊、剃刀隊などの別があります。剃刀隊と申すのは、大きな剃刀を持つて居る兵でありまして、これは極めて必要なる武器であります。弓矢は極めて粗末なこしらへ方ですが効用は随分多いのです。しかし一番有力なのは鐵砲隊で、これは歐人から得たのですが其の鐵砲には血糊でもつて子安貝をひつつけてあります。日本でも昔しは女子が戦場に出られたと、先刻お話がありましたが、私の國では現にそれをやつて居るのであります。

其の風采といひ、其の話柄といひ、目新しく耳新しかりければ満場の喝采暫しは止まず。

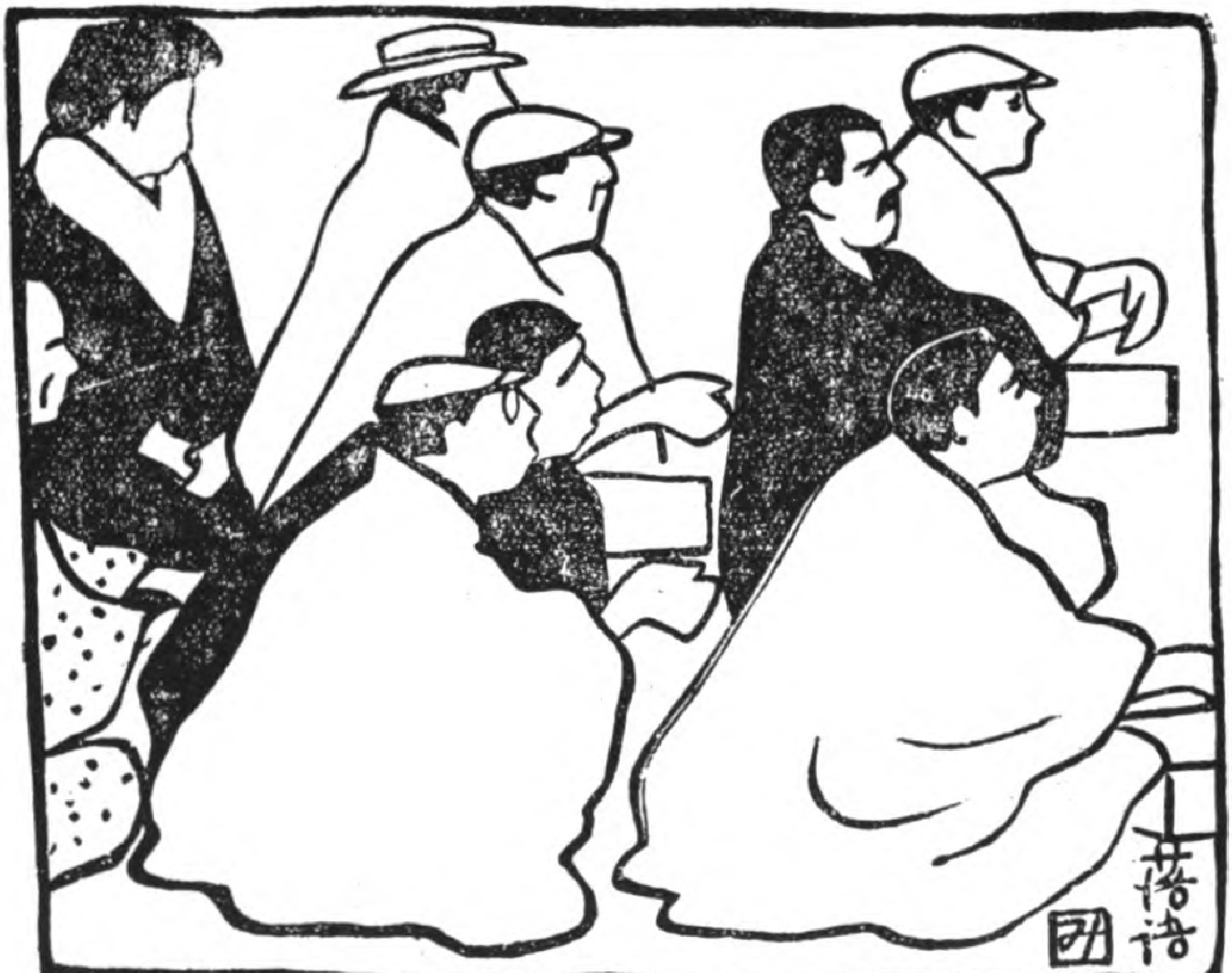
之に次ぎて壇上に現はれたるは。赤糸にて模様を縫ひつけたる布（カラムシ）を腰部より足先きまで纏ひ、上部に小さき腹掛を下げ、その紐を頸のあたりにて括り、其上に陣羽織やうのものを着たり。また頸より胸へかけて白黒赤の草木の實及び獸の爪牙など繋ぎたる紐を懸け、毛髪は自然のまゝにて、花束を紐にて繋ぎたる鉢巻やうのものを被れる異様の風體。此の婦人に取りては此上もなき盛装ならむ。そもいづこの人かと、耳を傾けて其の説き出づる所を聴くに

皆さん私はかやうな風體を致して居りまするが、これでもやはり大日本帝國の婦人でございます。それゆゑ、他の文明各國の方々に先だちて登壇するは憚り多いと存じてわざとさし控へた次第であります。

此の一語に満堂の人々、互に顔見合せて、これが日本婦人なるかよと、いはぬばかりの、おもゝちなりしが、婦人はやがて言葉を續けて

十二三年前までは野蠻人よ蠻族よと世の人から指目せられて居りましたが、今日では我が大君の御恩澤

に浴して、一步一步開明の曙光を仰ぎつゝある所の臺灣の熟蕃でございます。さきに或る部落の男子は觀光のため內地へ參つたそうでございますが、婦人としては私が初めであらうかと考へます。何か、お話しを致したいのですが、何分慣れないことでございますから只御挨拶だけに此の壇上に登りました、併し一言



申し上げておきたいのは、私共の同族は皆々人を殺すことを好むとか人肉を食ふとか、內地のお方も、外國のお方も、思つて居らるゝ人が多いさうですが、決してさういふわけではありません。唯北部の方に住んで居るアタイヤル種族にのみ此の風が存して居りますが。それも祭の儀式の爲めに首狩をするので、人肉を喰ふためではありません。併し追々と敎

化が普及しましたならは、此の蠻風も終には無くなるであらうと考へます。

次に現れたる婦人も亦前に劣らぬ奇異なる風體なり。身に楡(アッシ)の纖維を沼水にて樺色に染めなして織りたるアットーシを着、其の上にアミップとて羽織半天の長さやうなるを着る。其の袖は三角形をなし袖口襟のまはりには、紺色木綿の細く切りたるを縫ひ付けて裝飾としたり。下部にはホシといへる脚袢を穿き。足には鮭の皮にて作りたる鞋を穿き。頸部にはレタツンペといふ鉛製の飾を掛け、また南京玉を絲に貫きたる飾りを胸の少し下まで垂れたり。

頭髮は肩の邊にて截り、耳には蚊帳の釣手ほどもあらんと思はるゝ耳輪を懸け、これに金屬硝子製の玉、さては簪の如きものを附着す。手の甲と指とには黥を施し、ことに口の周りの黥、濃厚なれば、彼の般若の假面の如く、口は耳のあたりまで裂けたるやうに見えて、いと恐ろしき相好なれど、言葉は思ひの外にやさしく、先づ右手の食指をもて鼻の下を横に撫で、さて說き出すやう、

私もやはり大日本帝國臣民たるアイヌ婦人であります。私が今皆さんにお目にかゝります最初に、右手の食指で鼻の下を一撫で致しましたが、皆さんは之を御覽になつて、可笑な癖のある女だと、思召したでありませうが、これは私ばかりの癖ではありません。私共社會の禮式でございます。詳しく申しますると、男子は三度手を擧げて物を戴くやうにし、さて髯をひねるのが禮式でありまして、女の方はかういふ工合に右の手の食指を左の手の先きから肩の方に上げ、そうして鼻の下を横に撫でるので、これは極鄭重な禮式、普通は鼻の下を横に撫でるだけであります。結婚の風俗や熊祭りの事など申し述べましたなら、お耳新しい事もあらうと思ひますが、今日はまづこれで御免を蒙ります。

最後に登壇せるは謙遜なる態度の一婦人なり。飛白の單衣を三枚襲ねて、別に帶を締めず、腹部にて着物をつまみよせ、上には芭蕉布にて製したる袿衣やうの

ものを着流し髪は後にて束ね、一本の簪を挿し、足には筍皮のはきものを穿ちたり。

私はこれでも日本帝國の臣民であります、昔時は琉球などゝ申して未開野蠻のやうに申しましたが今日では內地の文明に追隨して段々と開明に趣きつゝありますが何樣僻遠の島國でありますから隨分風俗の異なる點が多からうと存じまして御參考までに登壇致した次第であります、さて私の地方では一般に女は男子よりもよく働きます。一切の家事は申すまでもなく農業の如きも女がやりますので、男子は唯ぶら〳〵と遊んでそれで毎夜一升位の泡盛を飲み、蛇皮線を彈いて笑ひ興じて居るのです。近來は兵役の義務を果すやうにもなり、また內地へ學術研究のために參るものも殖えて來ましたが、全體からいふて見れば、やはり懶惰の風が脫けないので少しも女子の勞を分つてくれないです。それでも女子は別に不足も申しませず。夫婦なかは至つて親密で、離緣などは絕えてありません。八重山の方では一夫多妻の風習ですが嫉妬なんていふことは、露ほどもありません。おとなしいのでせうか。意氣地がないのでせうか。それから女が物を運びますのに手で持つことは至て稀で、大抵は頭に載せて運ぶのであります。內地にもさういふ風習がないでもないと聞きましたが、私の地方では一般にさうでございます。

妻

◎人の妻たるものは啻に良人の爲に家政を司るのみならず、尙且其の精神上の友たらざるべからず。

◎妻は身自ら家庭の悅樂たり、休養たり、慰藉たることを忘るべからず、家庭政治の大原則は、良人をして己が家庭は他の家庭よりも嬉しく喜ばしと思はしむるに在り。

◎宇宙には珍工奇作少からず、然れども母の心に於て最も造化の妙用を見る可し。

◎母の愛撫に報ふる兒こそ孝行の第一なれ。

◎幼時の印象は拔けざるものと考へよ、又其の印象は母より與へられたるものなることを考へよ。

東京食品案内

菓子の部

▲鹽瀬饅頭　（京橋元數寄屋町）市内第一老舗にして古來禁裏御用を蒙り、饅頭の元祖なり他に種々の珍菓も鬻ぐ、茶の湯に用ふる袱紗も、同店の考案にして、鹽瀬袱紗の名あり。

▲虎屋の干菓子　（赤阪裏町）製品の高尚風味佳良何れも注文に應じて調進するのみ店頭に販賣せず。

▲菊壽軒　餅菓子の專門にして、其風味上品製造に家傳の秘法あり。

▲開化饅頭　風月堂本店の名物外に春日野、金鍔、大福等あり。

▲唐饅頭　兩國米澤町の風月堂の名物外に蕎麥饅頭、栗饅頭、桃山等あり又歐風菓子を日本化して、邦人の口に適する樣に製造せり。カルヽス煎餅の如きも其一也。

▲衛生飴　京橋南鍋町米津分店の名物外

家庭談叢

米と鹽と綿と糸と茶

厖軒

米と鹽と綿は、色の同じ所から俗に三白と申して、人間の生活に必要缺く可からざるもので、此三品さへ有れば先づ生きて居られると云ふ位大切な物で御在ます。又た此三品の相場は何時も奇妙に連合つて高下するものだと昔から言ひ傳へてあります。次に絲と茶は我邦に於ける重要の生產物で、共に輸出品中の首位を占めて居るものです。今此五品に就て少しく說明を試みませう。

▲米　は三品の中でも一番大切なものです。日本國中で年々出來る米は、凡そ四千萬石程で、之を人口の四千萬に割付けますと、一人前が一年に一石と云ふ勘定になります、日本は瑞穗の國と申す位で、往古より米を以ては有名な國で御在ます、故に日本の米は外國にも大層評判が好く、先づ世界中で一二を爭ふ良米といはれて居ります。尤も日本の中でも奧州邊より產する米は質が下等ですから、西洋へは向きませんが、中國九州邊の米は上等故澤山に輸出されます。西洋では麵包が常食でありながら、又た何の

にビスケット、カステイラ等あり。

▲甘納豆　西河岸榮太樓名物外に玉簾、村時雨、煉羊羹、梅干等あり。

▲最中　岡野榮泉堂は下谷坂本、淺草區駒形、神田旅籠町本郷三丁目の四店、名物外に饅頭其他の製品も頗る美味。

▲田舍饅頭　本郷四丁目の藤村の名物外に茶人向には、徳大寺、煉羊羹及び窓の月と稱する最中あり。

▲壺屋　四久保八幡町の壺屋維新後西洋菓子を製造して、風月堂と共に廣く其名を知らる。

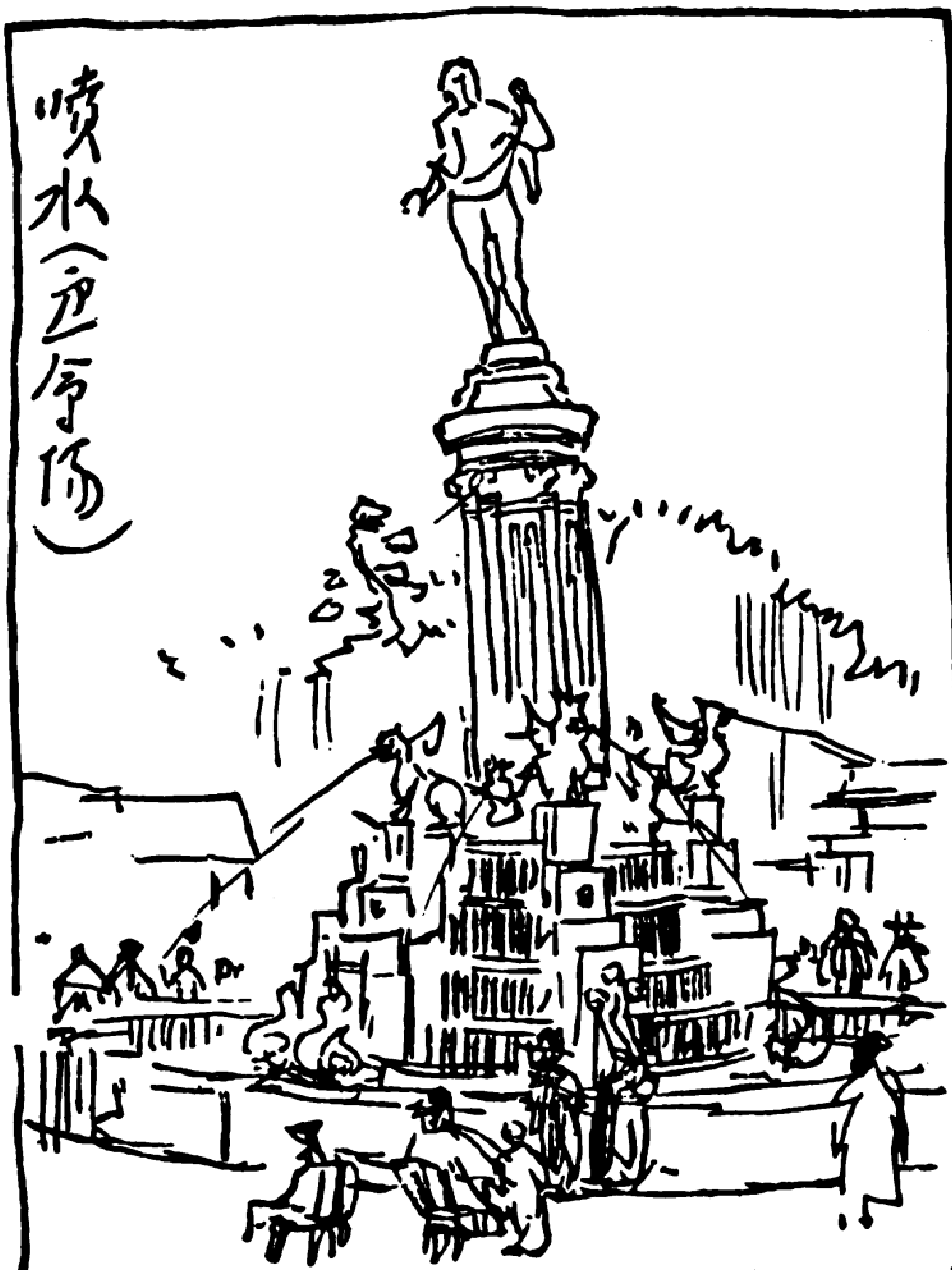
▲新杵のビスケット　名題の製品は、ライオンビスケット、英字ビスケット、つれ〴〵椿、玉露糖、閣龍煎餅等。

▲カルカン　濱町新屋の名題。風味無類

▲薄雪三升　中橋廣小路の松月堂は、干菓子專門にして、名題の外に最中及び黄金牡丹あり。

▲腰高饅頭　本郷四丁目の松園の名題なり。

爲に米を求めるかといふに、彼地では西洋料理のライス、カレーに致したり、菓子に致したり、又は金巾の糊にしたりするので御在ます。西洋で日本の米を一番多く用ひます所は、先づ英國のリバープールと倫敦で、其に次いでは獨逸のハンバークなどであります。是等の國へ輸出する米には、玄米と白米と



の二種あります。白米と申した所が、私共の平生喰べて居る飯米とは違つて蒸汽機械を用ひて充分に精げて、十分に燥したもので、兵庫には此精米

▲梅花亭のどら燒　名題の外に黄昏、三笠山等の製品あり。

▲青柳の磯燒と金鍔

▲屠蘇おこし　芝口の蟹屋は江戸時代より著名の菓子店なり。

▲隅田の月　小石川安藤坂の紅谷は、山の手の老舗にして、名題の外六の花、石衣、桃山等あり。

▲麵麭菓子　京橋南傳馬町市中各所に散在する同店の總本店にして、麵麭菓子、ビスケツト、カステイラ等を以て有　名なり。

▲雷おこし　公園仲店

▲菊見煎餅　團子坂名物

▲芋坂の團子　根岸芋坂下に古來著名の團子なり

▲長命寺の櫻餅▲言問團子　向島名物にして、長命寺門前にあり。

▲葛餅　龜井戸名物なり。

汁粉の部

汁粉と一口に言つても、餡を解いて、餅を

會社があります。又た輸出米の荷造は俵ではなく、皆なヅックの袋入で、一袋の量は五十六封度、百封度、二百封度、二百廿四封度など〻色々ありますが、先づ二百封度入（雜と七斗入）の袋が一番多い樣で御在ます。

▲綿　は元と日本には無かつたもので、今から凡そ千年程前に、天竺の船が三河の國の海岸に漂つて參りました折に、其船中の人が綿の實を持て居りまして、之を日本の人に與へて行つた故、そこで蒔き付けて綿を取つたのが起原で、それから追々と殖えて全國に擴がつたと云ふことです。併し綿は元が熱帶地方の物ですから、寒い國には適しません。其故日本でも北海道邊では產せず、一番多く產出するのは大坂府下と愛知縣下とで御在ます。日本で出來る綿の高は誠に少いもので、全國の產高を悉く集めて見ても、やつと二千萬貫位のものです。是計では迚も四千萬人の衣服を拵へるのに、間に合ひませんから、近頃は印度の孟買や米國あたりからも澤山に輸入致します。

▲鹽　は御承知の通り四面海を以て圍む日本のことゝて、何處でも大抵取れますが、北海道丈はいけません。一番產額の多いのは中國、四國邊で、所謂十州鹽田の名を博して居る位です。此十州鹽田と申しまするは、播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、伊豫、讃岐、阿波、此の十ケ國の海岸で御在ます。又日本中で產出する鹽は、年々五百萬石を下りません、

投込んで、煮立てた單純なものではありません、東京の汁粉屋で調進するものには、御膳汁粉だの、小倉汁粉だの、田舎汁粉だの、善哉汁粉だの、鹽餡汁粉だの、衛生汁粉だの、十二ヶ月汁粉だの、家々によつていろんな名前があり、其味も夫々異ふのであります、汁粉屋では又た汁粉の外に、萩の餅、栗餅、其他甘味の物を商ひますから、下戸や婦人方には宜しく先づ是から味はひ玉ふべきです、さて汁粉で旨いのは、木原店の

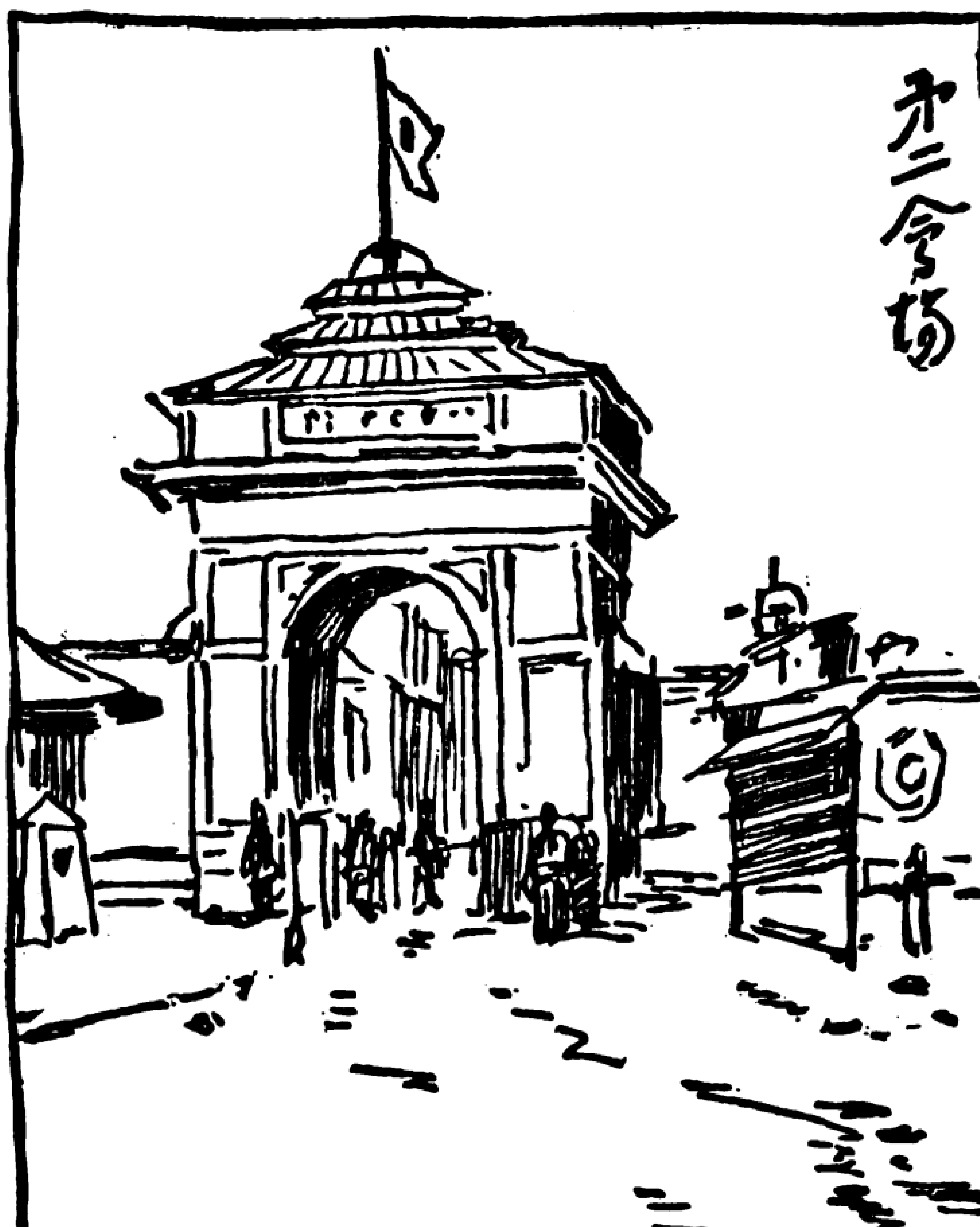
▲梅園　昔から評判の高い汁粉屋で、こゝのは餡も上等、甘味も上品、調味の趣向を春秋八種に分けてありますが、餘程好い味です殊に粟の善哉と來たら、此家の得意とする丈あつて風味の好いこと東京一、甘いものです。

次は淺草公園觀音堂裏手の

▲松邑　と仲見世の

▲梅園　で二軒共小奇麗ではあるし、汁粉の味も上等ですから、婦人方の立寄つて、アヽ美味しかつたと舌鼓を打つ處です。

新橋界隈では出雲町の



そこで之を四千萬人へ割當てゝ見ると、一人が一年に一斗二升五合の鹽を嘗めて居る勘定です、尤も直接に鹽を口に入れるのは這麼にもなりますまいが、味噌、醤油、漬物など随分澤山使ひます。因みに鹽の一俵と申すのは赤穂が九貫目入、本齋が六貫目入、新齋が六貫百目入で御在ます。

▲生糸　は日本の輸出品の中で、一番金高を上げてゐるものですから、貿易の上から見ると最も大切なものです。日本は元來養蠶國でありますか

▲時雨庵　こゝは汁粉の意匠を四季十二ヶ月に形どり、十二色の變つたものを調進するので、屋號を一に十二ヶ月とも申します、甘いものなら幾干でもと力身玉ふ御方でも此家の汁粉を一月から十二月まで都合十二杯を一杯も殘さず呑み干し玉ふ人は滅多にはないとの事、又た芝口の

▲萩の餅　は形が小さく味の淡泊な所に旨い味があります、ソレデ値段も一盆に餡のと、黄粉のとが六個載つかつて三錢といふ安直、外に汁粉も雑煮も出來ますが、萩餅が此家の名代です。

芝神明前の

▲太々餅　は代々下戸に歡迎された當家で、こゝの名代の「太々餅」と云ふのは「あんころ餅」の一種で素敵に甘いものです。

上野池ノ端の

▲氷月庵　は甘汁粉も上等ですが、鹽餡汁粉の旨いので評判です、こゝでは又た不忍池に蓮花の咲く季節になると蓮飯を調進します。

ら、西は琉球の端より北は北海道の隅まで、到る處大抵の地方では之に從事して居りますが、先づ繭玉の產出高で見ますと、一年に大概百萬石以上を產します。其中でも長野縣は最も養蠶の盛んな土地ゆゑ、一年に十五萬石以上の繭玉を產出致します。之に次いでは群馬縣と福島縣で、此二縣では年に各々十三萬石以上を產出します。で、此等の地方から出た繭は大概生絲に成つて、横濱から海外へ輸出するのですが、其向ヶ先は重に佛蘭西伊太利、亞米利加などで御在ます。生絲の荷造は御承知の方も御在ませうが、先づ十九匁乃至二十匁位の綛を二括とし、之を絲締器械で堅く締めて絹絲を以て三所を縛り、紙で包んで其上へ商標を貼り、之を十五六括づゝ箱へ詰めるのです。之に用ゆる箱は杉板で、内部へ澁紙若くは油紙を敷き、外をば繩にて縛り、其上を藁莚で包み、又之を繩で縛りますが、一箱の正味の重量は九貫目程であります。又た之を外國へ輸出する時分には、二十七八括か又は三十括づゝを金巾の大袋へ入れ、其上を細引で縛つて、更に澁紙と油紙で包み、又た其上をアンペラで包み、其上を繩で十文字にからげます。で、之を一俵と申しますが、其正味の重量は英斤で通例百斤としてあります。

▲茶　も亦た輸出品として名高いものであります。茶の向ヶ先は重に亞米利加で、同地へ向く品は綠茶と申して通常の茶で御在ますが、併し輸出

向島の
▲言問團子 は他のと異ひ、餡を餅で包んだもので、結構な味です、花より團子の連中が殊の外賞美致します。
芝赤羽の
▲粟餅
根岸芋坂の
▲團子 も亦た名物の内で、一風變つた風味があります。

蕎麥の部

▲更科（麻布永坂）昔は種物を鬻がざりしが、今は天麩羅蕎麥を名題とす、馬車にて遠く蕎麥を得意先に配達するは、此更科のみ。神田錦町に分店あり。

▲藪蕎麥（神田連雀町）小田巻鳥南蠻等總て種物を名物とし、向島須崎町の同店は笊蕎麥、茶蕎麥を名題とす。

▲蓮玉庵（池の端仲町）笊蕎麥を名物とし、太打を得意とせり。

▲蘭麵（本所押上）柳島へ通する押上の堤

する時には再製と云ふことを致します。其法は悉皆出來上つた茶を再び大きな鐵鍋へ入れて、能く焙じ乾かすのです。横濱、神戸、大阪等で夏分茶焙じといふ事があるのはこれですが、只だ焙じる許りではありませんで、諸國の茶をいろ／＼調合致し、更に之へ藥を以て色を着けるのです。之に籠製と釜製の二通りがあります。また荷造の仕方は、杉の箱の中へ鉛板を敷いて、其中へ茶を入れ、箱の上には商標を貼り、上をアンペラで包み、其上へ又た商標を貼るのです。此一箱の容量は大概五十封度から七十封度這入て居ります。相場は和百斤即ち日本の拾六貫目に付何程と定めてありますが、外國へ參ると一封度に付何程と唱へるのです。日本は各地共皆な製茶に適しますが、就中靜岡縣が一番多く產出致します。同縣一ケ年の產出額は百萬貫の上に出ます。之に次では三重縣、京都府で、年に四十萬貫乃至五十萬貫の茶を製造致します。又全國の總產出高は六百萬貫から七百萬貫の間で、外國へ輸出する高は代金にして六百萬圓以上に上るので御在ます。日本の茶を賞美するのは重に亞米利加ですが、彼地では之に砂糖や牛乳を和せて喫むのです。又た露西亞向の磚茶といふのは、茶を粉にして、之を餅の樣に煉つて板にしたものです。又た紅茶と申すのは紅い樣な黑い樣な茶で、英米の二國へ少しく輸出致しますが、之は支那が元祖で、随てまた支那が一番多く輸出致して居ります。

上にあり、蕎麦を以て名高し。

▲米市（深川辨天境内）蕎麦と鶏卵蕎麦を名物とす。

東京の蕎麦は概して蕎麦粉が少く饂飩粉が澤山交つてゐますから、蕎麦の本質を失へど、汁は東京の特色です、蕎麦の種類は、もり、かけ、笊、花まき、天麩羅、おかめ、五目、鴨南蛮、親子南蛮等いろ／＼ありまして、十錢以下でも中食代りになりますから至極便利です。

天麩羅の部

▲天金（銀座四丁目）東京第一調理の美なること他に比類なし。

▲橋善（芝口）種魚を選ぶを以て味殊に佳なり、一人四合以上の飲酒は、之れを謝絶する家風とす。

▲中清（淺草傳法院）近年の新店なれど、調理の美天金に讓らずと。

▲三定（人形町通り）お手軽料理をも兼業して繁昌の店なり。

家庭とビール

明治に成ッて飲料で新たに成功したものはビールである、ビールは一寸苦味があッて、又一寸薬臭いところもあッて飲み習れぬものには如何にも甘くない飲料ではあるが、さて一旦飲み慣れて來るとどうも忘れられない一種の風味がある、第一炭酸の氣が含まれてあッて胸の透くものである、酒酔の後は無論の事、餅腹の症へたのにも、食もたれにも一と口呑むと妙に爽やかになるのが、この飲料の一徳である。殊に夏季の飲料として持つて來いの品である。

△歐州、殊に獨逸、英國等では酒類といふよりは寧ろ普通の飲料として牛乳、茶の代りに飲む位である、或る處ろでは禁酒の社會でも、こればかりは許してある、又學校の寄宿舍などでも食後には必らずビールを飲むそうである故に家庭でも用ひられ、女小供さいも飲んである位である歐州に於ける麦酒の需用の大なること推して知るべし。

△それ故市中至る處ろにビーヤホールがあつて散歩の途上、渇を醫する爲めに皆このビーヤホールに這入る。學生、婦人、勞働者、誰でも構はず這入ッて飲むといふ風である。

麦酒は清涼飲料として飲むのであるから、無論夏季などは冷して飲むの

▲北邑（蠣殻町）取引所裏通り、即席料理を兼ね、金ぷらを名題とす。
▲仲野（神田區鍛冶町）天丼の元祖なり、
▲天勇（淺草公園）手軽料理を兼ぬ。

鮨の部

▲松壽司（柳橋）大六天前の安宅の松壽司と云へば、江戸時代より著名にして、同業者中の巨擘たり、鮨の巻鮨は殊に當店の得意とする所。宏大なる家屋と云ひ、其門構へと云ひ、一見割烹店かと疑はる。
▲與兵衛鮨（回向院前）握鮨の元祖にして著名なり味は總て甘口にして婦人の口に適す、また五目ちらしは殊に有名なり。
▲毛拔鮨（竈河岸）鮨は握りにして、鮨の拵へ方は魚の骨を毛拔にし、一ツ〳〵熊笹の葉に巻付けて壓をするゆゑ何時までも味が變らず土産物に適當せり。
▲鳴戸鮨　麻布飯倉片町
▲帆掛ずし（通り一丁目）名代は鯛と鱚の握りなりこゝは飯米の鹽化減少し辛き方な

はよいが、どうかすると氷塊などを入れて飲む人もあるがこれは甚だよろしくない、第一ビールの味を損ずる、ビールには天然にこの味が保たれて



ゐるのであるから、それを稀薄で飲むのはわざ〳〵まづくして飲む譯である。

れど味は上等なり。蒲燒

蒲燒の部

▲大國屋　（鎧橋の東袂）都下鰻料理の巨擘。得意は長燒にして調理の美、飯米の精選、漬物の佳、他に比類なし。

▲竹葉　（新富町紀州河岸）屈指の鰻屋にして、家の構へ坐敷の體裁、調度の高尙、風味の佳大國屋と相伯仲す。

▲和田平　（日本橋田所町）之れ亦都下屈指の鰻屋にして、調理の好風味を以て著名也。

▲神田川　（明神下）都下鰻屋中の著家にして、調理の美以上三軒と並び稱せらる。

▲鮒儀　（淺草山谷）蒲燒を重箱と云ひ、河魚料理の著家なり。鰻は普通のもの〻外に、大鰻を割くを特色とす。また泥龜煮及び鯰の泥龜煮は、當店の名物なるが、殊に泥龜煮は天下逸品と稱せらる。

▲松金　（芝金杉）新橋以南第一の鰻屋也。當店も鮒儀と共に大鰻を調理するを特色とす

▲狐鰻　（三十間堀）今は殆んど會席茶店

△又ビールの味は火入れをしたのよりは生ビールの方がうまい。麥酒に火を入れるのは罎につめて永く保たせる爲めであるから多少其の味を損するわけである。併し製造して遠方へ送り出すには生では行かぬから皆この火入をするのである。

△さて日本でもビールの需用は年々盛んに成つて婦人社會でも遠慮なく飮む樣になッて來たが、何樣まだ、一般の生活程度に比べて價が安くない處から、お茶の代りといふほどには行かないのである。

△ビールはアルコール分が極少量で、糊精、麥芽糖、炭酸、揮發酸等を含んでゐるから飮料としてはラムネなどよりも遙かに滋養がある、殊に食前に少量づ〻飮めば、大いに消化を助けるものである。

△麥酒の原料は、大麥、小麥、燕麥又は玉蜀黍などいろ〱あるが、まづ一般に大麥、燕麥を用ふるのが例である、その製造法はまづ第一麥浸し桶に入れ、淸水と空氣とを三晝夜加へると麥は段々膨脹して芽を吹かして來る、それを第二の發芽器に移し凡そ一週間華氏五十二三度位の空氣を加へると麥は漸々と芽を出して來る。

△そこで發芽したものを今度は焙爐にかける、焙爐も又上下二ヶ所に設けられてあるが、上の方は溫度の低い方、下の方は溫度を高くしてある、何故に發芽を溫度にかけるかといふのにそれは黴菌を殺す法である、即ち植

の如し。
▲丹波屋（麹町四丁目）山の手に於ける屈指の畜家なり。
▲奴鰻（淺草田原町）普通の料理もあり。

牛肉店の部

牛肉で名を取つてゐるのは京橋炭屋河岸の
▲河合　維新前の開業で、牛肉店中の老舗です。此家の特色は鍋肉を一人前毎に肪脂でもつて炙り上げてから出すことで、味は極く上等です。

四谷の
▲三河屋　こゝは當今山の手第一の牛肉店で、家の搆への閑雅なる牛肉屋とは見えぬ程です。

芝四國町の
▲いろは　は牛肉の安直と支店の多いので名を賣つた店です。

芳町通りの
▲今清　は安いのと旨いので客足繁く、日に六七頭の肉をこなす相です。

物の黴菌作用で發芽したものをこの焙爐にかけて殺菌するのである。
△斯くして殺菌した麥芽を釜に入れ、沸騰させて葱布といふ一種の香料を



加へて十分煮るのである、すると透明にして蜜よりも甘い麥の飴汁が出來る、この葱布といふ草は西洋殊產のもので一種の香氣を持つてゐる花粉で

浅草公園の
▲常盤　もはやる店です。
此他に於ては茅場町の
▲今用、
蠣町の
▲今文、
銀座一丁目の
▲吉川、
淡路町の
▲中川、
本郷切通坂の
▲江知勝、
芝二葉町の
▲黄川田、
麻布飯倉の
▲三ツ星、
浅草田甫の
▲米久、平野など屈指の内です。

鳥料理の部

鳥料理で一等は浅草公園裏通りの

ある、それを乾燥して麦酒に一種の香氣をつけるのである。

△さて右の様にして煮つめた飴汁すつかり絞つて麦粕を除き今度は華氏四十度位の冷却室に入れて大きな仕込桶に移し酵母を加へて發酵させると、透明な飴汁はブツ〳〵と泡を立てゝ沸いて來る、そこで甘い汁は段々アルコール質に變化し又炭酸瓦斯が出來るこうして凡そ十日間もすると麦の汁は變じて立派な麦酒となるのである。

△冷室で全く麦酒となつたものは、地下の冷藏庫に入れて貯藏する、冷藏庫は三十度位な温度で、どんな暑中でも此處は寒中同様で手足が痺れる様な處ろである、その冷藏庫に貯藏されたビールは管で以て瓶詰工場に送られる、この又管には濾過器が仕掛けてあツて麦酒が其中を通つて行くまでに混合物はすつかり濾されて仕舞ふ、これが即ち全くの生ビールとして瓶に詰められるのである。

△生ビールは夏になると瓶詰としても五日間位しか持たない、それ故市場へ出すには此の瓶詰を湯に入れて百五十度位の温度を加へるのである。

△麦酒の花に濃淡の差があるのは前申した焙爐の加減によるものである、花の黒いビールの如きは火を强く焦した上に少量の焦糖を加へたものである、又彼の札幌の黒ビールなどは褐花の麦芽を使つた上に、焦げ砂糖を加へたものである。

▲大金　此家は鳥肉ばかりで有らゆる會席料理を調進し、例へば椀盛に鳥團子、口取に鳥蒲鉾、刺身に「かしわ」を用ひ、「いり鳥」「どら燒」をあしらふなど巧みに意匠を凝らしてあります、但し此家の料理は甘口の方です。

次は馬道の
▲金田　こゝは上等の客筋を選ぶのと、肉の新らしいので高評です。

兩國米澤町の
▲鳥安　は燒鳥で名を賣つた家で、殊に家鴨のスキ燒と來てに、別して旨く喰べさせます。

向兩國回向院前の
▲坊主しやも　は名代の鳥屋で、こゝでは肉の丸切を美味しく喰べさせます。

又た芝口の
▲今朝　は軍雞鍋を安く旨く食べさせるので、平民社會に歡迎されて居ます、

此他にも尚ほ上野三枚橋の
▲鳥又、

改良臺所

おい〳〵臺所に瓦斯を使ふやうにはなつたが、併しこゝに電氣を使はない内は、まだ〳〵模範的などゝいへる準のものでない、併しこれは隨分費用のかゝる事であるから一般にすゝめる事は出來ないから、竈の燃料は今日の如くまづ瓦斯を用ふるより外にはないが、それは火が自由自在に加減が出來るのと、消す時なども頗る容易で、且つ安全である、それから料理道具は一般に清潔なのを好むに引かへ、立派な臺所と言はれてゐる處ろにさい、無益に大きな爐や、黒い不體裁な平鍋や、一世紀前にもありそうな鑵利などをごろ〳〵並べて置く癖がある、それ等は甚だ不體裁な事で、臺所は是非奇麗にして餘計な物を出して置かぬ様にせねばならぬ、殊に主婦の一日外に勤むるやうな家では、一つ特別に大きな鍋を買つて、それはパンも燒き、肉を燒き、野菜も、プツヂングも皆一つ個所理し、一日の御馳走が一二時間の内に、自然一人で出來るやうな輕便な料理にした方が一番よい。

又鐵爐は一時英國の鑄鐵爐が持囃されてゐたが、今は佛蘭西爐に壓倒されて仕舞つた、又流しは以前鐵製のものが流行したが、これは錆びたり又汚物が流れ難いといふので近頃上部に二つの水管がついて居て左右には二

銀座の▲大清、新橋の▲喜鶴亭などは上等の部類です。

茶漬料理の部

茶漬料理で高會なのは

▲宇治の里　日本橋通り一丁目と淺草藏前と外神田旅籠町との三ヶ所にあります、宇治の里と云ふ屋號は茶に縁を取つたので、茶漬が主意で、酒を賣らぬといふが昔からの家風ですから、客が强いて酒を注文すれば、酒の分丈は前錢を請求するならひです、こゝの料理は精進で一切魚を用ひず、眞如の椀盛、がき玉子、牛片のうまに玉子燒等はうまいものです、一人前は十一錢以上。

淺草公園の界隈では

▲ちん屋　と云ふ茶漬屋が有名です。

豆腐料理の部

豆腐料理では、根岸の

ツケルで縁の取つた陶器、又は硝子製の棚が備はつてゐる、それに石鹼とか、壜とか、ブラッシとかを置くのである、又重い壜を置く爲めに、格子の置臺を備へつけて置くのが肝要である、タワシは堅い木の纖維で造つたのがよい、器具を石鹼で洗ふ時の爲に湯の水管を備へ附けて置く事も必要である。

臺所の床は水分を吸はないものを敷つめ、水で時々洗ふ樣にせねばならぬ、それには煉瓦を入違に敷いたらば、經濟的で一番によからう。蓆は黴菌を呼ぶから不可ない、木材は始めは體裁はよいけれども早く腐るから臺所などに用ふべきものではない、壁は極滑かな煉瓦で下地を作り、其上へセメントを塗り、少しでも濕氣の浸み込む隙を作らないのが第一である、又其セメントの表面は極々平滑にして塵などの止まる事の出來ない樣にせねばならぬ、そして其の上に高さ五六尺の腰板を張るのである。

又竈は料理臺と反對の方面に設ける夫れは黴菌を含んだ外氣を食物に觸らせてはいけないからである、其窓の近くに棚を設けて獻立表とか、勘定簿とか、食料理品購入覺書とかいふもの、又鐵槌、釘等を入れた箱を置き、それから其外にガラス戸の食物戸棚を置き、バタ、チヨコーレト、コーヒーなど日々必要の藥味などの瓶をならべ、又夏季には食物を貯藏して置く冷却器を一つ備へねばならぬ、これは中がトタン張で、滑な陶器で區劃か

▲笹の雪　此家は餡掛豆腐の椀盛がうまく、之に次いでは上野三橋の▲揚出し、同廣小路の▲忍川　の二軒です。

即席料理の部

即席に一品二品の料理を調進する小料理屋では、木原店の▲中華亭　此家は金麩羅が名代ですが、鍋の椀盛も旨く喰べさせます、併し値段は些と高い方。

日本橋南詰の▲笹屋　は元と立場と云つて縄暖簾、屋様式の茶漬飯でしたが、魚類の新らしいので賣り出した家です、此家で旨いのは刺身と口取。

青物町の▲中鐵　は甘鯛の照焼が自慢で、うまく料理ます。

淺草廣小路の

してあるもの、蓋にはガラスを用ひてあるから外部から一見して、どんな食物が備へてあるか、よく分るのである。



東京の名所寫生══山内五重塔

一體英國の臺所は無暗に廣い弊があるが、近頃新式の臺所なども矢張り食堂とは隔てられてゐる、又米國でも臺所を馬鹿に廣くする弊があるが佛

▲松田　安く喰べさせるので評判。

淺草公園辨天山の

▲岡田　は惣菜料理で賣弘めた家。

此他仲見世の

▲天勇

下谷池之端の

▲岡政、

▲紫蘇飯

尾張町の

▲福ゑびす、等はよくはやる家です。

會席料理の部

會席茶屋の隨一として天下眞人の指を屈するは、山谷の

▲八百善　昔から名の高い茶會席で、家の造りも庭の模樣も雅美てゐまして、料理の風味に至つては東京一否な日本一でありまず、此家の獻立を見ると、普通の品で、第一汁、第二肉、第三茶椀盛、第四鉢物、第五椀盛、第六燒物、第七口取、第八刺身、第九香の物といふ順序で、殊に燒物の松皮かま鉾

國は一般に堅くしてある、それから英國式の臺所は下女が食物を持つて出ると戸が強いバチで締るやうになつてゐる、どうしても臺所の中を見る事が出來ないやうになつてゐる、これはむかしから客に料理する處を見すると客の食慾を減ずるといふ言ひ傳へからである、そこで一番肝要なのは臺所に電氣を用ふる樣にし臺所と食堂とは相通じて設ける樣せねばならぬ。

染物と化學

△衣服の原料は木の纖維を取ッて之を紡績したものであるがこれだけではまだ、衣服の用をなさない、これを染色して、種々なる色彩を施すことが必要である。

△染色に使ふところの材料は、之れを分けると三つになる、第一が植物から取る處ろの染料第二が動物から取る處ろの染料、第三が礦物から取る處の染料である。

△右の中で植物から採る染料が一番普通で、且ついづれの土地でも昔しから染料としたのは多く植物であるが、近來應用化學の進歩によッて次第に礦物性から染料を取るやうになッて來たのである、又動物性から取るものは、極めて僅かで、彼のコニチールといふ虫から紅を取ッたものであるが

は當家の名物と言はるゝ丈あつて、美味しく出來て居ます。

▲紅葉館（芝公園地）家屋宏壯、庭園風趣に富み、萬端高尚を旨とし、宴を助くるの美婦數十名ありて貴顯紳士のこゝ來遊ぶもの多し。

▲星岡茶寮　山王社の東南隅老樹蓊鬱として、一仙境を爲す處、古雅なる建築を見る、茶道の會席なれば、料理も亦高尚なるもの。

▲富士見樓（麴町區飯田町五丁目飯田河岸）

▲開化樓（神田明神境內）

▲金清樓（連雀町）

▲常盤家（濱町花屋敷）

▲百尺（新肴町）

▲藏多屋（檜物町）

▲福井樓（高砂町）

▲浪花屋（元大阪町）

▲尾張屋（橫山町）名物あなごの味噌漬

▲大又（藥研堀）名古屋料理

今日ではあまり使用しないのである、昔時猩々緋などいつて猩々の血から色素を取ッて織物を染めたやうにいふけれども實際は猩々の血ではなかつたので一種の植物から取つたものに過ぎなかッたのである。



△植物染料中尤も普く用ゐられ、且つ尤も必要なのは藍である、藍はいろ〳〵の植物から取れるが、日本で最も普通なのは蓼藍である、これは屬

▲岡田（濱町）
▲菊隅（元大工町）
▲采芳亭（兜町）
▲花月樓（竹川町）
▲萬安樓（木挽町）
▲松本樓（尾張町）
▲野田家（築地）
▲湖月樓（烏森町）
▲大光館（本芝）
▲八百勘（赤坂田町）
▲三河屋（山王臺下）
▲魚十（湯島天神境内）
▲伊豫紋（下谷區同朋町）
▲柳光亭（柳橋）
▲龜清樓（同町）
▲萬梅（淺草公園内）
▲一直（淺草公園）名物は櫻豆腐
▲松島（同區千束町）名物はおぼろけんちん）
▲八百松（向島）
▲植半（向島須崎町）名物蜆汁、芋飯

島附近の名產で、又琉球地方から產する山藍もある、藍の最も世界的產出場は印度で、今日の舶來藍といふのは皆印度の藍靛である、これは木蘭といつて日本あたりの蓼藍とは全く違つた種で豆のやうな花が咲くのである

△すべて藍は皆この葉から製するのであるが、その方法はまづ夏日蓼藍の葉を採り、それをよく天日に乾かし、それに水を少し加へて七八十日間倉庫の中に臥かして置くと段々と醗酵して黑い塊となる、之を玉藍と名づけて諸方へ出すのである、これが本邦古來唯一の藍の原料であつたが、實際その染料となる藍の有効成分は右原料の百分の五位に過ぎないもので九十五までは糟である。尤も印度の藍靛は葉を水の中に漬けて、それを攪拌し沈澱したるものを取るのであるから、この方法から得た藍靛は臥かしたものに比べると餘程藍の分子に富んで居る。

△玉藍又は藍靛を染物に使ふに當ッては、水に溶けないから、溶けるやうに變化させなければならぬ、それを藍建法といふ、日本在來の方法は、玉藍に石灰と小麥の糠と木の灰とを混合してそれを水の中へ入れたものである、蓋し小麥の中にある澱粉などは段々變つて一種の砂糖になり、この砂糖の爲めに、靑藍は白藍になる、白藍は普通の水には溶にくいけれども石灰や木灰の溶けた水の中にはよく溶解する、そこで玉藍中の靑藍は溶けて黃い液を生ずる、そしてこの液に木綿などの纖維を浸して、これを空氣中

▲奥の植半（向島木母寺境内）名物は家鴨の鋤焼と芋、
▲橋本（柳島）名物は鯉こく
▲目黒の大國屋　竹の子飯、栗飯を名物とす。
▲水神八百松（向島隅田村）
▲川崎屋（品川鮫洲）
▲扇屋（王子村飛鳥山）
▲海老屋（同所）
右の外は
▲伊香保（鶯谷）
▲志保原（同所）
▲草津亭（根津權現坂上）
▲芝濱館（本芝）
▲芝浦海水浴（同所）
▲伊勢源（大森）

西洋料理の部

▲精養軒　都下の西洋料理店中創業最も古く、且つ最も盛んなるは、京橋區釆女町の精養軒なり。洋風の大建築にして、晩餐の客

に曝すと、白藍が青藍に變化して纖維に固着するこれが即ち藍で物を染める原理であるが、藍靛を用ふるに當つては通常石灰と綠礬を用ふるか若しくは綠礬の代りに亞鉛を用ひる、つまりこれが玉藍を建てる時の小麥の糠



と同じ作用をなすものである、併し又藍で毛染などをする時に硫酸で煮て然る後炭酸曹達を加へてインヂゴ、カルミンといふものを作りこれを水で

三百人を容るゝに足る。上野公園内は支店なり。

▲帝國ホテル　建坪一千二百九十五坪間數八十を有す、客室食堂善美を盡す。我國における西洋料理は此ホテルを第一に推す。

▲富士見軒

▲寶亭（平河町）

▲三河屋（鍋町）

▲多加羅亭（淡路町）

▲吾妻亭（小網町）

▲八洲亭（呉服町）

▲芳梅亭（米澤町）

▲三橋亭（南鍋町）

▲壺屋（愛宕町）

▲三緑亭（芝公園）

▲明進軒（牛込）

▲彌生亭（眞砂町）

▲三橋亭（上野三橋）

等著名なり。

支那料理の部

支那料理で評判のよいは、日本橋兜町

溶して用ふる事がある。

△又藍の外植物性染料として使はれたのは紅藍花、茜草、紫草等から取れる染料であるが、今は人工染料に壓倒されて殆んど用ゐない、又滋木、苅萱の如きは黄染として少しづゝ用ゐられるが應用の遙かに廣いのは、絹、或は毛を黒染にする時用ゐるロッグウード、茶褐色を出すカテキユー等である。

△礦物の染料は昔時鐵漿などを用ひたが今は石炭から作る處ろのコールターが中々染料界に大勢力である、これは石灰を蒸燒にして瓦斯を造る、其際に副生するもので、實に汚い物であるが、その汚いコールターからいろ／＼な油や、結晶物を分解してそれから奇麗な染料を作るやうになつたのであるそれを發見した始めは今より五十年ほどの昔で始めは偶然に奇麗な紫色が出來たが段々と研究して今では赤、緑、褐色、種々の色を得るやうになつた、而かも其の色は他の植物性のものよりも一層鮮麗で染色界に於て一大勢力を擅にする樣になつたのである、尤もこれを染める纎維に依つて都合のよいものと惡いものとがあるが、一番持のよいのはアリザリン染料である、このアリザリンにいろ／＼の金屬を含んだものを加へると色々の染料が出來る、藍のごときも又このコールターから製造する事が出來るので漸次に植物性のものを驅逐する樣になつて來たのである。

の▲偕樂園＝此家の獻立は中等の所で、○鳥蛋湯幷（食滿魚、鷄の卵物）○鍋子燒（鍋肉團子の炙物）炸蝦餅（豚肉と椎茸の汁）○炸鷄片（鷄肉を炒つたもの）○高麗蝦仁（海老の揚け物）○東坡肉（豚の脂肉を煮たもの）以上菜單、○八寶飯○杏仁湯、以上點心當小菜四種、値段は中食事の上等貳圓。（以上四人前）。

佃煮、煮豆等

▲玉木屋の佃煮　（本石町）芝口淺草茅町の三ヶ所にあり。都下佃煮商中著名の老舗にして、鮮魚及び海苔の佃煮、座禪豆、梅ヶ枝でんぶ、いゝ、梅醤、梅味噌、てつか味噌、其他漬物、罐詰類を販賣す。就中座禪豆は最も好評あり。

▲寶來屋の煮豆　（新橋町）佃煮の老舗にして、諸種の佃煮、田麩、鯛味噌、てつか味噌、鮒の雀燒、福神漬、其他漬物、罐詰等を販賣せり、何れも風味佳良を以て聞えたるが、名物は煮豆にして、之れを〇〇豆と稱

△染物は概して之を纖維に附着せしむるのは藥品を媒介にしなければならぬ、この媒介物を媒染劑といふのである、これは明礬、綠礬、吐酒石などで皆その染める纖維によつてそれ〴〵媒介劑が違ふのである、そこで纖維を染めるにはまづこれを精練し、漂白せねばならぬ、其方法は質によつていろ〳〵あるが、まづ木綿ならば洗濯曹達を十倍の水に溶かし、其中へ入れて煮取り出して水で洗ふこれが木綿類の精練法である、次に漂白のは、漂白粉の溶液の中へ入れて水で洗ひ、其後淡い硫酸の中へ入れてもう一遍洗へば漂白が出來る。併し絹物若しくは毛糸になると精練に石鹸を用ひ、漂白するには硫黃を燃して出來る瓦斯によつて漂白するのである。この如く漂白したものへ模様を染め出そうとするには捺染法を用ゐる、この捺染には型を用ふるのであるが、型紙は厚い美濃紙でいろ〳〵の模様の彫つてあるもの、それを布の上は載せて一面に染料を混せた糊を施くと其形通りの模様が着くのである、

獨逸　育兒の習慣

獨逸の育兒法は極めて規則的である、例へば子供が產れた日から必らず新たに日記を造つてその小供に關する事柄は每日嚴重に記入し、そして每

す。毎年盆晩に至れば顧客群集す。

▲濱金の紫蘇巻　金龍山下瓦町、今戸渡船場の角に在り、佃煮、▲煮豆、漬物類、味噌類等を販賣せるが、名物は紫蘇巻蕃椒にして、夙に好評を博す。

●小間物

▲大西白牡丹　（京橋區南傳馬町二丁目）櫛笄簪等の髪道具は云ふに及ばず、其他婦人用装飾品、袋物類に至るまで、製作に意を用ゐて、精巧を極め、又各種の美術製作品をも販賣す。店の特色は、他に率先して新流行品を出すに在り。擬形、新模形、都形など稱する櫛は、當店の創作なり。

▲松田白牡丹　（同尾張町二丁目）當店は各種の婦人用装飾品、化粧品等を販賣せるが、就中儀式用鼈甲の櫛笄及び、蒔繪の櫛中挿等殊によし。

▲小川専助　（葺屋町）當店は鼈甲、珊瑚珠、金銀製及び蒔繪の櫛笄、釵、根掛等を販賣する老舗なるが、殊に鼈甲物を以

週に一度は必らず醫師が見舞つて病氣の有無を診察する、若しも其兒が並外れて小さいとか又は體量が非常に輕いとかといふ塲合には日に一度づゝ其の體量を計つて醫師から相當の手當をして貰ふのである。

それから又嬰兒を寢かす塲合にも母親なり、乳母なりが添乳をしたり守唄を歌つたりして寢かす事は決してない、先づ普通搖籃の代りに用ひて居る乳母車の内に仰向にして獨り寢させるのである、これは寢臺の上や、又他の部屋へ移すのに便利であるからで、且つ又嬰兒が非常にむづかつて、よく睡らぬ時でも決して手に取つてあやかすなどいふ事はない、泣く兒は其儘泣疲れて睡るまで、打棄て置きそして獨り寢の習慣をつけるのである。

次に又此國の習慣は母親の乳が十分出ぬ塲合には半年位乳母を傭ふことにして居る、この乳母はいづれも田舎から撰ぶので身體の壯健な農婦である。斯る乳母奉行する者は、畑仕事を休んでも高い給金を貰つた上に美食が出來、身が樂であるからいづれも大喜びで自分の子は親類に托して置いて都會へ出て行くのである。

さて半年間乳母の手に育つた小兒は半年過ぐると保母の手に移るのである、この保母は毎朝新鮮な乳を温め哺乳器にゴムの吸口をつけて嬰兒に飲ませ、其他の世話をするのであるが、この牛乳は毎日搾乳場から育兒用として配達して來るもので外氣の入らぬ新乳を封のまゝ水鍋に入れて適當の

て特色とす。

▲高久（同區鍋屋町）都下小間物屋中屈指の老舗にして、各種の婦人用裝飾品其他諸種の袋物類を販賣す。殊に鼈甲物製作精巧優美、且つ意氣好みに適する品多きを以て花柳社會に顧客多し。

▲兼康（本郷區本郷三丁目）天明狂句に「本郷もかねやす迄は江戸の內」とあり。江戸草分以來の舊家なりといふ。昔より婦人用の裝飾品、化粧品等を鬻ぎ、今も相變らず繁昌して、來客店頭に滿つ。

◎山崎油店　同店は上野大門町曲り角に位し既に水油業を營むこと五十代二百年の久しき老舖にして曩きに「煉油いぎりす香」を製出し大に高評を得たりしが今度新に「松みどり香油」を發賣せり同油は專ら貴夫人令嬢の日本髷に適するやう精製したるものにして品質高尚香氣優雅なりと云ふ。

温度に温めるのである。

さて斯樣にして育つた嬰兒が滿一年になつて齒が二三本も生へて來るとまづ早熟の方として居るのである、それから小兒の命名式は通例二タ月目の吉日を撰んで執行するので、此日には其母親、親戚知己打揃ひ、禮服をつけてその其兒を教會へ伴れて行き、牧師からその兒に名をつけて貰つて歸るのである、其日は非常な御馳走で、諸方から來た澤山の贈り物を奇麗に飾つて列席者一同盛に杯を擧げて其兒の將來の幸福を祝するのである。生後三ヶ月位からは英米の子供と同樣にフロックを着せ、下袴を穿かせたりするけれども唯ふはりと樂に着せて置くけだて日本などの樣に窮屈に紐で締めつけたりなどはせぬ。獨逸では嬰兒の內はなるべく冬の寒氣にあてない爲めに戸外に出す時は外から風の入らぬやう乳母車の被を深くして連れて歩き、夏になると帽子も着せず、靴も穿せず、跣足で歩かせるのである。（完）

女學世界 景品附紀念號

五月五日發行

本誌は豫告の通り、五月五日の誌上（第七卷第七號）に景品福引番號を摺込みあれば同誌第一頁左方切取線内の番號記入の處注意して購求せらるべし。
景品は**金千圓**を以て別表品物附の通り**一千個**の物品を調達し之れを**壹等**より**拾等**に分ち**鬮の順番**によりて**當選者**に配つ
景品は市内有數の呉服店小間物店より、それぐ新規流行の品物を選定したるものなれば、當選者は等級の範圍内に於て何品にても隨意に選むことを得べし。

景品の等級

壹等……當り數 參十本
品物——博多帶側、琥珀帶側、縞セル、節糸織、金帶止、伊勢崎銘仙、米琉、大島絣、指環、

六等……當り數 八十本
品物——鹽瀬ふくさ、縮緬帶上、西洋菓子、東髪櫛、絽半襟、衛生襯衣、指環、寫眞挾。

女持懐中時計、奉書紬。

貳　等……當り籤……四十本

品物——秩父縞、絹張洋傘、小柳繻子、寫眞ブック、新御召、花色きぬ、空色ぎぬ、紅きぬ、夏シーヨル、メレンス友禪。

参　等……當り籤……五十本

品物——縞ナル、女持洋傘、富國セル、紅きぬ、帯上げ、蒔繪硯箱、ハコセコ白毛布。

四　等……當り籤……六十本

品物——色繻子、本カシミヤ山吹織、上等久留米絣、白薩摩絣、絹レース、夏シオール、蝦夷茶モスリン、銀製食匙、置時計。

五　等……當り籤……七十本

品物——金城琉球、中形縮、白薩摩絣、新節糸、縮緬帯揚、半襟、寫眞ブック、新柄中形、蒔繪硯箱、紡績大島飛白、ハコセコ、絹レース、博多結城、白瓦斯縮、瓦期明石。

七　等……當り籤……百　本

品物——新意匠絹ハンカチーフ、半襟、四季袋、ブローチ、絹糸、駒下駄、指環、帽紗。

八　等……當り籤……百二十本

品物——箱入香水、銀貨入、羽織紐、縮緬半襟、絹足袋、枝折、短冊、ナイフ、タオル。

九　等……當り籤……百五十本

品物——煉白粉、メレンス風呂敷、懐中鏡、ハンカチーフ、銀貨入、羽織紐、半襟、枝折、短冊。

拾　等……當り籤……三百本

品物——リボン、紐カザリ、化粧石鹸、襟留、繪はがき、白粉、歯磨、香水、煉歯みがき、懐中鏡、ハンカチーフ。

當り籤總計　壹千本

五月號記事豫告

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……………十二冊
（增刊四回…一、四、七、十月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引　四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引　三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引　二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引　二十三圓

▲等級の位置ノ切月等御照會次第御報可致候

註文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年四月十五日發行　第七卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

博文館編輯局主幹　坪谷水哉君著

増訂三版



全一冊洋布上製
中判頗美本
本文紙數千三百七拾餘頁
定價一册　金壹圓
郵稅一册拾貳錢宛

各巻共府縣廳所在地銅版圖二十餘頁、風景寫眞八十餘圖全國兩半部彩色刷大地圖添附

上巻＝東海、東山、北陸、北海の各道と樺太

下巻＝近畿、中國、四國、九州、琉球の各道と韓國

案内記なくして旅行するは、燈無くして暗中を行くが如く、また誤れる案内記を携へて旅行するは破損せる磁石を以て大洋を航行するが如し。何れも極めて危險なり。本書著者夙に旅行癖あり、常に筆と寫眞器とを携へて普く各地に漫遊して、凡そ全國の名山、大川、港灣、湖海、神社佛閣、名所舊蹟、具さに自ら之を探りて、其順路と車馬の利用は勿論、旅館、酒樓、休息所の用意まで最も確かなる案内記を編し前年之を公にして大に好評を博して以來、尙ほ世運の進歩と交通機關の改良とに伴ひ、次第に其の狀況を異にするを注意し、**斷へず巡遊**して**實地を檢し**、版を改むる毎に**訂正**を加へ、今や**第三版成**る。而して**上巻には『樺太』の新版圖＝下巻には『韓國』の保護國**に遊べる最新の案内記を添へ、北海道、奥羽、中央の各鐵道が近來開通したる沿道の案内記も、精密に實踐して之を訂正し、附錄の**全國地圖**は、益々精細を加へたり。旅客幸に此書を行李の中に收めば暗夜に燈無く、航海に磁石の損じたる危險を免かるべし、旅客ならざるも、一室内に繙讀して、座から名所を知るの快あるべし。

野崎左文君　田山花袋君共著
● 改訂増補 **漫遊案内**　全一册小判　正價五拾錢　郵稅八錢

大橋乙羽君著　彩色木版寫眞版挿入
● **旅行案内**　全一册大判　正價貳拾五錢　郵稅六錢

大橋乙羽君著　寫眞版二十八葉挿入
● 増補 **千山萬水**　全一册小判　正價五拾錢　郵稅拾錢

大橋乙羽君著　寫眞版二十八葉挿入
● **續千山萬水**　全一册小判　正價五拾錢　郵稅拾錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

(後付の二)

五二共進會に於て銀牌受領

●本圖の內容精確にして鐵道線路名勝古跡宿驛名邑を詳載す●

●本圖の裏面精密にして表面地圖關係の重要諸表數三十三を網羅す●

鐵道作業局長官 工學博士 平井晴二郎君
同 建設部長 工學博士 增田禮作君
遞信省鉄道局遞信技師 工學博士 野村竜太郎君 校閲

麻生鉞三君著

麻生式折本

全國鐵道線路名勝古蹟明細 旅行案內地圖

全一冊長方形折本（縱長八寸一分 横長九尺）
表面地圖銅刻
三色刷
正價四拾五錢
郵稅四錢

附半球一覽圖●滿韓一覽圖●重要諸表各種

表紙精刻帝國八千尺以上高山及著名大河湖沼實側圖入

本圖の特色一にして足らず著者玆に五星霜の苦心を累ねたる大成發明の折方地圖なれは一たび之を手にする人は其輕妙無比なるに驚き忽ち旅行必携の實用たるを自認せらるべし本圖はもと縮尺百六十萬分の一にして從來の地圖なれば少くとも紙幅四尺以上を要すべきに此發明法に依りて紙幅僅に八寸弱冗紙五分の四を節減せり況や著者は多年鉄道局に奉職して最も周到なる注意と精査とを以て縮圖し特に平井。增田。野村の三工學博士の綿密なる校閲を受けたるを以て愈よ錦上添花の觀あるものと謂ふべし江湖の諸彥請ふ刻下の大必要品として必ず一本の愛購を賜らんことを

●本圖の折方は從來他に類例なき最も嶄新輕妙の折方なり●

●本圖の折方は携帶頗る至便使用展閱掌中自在の折方なり●

（後付の三）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館



早稲田大學撰手 橋戸信君著

最近野球術 （三版）

全一冊紙皮上製三六判二百七十五頁

正價金參拾錢 郵税六錢

口繪寫眞版 （第一高等學校、慶應義塾、學習院、早稲田大學） 最近野球撰手▲米國模範撰手 ▲野球大競技等珍絶壯絶

野球は武士的競技なり、膽を練り筋肉を鍛へ腦力を發達せしむる最好遊戲なり、方今到る處、ボール、バツトを見ざる無く、野球競技は學生間の一大勢力となれり、唯惜むこれに對する好著述無きを、偶二三書ありと雖ども、多くは簡に失し粗に失し、僅かに初心者を教ふるに足るのみ、紀事陳腐にして野球の眞髓を知り難し、即ち本書の出づる所以也、著者は有名なる早稲田大學野球選手SSにしてキャプテンを兼れ、本年春より夏にかけて、遠征隊一行と共に野球の本場所なる米國に渡り奮闘苦戰數十回、自己の視察經驗に加へて、同國模範選手の意見學說及び好著述を參酌し、歸來江湖の要求に應じて此著あり、

日本遊戲研究會編纂

模範運動會法

附新式舞踏遊戲

全一冊洋裝中判紙數二百七十四頁

正價金參拾錢 郵税六錢

著者卷頭に識して曰く「是れ變の上に得たる想像論にあらずして自ら遊戲帽を冠り指揮旗を振りたる實驗談也」と以て其梗概を知るべし。其内容に至りては先づ運動會の意義と種類とを說き、其教育價値を兒童學校、社會の三方面より聯合運動會の利害を斷じ演技の種類は之を個人競技、團體競技、舞蹈、行進遊戲、歌舞體操に分ち、力を極めて其選擇に關する注意を詳說し、運動場に關しては其選擇上注意すべき要項を擧げ次に區劃の方法設備及會務等の要件を精密に說明したり、卷末には都下の小學校等に行はるべき舞蹈遊戲のニュースタイルを著者得意の新發明法により獨立演習等數十ヶ條を說き、遂にクヮドリール、カレドニアン等の對舞方舞スケーチング、メンクライゲン等の團舞合せて十八番を最も簡明に說けり。



發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の四）

（後付の五）

（付錄の七）


美貌劑
乳白化粧水
レート
大瓶金五拾錢
小瓶金參拾錢
皮膚の營養に最も卓効あるは牛乳なり而も牛乳は水分の腐敗し易き缺點あり此缺點を除去したる者はレートなりレートは牛乳の主成有効分のみを含む故に皮膚の營養にはレートに及ぶなしレートは高貴なる香料を多量に含有す故にレートは使用後身心を爽ならしむレートは最も進歩したる化粧劑の隨一故に之を用ひれば艶麗氷雪の肌となる蓋しレート最新最良なる美貌劑なり
販賣店ハ至ル所ノ和洋小間物店並ニ賣藥店ニアリ
發賣元
東京 平尾贊平 大阪

女學世界定期增刊
婦人博覽會
第七卷第六號
(明治四十年四月十五日發行 每月一回五日發行)
(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)



(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊿
明治40年4月（第7巻第5号、第7巻第6号）

2008年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3506-6　C3321